

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜チートな主人公の頑張り物語〜

### 【作者名】

てりー

### 【あらすじ】

後日投稿する次回作を読んでいただいたほうが面白いと思われます。

こちら処女作ですので、薄ら寒いノリなどが多発しております。ぶつちやけ黒歴史……。それを念頭に入れて読んでいただいたほうが、スコップの強度があがるでしょう。

にじファンで連載していた小説です。

こちら実際には完結し、次回作もあるため内容の大幅な編集はできません。感想は、次回作を後日投稿致しますので、そちらのほうによりしく願いたいします。

## プロローグ

トンネルを抜けるとそこは銀世界だった。……………いやいや

「あれ……………？俺は渋谷で遊んでいたはずだったんだが……………。ここはどこだ？」

そう、俺こと石神剣介はさっきまで友達と渋谷であそんでいたはずが、気がつくと一面真っ白なところになっていた

「ここんどこは？」

いきなり現れた天使っぽいのがハイテンションで叫んできた。

「お前は誰だ？」

「天使ですよ。下級ですけどね」

本当に天使なんかい

「ここはどこだ？」

「テンション低いですね、そんなことじゃもてませんよ」

大きなお世話ってやつだ。リア充爆発しろ。

「ここはどこだ？」

ちっちと同じことを聞いてみると

「ここは死後の世界、死んだ人のみが来れる世界ですよ」

一瞬ついていけなかった。俺が……死んだ……？

「そうですね、スクランブル交差点で車に引かれて死んじゃいました

ただ、良かったですね

ガブリエル様が残念な死に方だったので、慈悲をくださいましたよ」

もっと残念な死に方をしたやつはいっぱいいると思うが……まあいい。

「それで、どんな慈悲をくれたんだ？」

「え〜とですねえ。転生して生きることができるようになりました〜、どんだんパフパフ〜」

正直ガブリエルGJ！かなーりやってみたかったんだよなあ。

「で、どこの世界？」

「魔法少女リリカルなのはの世界ですね」

あの砲撃で有名な世界か。いいじゃねえか。

「あっ、あともう一つ。ガブリエル様が、チート能力をくれましたよ」

大盤振る舞いだなガブリエル。

「どんな能力だ？」

「向こうに行ってから発動するようですね。それじゃあ行きますか」

「お前もいくのか？」

「監視役ですから。ただ、剣介さんしか見えない聞こえない触れないですけどね」

そうなのか、まあそれじゃあそろそろ行こうかな

レツッゴー  
!!!!!!!!!!

## 第一話

白い霧のようなものを抜けるとそこは……………空中!?

はるか眼下には山が見える

ああ、これで俺の転生ライフも終了か……

さようなら天使、今まで楽しかったよ

「そんな簡単に死にませんよ」

確かに平気だ、でも、身体が痛い

「いつだったー」

痛いと言えば痛いけど、意外と平気だな

「大丈夫ですか？」

「……………なんとか」

こんな高さから落ちても死なないとは……………ガブリエルがくれたチート能力に関するものか？

というか、どんなチート能力をくれたんだろう

「おーい、どんなチート能力をくれたのか教えてくれないか？」

「い〜ですよ〜手紙があるみたいですけど〜読みます〜?」

「ああ、読ませてくれ」

手紙をもらって中をみてみると

“こんにちは、転生した気分はどうかね?

さて、今回君にあげた能力は全部で四個だ

一つ目、Fateシリーズに出てきた宝具と道具の譲渡

二つ目、身体能力と五感の大幅な強化

三つ目、オリジナル宝具『天地統一《エインヘルトワールド》』

四つ目、条件を満たせば勝手に使用可能になるだろう

ちなみに、そこにいる天使が詳細を知っているのでこき使って構わない”

大盤振る舞いってやつか?

正直ここまでもらえるとは思っていなかった

それに本編からzeroさらにマテリアルまで全て買っているほどFateが好きな俺が宝具を使える……これでテンション上がらなかったら人じゃねえ!!

しかし、譲渡というのはどういう意味なんだろうか

「チート能力の詳細を教えてくださいませんか」

天使に聞けと書いてあるしな

「い〜ですよ、何から知りたいですか〜？」

宝具が気になる…すっげー気になるけどまずは

「身体能力と五感の大幅強化について教えてくれ」

「文字通りの意味ですね〜…う〜ん、そうだ！そこにある木を蹴つてみてください」

指さしている方向をみると……嘘でしょ！！

成人男性一人でもギリギリ届かないような太い木があった

「……………」ね？」

「そ〜ですよ〜」

ニクニク微笑んでいる顔を見ると怒る気もうせた

まあ、怪我しても大丈夫か（やけくそ）

「しおじや〜……!!!」

…ドゥン

「……………なんぞれ」

某正義の味方の口癖がでてしまったが本当になんてさ!?

蹴った瞬間鈍い音がして5mくらい根本から吹っ飛んだ

「筋力はこのくらいですね、視覚も強化されているので意識すればかなり遠くまで見る事ができますね」

確かに空を見てみると、飛んでいる鳥の目が見えた

「……」りやすげえな

ため息しか出ない

アーチャーの千里眼ってこんな感じだったのかな

ただこれで時間を取られすぎるわけにもいかないから、次のチート能力を教えて貰おうかな

次はお待ちかねの宝具だ!!

「次に宝具のことについて教えてくれないか」

「え」と、『 王の財宝《ゲート・オブ・バビロン》』とってください

かの英雄王の宝具か

「 王の財宝《ゲート・オブ・バビロン》」

いきなり背後の空間が裂けて何か変な空間ができた、よく見てみると刀の柄がたくさんでている

「今回、宝具の担い手を譲渡しましたので、真名解放もできますね」

ただ、あくまで譲渡ですので、元からあなたの物ではないぶん、ランクが1〜3ランクまで下がります」



それと『十二の試練《ゴッドハンド》』等の『王の財宝《ゲート・オブ・バビロン》』に入らないものは含まれていません」

また、道具も全部入っています

要するに〜ドラ もんの四次元ポケットと同じです〜」

ということは、Fateの宝具をいくらでも使えるってことがそれは嬉しいな

とりあえずシリーズごとに、少しずつ宝具をだしてみようかな

まずは、zeroから『破魔の紅薔薇《ゲイ・ジャルグ》』

staynightから『約束された勝利の剣《エクスカ

リバー》』と『風王結界《インビジブル・エア》』

hollowから『切り決る戦神の剣《フラガラック》』

extraから『祈りの弓《イー・バウ》』

を出してみた

ちょっと真名解放してみたいな……

やっちゃんおうかな……

やっちゃんうか!!

「風よ、舞い上がれ」 風王結界《ストライク・エア》!!」

暴風が起こり、あたりの木を根こそぎ持って行って小さな広場がで

きた

制御が上手くできないから使うのは難しい

ここは、これからの課題かな

そういえば、宝具の真名解放をしたので今更だけど

「俺の魔力って大丈夫なの？」

せつかく宝具を持ってても魔力切れで使えませんか悲しいから  
な

「たぶん大丈夫です、身体能力に含まれるので、かなり強化されてますね」

え〜と、『天地乖離す開闢の星《エヌマエリシュ》を全力で50  
0回うつても全魔力値の数%しかつかわないレベルですね」

それは凄いな……

確実にキャスターより上だろ

「メディアさんですか？数十倍です〜ランク的にいえばEXですね  
」

つまり、無尽蔵ってことだな

「あとですね〜、剣介さんには元から魔術回路がありました」

本数は2本で、属性は、『偽』と『癒』です〜

両方とも適正が高かった上に強化してあるので

今は複製しか使えませんが、修行すればすごいことになると思います」

俺は魔術回路まで持っていたのか、意外と高性能だな

しかし、複製と投影の違いって何だ？

「何か道具を持って」複製開始《レプリケーション・オン》でできますので試してみてください」

俺は光輝く「約束された勝利の剣《エクスカリバー》を持って

」複製開始《レプリケーション・オン》」

増殖した

いや、「約束された勝利の剣《エクスカリバー》が二つに増えた

しかし、複製したと思われるほうは光っていない

「複製と投影の違いは、複製はランクが下がらないかわりに中の魔力がなくなります」

投影はランクが下がるかわりに魔力が残ります」

だから光っていないのか

でも、元から通常よりランクは下がっているからな

感じとしてはいくらでも複製できそうだな

宙に浮かぶ無数の剣……………恐っ!!

さて次で最後か

オリジナル宝具とやらの『天地統一《エインヘルトワールド》』だが、道具が無いってことは元から備わった能力ってことかな？

まあ、とりあえず使ってみるか

『『天地統一《エインヘルトワールド》』!!』

……………あれ？何も起こらない

どっぴいっことだ？

「この宝具は常時発動型ですのでわざわざ言わなくても大丈夫です」

空を地面と同じように踏む感じですね」

空を踏むって何だ？

まあ、とりあえず空に足をだしてみて「うわああああ!!!!」

確かに踏めた、踏めたんだが何か気持ち悪い

落ちそうな気もするし

正直、楽しいよりも気持ち悪いって感じの方が強い  
慣れれば、この感じはなくなるのかな？

「説明はこれで最後です〜」

「おお、色々ありがとうな

試して遊んでみるわ」

複製や宝具で遊んでいると、はたと気がついた

「俺、金がねえ……、寝るところどうしよう」

そうだった

転生してきて浮かれてたけど、金がない

『王の財宝《ゲート・オブ・バビロン》』も探してみたが流石に家と

お金はなかった（後々考えれば宝石を売ればよかったのだが）

「どうしようかな……」

いくら外が寒くはないといっても限度がある

「町に降りてみては？」

その手があったか

町にいけばバイトもできるしな

天使から至極まともな提案をうけて、町に降りることにした

歩くこと二時間、やっと山の下の住宅街みたいな場所に着いた

一息いれようと、何気なく近くのカーブミラーを見て時が止まった

写っているのは黒髪に琥珀色の美少年だった

自分は高校生のつもりだ

でも、周りに人が全くいないし、自分は転生という奇妙なことをした身

もしかしたら、この少年は俺かも知れない

そこまで考えた時点でやっと声が出た

「これ、もしかして俺ええええ  
!!!!!!」

そうすると横から呆れ顔をした天使が

「そ〜ですけど〜……今更ですか〜」

え？ 今更って何？

今更も何も、言われたことないんだけど

「いや〜、なんでもなにも転生したときに子供になりますっ〜ってい〜ましたよ〜」

初耳なんですけど

そんなこと聞いたら絶対に覚えているぞ

「本当ですか〜!? それはすいませ〜ん

今更ですが、転生したあなたは8歳になります〜」

「本当に今更! ってか軽いな!!!!」

「もつすんでしまったことでウジウジしてもしようがないですよ。前をみなくっちゃ!!」

「いや、あんたのせいだからね!!」

漫才みたいな事をしたあと、俺はさらに重要なことに気がついた

バイトできねえじゃん

俺どこもいけねえじゃん

俺何も食えねえじゃん

俺が気落ちして歩いてしていると、横をトラックが追い抜いていった。

ぼーっとトラックを見てみると、いきなり少女が道から飛び出してきた

一気に意識が覚醒する

トラックも気づいて車を止めようとするが、間に合わない!

俺が助けるしかねえ!!

「くそったれ-----!!!!」

トラックを追い抜いて横っ飛び、間一髪少女を助けた



「つつ、はああー、大丈夫だった？」

優しく声をかけると、いきなり目から大粒の涙がこぼれて顔を俺の胸に押しつけて

「うわああああん、恐かったよー!!!」

これが、俺と高町なのはの出会いだった

## 第二話

前回のあらすじ：チート能力を貰って町を歩いていたら少女を助けることになりました

そして、泣かれました

……………どうしよう

泣き始めて5分くらいたったけどまだ泣いてる

お、声が小さくなってきたぞ……………って寝た!?

スウスウ

「嘘だろー」

俺の音が閑静な住宅街に響く

とりあえず起こそうかなと思えば体を揺さぶろうとすると、泣き跡の残るあどけない寝顔が見えた

「はー、とりあえず公園でも探すか」

こんな可愛い寝顔みせられちゃー起こす気にはなれんな

ただ、この子がどこに行きたいのか分からないので、起きるまで公園に行くことにした

「よっつと……軽いな」

おぶってみると、むちゃくちゃ軽かった

土か日曜日（少女が私服なので）の真っ昼間に寝ている少女をおぶる同年代の少年、シユールだなあ

とか思いつつ歩いていると公園を発見した

その公園は遊具もなくベンチしかなかったので子供いなかったが逆に好都合だ

俺はベンチに座って膝枕の体勢にして、『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から『マグダラのせいがいふ聖骸布』を取り出して少女にかけてあげる

「やることねえなあ」

“ 暇ならおしゃべりしましょ〜よ〜 ”

“ うお!! びっくりした、いきなり出てくんよ ”

“ すいませ〜ん ”

”で、何話す?”

”ひぐらしのなく頃にのお話でもしましょうか”

”え!? ひぐらし知ってるの?”

”知ってますよ”

とオタトークをしていたらいつのまにか1時間くらい経過して  
いた

”いや、あそこは圭一が……とそろそろ起きそつだな”

”ではさよ〜なら”

少女はモゾモゾ動いた後

「んっ、へ!? ふええええええ!?」

うるせえ!!

耳がキーンとしたぞ

SIDEなのは

夢を見ていました

その夢のなかでは、私は白い服を着て杖を持って空を飛び、魔物み  
たいなものを倒していました

地上に降りると

「お帰り、なのは」

そう、それは心が安らぐ大好きな声

私は微笑んで

「ただいま、君」

そこで、目が覚めました

頭がなにか柔らかい物の上に乗っていて、それが気持ちよくて目を  
あけると……男の子の顔がありました

「んっ、へ!?ふええええええ!?」

SIDEOUT

うお!!叫ばれた

まあ、あたりまえか

起きてすぐに野郎の顔があつたら誰でも驚くわな

「おはよう、気分はどうかな？」

まあ、そういう問題ではないと思っけど

優しく聞いてみると

「ふえ!?だ、大丈夫です」

なら、説明しようかな

「驚かせちゃってごめんね。俺の名前は石神剣介

君がトラックに引かれそうなところを助けたんだけど、覚えているかな？

で、その後寝ちゃったからここまで運んできて起きるまで待ってたんだ」

軽い状況説明をすると

「そういえばそんなことがあったような……私の名前は高町なのは  
「なのは!」「ふえ!? そ、そうですけど」

「これが仕様ってやつか？」

「すまん、続けてくれ」

「あ、はい。助けてくださいってありがとうございます」

それに、なんかご迷惑をかけちゃって」

ああ、やっぱり気にしていたか

ツインテールもしょんぼりしてるな

「全然かまわないよ、なのは

ああ、それと同じ年くらいだから、タメで構わないよ」

「あ、うん!! よろしくね、けん君」

花が咲いたかのような満面の笑み

うん、やっぱり可愛い女の子には笑顔が似合うな

「それで、なのはは何処に行く予定だったんだ？」

よければそいまで送っていいのかな

「お父さんとお母さんのお店の『翠屋』なに行こうかなと思って

けん君も一緒に来てくれるかな」

その程度、全然いいけど

元から送るつもりだったし

「ああ、それじゃあ行こうか」

「うん!!」

歩くこと数分、喫茶店が見えてきた

「ここだよけん君」

そう言ってなのはがドアを開けると、中から若い女性がでてきた

「来たわねなのは、遅かったじゃない……あら、そちらの方は？」

なのはのお姉さんか何かか？

「石神剣介です。よろしくお願いいたします。失礼ですが、なのはのお姉さんですか？」

そういって、女性の顔がほころぶ



「うわっ、綺麗だな、元の年齢だったら惚れていたかも

「あら、お上手ね。わたしはなのはの母親で高町桃子といいます

よろしくね

お母さんだっけ？ 若いな、まあ、なのはしか子供がいらないなら分かるか

すると、奥から男性が出てきた

「おお、いらっしやいなのは……そちらの子供は？」

「石神剣介君というらしいわ。」

「ほお、剣介君というのか

私は高町士郎。なのはの父親だよろしく」

「石神剣介です

よろしくお願いいたします」

「して、剣介君

うちのなのとは、どうして知り合っただい？」

まあ、いきなり自分の娘が仕事場に、今まで見たことないやつを連れてきたら気にはなるよな

「けん君はね、トラックに引かれそうになった私を助けてくれたんだ

よ!!」

なのはが話すと二人ともびっくりして

「トラックに引かれそうになった!？」

そりゃ〜、実の娘がトラックに引かれそうになったららびびるわな

すると土郎さんがこっちを向いて

「けん君、なのはを助けてくれて本当にありがとう。」

「いえいえ、大したことでは……」

チート能力のおかげだしな

「いや、そういうことは真に勇気のある者にしかできないことだよ。本当にありがとう。それで、感謝の気持ちをこめてお昼ご飯を馳走したいのだけれどどうかな？」

よかった

少なくとも、今日の食糧問題は解決したよ

「本当ですか?! ありがとうございます!!」

何にしようかなあ、どれも美味しそうだなあ

カウンターで高町一家としゃべりながらカルボナーラを食べていると桃子さんが

「両親にお礼を言いたいので電話番号を教えてください？」

ゲッ!! ヤバいどうしよう……

いい言い訳が考えつかない俺のばかぁー

「実は、両親共に死んでしまっ……」

嘘つきました

「え!? それは悪いことをしたわね……」

「うちこそ罪悪感でいっぱいです

「いまどこに住んでいるの?」

また、爆弾が……

「実は、野宿をしていますが」

「本当に!?!」

嘘です

ああ、悪いことしたあー

なのはも泣きそうな顔してるし

あれ？ 桃子さんが士郎さんと何か話してる

お、こっち来たぞ

桃子さんが

「けん君」

「はい」

改まった顔をして、どうしたんだろう

「家に居候をしない？」

「はい。っつてっえええ!!」

いきなり何をおっしゃりますか!?

「それがいいよけん君!!」

なのはまで……

「迷惑ではないのでしょうか」

「迷惑なもんか、こちらとしてはなのはに寂しい思いをさせなくてすむから大歓迎だ」

こんどは土郎さんに言われる

今まで、あまり使ったことのない脳をフル回転させて考える

そして結論がでた

「では、よろしくお願いいたします。」

「やったー……………!!!!!!」

なのはが抱きついてくる

桃子さんと土郎さんも笑っている

今この時、石神剣介は、高町家の居候となりました。

## 第三話

前回のあらすじ…なのはの家に居候することになりました

俺は今、道場で2本の木刀を持っています

目の前には、むちやくちやな殺気を放っているお兄さんがいます

事の起こりは夕食前だった

なのはや桃子さんと夕食の準備をしていると

「ただいま」

誰か帰ってきたみたいだな。若い男性と女性の声……

するとなのはが

「お帰りなさい、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

迎えに行った

ガチャッと扉が開いて女性が入ってきた…お、固まった

「なにしてる美由希……君は誰だ？」

押しのけて入ってきた男性が訝しげに尋ねる。しかし冷静だな

ん？ ちょっと待て、この二人、特に男性のほうはどうみても大学生

で、なのはのお兄ちゃん、と言うことは……桃子さん何歳だよ!!

恐ろしいな、流石はアニメ世界

……まあ、とりあえずの疑問はおいといて挨拶、挨拶と

「今日からお世話になることになった。石神剣介です。よろしくお願  
いいたします」

「ほお、そうなのか、俺は高町恭也という。剣介と言ったか、よろしく頼む」

あれ、ドライな反応だな。お姉さんはどうかな？

「か………」

か……？

「可愛い!!」

「うお!?!」

抱きしめてきた

「私の名前は美由希っていうのよろしくね!!」

やっと解放された……でもちょっと気持ちよかったかな

「じゃあまた後でね」

二人は二階に上がっていった

さて、夕食の準備を再開しますか



そして夕食

「やっぱりめっちゃくちゃ美味しいですね」

昼にカルボナーラを食べたときも思ったが、やっぱり桃子さんの料理はハンパなく美味しい

「あら、嬉しいわね。いっぱい食べてね」

お店を出してるだけあるな

「剣介」

「はい？」

いきなり恭也さんに話しかけられた

「どついつ経緯で家に？」

「実は……」

そこから先は前と同じ説明

「そんな……」

美由希さんはショックを受けていて、恭也さんも

「きついことを聞いてすまない」

ああ〜食卓の空気が悪くなった。だから嫌なんだよなあー

そして、なのはを助けたときの話をしようとして

「それで……トラックに引かれそうになっている、なのはを見つけたんです」

「トラック!?!」

おお、家族皆同じ反応だ。仲良いな

すると横からなのが、

「けん君すごいのー！走ってくるトラックを追い越して助けてくれたんだよ」

言っちゃまったか、俺がおかしいってバレちゃうかもな

「いや、あまりスピードがでていなくて」

「嘘だよ、ブレーキ間に合ってなかったもん」

せつせつかく取り繕ったのに……

恭世さんがこっちを向いて

「なあ、剣s」はい、お味噌汁よ」

桃子さんG」!!

「ありがとっございませす!!うわぁこの味噌汁むっちゃ美味しいですね」

ふう、危ない危ない何とかごまかせたかな

「けん君」

桃子さんに話しかけられた

「なんですか？」

「お布団をクリーニングに出していたから、今日はなのはの部屋で寝てちょうだいね」

「わかりました」

「やったー!!」

なのはも喜んでるから、その程度ならおk

俺ロリコンじゃないからね

「剣介、あとで道場に来い」

「なぜですか？」

「この家、道場なんてあったのか

「なに、なのはの話を聞いてみて、ちょっと試してみたくなくなっただけ」

「やっぱり気づかれたか」

「そりゃ、おかしいって気づくよな」

「わかりました」

と、こんなことがあったなあ

「剣介、準備はいいか？」

恭也さんが、小太刀（木刀）を2本構えて聞いてきた

「いつでも」

俺もアーチャーみたいな持ち方で双剣（同じく木刀）をもって答える

「では……3本勝負始め!!!」

土郎さんの声で勝負が始まった

「ハア!!セイツ!!」

「フツ!!ハツ!!」

恭也さんが一方的に攻撃して俺が守らざるをえない戦い

す  
右側頭部への打撃からの流れるような左わき腹への打撃を受け流

十数号打ち合って確信した

力や動体視力では負けないので、守っている限り負けはないと

ただ、勝ちもないので攻めなければいけないが、攻めようとする  
と変幻自在の動きで機先を制される

「……ガードが堅いな、ならば、これはどうだ!!」

? 何の変哲もない打撃だが……!?

「くぅ!?」

腕がしびれるような打撃だが、いつもと違い腕内部への衝撃がきた

何とか落とさずにはできたが……何だこれ?

と思ったら鳩尾への打撃がきたので受け流そうとすると

「ガッッ!?!」

いきなりガードをすり抜けてきた

ない  
だけど、恭也さんは俺が倒れると思って油断してる……なら、今しか

「うおおおお!!なめるなあああ!!」

バキヤ!!

渾身の力で振り抜くと恭也さんの木刀が、1本弾け飛んだ

「おおりゃああ!!」

勢いづいて攻め立てようとするが、消えた!?

そう、いきなり恭也さんの姿が消えたのだ

俺の動体視力でも捕らえられないとは……どこだ?

「後ろだ」

バンツ!!ガンツ!!

「2・3本それまで!!」

……完敗か

「君は、タフだな剣介」

まあ、バーサーカー並だからな

さて、かねてからの考えを実行に移すべきかな

「恭也さん」

「なんだ？」

振り向いた恭也さんの目の前で、俺は土下座して

「俺を、弟子にしてください!!」

恭也さんは目を丸くして

「なぜ？」

「俺のこの手が届く範囲にいる守りたい物を守りきりたいからです」

そう、これは転生したときから考えていたこと

「それは……完全に君のエゴだろ」

恭也さんに痛いところを聞かれた

「確かにエゴかも知れませんが、でも、それでも守れるならば守りたい」

恭也さんがジッと俺の目を見て

「……しよつがない、」じつで駄目と言って引き下がるような目ではないからな……弟子にしよつ

「ありがとうございます!!」

よしっ!!これで剣を使えるようになる

「恭也、」じつは私が面倒をみよつ

「士郎（父）さん!？」

士郎さんは頷くと

「ふむ、恭也には美由希がいるからな、さすがに2人いつぺんに見るのは難しいだろう」

ああ、確かに

というか、美由希さんって恭也さんの弟子だったんだ

恭也さんも得心がいったのか頷いていた

「では士郎さん、これからよろしくお願いします!!」

「ううして、俺は御神流（そついう名前らしい）の弟子になった

その夜

眠れん!!

理由は2個ある

一つ目は寝る時間が早すぎることで、現在時刻9時!?!いや、転生する前だったらドラマ見てる時間だよまったく

二つ目は横で寝てるのはが腕に抱きついていて寝にくいったら



ありゃしない

夜はそんな感じで更けていった

SIDE 土郎

夜、居間で晩酌をしていると桃子がやってきた

「あら、今日はなんだか上機嫌ね」

「そう見えるかな」

確かに嬉しいのだろう

『徹』を受けて武器を落とさず、鳩尾や後頭部に打撃をくらっても気絶しない

しかも、恭也に『神速』まで使わせたのだ。

確かにまったく技術はなかったが、それを補って余りある異常とい

うべき身体能力を持つ

そんな子に技術を教えればどれほど強い剣士に成長するのか……  
本当に楽しみだ

「父さん、母さんちょっといいかな」

神妙な顔つきで入ってのは恭也だった

たぶん、けん君の事だろう

「剣介のことだけど、父さんを狙う暗殺者じゃないのかな、どう考えてもあの身体能力は異常だ」

予想どっりの反応だ……しかし

「いや、それはないだろう。あれほどの身体能力を持っている子に何の技術も教えず死なせるというのは、金をドブに捨てるようなもんだ」

「でも、あの場の勢いで納得してしまったけど、あの理由になっていない理由はおかしい」

ふむ、あれは理由になっていなかったな

でも、本気さは伝わってきた

「そついえば、帰りがけに役所によってきて戸籍を調べてきたんだ」

「戸籍？ まさか!？」

「このくらいの歳の子供が野宿しているなんてありえない

一応、役所で調べてみたが

「石神剣介なんて子はのっついていなかったよ」

何度も見返したけど、やっぱりのっついていなかった

「なら!! なおさら駄目じゃないか!!」

もしかしたら、本当に私の命を狙う暗殺者かもしれない

でも、あの程度の力なら、まだ負けることはないし

何より、なのはを助けてくれた

そして、あの弟子にしてほしいと言った時の目

あれは、大事な物を守りきれない無力さを知っている目だった

過去に何があったか分からない、でも、もし力になれることがあるならば、なってあげたい

そう思った

「剣介が本当に暗殺者だと思ったら、俺は彼を切る」

「ああ、それで構わない」

恭也は部屋を出て行った

さあ、明日からの鍛練メニューはどうしようかな

私はわくわくしながら思考の海に入ってしまった

SIDE OUT

## 第四話

前回のあらすじ：御神流の弟子となりました

AM5時

「ん……ふう」

俺はしっかりと腕をつかんでいるのはの指を優しくはがして頭をなでる

「うにゅう……けん……君」

なんの夢見てんだかなあ

布団をかけ直して部屋を出た

静かな廊下を歩いて階段を下ると、桃子さんが起きていた

「1」の2週間毎日恒例なので、もう慣れてるけどな

「おはようございます」

「おはようけん君。相変わらず早いわね」

「いやあ、もう習慣ですよ」

俺は、前世で日曜を除き、弓道部の朝練で毎朝時に起きていたので、何時に寝ても5時きっかりに起きてしまうという迷惑な特技(?)がある

「そういうえば、今日はなのはと一緒に寝ていたのね。ごめんね迷惑かけて」

「いえ、週2回ですし、俺自身結構楽しいですから」

もう自分の部屋はあるのだが、なのはの強い要望より週2日なのはと寝るという約束をしたのだ

「じゃあ俺、外にいますので」

「ええ、頑張ってるね」

俺は庭にでて『ゲート・オブ・バビロン王の財宝から子ギルが使っていただろう黄金の弓と複製した矢を大量にだし(もちろん鏃は潰して、当たっても痛くないようにする)、それを木に打ち込む

トン……トン……トン

朝の静かな住宅街に弓矢の音だけが響く

「……………ふう」

一息をいれた瞬間に汗があふれてきた

横にある時計を見ると、AM6時

そろそろ恭也さん達が起きてくる時間だ

AM6時

「おはようけん君」

「おはようございます」

まずは士郎さんが出てきてストレッチを始めた

「剣介、おはよう」

「おはよう〜」

「二人ともおはようございます」

恭也さんと美由希さんが出てきた

10分ほどストレッチをやって

「ちま、いじじいか」

「はい、」

あの裏山まで走りて往復するのが日課だ、この程度なら汗もかかずにすむし

さて、30分ほど走って家に帰ってくると次は普通の鍛錬の時間

「ふう、今日は実戦演習をしよう。けん君と美由希、構えて」

俺は木刀を構える

「始め!!」

気合いを溜めて……

「ハア!!!」

SIDEなのは

「……眠いよお」

つい先ほどお母さんに起こされました。まだとても眠いです

「……顔あらお」

「ふはあ」



顔を洗つとシャキツとしました

服を着替えて髪をツインテールに整えてリビングに行くとお母さんが朝食を作っています

「おはよう、お母さん」

「おはようなのは、お父さん達が道場にいるから連れてきてくれるかしら」

「はい」

道場に行くときけん君とお姉ちゃんが試合をしているので大きく息を吸って

「みんなおはよう!!ご飯だよ!!」

私がけん君とお姉ちゃんにタオルを投げると二人ともキャッチして身体を拭きはじめます

「おはよう、今朝も元気だな」

なんで、けん君に言われると胸がドキドキするんだろ

おかしいな

その後皆で家に戻りました

SIDEOUT

AM7時30分

「「「「いただきまーす」「」」」」

うん、やっぱり美味しい

「うん、いつも桃子の料理は美味いなあ

特にこの〜スクランブルエッグが」

「あら、分かります？今日は隠し味にバジルを入れてみたの」

「みんな幸せだぞ〜こんな美味しい料理を作ってくれる優しいお母さんがいて〜、分かっているのか？」

……また始まったか、このバカップルめ

毎日のことなので、もう慣れた

「美由希」

今度は恭也さんですかい

「タイが曲がっている貸してみろ」

恭也さんが美由希さんの胸元に手をのばしている、これだけみていたら恋人だと思っただろうな

「けん君!!」

最後はなのはか

「今日確か試験だったよねお守り作ってみたの」

それは小さいピンクのストラップだった『けん君』と入っている

……お守りねえ、久しぶりに貰ったな

「ありがとなのは、すごい嬉しい」

そう言って頭をなでると気持ちよさそうに目を閉じている、なんか猫みたい

AM9時

「じゃあね、行ってきますけん君。またお昼にね」

「ええ、いつてらっしやい。またお昼に」

桃子さんを送り出し終わったので家には俺しかいない

何しようかな

いつもだったら恭也さんがいれば鍛錬だけど今日はいないし、宝具や道具の点検はもう終わったしな……

ああ、魔術の訓練でもするか

俺は自室に戻りカーテンをしめて『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から『干将・莫耶』を取り出して『偽』の魔術である複製を使う

『レプリケーション・オン複製開始』

作って作って作って作って作って……………

それを空中に固定させる

「ふう、無事できたな」

これまで失敗していただけに成長出来たな

じゃあ、次は……………

AM11時30分

「ん？今何時だ……………!？」

ちつべえー、熱中しすぎて翠屋行くの忘れるとこだった

さっさと行くか

「いんにちは〜」

翠屋は今日も満員だが、俺はカウンターにある指定席に向かう

「あら、けん君。今日は何にする？」

「そうですね……今日はミートソースで」

「はい、分かったわ」

頼み終わったら暇だなー

「そついえばけん君、試験の準備はどう？」

「あ、ばっちりです。でも本当によかったんですか？学校、しかも私立なんて高いところ」

何回も話し合ったことだけど、もう一度聞く

私立なんて高すぎる

「何回も言ってるけど、子供がそんな心配しちゃダメよ。頑張ってるね」

「ありがとうございます」

本当に感謝しないとな……

見よりのないガキを拾ってくれたばかりか私立までいれてくれるなんて、どんだけ良い人たちなんだよ高町家は

頑張んなきゃな

PM1時

「では、これより試験を始めます」

さて、どんな問題だ？

半径2cmの円の面積を求めなさい

いや、小2がやる問題じゃないだろ、まあ簡単だけど

$$2 \times 2 \times \pi \times 4$$

……だめじゃん!! 小学生は なんて使わねえよ

意外とあなどれないぞ小学生の問題

PM2時30分

「はい、終了」

やーっと終わったか、退屈すぎて死ぬかと思ったわ

ちょうど時間もちょうどいいしなのはと一緒に帰るか

小2のクラスまで来たけど、なのははどこだ……見つけた

もうHRだからすぐ終わるな

「きりーっ、礼!!」

「」「」ありがとうございましたー」「」

教室から続々と人が出てくる

みんな俺のことを二度見してくるな

先生と一緒に知らない子供がいるんだから、しかたないのか？

「けん君!？」

お、いた

「よお、なのは」

「あんた誰」

なんか金髪幼女と紫髪幼女がこっち見てる

「俺の名前は石神剣介、なのはの家に居候してる。そっちは？」

金髪のほづが

「あなたが、なのはのいつも言っている……私はアリサ、アリサ・バニングスよ、こっちは月村すずか」

「月村すずかです」

あの、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

で、いつも言ってるって？」

アリサの目が怪しく光った

「え〜とねえ、いつもかっこよくて優しくて」にゃあああ!!それ以上ダメー!!」「いいじゃないなのは、それで」だからストップ!!」「だそうよ」

ふ〜ん、18年生きてるけど……カッコいいは初めて言われたな  
しかし、なんでなのは止めたんだろ

「け、けん君、試験はどうだった?」

「余裕

ありがとなのは」

俺が微笑んだら、アリスとすずかはポカーンと口を開けて、なのは顔を赤らめた

「よ、よかったの」

「話には聞いてたけど、これは破壊力満点ね」

「アハハ、そうだね」

アリスとすずかも顔が赤い

なんでだ?

「そうだ、一緒に帰ろうなのは、そのために待ってたんだ」

なんと帰りはアリスの車に乗せてもらった……金持ちだなあ



PM3時

「「ただいま」」

「あら、お帰りなのは、けん君も一緒だったのね」

「ええ、偶然会ったので、一緒に帰ってきました」

「試験お疲れさま」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

「そんな、いいのよ……恭也はもう帰ってきているわよ」

「本当ですか、ありがとうございます」

さして、午後の鍛錬の始まりだ

「脇が甘い!!」

ドガッ

「グッ!!」

また、右わき腹か……同じパターンだな

「もう一回お願いします」

「おう」

俺の身体はボロボロだーってなりました

PM9時

「ご飯とか風呂とか終わっていつもの就寝時間、寝ないけどね

「よし、やるか」

今からは魔術の訓練、今回は『癒』の属性である壊れたものを直す能力

だって、宝具が修復できなくて『ロー・アイアス熾天覆う七つの円環』が使い捨てとか嫌すぎるもん

ゴミ捨て場から拾ってきた、壊れたものを床において

『『デイメラリ・リペレイション修復開始』』

一つ一つに直れ直れと気持ちを進める

「ふう〜」

10個中3個成功

こんなもんかな、よしもう一回

こんな感じで一日がすぎた

「ん、ふうー」

AM5時、いつも通り目が覚める

俺の名前は石神剣介、小学3年生の9歳だ

リリカルな時といま交わる……

## 第五話

前回のあらすじ：あれから1年がたちました

S I D E  
???

「ハア、ハア、ハア」

あれからどのくらいたったのだろう

腕からは血が流れ、意識は朦朧としている

ガサッ

魔力によって研ぎ澄まされた感覚が左に敵がいることを感じさせる

予想通り茂みから顔をだした敵を目で確認して、赤い宝石のような丸い玉を目の前に突き出す

それをみた敵は目を見開いて突っ込んできた

少し早いけど……大丈夫かな

「妙なる響き光となれ

赦されざる者を封印の輪に

ジュエルシールド封印!!」

まだ慣れていない魔法を唱えた

ズガアアン!!

ダメージは与えたものの、敵は封印しきれずに逃げてしまった

「逃がし……ちゃった」

足が崩れ落ちてしまったようだ、体力の限界だ

でも、伝えなくちゃいけないから最後の力を振り絞る

「誰か僕に力を貸して、魔法の力を」

SIDEOUT

「将来かあ、アリサちゃんとすずかちゃんはなりたいものって決まってるんだよね」

お昼のひととき、前の授業の先生に触発されたか、なのはがそんなことを言い始めた

「私は、お父さんとお母さんがの後を継ぐ。これよ」

アリサはまあ、小学生ぽいつちゃぽい……かなあ

「私は機械が大好きだから、お姉ちゃんみたいな大学に行きたいかな」

すずかよ、ちょっと大人びすぎてないかい

「けん君はどうするのかな」

「俺か？ とくには決めてないな、そんなもん高校の時くらいから決めりゃあいいんだよ」

「高校ね……先の長い話じゃないの」

つい1年前まではそうだったんだがなあ

「2人は決まってるんだよね」

どうしたんだのはは、なんか卑屈だぞ

やっぱり気になるのかな将来とか、俺の子供の時なんて遊ぶことしか

考えてなかったけどなあ

「でも、なのはは翠屋の跡継ぎじゃないの？ ほら美由紀さんって料理……あれだし」

「うん、それも考えていることの一つではあるんだけど」

……もう少し子供らしい会話ってやつをしてほしい

「私、取り柄がないからなあ。やりたいこと……ほかに何かあると思っただけど……」

ベチン

ん？レモン？

「バカチン!!!」

あ、アリサが怒った

「私の親友が卑屈になるんじゃないの!!」

「そうだよ、なのはちゃんだからこそ出来ることはあるよ」

アリサの説教とすずかのフォローの絶妙な取り合わせだけど、なのはは直らない

あちゃー、ついに頬を引っ張り出したよ

そろそろ俺の出番かな

「はい、そこまで」

アリサを猫のようにつまみ上げる

「離さないよ」

ジタバタ暴れるが離さない

お、パンツ丸見え

……黒……だと？

「おいアリサ、黒とは大胆だな」

一気に顔が真っ赤になって

「何見てくれてんのよおー！！！！！！！！！！」

吠えた

「けん君、さすがにそれはダメだよ」

「デリカシーがないの」

その後二人から絞られて、アリサには平謝りした



夕方4人で帰っていると

「こっちの道が近道なの。前に見つけた隠し玉よ」

塾へ向かう3人とはそろそろ別方向かなと思ってしているとアリサがいつもとは違う道に入っていく

「ね、どこから入るにやるの？」

「……………」

あれ？なのは様子が変わ

「どうした？なのは……………っておい!!」

いきなり走り出した

どうしたんだ？

急いで追いかけると、小さな動物を抱えていた

「この子が倒れてて……………びっしょりけを替」

「これは……フエレット？ いや、何か違うな

」とにかく衰弱が激しい、この近くに動物病院ってあったか？」

「私、家に電話してみるね」

「よろしく頼む」

そうして俺らはフエレット（？）を動物病院に連れて行った

夜

ガタン

夕食を食べて風呂に入って、さあ寝るか

と思っていたら、なのはが凄く勢いで部屋から出る音が聞こえた

「なんだ？」

玄関に向かうと、土郎さんたちが騒いでいた

「なのははどうしたんですか？」

「今出ていったよ。どうしたもんか」

なら、俺が行こう

「行ってはだめよ、けん君」

止められるが、それよりもなのはが心配だ

「すみません!!あとで叱られるので」

そうして一気に加速した

単なるスピードなら、誰も俺には追いつけない(神速使われたら無理だが)

庭を突き抜けて道路に出た

SIDEなのは

今日見た夢と、あの林で聞こえた声と同じ声が聞こえたので

あのフェレットを預けた獣医さんを目指して走っています

「っは、っは、っは……着いた〜」

「ドーン!!」

「ふえええ!?!」

いきなり爆発みたいな音がして……あのフェレットが飛んできた  
!?

とりあえず胸で受け止めて、逃げなきゃ

「すみません、助けていただいて」

「しゃべった!?!」

「あなたにこれを差し上げます、どうかあのジュエルシードを封印してください」

フェレットが赤い宝石を差し出してきたけど、何これ?封印?

私があたふたしているとフェレットさんがいろいろ説明してくれた

「え〜とよくわからないけど、要するにこの宝石で、せつとあつぷとかいうのをして封印すればいいの?」

「そうです」

「わ、わかった。え〜と、レイジンググハートせつとあつぷ!!」

わわ、いきなりあたりが光り始めた

「ふえええ? どうすればいいの?」

「落ち着いて、杖とバリアジャケットを想像してください」

いきなり言われても……

とりあえずこれでいいや

光がおさまると杖と学校の制服に似た服を着ていました

「この後は……キャー!!」

いきなり黒い怪物がジャンプして襲ってきて

ガキイン

あれ? 衝撃は?

おそろおそろ目を開けると、そこには慣れ親しんだ琥珀色の瞳をした、私の大切な人がいました

SIDEOUT

家を出て少し行くと、白くて杖を持った女の子……ってあれ、なのは？  
を見つけた

「キヤーー!!」

怪物が頭上から飛び込んできてる

俺は飛び出して、持っていた干将・莫耶で

ガキイン

防いだ

「なのは、無事か？」

「ふえ、けん君？」

「ああそつだ、ちょっと待ってるよ。あの雑魚をすぐにかたづけしてやるからよ」

「いけません」

「どこから声が？」

もしかしたら、フヘレット？

「あれはジュエルシードの魔力によってできた思念体です。いくら壊しても復活してしまいます」

本当にしゃべってるし

お、きた

キーン、カン

「で、倒す方法は？」

受け流しながら訪ねると、

「あります」

あんのかい

「どうすんだ？」

「彼女の持っている杖で封印をするんです」

「封印ってどこじゃあるの？」

「心の中に浮かんだ呪文で封印をするんだ」

うわっ、アバウト

ギャイン、ギチ

「じゃあ、なのは。封印しやすいように敵をバラバラにするからその隙によろしく」

「わかった」

意識を集中して

『レプリケーション・オン複製開始』

怪物の周りに剣の牢獄を造り

「行け」

空中に浮かぶいく千もの剣で貫いた

「いまだ、なのは!!」

「う、うんいくよ!!リリカルマジカル……ジュエルシールド封印!!」

おいおい、なんだあの杖すごい科学的だな

変化したと思ったら桃色の帯で怪物を包み込んで

おお、何か青い石が出てきた、あれがジュエルシードってやつか



杖で触って封印完了ってところだな

「お疲れなのは」

「あれ、終わった……の？」

「ええ、あなた方のおかげで」

「コテン

フェレットがぶっ倒れた

「大丈夫!？」

パトカーの音が聞こえる

周りを見てみると、なんだこの惨状

地面は陥没し壁は壊れ、電線は引きちぎれている

「こりゃーやべえな

「けん君、もしかしたら私たち、ここにいて大変アレなのでは……」

「あー、そうだな、三十六計逃げるにしかずってやつだね、逃げるか」

後に残ったのは惨状だけでしたとさ

## 第六話

前回のあらすじ：なのはが魔法少女になりました

「はあ、はあ、はあ……着いた」

なのはも疲れてるな

あの黒い怪物（ジュエルシード？）を倒したあと、近くの公園まで走ってきた

ああそうだ、『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』の中に午後の紅茶を入れといたんだった

「なのは飲む？」

差し出すと顔がパアッと輝いた

「うん けん君ありがとう」

モゾモゾ

なのはの膝の上で何か動いている

「すみません、」迷惑をおかけして

ああ、フェレットか

まあ、迷惑……ではあったな

「うんうん、そんなク、まったくだ」「けん君!？」

やっぱりという感じでぐっぐっむいている

あんまり遅くなると桃子さん達も心配するからこんなこと追求し  
たくないんだけどな

ただ、ここははつきりさせなくちゃならないと……

「なのは、なんでこのフェレットが助けを求めてると思った？」

まずはこっからかな

「えっと、今日見た夢の中とあの林の中で聞こえた声と同じだったの。  
それでその声と同じ声が部屋の中で聞こえてきて……それで……」

うん、分かりにくい

「要するに、夢と林の中と部屋の中で聞こえた声と一緒にあったってこ  
とだな」

「うん、そう」

林の中で声が聞こえた時にあのフェレットを見つけたから、部屋の中で聞こえた時もあのフェレットだと思った、ってところか

一応納得、次は問題のこいつだ

「なぜなのはに助けを求めた？」

とにかく、一番の問題はそこなので、ちょっと威圧的に聞いてみる

「あの、言い訳に聞こえちゃいますが、別になのはさんに助けを求めた訳ではないんです」

ただ、なのはさんには魔法の才能が豊富にあったみたいで……」

ってことは、別になのはを狙っていたわけではないと

どこまで本当なんだか

ただこんな時間だしこちら辺にしておこう

「まあ、いいや。俺の名前は石神剣介

呼び方は呼び捨てならどうでもいい

そっちは？ちなみに敬語禁止な」

威圧的な態度をやめて少し親しみやすくすると

ホッとしたように

「あ……僕の名前はユーノ、ユーノ・スクライアで……だよ  
スクライアは部族名だからユーノが名前かな」

「ユーノ君かぁ、私の名前は高町なのは、なのはだよ」

「うん、よろしくねなのは、ケン」

よしっ、そろそろ帰ろう

紅茶を飲み干すとまだ温かった

帰り道にて

「そっだなのは」

「何？けん君」

俺もだが、こんな時間に無断で勝手に家を出たからな

叱られる覚悟をしておいたほうがいい

「え……気づいてないと思ったのに」

甘い、あの人たちは人間チートだぞ

二人とも足取りが重くなりました

少し歩くと家の灯りが見えてきた

それと同時に誰かさんの怒った気配も……

なのはがそろそろと玄関に近付いていくと

「こんな時間にごうに行っていたんだ

それに、制止を無視して外に出るといづのも看過できないな」

どっかの誰かさんが姿を現した

思わずなのははユーノを後ろ手に隠してうろたえる

「ええと……じっ」

俺もどうしようかと思案をしていると

「ここで思いもしない幸運の女神が舞い降りた

「あ、なのはは何持ってるの？うわぁー可愛いフェレット」

「あ、あ、美由希さん

なのはの背後から現れたのは美由希さん

「ありがとねけん君、なのはを守ってくれて」

いや、勝手に出ていっただけなんだが

「いや、剣介ありがとう。なのは、これが例のフェレットか。本当に連れ出すことは許可してくれたのか？」

やっぱり追求するよね〜

どう切り返そうかな

「まあまあ。持ち帰ってきてるってことはそうなんですよー」

おう、ナイス美由希さん

って、ウィンクしてるし……

なのはちよっと二人を見て

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、心配かけてごめんなさい」

ちよっと無然とした表情でそれを聞く恭也さんと笑いながら聞く美由希さんが好対照だな

美由希さんがユーノを抱き上げてジックリ見る

「うーん。可愛いフェレットだねえ。お母さんマズいんじゃない？」

ユーノを抱きしめて悶絶する桃子さん……うわっ簡単に想像できるな

「ありえそつですね」

「容易に想像できるな」

俺と恭也さんがハモった

家にて

「あら〜この子可愛いわぁ」

「キユ〜」

ユーノがおもちゃにされている

さつき家に入ったときに桃子さんがユーノを見つけてからずっと  
こんな調子だ

あの〜桃子さん、なのはへのお説教は……？

……この様子を見る限りお説教なんて頭から飛んでそうだな

ま、いいか

次の日の朝

いつものように朝の鍛錬をしていると、なのはが起きてきた



「おはよう、なのは」

「あ、おはようけん君」

ユーノは部屋かな？

色々と話したいことがあるんだが

「ユーノは？」

「部屋にいるよ」

「ちょっと入ってもいいか？」

「うん、大丈夫だよ」

なのはの部屋にはいると、ちっちゃいバスケットの中にタオルがひいてあって、そこにユーノがいた

「よお、ユーノ。調子はどうだ？」

「あ、おはようケン。調子はいいよ」

「そりゃ何より。んで、色々と聞きたいことがあるんだが……」

「僕は大丈夫だけど……ケンはいいの？学校があるって聞いたけど」

そりゃあるけど、そんなものサボればいい

一日出席しなかったからって授業が分からなくなるほどバカじゃ

ないし

桃子さん達に知られたら面倒だから、バス停まではなのはと一緒に行き、そこから別行動

そのためにユーノをいれる袋を用意した

「というわけで、この袋に入っていてくれる？」

「いやいや、何がというわけなのさ。それに学校をサボるのは駄目だ  
」  
「や

真面目だなあ、元の世界では時々やってたぞ俺

それに、そうでもしなかったら何時話をするんだっちゅうに

それを話すとユーノは納得したように

ああ、その点なら心配いらないよと話す

【これなら聞いえるでしょ】

!?なんだこれ、頭の中に直接響くような

【これは念話っていうんだ、なのはともこれで会話できるようになっ  
たんだよ】

「ちょっと待て、まさかなのはが聞こえた声ってこれのことか？」

「正解」

そうすると疑問が湧いてくる、何故今聞こえて、あの時間こえなかつたんだ？

「それはね？」

考えていることが分かっているようにユーノがしゃべる

「あの時既に、なのはの魔法の才能が開き始めてきていたからなんだ」

なのはのねえ

「俺は今開いたってこと？」

それは違つと少し苦笑しながら

「昨日、なのはの魔法を見た時点でもう開きかけていたんだよ、僕は単にそれを後押ししただけなんだ」

つまり、俺には魔法の才能があるってことが

「念話だつたっけ。どうやんだ？」

「意識を集中して、僕に語りかけてみて」

意識を集中して、ユーノに語りかける……ねえ

【「こんな感じか？」】

おお、何か変な感じ

例えるなら、頭の中で妄想の相手にしゃべりかけている感じ

【そうそう、そんな感じ。慣れれば呼吸と同じように出来るよ】

あゝあ、これで学校をサボれなくなっちゃった

ちゅんねん

【じゃあ、これじゃベテランじゃな】

【そうだね、いってらっしゃい】

【おう、いってきます】

朝食の時、なのはにいきなり念話で話しかけたら牛乳吹いていた

いやあゝ楽しかった



なのはが罪悪感にまみれた顔をしてる

俺？ 大爆笑しました

アリサとすずかが怪訝な顔をしてるけど気にしない

【笑わないでよけん君、頑張って考えたんだから】

おお!?! こんな念話の使い方もあるんだな

【悪い悪い、しかし上手い言い訳だねえ】

【嘘じゃないもん、ちょっと真実をぼかしたただけだもん】

世間じゃそれを嘘と言っんじゃないのか？ まあいいけど

「それである子、飼いフェレットじゃないみたいだから当分の間、家で飼うことになったよ」

「そうなんだ」

「じゃあ名前つけてあげなくちゃ……もう決めてる？」

そろそろ会話に入れて欲しい

「ああ、ユーノっていうんだ」

「ユーノ？」

「そう、ユーノ」

「へえ」

……………眠い

漢字の成り立ちなんぞ知ってるわい!!

寝ようかなあ……………などと思っていると

【ジュエルシードとユウノは……………】

ビックリしたあ

なのはを見るとツインテールがピョピョコしてるからなのはも  
ビックリしたのだろう

てか、空気読もうぜユウノ

いや、逆にしっかりと空気を読んだのかな？

おっと、ユウノの話を聞かなくちゃな

ふむ、要するにジュエルシードは、規模は小さい代わりに発動が容易な聖杯が21個あるみたいなものだと

ぶっちゃけジュエルシードがここに来たのはユーノのせいじゃないと思うが、真面目だから何でも自分のせいだと思っちゃうんだろうな

で、あと19個見つけなければならぬって

何かユーノが魔力が戻るまでいさせてもらえればいって言うけど……なのはにゃ〜通じないだろうな

【それはダメ】

ほらね

【で、でも昨日みたいに危ないことだってあるんだよ】

【それは……そうだけど】

さて、そろそろ介入しようかな

【心配いらぬよユーノ。そうしたら俺が助ける】

俺はなのはを守るって決めたからな



【……ありがとうけん君】

【礼にはおよばないよ、なのはだって俺を助けてくれたんだから】

一応、これからどうしようか困っていた時に助けてくれたしな

【ありがとう……なのは、ケン】

そんな話をしているうちにそろそろ家の近く

念話でおやつ何かなあなどと話していた

!?何か変な感じがした

【ユーノ、今は】

【新しいジュエルシールドが発動している、すぐ近く】

【どっすねば……】

ふう〜、空気の読めない石だことぞ

【ユーノ、近くで合流してそこから向かおう】

【は、は、は】

「なのはは俺と一緒にさっさと行くぞ」

「うん、うん」

「ユーノと合流して神社に行くと、目が4個ある怪物がいた

「現住生物を取り込んでる」

「それって何が厄介なんだ？」

「強くなってるってことと、怪我とかはジュエルシードを封印した後も身体に残るところ」

「怪我は負わせられないってことか」

「俺は『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』からライダーの使っていた釘のようなダガーを取り出してなのはの前に立つ」

「俺が動きを止めるから封印よろしく」

「わかった」

学校の制服のままでなのは答える

いやいや、その姿のまま言われても

「ちゅちゅsetoppしゅね」

「ふえ」

ち、突っ込んできやがった

後ろにはなのはがいる……

退けねえな!!

ダガーについている鎖を盾に受け止める!!

ガキイン

「けん君!!」

勢いを止めることには成功したが、身体は吹っ飛ばされた

ああ、体重が軽いつていやだなあつと

吹っ飛ばされたまま神社の長い階段から2m上の空気に降り立つ

久しぶりの『エインヘルトワールド天地統一』だ

そのまま走って怪物の上を走り抜ける

「なにそれえー！！！」

二人（？）して驚いているけど気にしない

グオツ、ギャウ

怪物の攻撃をかわして仕上げに移る

ギャオオオオ

そこには鎖で雁字搦めになった怪物がいた

「よろしく、なのは」

「う、うん、リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル 封印!!」

また杖から桃色の帯が出てきて封印終了っ

「ちとど、帰るか」

何かなのはが怖い顔でこっちを見ている

「どうした、なのは」

「けん君、けん君の力も魔法なのかな」

ああ、やっぱり知りたくなるよな

しょうがないな教えてくださいな

## 第七話

前回のあらすじ・調子に乗って敵を倒したら、なのはに疑いの目を向けられました

どうしようかな

俺となのは（withユーノ）は、神社の石段に座っている

二人（？）ともこっちを見ているが特になのはの視線が厳しい

どのあたりまで真実を話してよいのやら

さすがに転生者までばらすわけにもいかないし……かといって魔法だとレイジングハート（デバイスだったか？）的なものはどこにある？って聞かれたらまずい

まあ、とりあえず質問からかな

「で、俺の何が知りたいの？」

なのはがちょっとムツとした

聞きたいこと分かってるでしょ!!みたいな感じだな

「……けん君の背後に出てきたした倉庫みたいなものと、この前の戦いの中でやってた剣を増やすようなやつ、それに何で空中に立つことができたのかって事が知りたい」

「あれは、魔法なのかな」

前回の戦闘まで覚えているのか

うーん、どうしようかな

……よしっ!!ここまではばらそう

「じゃあまず始めに、あれは魔法ではなく魔術と呼ばれているものだ、そ」「ちよつと待って!!」「何だユーノ？」

人が折角解説しようとしているのに

「魔術と魔法って何が違うの？」

なのはも頷いている

そっか、そこから説明か……

難しいなあ、いくら好きとはいえ1年も触れてない知識を持つてくるのは

「えーと……だなあ、まずはユーノやなのはが使う『魔法』と今から話す《魔法》は別物だったことを念頭においてくれ、じゃあいくぞ」

説明タイムあん

まず魔術というのは人の力で神秘と呼ばれる奇跡を作り出すことを目的としたものである

例えば、タイムスリップとかを科学の力を用いずに目指している人たちのこととかを言う

大昔は魔術のほうが科学より全然進んでいたんで、奇跡の力を用いた人（錬金術師など）とか言われるような人がいた

ただ、ここ数百年は科学が進歩してきているから魔術は科学の後追いをしているとも言える。でも、例えば割れたガラス窓の修理とかは、魔術の方が楽である

魔術と科学の違いを表す言葉に「科学が未来に向かっていくものならば、魔術は過去へ向かっていくものだ」というのがあり、いくら後追いをしているからと言って魔術でなければ到達できない地点というものがある

次に《魔法》だが、その時代の文明の力ではたどり着けない奇跡を魔法という

逆にいえば、科学が発達してその奇跡が行えるようになればそれは

魔術へと格下げになる

という説明をしたのだが……疲れた……

しかも

「それってどういうことなの（かなあ）」

いや、俺もすっかり分かってないから上手く説明できないけどさ

……

それでも少しは分かって欲しかったなあ……

ユーノが分かっているけど強引に納得したような様子で

「ま、まあ分かったとはいえないけど……いや。それでケンの魔術はどついつものなの？」

「え〜とな」

説明タ〜イムどう〜

あの倉庫みたいな物は『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』といってこの世界のどこかにある俺の宝物庫からここまで転移させるための扉って感じかな

「じゃあ、ケンの能力は転移ってこと？」

「ああ、まあそれだけじゃないかな」

次に剣を増やしたことについて



あれは、複製という魔術で、よつするに増えたと思ってくれればい  
い

最後は、空中に立ったことについて

あれは常時発動対人概念宝具「概念？」ああ、ちょっと待て、説明  
するから

で、名前は『エインヘルト・ワールド天地統一』

効果はどの空中にも自分が大地に立っているのと同じという概  
念を持った宝具

要するに空中に投げ出されても平気ってことだな

こんな感じかな

あつと、概念についてか……

俺もよく分からないんだけどな

説明タ〜イムとろわ〜

概念について

俺もよく分かっているけど、要するに決まっている事かな

例えば、『らいきり雷切』っていう剣がある

これは、雷の性質を持ったものならば必ず切るといつ決められたこ

と、すなわち概念がある

俺の『エインヘルト・ワールド天地統一』は空中に立つという概念があるから、どんな体勢でも空中に立つことができる

「こんなところか」

「……………わかった？」

「……………わからないの」

「少しならなんとか」

おお、ユーノがわかってくれたか

「とりあえず、魔術があるってことはね。でも、それだけ有用な技術なのに、なんで有名にならないの？」

説明して……………ないか

「魔術ってというのは秘匿するものなんだ、時には家族にも教えない」

「なんで？」

「結構危険な物なんだよ。時には命を落とす人もいる」

「え……………そんな危険なんだ……………」

さて、説明も終わりかな

「ちょっと待ってけん君」

なんだ？

「なんでけん君は私たちに教えてくれなかったの？」

「さっきも言った通り、魔術は秘匿するものだから。それに魔術って  
いうのは踏み込むと危ないものでもあるからさ」

あくまでFateの世界では、だけどな

……なんで？なんで泣きそうになってるの？

「それでも……教えて欲しかった……」

「なのは……」

「いくら危険でも……けん君の……力に……なりたかった。だって……だっ  
て死んじゃうことだってあるんでしょ、少しなら私だって……手伝える  
かもしれなかったのに」

手伝える事……無いんだけどなあ

グスツ、うえええん

えゝ泣き出しちゃった、わけわからん

いや……どうしようこれ

“今こそ抱きしめなきゃ”

うおおおおおお  
!!!???

“ お久しぶりの天使です ”

ビックリしたー!!!

本当に久しぶりだな、半年ぶりくらいか？

“ そ〜ですね ”

っと、こんな事してる場合じゃなかった

どっすりゃいいと思う？

“ だ〜から〜、ゆー抱きしめちゃいなよお ”

ほんと何キャラだよ

ってか、まじでかよ……

“ 嫌なんですか〜？ ”

いや……嫌じゃないけどさあ

“ じゃ〜早く!! ”

ー分かったよ

「なのは

「グスツ、何？けんく「ガバツ!!」ふええええ!!!!」

抱きしめました

……恥ずかしいなあ

ユーノも目を丸くしてる

「話さなくてごめんな、なのは

でも、まだお前に教えられない、教えてはいけないことはたくさんある

でも、いつか絶対に話すから、なのはのことも信頼してないわけじゃないから」

「うん……うん……分かった。けん君のこと信じる、信じるよ」

「……ありがとうなのは」

そろそろ離すぞ」「待って!!」「なのは?」

「もう少しだけ……」そのままでごちせして」

ふう〜、まあいいか

この後、帰るのが遅くなって桃子さんに説教をくらいました

「僕、空気だったなあ」

ユーノが何か言ってるけど気にしない

その夜

「今日も元気にジュエルシード探索行きますか」

「「「「」」」」

まあちょっとテンション高く探索しているよ

ドクン

お、反応かな？

「!?ケン、反応があった」

「分かってる、どこだ？」

「」の反応は……ちょっと遠いかな」

なら俺がおぶって走ったほうが速いな

「なのは」

「なにけんk「ちょっと失礼」にやあああ  
!!!???

うるせっ!!

まあいきなりお姫様抱っこしたららびびるわな

【ケンって時々すごく強引だよな……】

うーんそんなつもりは……あるな

【まあね〜だが反省はしていない】

【けん君はちょっと反省して欲しいの】

【嫌だったか?】

【嫌じゃないけど……】

そんなこんなで目的地に到着ってここ学校じゃねえか  
いるのはまた黒い怪物

【ユーノ、あれは思念体なんだよな】

【そうみただね】

【じゃあなのは、またバラバラにするからよろしく】

【わかった】

さて、戦闘開始だ!!

俺は突っ込んできた相手を上にかわして『ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝』を展開させる

上から潰そうとしてきたので転がってよけて『エルキドウ天の鎖』  
を四肢に巻き付けチエックメイト

さらに『偽・螺旋剣（カラドボルグ）』と弓をだして

『偽・螺旋剣（カラドボルグ）』!!

少し魔力を込めて引くと、うわああ!!

怪物の身体をねじ切ってズタボロにして、壁にもものすごい勢いで突  
き刺さった

もうちょい威力考えなきゃなあ

【なのはよろしく】

「リリカルマジカル、ジュエルシード封印」

いつも通りに封印完了

「お疲れなのは」



「今日はちょっと疲れた……」

しょうがないわな

小学生が毎日夜遅くまで運動（？）してるんだから

「おいしょ」

またお姫様抱っこをして帰りました

道中

「ケンによく恥ずかしくないよね」

そんなことはない

もちろん恥ずかしいぞ

「恥ずかしくてもその方法が一番いいならやる!!それが男ってもんだ  
」よ

「なんかキャラ壊れてない？」

「ちょっとね、気にすんな」

ずーっとなのはは寝たまんまでした

## 第八話

前回のあらすじ…なのはに少しだけ説明をしました

AM7時

朝ご飯を食べている最中、土郎さんと今日の作戦について話し合う

「やっぱり怖いのは相手の10番ですから、そこに潰しやの8番を向かわせて、できるだけ触らせないようにつけるのがいいかと」

「そうするとチームのシステム上ボランチが一人になるよね」

ボランチ＝守備的MFのことです

「それで大丈夫じゃないですか？ GKも上手いですから」

「そうだね……それでいくか」

「そいやあ、今日なのは達が見にくるんですよね」

「そうみたいだね、そういえばなのはは」

「まだ起きてこないわよ、昨日も遅くまで外に行っていたんでしょ」

確かに昨日は結局帰ってきたのが2時だったしな

別に今日来なくても全然かまわないのに、来るって聞かないんだよ

「そう言えばけん君は今日どのくらいのタイミングで入るんだい？」

俺は、土郎さんがコーチ兼オーナーをしている翠屋JFCのコーチ兼選手をやっている

何故コーチかって？

結構、転生前からサッカーが好きでフットサルクラブに通ったりしてたから、他の人よりは巧いんだよね

それで先発だとなまらない（俺が）から毎回途中出場してるんだけどね

それでもうちのチームは強いんだが

「そうですね、今回は後半あたりから入ろうかなと」

「分かった、よろしく頼むよ」

「御馳走様でした」

さて、集合まであと2時間、ゆっくりしますが

試合前の軽い練習をしていると、なのはとすずかとアリサのいつものメンバーが来た

「おお3人も来たか」

「きてあげたんだから勝ちなさいよね」

「頑張ってるね」

「応援してるよ」

三者三様の挨拶

気合いが入りますね

練習を初めて30分ほどたって

「そろそろ試合を始めますか」

「そうですね」

お、そろそろ始まるみたいだな

プー

さて、どんな感じかな

相手のフォーメーションは4 5 1か

やっぱり10番から攻撃が始まるな、まあそこは、こっちの8番が上手く止めてるから恐さはあまりない

こっちは右サイドからのクロスを中心としたいつもの攻め

後ろで回して、中央の6番に渡して、もう一度右SBの4番に戻す、上がってって中に切れ込んで……詰まったな

それを7番に渡して

お!!右サイドの7番からのスルーパス

11番が反応して決まったああ!!

「「「やったー!!!」」」

決めてからは相手のペース、交代で入った13番のでかいやつに合わせて、落とすなりシユートするなりって感じ

さすがに高さではかなわないから苦戦してるなあ

「」「」「」  
「ああ」

普通に、クロスから点をとられたか

クロス＝サイドからボールを中に向かって蹴り込むこと

もう少しでハーフタイムだよな、後半の作戦でも土郎さんと話し合いますか

ピッピ

ちょっと疲れた顔をして戻ってくる

「あの13番反則だよ」

「敵も強いなあ」

前半の感想もだいたい13番に関して

「皆お疲れ、後半の作戦だけど、守備に関しては9番と15番を入れ替えて、フォーメーションを4 4 2から4 5 1（スリーボランチ）にしよう。そうして13番には2人でマーク。トップ下にはけん君が入ってくれ」

これは守備的に行くというよりは、あの13番をしつかり抑えようという布陣

「とにかく13番に密着マークをして跳ばさせないように、引っ張ったりとかはしないで、くっつくだけで相手は跳びつらくなるから」

「」「はい!!」「」

「次に攻撃だけど、トップ下にけん君が入るから、ボールを集めてそこからの指示はけん君がしてくれるから」

ピッチ外から見ていると相手は右サイドの警戒が強いから左サイドに振ってもいいとは思っけれど……どう攻めようか

「じゃあ後半頑張っておいで」

「」「はい!!」「」

ピ。ピ。

後半キックオフ

まずは相手の攻めだけど、13番は流石に二人マークを振り切れはしないようだ

っと、ボールがきた

後半開始直前に指示していた形

俺が左サイドにはたいて少し内側に入る

そうして相手DFが警戒しているところでパスをもらいやすい位置に走って戻る、そうすれば俺を追いかけるDFが一人釣られてポツ

カリと穴があく、そこにFWが走り込んでクロスをいければフリーでヘディングを打てる

そんな形が一つ、まあ他にもあるけど、とりあえずこれで

切り返して貰いやすい位置に戻るともの見事に釣れた

「あげる!!」

ボールをあげると、これまたドンピシャリのタイミングでボレーシュート

決まったああ!!

「ナイスシュート!!」

「やったー!!」

色んな声が飛び交う

さて、もう1点決めて息の根を止めますか

今度は俺がスルーパスを受けてDF一人とGKしかない状況

DFをマルセイユルーレットでかわして飛び出してきたGKに対してループシュートで頭を越す

マルセイユルーレット!!左足をボールの上に乗せて、ボールを軸に身体を回して敵をかわすフェイント、フランス最高のMFジダンの得意技



「ゴール

3 1とリードして、あの13番にもほとんど仕事をさせず、最後のミドルシュートのピンチもGKのナイスキャッチで試合終了

「勝ったー」

「「「やったー!!!」」」

試合が終わって挨拶もすんで、毎回恒例の勝利記念翠屋ご馳走イベントで俺は三人娘達と食べる

「それにしても、けん君格好良かった」

「うんうん、あのクルッて廻ってDFをかわすのとか凄いよね!!」

「ふん、まあまあ格好良かったんじゃないの?」

「ありがとう、皆」

正直、指示通り動いてくれた皆のおかげだけだね

さて、食事が終わって話をしていたらユーノへの爆弾発言がとびだした

「「「の子フェリット……」」」だけ、何か違っわよね」

いや……まあ実際フェレットじゃないしな

それにしても、なのはとユーノのキョドった顔が印象的だな

「確かに、動物病院の先生も変わった子だっていったよね」

どんな方法で切り抜けるのかな

【ど、どつしようけん君】

念話で助けを求めてきた

応じるわけないでしょ

【頑張れなのは】

【ひどいよケンー】

「えっと、ちょっと変わったフェレットってことでユーノ君お手!!」

キュク

パシ

「うわあああ!!」

力技で解決しおった

「可愛い」

「賢い、賢い」

二人とも目を輝かせてユーノをなでる

【「う、うめんねユーノ君」】

確かにおもちゃになってるからな

【だ、大丈夫】

「……ご馳走様でした」……

皆がでてきて今日は終了となった

何かなのはが変な顔をしてるけど、どうしたんだろう

見ている先はG Kとマネージャーのカップル、ああいつのに憧れる  
年頃なのかな？

そのわりには浮かない顔だが……まあ疲れているだけかな

気にしすぎてもしょうがない

「はい、なのは」

うわっ、何このぼろ雑巾みたいなユーノ

……ユーノがゴミミのようだ……「うめんなさい

【ユーノ、ご愁傷様】

【助けてよ〜】

【アハ、アハハハハ】

あれから、すずかもアリサも用があるらしいので解散して家に帰った

最近、毎日より遅くまで頑張ってるから疲れてるだろう

「とりあえず、なのはは寝たほうがいいんじゃないか？」

「うん……そうだね、晩ご飯までお休みなさい」

俺は庭にでて剣術の鍛錬、最近やっと技を教えるようになってきたのでその反復練習、木を打って内部から破壊させる『徹』の練習

20分くらいやっているよ

ドクン

!?あの慣れた感覚がきた

すぐに念話で話せるようにしておく

【ユーノ、なのは】

【気づいた?】

【ああ、どこだ?】

ユーノに軽い探索をお願いするとユーノの声の調子が変わった

【ちょっと待って、何この広さ?】

どっちら今回はものすごく広範囲らしい

願いが反映されて一番力がでるのは人間だって言ってたな……っ  
てことは今回は人間が発動させたのか?

まあ、どっちにしても止める事には変わりないけどな

ドタドタドタ

「おおなのは、お父さんと一緒にお風呂に入るか?」

入るか!!

こんな状況でなにのんきなことを

「ごめん、また今度」

すごい、キレにふられたな

よし、行くか

「何だ……」  
「じゃ」

予想していたものの斜め上をいく風景

むちゃくちゃ大きい木が何本も生えていて、地面やビルに枝や根が  
張り、車を破壊する

「……ひびく……私のせいで……」

なのはのせい？どういふことだ？

「私、見かけていたのに、あの子が持っていたのを」

要するに違っただろうと思って、そのままにしていたんだろうな

だが、今はすべき事が他にあるはずだろ

「今それを言っている場合か？」

ユーノ、この場合どうやって封印すればいいんだ？」

「これだけ大きければ、どこかに核があるはずなんだ

それを見つけて封印すれば……」

問題はどこに核があるかって話だな

……しょうがない、地道に探すしかないか

まさか『エクスカリバー約束された勝利の剣』で焼き払ってわけにもいかないしな

「よし、俺が探してくるから」ちよっと待って「なのは？」

他に良い手があるのか？

「ユーノ君、何かそういうものを探す魔法ってないの」

そういうところが、魔法で探せるのなら簡単だな

俺はそっち系の魔術は出来ないし

「えっと、ワイドエリアサーチ一応WASっていうのがあるけど」

「レイジングハートできる？」

[Yes, my master]

「じゃあ頑張ろうレイジングハート、リリカルマジカル、探して災厄の根元を!!」

俺空気〜、つ〜まん〜ない

なのはは意識を集中させて探している

【ケン、僕の寂しさ分かった？】

【ああ、分かったぜ!!】

何か友情が深まった気がした

「見つけた!!」

「ど〜だ（本当）!？」

「……………ここから封印する」



本気か？こんな遠くから封印だと？

……いや、目がマジだ

「いついつ時のなのは言っても聞かない

なら、俺はサポートするだけだ

「無茶だよなのは」

「落ち着けユーノ、なのは……出来るんだな」

ゆっくりとしっかりと見据える

「……出来る」

いい目だ、出来るって確信している

「よし、もし何かあったら俺がその全てを取り除いてやる。だからなのは安心してぶっ放せ」

「うん!! いくよレイジンググハート」

[shooting mode setup]

杖が、今度は、さすまたみたいになった

「いって、捕まえて!!」

ドガアアン

何これ……砲撃？

ものすごい光の奔流が空を統べる

これ、死なないのかな……ああ非殺傷設定だから大丈夫か

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル 封印!!」

おお、一気に木が消えた

……残骸がひでえな

「いろんな人に迷惑かけちゃったね……」

迷惑か、間違っちゃいないな

「もう、かけてしまったものはしょうがない、まあ反省しなきゃ駄目だけどな

一番大事なのは、これからどうするかだぞ」

ぶっちゃけ今回のミスはでかい、結構な人が怪我をしているだろう

それでも、なのはが成長するのに必要な犠牲だった

「そうだよなのは、元気だして」

「二人とも……ありがとう」

ちょっとはにかんで、なのはが答えた

「はいはい、湿っぽいのは終わり、帰るよ」

そうして俺らは家に帰った

少しの反省と、少しの収穫を持って

## 番外編 1

翠屋で三人娘と話していると、こんな話がでた

何でけん君とアリサちゃんはそんなに仲がいいの？

番外編

仲良きことは美しきかな

あれは学校に入学してから4ヶ月くらいたったある日

「何でアಂತタに勝てないのよぉー！ー！ー！ー！！！」

そりゃ勝てないだろ

元高校生（しかも受験生）の俺が進んでいるとは言え、仮にも小学生のテストで負けなきゃいけないんだ

総合得点600点中

アリサ：599点

俺：600点

これまで3回テストを受けて、ことごとく負けてるアリサ（ケアレスミスのみ）

次こそは、次こそは、と言っていたが、ついに我慢の限界がきたようだ

でも、いくら小学生のテストとはいえ、まともな方法で受けてる人が1点しか落とさないのは、凄いなと思うんだけどなあ

「しかも……他のやつに負けるならともかく……授業で寝まくってるあんたに……」

そう、俺はだいたいの授業で寝ている

だって読者の皆さんも考えてみてよ、元受験生が『アルコールランプの使い方』とか聞いても楽しいか？

メタ発言は気にしない方向でよろしく

「次アンタに負けたら、目でピーナッツ噛んでやる!!」

おお、思い切った行動だな。でも、熱くなり過ぎ

「ちよいと、落ち着けて、別にテストの勝ち負けなんてどうでもいいだろうが」

「よくない!!その姿勢もムカつくのよ!!絶対勝ってみせるからね!!ア  
ンタが負けたらアンタが目でピーナッツ噛みなさいよ!!」

……なんでさ

よく分からないが、何か変な約束をさせられた

はあ、負けるわけにはいなくなっちまったじゃねえか

そんな事があってから3週間後、最近アリサは毎日塾や図書館で遅  
くまで勉強しているらしい

何処の受験生だって言っでやりたいくらい

「アリサちゃん……大丈夫?」

「何かクマが凄いよ」

「……大丈夫よ、絶対にケンに噛ませてやるんだから」

覚えていたか

「だがなアリサよ、それで身体を壊したら元も子もないぞ」

「うっさい、あの人の力もあるんだから、絶対に勝っでやるからね!!」

本当にガンコだな

こりゃ意思曲げねえぞ

しかし、あの人って何だ？家庭教師かな？

SIDEアリサ

今日は日曜日、図書館で勉強する日だ

最近、図書館に行こうと思うと心が躍る

だってあの人がいるから

あの人は、私が悩んでいる問題をすぐにといてくれた

あの人は、私の不満を文句一つ言わず聞いてくれた

あの人は、おもしろい話を聞かせてくれた

あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、あの人は、

「こんにちはアリサちゃん、今日も勉強かい？偉いねえ」

「……………こんにちは、今日も分からない問題があるんだけど……………」

「いいよ、教えてあげる。だからちょっと、あそこの椅子の裏にこれを貼り付け来てくれないかな」

いつもと同じ、白い粉を渡される

数時間に1回、こうやって椅子の裏に貼り付けるだけで教えてくれるなら安いものだ

「わかったわ」

「……………今日もあの人に教えてもらっていた

SIDE OUT



すずかに聞いて、アリサが行っているという図書館の近くまで行ってみると、目の前の公園に金髪幼女がいて、ベンチの裏に何か貼り付けていた

そこは、基本的に人がいない公園なので誰も見ていない

アリサは悠々と図書館に戻っていった

急に不安になる、まさかそんなはずはない、アリサがそんなことをするわけがない

ベンチの裏に貼り付けてあった物を取ると、それは

白い粉

だった

「いや……嘘だよな」

開けて少し舐めてみる

きた!!!!!!  
やっぱりこれは覚醒剤だ!!

昔、馬鹿な友人に誘われて一回だけ舐めたことがある、その感覚だ

ウゲエ、オエエ

直ぐに近くのトイレで胃の中のものを全てだす

それでも興奮はおさまらない、必死に冷静になれと念じる

「何処のどいつだかしらねえが、アリサをたぶらかした罪、償ってもら  
うぞ」

俺は図書館へ向かった

図書館の中を見回してみると、すぐに見つかった

金髪幼女と勉強している大人なんてそうそういるもんじゃない

決定的証拠を握るために待っていると、それから2時間後のこと  
だった

「じゃあ、また行ってきてくれるかな」

「はい」

その手に渡された物は、白い袋だった

俺はカメラで取った後、外にしようとするアリサの腕をつかんで男  
の前まで行く

「な、なんでケンがいるのよ」

驚いているが気にしない

男の前へ行って、白い粉を叩きつける

「ぶわっ、何しやがんだこのガキ!!」

殴りかかるうとするのを止めて

「この粉について話がある、ちょっとそこの公園まで来い」

精一杯ドスを効かせた声で威圧する

だがそこは大人、子供の戯言と平然としている

俺が不安なことは一つだけ

アリサも麻薬に犯されていないか

公園の広場に俺とあの人がたった

遠くのベンチにアリサを座らせて待たせる

「単刀直入に聞くぞ、あれは麻薬か？そして、アリサには舐めさせたことがあるのか？」

「麻薬？お兄さんには、何を言っているのか分からないなあ……おい  
餓鬼、世の中には知っちゃいけねえもんがあるんだよ!!」

最後にはドスを効かせた声で威圧してきた

だが、俺が聞いたかったことはそんなことじゃない

「もう一度だけ聞くぞ、あれは麻薬なんだな、アリサに舐めさせたことはあるのか？」

怒りと苛立ちを必死に押さえ込む

その時、俺は近づいてくる影に気づくことができなかった

「はっ、だからどうした、お前に関係があるのか？アリサに舐めさせた事？ああ、あるぞ

その時は非道く落ち込んでいたからな、感謝して欲しいもんだぜ」

白状しやがった

しかもアリサに舐めさせただと？

あの野郎、ぶち殺してやる!!

だが、その時、袖が誰かに引っ張られた

「ねえ、ケン、麻薬ってどういふこと？ 私が舐めたことがあるってど

ういづことなのよ……」

やべえ、聞かれた

調子づいた男が更にしゃべる

「そつだよアリサ、君が運んでいたのは麻薬だったんだ、

それに、君が…何だったかな……そつだ!! テストに負けて悔しいと落ち込んでいた日、その日に舐めさせたら気分が良くなったと嬉しがっていただろう」

しかも、俺のせいもちよっと入ってんじゃねえか、チクシヨウ

「そんな、私、犯……犯罪をしたた……なんて……しかも……麻薬を舐め  
イヤアアアア!!!!!!」

アリサが泣き出す

あの野郎

これ以上しゃべらせてたまるか、と一歩踏み出した時

「これを知られた以上、口封じしなきゃなあ」

その瞬間、周りから男が5〜6人あらわれた

いつのまに呼んでやがった

こっちにはアリサもいる……厳しいな

「いつまで待たせやがんだこのバカ!!」

「一番偉そうなやつが言う」

「雰囲気的に、一番偉いのはあいつなんだろう」

「へ、へえ、すみません」

さっきまで高圧的だった男が、急にへりくだる

「まあいい、女のほうは捕まえて売り飛ばす、変態どもが好きだろう。男の方は用済みだ、捕まえてバラすぞ」

「はい!!」

襲いかかってきた

アリサを抱えて距離をとろうとするが、アリサが泣いて動かない

クソッ、包围されたか

周りを取り囲む男6人

いくら、身体能力がヤバいからといって、所詮は子供の身体、上から押しつぶされれば動けないこともあるし、蹴られれば吹っ飛ば

しかも、動けない女の子を守りながら

一人の男が俺を蹴り飛ばす

ドゴッ

吹っ飛ばすが、困まれているので近くにいた男にもう一度蹴り飛ばされる

ドガッ

痛くはない、あまり痛くはないが……ウザい

一人の男が、いまだ動けないアリサに向かって手をのばした

「やめろ!!」

飛びつこうとするが、またも蹴り飛ばされてアリサが捕まる

「さて、アリサちゃん。君のために男の子がボコボコにされているよ」

やめろ……それ以上アリサを傷つけるな……やめてくれ……

「この子がやられているのは君コ」やめろーー!!!」

力いっぱい呼びに、こで俺を調子づかせたらまずいと判断したのか

「とりあえずこいつをしめろ、その女は気絶でもさせておけ!!」

……ありがとよ……アリサを気絶させてくれて……これで……これで真の力が使える……

「いくぞ、カス共、2秒でケリをつけてやる」

あまりの豹変ぶりに皆言葉を失う

「……ハッ……何をやっている、こいつを殺せ!!」

遅いよ……もう終わりだ

『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』

展開させる

「何だ……」りゃあ」

流石に言葉を失ったようだ

バーサーカーの使っていた斧剣をとりだして複製する

「殺しはしねえよ……ただ……死ぬほど苦しめ!!」

峰を向かせて頭上にセットして、アリサを持っているやつ以外に落とす

腕は折れ、足はあらぬ方向に、血が飛び散って泣き叫ぶ

「ひいひいひい、じいつは返すから、どうか、どうか助けてください」

知ったこつちやねえ、アリサに手をだした瞬間から、お前等は終わっていたんだ

「知るか、カス」

アリサを抱いて、余っている片方の腕で斧剣を持ち、横に風ぐ



ドグシヤッ

嫌な音がして男は崩れ落ちた

残ったのは、血だまりに倒れている男6人、

「別にお前等が麻薬を売ろうがどうでもいい、問題は、俺の守りたいやつに手をだしたことだ」

俺は、アリサを抱きかかえてその場を去った

何処行こうかな

SIDEアリサ

どこか分からないけど白い部屋

「ほら、しねを舐めろ」

男の人に出された白い粉を言われるがままに舐める

舐めるたびにいい気分になって高揚する

ああ、私、麻薬が好きになっちゃったんだ

私、駄目になっちゃったんだ

いつのまにか場所が変わっていた

……ここは……牢獄？

そっか、私捕まっちゃったんだ

そうだよね……あんなことしちゃったんだもんね

パパ、ママ、なのは、すずか……ケン

ごめんなさい

サ

?何か聞こえる

サ、……リサ

懐かしい声、そこに引き寄せられる

いつのまにか周囲は海

光指す海面に向かって、浮上していった

SIDE OUT

「アリサ…アリサ…アリサ」

うなされ始めたアリサに、優しく声をかける

帰ってくる場所はここだ

「ん、にゅ〜……………ケン？」

起きたか、よかった

ガバツと跳ね起きると

「なんでケンが？私捕まったんじゃ……え？……何で？」

夢と現実がごっちゃになってるな

「たぶん、思っている事は全部夢だよ。怖い物は全て払った  
安心していいよ」

何か呆けてる、どうしたんだろう

「夢……でも、私、犯罪を……」

そういうことか……

確かに犯罪っちゃあ犯罪なんだが

「ケン、やっぱり私、犯罪をしたんだよね。麻薬を取っちゃったんだよね。もう……戻れない……んだ……よ……ね……」

最後は嗚咽まじりになった

……馬鹿やろう

俺はアリサを抱きしめた

折れそうな程小さくて

こんな背中に重い物が乗ってしまったことを後悔して……

「それがどうした

犯罪？確かに犯罪かどうかと問われたら犯罪かもしれない

でもアリサは

後悔している

反省している

謝りたいと思っている

そんなお前がどうして悪いと言えるんだ

それでも悲しいのなら、

悔しいのなら、

俺にぶつける、そのくらい俺が受け止めてやる!!」

未成年だから、知らなかったから

励ます方法はいくらでもあるかもしれないけど、俺はこうやって受け止めたい。

だって、アリサは俺の大事な人だから

「……………ケン……………ケン……………ケン……………うええええええ」

泣け、泣け、今の俺はお前の専属だよ

S I D E アリサ

あの後、泣き疲れて寝てしまった私を家まで送ってくれたらしい

ありがとうケン

私を救ってくれて

助けてくれて

私からなんて恥ずかしくて言えないけど

大好きだよ

## 番外編 2

家で、なのはと話していて、こんな質問が飛び出た

修行って何やっているの？

番外編：修行なう

「っは、っは、っは」

あゝ、疲れた

もう何分同じ動きを続けているのだろう

「乱れてるよ!!」

っと、叱られた、集中、集中!!

何をしてるかって？

素振りです

つきつきりで3時間、延々と両手に持った竹刀を振り続ける

ってかこれ、鍛錬初日じゃないでしょ!!

何でも土郎さん曰く

「けん君の基礎体力は大人並にあるから基礎体力の訓練はしなくてもいい、代わりに、骨組みとなる、基本的な動きを身体にしみこませよう!!」

らしい

むちゃくちやだ……

そんな感じで一日が終わった

やったことは素振りのみ!!

まあ、身体で覚えた気がしなくてもないけどね

その日の夜、土郎さんの部屋に呼ばれた

「けん君は、どんな戦士になりたいのかな?」

たぶんだけど、このまま2刀流だけをやるのか、それとも色々な武器をやるのか……なのだろう

それなら答えは決まっている

色々な武器を使いたいだ

何故か? 『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』の中には、双剣だけが入っている訳じゃないからさ



「そうか……ちなみに使えるようになりたい武器は、どのくらいあるんだい？」

え〜と、剣、槍、斧……」のくらいか

「とりあえず、剣、槍、斧の3種類ですね」

まあ、大・小などを含めたら7種類くらいになるけどね

「そうか、それならばとりあえず戦うことが出来るようになるまで半年、基本的な戦闘ができるようになるまで更に4ヶ月のペースで予定をくもつ

どうだい？」

「はい、OKです」

「ああ、後もうひとつ、私はあくまで御神流の師範代

剣はなんとか教えられるけど、槍や斧は教えることができない

だから、そこは教えることができない」

それは残念というか辛いな

ほかの人に教わる時間なんて作れない

「そこでだ、古い友人に、そこら辺を武器としている人がいるから、その人たちを呼ぼうか？」

さすが士郎さん、しっかりと考えてくれている



はじめましてケンスケ君、僕の名前はラルフ・ローラン、よろしくね」

見たところ完全に外人なのに、日本語が上手い

「当然だミジー、こいつは5歳の時から日本にいるんだ、もはや母国が日本だよ

俺は、武智祐三だ、祐三様と呼びやがれ」

誰が呼ぶか

というか、ミジーって俺のことかよ

「相変わらずだな二人とも、けん君、この二人が今日から指導してくれる先生だ

自己紹介は済んでるけど、槍担当のラルフと、斧担当の武智だよ

二人の指導力は保障するよ」

「ミジーじゃなくて石神剣介です

よろしくお願いします」

それが地獄の始まりだった

「おらあ!! どうしたミジー、もうおねんねか?」

祐三さんの怒声が響く

いや、いくら木製とは言っても、先にゲルが付いてるとは言っても吹っ飛ばされたら痛い……というか死ぬわ!!

「お前は耐久力だけはあるんだから大丈夫なんだよ」

そう、この方々、初日で俺の耐久力に気が付いてからは、身体に叩き込ませるとかいつて無茶苦茶な修行をしてくる

二日目が終わったときには、青あざが絶えない身体になっていた

「おい、ミジュー」

てめえはおかしいほど筋力があるんだ、壊し屋と恐れられた俺よりもな

だったら、俺よりも斧使いの才能があんだ」

不意の優しい言葉にビックリする

筋力については……セイバー並みだからな

「だから、普通はできねえ技を教えてやるよ

これができるだけで、斧の致命的な弱点が一つ無くなる

それはな、振り下ろしを途中で止めて、ノンステップで横に振る、それだけだ」

それだけ？

拍子抜けした

やってみろ、と言われてやってみる

振り下ろしを止めた時にかなりの衝撃が来たけど、俺にとって問題ではない

そのままノンステップで横に振り切った

「そうだ、その動きだよミジィー」

斧で連続攻撃が出来るってのはチート並みだ、これからはそれを重点的にやるぞ」

「ほー!!」

斧の修行はこんな感じだった

「甘いよケンスケ君、君なら付いてこれるはずだ!!」

いやいや、無茶言わんといてください

ただの突きなのだが、引くスピードと突くスピードが速すぎる

しかも、この修行は、ランダムにラルフさんが突くのを、槍の穂先で受け止めるとかという謎の修行だ

いや、動体視力や突く場所を見極めるのには最適な訓練だと思うけど.....

「ほら、甘いよ!!」

段々とジリ貧になってきて、最後にはおしきられる

そこで一旦中断となった

「動体視力や筋力は申し分ないけれど、恐怖心が強いんだね

知ってるかい？ 槍で一番恐ろしいのは突きじゃないんだよ」

それは初耳だ

突きが早いし、避けづらいのじゃないのか

「突きは直線的なので読みやすい、一番恐ろしい技は、読んでいても対応することが難しい、槍のリーチを生かしたなぎはらいなんだよ」

ああ、確かにそうだ

こんな長い凶器を振り回されたら、避ける事なんて不可能に近い

しかし、何を言いたいんだろう

「だからね、突きを恐れる必要なんて無いんだよ

さあ、続きをやるっ」

いや……そういう問題じゃ……

なぎ払いが一番恐ろしいからといって、突きが恐ろしくないわけない……そんな叫びが聞き入られはらずもなく、修行は進んでいった

最後は土郎さんとの修行

「実践的に流れの中でどう攻撃するか、を修行しよう」

つてな感じで修行スタート

修行内容といえば

土郎さんとの1対1を基本として、とりあえずボコボコにされる

雰囲気的には土郎とセイバーの特訓に似た感じ

他にも、恭也さんとの1対1や土郎さんと恭也さんとの1対2

俺と美由希さんと組んで2対1とか、足りる人数で考え得るパターンは全てやった

そして、時は流れてもう、9ヶ月

「よっしゃ、俺が教えられんのはここまでだな」

「僕もかな、今まで頑張ったねケンスケ」

これまで9ヶ月間のことを思い返す

ボコボコにされ、そしてボコボコにされた

習った事といえば、かなり基本的な動作ばかり

槍だったら突きとなぎ払い、斧だったら連続攻撃（これは基本的なのか？）

でも、だからこそ、強くなれたことが実感できた

槍にしる斧にしる、練習用のものは10本以上使いつぶした

「おい、ミズー

前にもいったが、てめえには才能がある  
それを基礎的な意味での運用方法は、俺もラルフも教えた  
それを、どうやって応用させるかは自由だ」

そつだ、どういった方法で運用するかを考えるのもこれからの楽しみでもある

「じゃあ、僕たちはここら辺で失礼するよ  
ありがとう、今まで楽しかったよ」

去っていく二人に、心からの感謝を込めて

「ありがとうございました!!」

一度も振り返らず、二人は行ってしまった

「さあ、けん君

私たちも仕上げの模擬戦をしようか」

いや……聞いてないんですけど

模擬戦内容は至って簡単、3分間の間に、土郎さんに一撃いれるだけ!!

そんなもの出来るわきゃないでしょう

練習の時にもサンドバックなのに……



とにもかくにも模擬戦開始

士郎さんはもちろん双剣

俺は色々悩んだが、双剣にすることにした

理由は簡単、一番得意だから

さて、どう攻めるかな……!?

くそっ、いきなり攻めてきた

先守防衛が基本の双剣なのに、四方八方から攻めてきてこちらが攻撃の暇を与えない

ジリジリと壁際まで追いつめられる

そうした絶対的劣性の中で、一回限りの手を思いついた

キンッ、ガンッ

受け流す、受け流す

そうしながら肩口に隙を作る

「隙だらけだ!!」

きた!!

肩への突きを、逸らしながらしやがんでよける

狙い通り、土郎さんの剣（一本）が壁に突き刺さる

今考えると、壁に突き刺さる強さってなんだよ、と思うが……

「……だ……!!!」

もう一方の剣で、無理に土郎さんの胴を狙う、土郎さんの剣はまだ動いていない

身体が軋むけど構わない

いけええええ!!

キンッ

軽い音が響いた、そして……

「3分経過、試験終了」

無機質な恭也さんの声

それと同時に無様に崩れ落ちる身体

勝てなかった、最後の攻撃も、とっさの判断でかわされた

畜生……畜生……畜生

「惜しかったね、けん君。でもいい攻撃だった」

慰めが痛い

でもここは気丈に振る舞わなければ

「ありがとうございました」

礼をしてクールダウン

ああ、また今日から頑張るか!!

それが、明日に繋がると信じて……

SIDE 士郎

危なかった

クールダウンをしながら心底そう思った

最後、ああいう風に追いつめれば、考えつくだろうと思っていた

案の定、思った通りの事をしてきたから、わざと壁を貫いて隙を作った

だが、予想外の角度、スピード、キレだった

気づいたときには『神速』で防いでいた

「あれほどのスピードがだせるとはな……しかし私も大人げないな」

頭をかく、自分の大人げなさに、あの子の才能に

いまはまだ自分の方が強い

だが、抜かれるのは時間の問題だろう

せめてその時が遅くなるように、私も修行しよう

それが、未来へと繋がるだろう……

## 第九話

前回(?)のあらすじ…なのはが砲撃を覚えました

S I D E  
???

風が気持ちいい

海鳴という名のこの町に来て初めて知った感覚

眼下には光の海、それを見た私は心の中で母さんに語りかける

世界はきれいだね

反応なんかあるわけない

「ジュエルシート……か……」

戸惑いがないわけじゃない、目的を知りたくないわけでもない  
でも、母さんのためなら何でもしよう

私は、あなたの娘だから

SIDEOUT

「おっい遅刻すんぞ〜」

なのはに呼びかける

「ちよっ、ちよっと待っててよ〜」

今日はすずかの家に行く日

恭也さんも、すずかの姉である忍さんという彼女に会いに付いてく  
るらしい

で、バスに乗るのだけれど……時間が無い

もちろん俺と恭也さんなら余裕、ただ、運動神経がちょっとアレな、  
なのはがいることを考えるとギリギリの線

「じめんね、お待たせ」

やっときたか

じゃあ行きますかね

「わあ〜」

後ろのなのはが嬉しそうな声をあげる

何かと思って外を見ると、快晴の空と、光を受けて輝く海があった

「ここ海鳴は名前の通り海が近い

毎日色々な顔を見せてくれる海だが、今日の気分は最高のようだ

……こここのところなのはも頑張っていたから、今日は楽しい一日に  
なるといいな

淡い期待を海に投げかけた

ピンポン

「恭也様、なのはお嬢様、剣介様、いらっしやいませ」

ガチャツつと開けて出てくるは、紫髪の美人メイド、ノエルさん  
可愛いというよりかはかっこいい系の方だ

挨拶をすると、小首をかしげて可愛く挨拶を返してくれる

「いつみても思っけど……でかい家だよな」

そう、メイドさんがいることから分かる通り、月村家はかなりの  
お金持ち

こんな友人一人は欲しいよね、って言われる人の一人だと思う

「なのはちゃん、けん君」

「おお、すずか、アリサ…ファリンさんも久しぶり、忍さんもこんにち  
は」

部屋に着くと、もうアリサは来ていてお茶をしていた

部屋にいるもう一人のメイドさんは、可愛い系のこれまた美人メイ  
ド、ただ、ドジっ子なところが玉に瑕なファリンさん

忍さんは本当に綺麗な人で大学のミスコンとかに出たら優勝しそ  
うな程

「いんにちは、二人とも、さあ行きましょ恭也」



恭也さんと熱いのはもう慣れた

俺は思い返す、転生前、こんな豪邸で遊んだことはあっただろうか、いや、ない

ってか、お茶ってなんだお茶って、おままごととかもって子供らしい遊びをしろよ、何かOLみたいだから

「今日は来てくれてありがとう、なのはちゃん元気なかったから……元気づけたくて」

ほう、やっぱり友達ってやつは異変に気づくもんか

でも、こういふことは気の効いたやつしか出来ないんだろうな、俺には無理だ

「なんかあれば私たちに相談しなさいよ、私たちはその……親友……なんだから」

いやあ、分かっていたけど、いい子たちすぎるなあ

なのはも泣きそうになってる

キユ〜!!

その静寂を破る声

何かユーノが猫に追いかけてる

ユーノ……別にお前のせいじゃないし、必死になる気持ちは分かるけど……空気読めよ

S I D E  
???

アルフに言われた通り、近くの大きい家に行くと、これまた大きい庭があった

アルフ曰く、ここにあるらしい

そうならば、早く見つけて封印しないと……

「バルディッシュ、行こう」

[Yes sir]

私は搜索を開始した

SIDEOUT

現在地 トイレ

皆は外でお茶をしているはず

ドクン

!?

その時、非日常が帰ってきた

【けん君!!】

なのはからの念話

【ああ、気づいてる、近いよな】

【じつ……じつじつ】

何が？ と言いつけてやめた

その言えは近くにアリサとすずかがいた事を思い出す

【ああ、すまん。状況がわからないからアドバイスが出来ない】

【ええ、まあしょうがないか……】

SIDEなのは

すずかちゃんとアリサちゃんに上手く言い訳する方法が見つからない

でも、じつしてる間にもジュエルシードが……

ってユーノくん!?

いきなり飛び出したユーノくんが林に入っていく

え……ああ、そういごと

たぶん、自分が出ていったことにしてくれたのだろう

なら私は、それに合わせるだけ

「わ、わぁーユーノ君どこいくのー、さがさなきゃー」

私も、さもユーノくんを追いかけるふりをして席をたつ

「あら、ユーノどっかいったの？」

「手伝っよ」

ちょっと優しい言葉が身にしみる

「大丈夫、すぐ戻ってくるから」

そう言っって私も走り出した

すぐに追いついて少し走ると、思い直したようにユーノくんが立ち止まった

「人目にふれるとまずいからね。結界をつくらなきゃ」

けっ…かい？

何それ？

「僕となのはが最初に出会ったときと同じだよ。認識をずらして認知されづらくする魔法なんだ」

意識を集中させるユーノくん

よく意味は分からなかったけど、ようするにアリサちゃんやすずかちゃんにバレないようにするって考えればいいと思う

ユーノくんの目の前にあった、大きい魔法陣が光る

その光が広がっていくと、周りがちょっと懐かしい感覚になる

たぶん、ユーノくんも言っていた通り最初に会った時はこの空間だったからなのだろう

ピキピキピキ

あ!?

前をみると、ジュエルシールドが変化した姿があらわ「……………へ？」

にゃあお

…………それは、とっても大きな猫でした

それでも封印しなきゃと切り替えて、猫さんを見ると

ドカアアン

アリサちゃんと同じ金色の髪をした人が、金色の魔力弾で猫さんを襲っていました

「え……魔法!？」

ユーノくんもびっくりしている

でも、あれじゃあ猫さんが可哀相だよ

助けてあげなくちゃ

「行くよ、レイジングハート!!」

いつもの衣装に着替えて(？)(攻撃を受けている猫さんのほうへ向かう)

背中に飛び乗ろうと思うと

[flier flier]

綺麗な桃色の羽が生えて、猫さんの背中に飛び乗ることができた

ドゴオオ

ニヤアオオオ

でも、そこからどうすればいいのかわからない

今まで、全部けん君に任せてきていたから

封印とディバインバスターしか分からない……どうしよう

……でも……それでも私はあの猫さんを助けるために戦つ!!

この前だつて何とか出来たんだ、今度だつて出来るはず!!

私は飛び上がった金髪の少女と向かい合う

第一印象で思った

……なんて可哀相な目をしているんだろう

それが凄く印象的で、次の行動に移れなかった

「じゅめんね、あれは私がもらったから」

少女の杖が鎌になって、私に襲いかかってきた

「なのは!!」

ユ一ノくんの声が他人のように聞こえる。あれ、私……何して

[ protection ]

ガキイイン

レイジングハートの声で正気に戻る

そうだ、私、戦つてて……

少女が距離をとる

二人とも砲撃の構えになる……砲撃なら……



ニヤアオ

あ……猫さん……

「しめんね」

あ!!

猫さんに気を取られていた隙の砲撃……避けられない

私は空中で意識を失った

SIDEOUT

俺がトイレから戻ると、もうなのははいなかった

「あれ？なのはは？」

さすがとアリサが心配そうに

「ユーノがどこかに行っちゃって、探しに行ってるの……でも戻ってこなくて……」

上手い言い訳だな、ユーノ発案かなあ

「じゃあ、俺も探してくるわ」

走っていくと、すぐなのはは見つかった

……ユーノのすぐ横で……倒れて……

「ユーノ……」

なのはは意識を失っているようだった

特に外傷は見あたらない

「あ、ケン!!」

周りを見ると、ちょうど封印し終わって帰ろうとしている金髪ゴース  
ロリ幼女がいた

「あいつか?」

「……え?」

「なのはを倒したのはあいつか?」

「そう……だけど」

よく分かった

ならば、俺はあいつを……潰す

「その金髪」スロリ幼女ー!!」

空中を走りながら叫ぶ、幼女が振り向いて驚いた顔をしてるが関係

ん

「フォトンランサー……ファイア!!」

金色の魔力弾を撃ってきた

立ち直りが早いから戦闘経験者かな？

俺も『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から、干将・莫耶をとりだして払い落とす

ギン、ギャン、ギン

っち、数が多い

いくら、魔力耐性が上昇する宝具でも、こつ数が多いとやりにくいことこの上ない

俺は、バビロンから『強化を施された土郎の制服』を取り出して前に投げつける

微弱な時間だが、時間稼ぎくらいにはなる

その間に前に進めば言い話だ

「ック」

目前まで迫る……あと一歩

「フェイト!!」

!? 横から声がした

何だ? あいつの仲間か?

とりあえず声のした方向に向かって、かかと落としを放つ

ギャンツ!!

「アルフ!!」

感覚的には手応えあり

ようやく横を見ると、赤い犬が落ちていくのが見えた

あれは、ユーノみたいな感じの使い魔かな?

「よくもアルフを!!」

あの間で離れたのか

少し離れた場所から、初めて感情の籠もった声

今攻撃されていたら危なかったな

「あの使い魔、アルフっていつのか

だがな、俺にとってもなものはがやられたんだ

お互い様というやつだ!!」

俺はまた駆け出す

幼女（フェイト？）も負けじと

「ハーケン……セイバー!!」

鎌状の武器から鎌を発射してきた

あれは……回転してるし弾くのは難しい……なら

「ウソッ」

簡単なこと、横にステップして避けただけ

幼女は予想外に避けられて、ビックリしたのか呆けている

「終わりだ」

距離をつめて首を斬る

幼女の首から上が綺麗になくなって赤い肉がその身をさらけ出す

首から血が吹き出して俺の身体にかかる

……俺の勝ちだ

とはならなかった

「どついつつもりだ……ユーノ」

俺の身体には鎖が巻き付いていて、首に触れるか触れないかの位置

で刃は停止していた

幼女はさすがに、リアルな死の恐怖は初めてだったのか歯の根を打ち据えて、目には涙が浮かんでいる

「ケン……駄目だよ」

そんなことを聞いているんじゃない

「どっいつつもりだって聞いてんだ!! 答えるユーノ・スクライア!!」

「そこの黒い魔導師の人は逃げて……早く!!」

このバカがつ、逃がしちまったじゃねえか

「ケン、落ち着いて……お願いだから……そんなケンを見たら、なのが悲しむよ」

ユーノの瞳に俺が映っている、その映った目には見覚えがあった

俺がよく知っている人……いや、知っていた人の目

俺が世界で一番なりたくなって、世界で三番目に好きだった人

それを思った時、急速に醒めていく熱

「……すまん、熱くなり過ぎていた」

心底ホツとした顔のユーノ、すぐに鎖がきえて動けるようになった

「よかった……大丈夫ケン？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけた」

本当に自分が嫌になる

結局ダメだった

あの人にならないように、あの人に近づかないようにしていたのに……

俺は弱いな……本当に……ダメだ

「ケンは弱くないよ!! 今日のは……ちょっと熱くなり過ぎただけ……」

ユーノのフォローが痛い

「……とりあえず……なのはを連れて帰ろう」

俺はユーノとその場を後にした

「あ!! 帰ってきた……ってなのは、どうしたの!?!」

日常に帰ってきた

「ああ、何か躓いて転んだみたいでな……ちょっと気をうしなっているみたいだ」

口からは鉄の味、出てくる言葉は飴細工



「大変、ファリンさんお願いできますか？」

それは成長の証

「わかりました!!こっちはです」

退化の証

「わかりました」

少年は今

「行くっ、アリサ、すずか」

己の歪みを自覚する

## 第十話

前回のあらすじ…キレてフェイトを殺そうとしました

「けん君……わたし、強くなりたい!!」

部屋で雑誌（卓球王国!!）を読んでいたら、いきなり入ってきて叫んだ

とりあえずノックもせずに入ってくるのは止めて欲しい

魔術の鍛錬してたら、命に関わるから

「で……何で?」

まあ、たぶん昨日のことだろう

あの幼女にやられて気絶した後、目を覚ました時に本当に申し訳な  
さそうに皆に謝っていたからな

何か原因があるのか、生来の性格か、なのはには極端に他人に迷惑をかけないようにしようと頑張るところがある

「実はね、昨日あの子と戦った時に

木の怪物を封印したときみたいになんとかなるだろうっていう気持ちで戦ったの

そしたら何も出来なくて……けん君だけじゃなくて皆に迷惑かけて……

あともう一つ、たぶんこれが一番の理由、あの子、なんだか悲しい目をしてた

あれはたぶん孤独に慣れちゃった目

私はあの子の悲しみが分かるから、理解できるから……

その悲しみを一緒に背負ってあげたい……うつん、背負えなくてもいい、知るだけでもいい、支えてあげたい

でも、あの子と一緒にの目線に立つためには力が足りないの」

だから強くなりたい……か

実は、なのはには幼女との事は話していない

ユーノに、あれは話さない方がいいと止められたからだ

心遣いは嬉しいけど、いつかはしゃべらなければいけないことだと

は思う

「でも、あの子は知られたくないかもしれないよ」

言っちゃ悪いが、なのはの自己満足も多分に含まれている

「それでもいい、教えてくれなくてもいい

私は、あの子とお話をしてみたいの」

お話……か

まあそこまで考えているのはなら鍛えてもいいんじゃないかとは思う、でも

「それにしても、何で俺？体術を習いたいなら土郎さんに習えばいいし、魔法ならユーノに習えばいいじゃん」

教えたくないというわけではない

ただ餅は餅屋といった言葉がある通り、専門家が教えた方がいいと思っただのだ

「うん……そうだよね……でも、お父さんに心配かけられないし」

そっか、まだ土郎さん達には話していないんだもんな、そりゃ頼みにくいわ

「まあ、いいか

いいよ、何の力になれるか分からないけど、俺でよければ力になる

「よ」

「ほんと!!」

「ああ、ただ、魔法に関してはユーノと協力しながらだぞ」

「うん ありがとう、けん君」

まさかそこまで喜ぶとは……ツインテールが犬のしっぽみたいにブンブンはねている

「え〜と、ちょっとレイジングハートを持ってきてくれるか？」

持ってきてもらったレイジングハートと話をしている分かったのだが、レイジングハートには録画機能がついていて、前回の戦闘も撮っているらしい

見せてもらうと、なのは視点ではなく、空中から地上から色々な視点で撮ってあるのもすごくみやすい

「レイジングハートって凄いな〜」

[thank you my master]

そうして見てみると、なのはの弱点というか戦いなれていない部分がいっぱいと見えてきた

「じゃあ、今日はもう遅いから明日から特訓しよう」

レイジングハートはちょっとこの場に残って練習メニューについて

て話し合おうか

あと、ユーノも借りるぞ」

その後俺は、ユーノとレイジングハートと話し合って練習方針を決めたのであった

朝

さて、まずはなのはの反応が楽しみだなっ

朝飯食って、部屋で支度をしていたら

【ふえええ、どういことなの〜】

主語も何もあったもんじゃない念話ってきた

まあそりゃそうか、なにしろ今のなのはは、普段の80%の力しかでないからな

『運動・魔法能力の限定』

これは、文字通りなのは運動・魔法能力を制限するもの

効果は、今まで余るほど持っていた魔力を制限することで少ない魔力で身体を動かすことになり、普段のままでは辛くなる

それにより魔力の運用効率を上げるといってもおもしろい（レイジングハート談）

本来は徐々に制限していくのだが、今回は時間もないのでいきなり80%から始めた

レイジングハートをつけているときは基本的にこの状態

とレイジングハートが説明してくれているはず

やはり、かなり動きづらくなるみたいで

学校でもいつも以上に転んだりしていた

心配したアリサとすずかが俺に何をしているのか聞いてきたが、そこは口先の魔術師（そんな異名は持っていないが）のトークでごまかしたりしていた

家に帰ってくると、恭也さんも美由希さんもいなかったので、早速

特訓開始

桃子さんに一声かけて（もちろん嘘の理由）裏山まで走っていくつもり……だったか

「ちょっと……けん……君……ま……って」

あちゃー、いつもより随分ゆっくり目に走ったけど駄目か

しょうがない、歩いていくか

さて、裏山について休憩をとった後、修行スタート

「今回、いつあのゴスロリ少女と会うかもわからないから、今、必要な技を修得しなきゃならない

まずは、『小さい誘導弾の生成』

現在、なのはの持つ攻撃魔法はディバインバスターという直線的で高威力の砲撃魔法

これは、威力だけなら高いけど使い勝手が悪いし、あの少女相手には心許ない

だから、自分で小さい誘導弾を作って操作できるようにする

これができるようになれば、攻撃の幅が大きくなるぞ」



この程度なら簡単に出来てしまっただろうというのが1匹と1デバ  
イスの意見

それほどなのは魔法に対する才能というものは素晴らしいら  
しい

確かにもう1個出来上がった

ただ制御は難しいようで、あっちこっちに飛んでいつている

「じゃあなのは、次にそれを今、作れるだけ作ってみな」

1…2…3…4…5…6個が限界か上出来、上出来

「それを制御できるように特訓しよう、この的に全部あたるように」

弓道の的を出した

意外と小さいから厳しいと思う

1時間後

「うー、2個しか当たらないの」

額を汗で濡らしたなのはが悔しげにうなる

さっきユーノと話したところによると、初めて作った人が1時間で  
2個当たることなど聞いたことがないらしい

そこから、なのはの才能が見え隠れする

「よし、じゃあ次にいじろ」

次は『既存の防御フィールド強化と広範囲のフィールド形成』

これは、今ある protection を強化することと、相手の範囲攻撃に対して、自分の2倍くらいの

フィールドを張れるといいな

まずは、でかいフィールドを張ってみてくれ」

すぐに張るなのは、フェイトとの戦いの時にできなかったのは、焦りやプレッシャーがあったのだろうか

俺も砲丸投げ用の球に、uni・ゲルをつけた自作の球を取り出して、複製しておく

「よし、なのは、次は protection を張ってくれ

……よし、張れたな

しっかり受け止めるよ……行くぞお」

「ふええええ!!」

まずは軽く、段々と強く投げていく

もちろん安全は確保済み、なのはの前) protection の後ろ(に、ユーノがフィールドを張っておいてくれる(なのはは知らない)

強度は昨日確かめたので問題ない

受け止めるたびに、玉のような汗が飛び散るなのは、相当に厳しいようだ

これをでかいフィールドでも繰り返す

「よう、116へんごぶごぶごぶ」

最後、今日得た知識でも、今まで得た知識でもいい、攻撃したって構わない

何でもいいから10分間、俺から逃げ切ってみろ」

俺は、白と黒のコントラストが美しい一対の双剣をとりだす

黒い剣には赤い紋様が、まるで闇に爆ぜる炎のようになっている

その双剣を持ち、なのはに襲いかかる

「レイジングハート!!」

[protection]

ビシイ!!

意外と堅い、もう少し力を入れるか?

いや、ここからどつするのを見てみよう

一旦下がって様子を見る

なのはは、下がりながら魔力弾を生成して撃ってきた

まだまだ狙いは甘い、一目とは思えないほどの精度、スピードに思わず嬉しくなる

それから5分、万策つきたようで、肩で息をしながらこちらを見ている

「まだまだ……ディバインシューター」

あの魔力弾が4個できた

そろそろ潮時だな

俺は白い剣をなのはの後ろに投げる

もちろんなのはは避けようとする

「甘いぞ、なのは」

ギヤイン

後ろで鳴った激しい音に、なのはは驚いて振り返る

そこには、落ちていく白い剣と、ユーノのシールドがあった

もし危なくなったら、助けてくれと頼んでおいたのだ

「残念だったな、今ユーノがフィールドを張ってくれていなければ、串

刺しになっていたぞ」

なのははビクビクしながらも驚きの表情をしている

「なんで、けん君の剣は戻ってきたの？」

絶対投げ損ねたと思ったのに……」

種明かしだな

「この双剣は『干将・莫耶』といって、一对の双剣だ

この双剣には、互いに引き合う性質がある

だから、戻ってきたわけ

こつやって、いきなり自分が知らないことを相手がしてくる事はよくあるから、どんな時でも気は抜いてはだめだぞ」

「は……」

うん、いい返事

「じゃあ、今日の修行はこれでおしまい

明日は、更に速度を高めよう。特にダイバインシューターの操作性だね

缶を落とさないように下から打つてのもいい練習かもな」

こつして、修行1日目は終わった

SIDEフェイト

あの時の事を思い出すと、今でも恐い  
慣れていたはずなのに

母さんが慣らしてくれたはずなのに

現実には厳しいな

首筋まで寄ってきた死

憤怒の目

こんな思いは嫌だ、もうたくさんだ

本当にそう？

それはありえない

だって母さんに頼まれたから

待っててね、今、集めるよ

SIDE OUT

今日は、なのはが塾で恭也さんはデートだから修行も鍛錬もない  
(夜まで)

ってなわけでぶらぶらと散歩をしているわけですよ

お、あの大判焼きは旨そうだ

なのはに買って行ってやるか

お金？宝石を換金してもらいました

だって宝石魔術は専門外だから持っていてもしょうがないんだも  
ん

「おっちゃん、大判焼き2個」

「あいよ」

さて、そろそろ帰ろうかな

……………あれは、

「その金髪幼女」

呼びかけると振り向いた

SIDEフェイト

今日は天気がよかったから外にでてみた

この世界には魔法がない

でも明るい

でも暖かい



この世界に母さんを連れてきたら嬉しいかな

たぶん嬉しいがらないだろうな

そんなことを考えながら歩いていると、お店……なのだろうか

小さな移動式の車？を発見した

あれは、何だろう

「その金髪幼女」

恐怖がよみがえった

あの艶のある黒髪

中性的な顔立ち

そして何より、琥珀色に輝くその瞳

「あ……あ……」

歯の根が鳴る

瞳孔が開く



「よお」

挨拶のつもりで肩に手をかけると

フワッと気絶した

……やっぱり恐かったんだな

本当にすまないことをした

また罪悪感がよみがえってきた

幼女をお姫様抱っこして、近くの公園まで連れて行き、ベンチに座る

近くで見たからこそ分かる

白くあどけない顔

スベスベした細い腕

サラサラの金の髪

やっぱりかなりの美人なのだろう

そうやって観察していると直ぐに起きた

起きあがって俺の顔を見た瞬間に暴れ出した

「やめて!! 離してください!!」

殴られる顔、身体

「嫌だよ……死にたくない……」

ついには泣き出してしまった

殴られた身体は痛くない

でも心が痛い

自分のしてしまった事に怒りが沸く

「うめん」

二の句がつけない

「うめん……本当にうめん」

ただ壊れた人形みたいに謝る

言おうと思っていた謝罪の句はたくさんあった

でも吹っ飛んだ

カー、カー

どのくらいだったのだろうか

真っ青だった空は赤く燃えている

下を見ると幼女が泣きやんでこっちを見ていた

「なんでそんなに謝るんですか」

「え？」

思わず聞き返す

「あの時のあなたの行為は間違っていなかった

なのに何故謝るんですか」

あの時のことがフラッシュバックしてきた

あの時感じていた違和感

何だったのだろうか気になっていた

……そうか

だから俺は違和感を感じていたんだ

謝りたかったんだ

「あの時、俺はなのはを守るといふ名目上で君を攻撃したと  
思っていた

でもそれは違ったんだ

あの時攻撃した理由

それは、守れなかった悔しさ、怒りを発散したかっただけ。だったんだ

そして、その時都合良くいた敵である君に襲いかかったんだ」

そう、それはただの八つ当たり

俺の理想とは程遠いもの

自分自身にまけた愚か者

それが違和感の正体

「だから謝りたかった

本当にごめん」

幼女は数回まばたきして微笑んだ

「ごさびすよ

私はあなたを許します

私には、あなたの後悔が痛いほど伝わってきた

あなたの反省が胸に届いた

だから、あなたを許します」

そう言った幼女がとても眩しかった

俺は許された喜びをただ、噛みしめていた

「そういえば」

俺はとなりに座っている幼女に大判焼きを渡しながら話しかける

「なんですか？」

「名前聞いてなかったな、と思って」

いくらなんでも幼女なんて呼びたくない

「フェイト」

フェイト・テストアロッサです」

「フェイト……運命か」

何か似合ってる、いい名前だと思うな

俺は石神剣介

呼び方は何でも構わないよ

ちょっと頬をそめて、嬉しそうに顔をしているフェイト

「似合ってる……か

嬉しいよケンスケ」

「また……次あったら敵同士だな」

ジュエルシードを集めている以上

またぶつかる事は必至だろう

「そうだね……ケンスケはどうしても引けない？」

「……そうだな、もう約束しちまった事だし、なのははフェイトとお話をしたがってる」

「なのはってあの白い子のことだね

お話……か……たぶん話し合って解決するような事じゃないと思  
う」

そっか、それだけ固い決意なんだ

「わかった



なのにも覚悟はしとけて言っとくよ」

「うん、よろしく」

じゃあねケンスケ、大判焼き美味しかった」

「ああ、また今度」

そう言ってフェイトは去っていった

今回、分かったことがある

俺は精神面が弱い

これはただのカンだけど、それで将来ひどい目に会う気がする

そんな風に思う日だった

## 第十一話

前回のあらすじ…なのはの修行とフェイトとの仲直りをしました

「明後日から温泉に行くから」

「はい」

「了解」

「わかったよ」

「OKです」

なんで皆こんな軽いかって？

毎年恒例行事だからさ

うちとすずかの家族にアリサを加えたメンバーは、毎年この時期の連休になると2泊3日の温泉旅行にでかけている

さて、じゃあ今日のうちに準備しときますか

当日

「見てみて、すっごい緑」

車に乗ってからそんなに経ってないけど、緑が多くなってきた

ってことは、そろそろ温泉も近くなってきたってことかな

【旅行なんだから、楽しまなきゃ駄目だよ】

ユーノからの念話に大丈夫だよと答えるのは

よくよく考えてみると旅行中でもレイジングハートを身につけている以上、80%制限は実行中だから、真にゆっくりとは出来ないだろうけど

それにしても、今のなのは色々と背負い込んでいる

修行のこと、ジュエルシードのこと、そして何よりフェイトのこと

温泉旅行の間くらいは忘れていてほしいけどな

「着いた〜」

車からでて、伸びを1回

新緑に囲まれた中に佇む情緒あふれる旅館、これが今回泊まる旅館、『旅館山の宿』

……前も思ったけどそのまんますぎないか

純和風の部屋に荷物をおいて

さて、温泉に行きますか

「ユーノ君、おいで」

キュ、キュキュ

婦人の湯の前で、何だかユーノが騒いでる

「どうした、なのは？」

「ユーノ君が女湯に入りたくないって……ねえ、一緒に入るっよ」

まあ、ユーノも男(?)みたいだからな

一緒に入りたくないのだろう

「いいよ、ユーノ、こっちに来い」

キュ

【ありがとうケン!!】

そこまで喜ぶか……俺だったら喜んで入るけどな

「え〜、一緒に入るっよ〜」

未練たらたらなのは置いて、恭也さんとユーノと一緒にのお風呂に入る

カポ〜ン

「いや〜、気持ちいいな」

「本当にそうですね〜」

「ユーノはどうだ〜」

キュク〜

【大きいし、いい気持ちだよ】

ああそうだ、ここには露天風呂もあったんだ

「ユーノ、露天風呂に行くか」

恭也さんの顔が戦士のそれになった

「待て剣介、そっちは行かないほうが……」

何でだ？

「何故ですか？恭也さんも行きましょっよ」

だって露天のほうが気持ちよくないか？

「いや……俺はいい、ユーノと行ってこい」

「……？わかりました、ユーノ行こう」

それが間違いだった……恭也さんの言うことを聞いておけばよかったのに

流石は温泉旅館、新緑の景色が美しい

何人か先客がいるようだ……何か見覚えがあるよう……

「あゝ、けん君とユーノ君だ〜」

「本当だ、お〜い」

「一緒に入ろう」

なん……だと

落ち着け、慌てるな、これは罠だ、そうだ、これは孔明の罠だ  
ってどうした俺は

恭也さんが言っていたのはこれか……

そつえば去年も同じような感じだったよな……忘れていたよ

ちて……もど」「そうはいかないわよ」

忍さんに捕まった

「恭也は来ないみたいだから、けん君で遊びましょうか」

うわっ、嫌な予感しかしねえ

「じゃあ私、けん君に背中流して貰おう」と

悪のりする美由希さん

「えっ、ずるいよおねえちゃん、けん君私も」

「さっさとやりなさいよ、次は私なんだから」

「けん君、私もやってくれるよね」

もういい、こつなりゃヤケだ

全員まとめてかかってこいやあ!!

「じゃあ、私たちは探検に行くから、ケンも早く来なさいよね」

「りよ……かい」

くそ、迂闊だった

【ケン、大丈夫？】

今はユーノの優しさのみが救いだよ

「すごい気持ちよかったね」

「温泉で汗流したところで卓球しない？」

卓球か

久しくやってないしな

「私……卓球はちょっと」

そりゃなのは嫌だろう



運動音痴の極みだからな

「こんにちは〜お嬢ちゃんたち〜」

なんか桃色髪で美人……美人だな、女性が話しかけてきた

なんだこいつ

なのはの前でとまった

「ふーん、ふんふんふん……」

いきなり何をしているんだ？

「強そうでもなければ賢そうでもなし、早さも無さそうだし……ふーん」

はあ、何かイライラすんなあ

アリサが前にでようとしたが、それを制して前にでる

「どなたさまでしようか？」

ん？何か雰囲気が変わった？

「あなた……よくも」

俺？俺、なんかこいつにしたか？

「もしかしたら人違いでは？俺含めて、ここにいる皆はあなたのこと  
を知らないようですが」

キョトンとした後

「あーらっめんねーなんか知り合いににてたから勘違いしちゃったよ〜」

嘘くれ

まあ……別にどうでもいいが

「可愛いフェレットだねえ、よしよし」

【今のところは、挨拶だけね

忠告しとくよ、子供はいい子にして、おうちで遊んでなさいね

お痛がすぎるとガブツといくよ】

やっぱりそっち系統か、この人

しかし、会ったことあったか？

でも、やられっぱなしは嫌だな

【あら、そうですか

し」忠告ありがとうございます

でも、余計な忠告は身を滅ぼしますよ

お・ば・ね・と】

【やっぱりあんたむかつくわね

「いいでやっつてやろつかしら」

【出来るもんならやってみな

2秒で追い返してやるよ】

【あんたね

年上への口の効き方って習わなかった？】

【すまんね

礼儀知らずの馬鹿に使っようなものは知らんよ】

険悪な空気が辺りを包む

にらみ合う俺と女性

一触即発の空気が流れて……痛っ!!

「わかったから、さっさと行くわよケン」

耳を引っ張るなアリサ

ありがたいけど痛いって

「しっかし長い時間にならみ合ってたわね」

「わたし、どっつしたのかと思った」

「あはははは」

事情を知っているなのは乾いた笑いに不思議そうな顔をしている、  
「さすがとアリサ」

「まあいいじゃん、卓球しよ、卓球」

卓球場

トーナメント形式の5点先取マッチ

1回戦目は

俺VSなのは

さすがVSアリサ

まず、俺となのは

「おいしよー」

「ふええええ」

なのはのサーブをバックに送って、返ってきたところをフォアに  
送って終了

フォア：相手がラケットを持っているほうのサイド、対義語はバック

「50でケンの勝ち」

さすがに余裕だったな

小学校の時（今じゃないよ）習っていたのは伊達じゃない

もう1試合のすずかVSアリスも一瞬だった

「50ですずかの勝ち」

恐ろしいな、アリスがどんなに返してもズバンとスマッシュを決めるんだから

さて、決勝戦だ

まずは下回転で様子を見る

ストップで返してきたから、それをフリックでフォアに払う……甘いか

ストップ：ボールを台の上で2バウンド以上させる台上技術

フリック：台上のボールを上回転をかけて返す台上技術、台上技術の中では一番攻撃的

甘く入ったボールをスピードドライブでバックに返してきた

スピードドライブ：体重を前に乗せて放つドライブ、スピードが速く、回転がかかりづらい

それをブロックでバックに返すとバックドライブでフォアに打ってきた

うわっ、意外と回転がかかっている……

ボールは高く上がって相手のコートに落ちる

やっばい、下がらなきゃ

バチンと音がするスマッシュをロビングで返す

ロビング：テニスでいうロブ、わざと高く球をかえす技術

普通この年齢くらいだと、ボールが頭を越すのだが……すずかはジャンプして打ってきた

予想外すぎて点を取られてしまう

しょうがない本気を出すか（何このブリーチ展開）

経験者ならば分かると思うが、卓球とはすなわち、回転のスポーツである

なぜか、スピードがあるだけなら素人でも当たれば返る

しかし、遅くても回転がかかっていたら返されない

また卓球は『最速のスポーツ』と言われている

それはなぜか、3 mの台を挟んで、プロならば160 kmものス

ピートで飛ぶからだ

野球に例えれば、3m手前から全盛期のランディ・ジョンソンがストリートを投げるようなもの、そんなもの反応だけで返すしかない

それに加えて回転がかかっていたらどうか、当たるまでが精一杯、当たっても吹っ飛ぶ

そんなもの返せるわけがない

何でこんな説明をしたかって？

それは俺がそのボールを打てるから（ガブリエルのおかげで）だ！

「…じいちゃんあぁあぁ」

よし、渾身のドライブだ

ビシッ

……あれ？

「…すずかちゃんすずい」

よし落ち着け、今度は素数を数えよう

ってまた何やってんだ俺は

よし次だ次、さっさと勝つぞ……

「5 2ですずかの勝ち」

「あ、あの〜けん君、元気だしてね」

「俺は……貝になりたい」

「意味が分からないわよ」

まさか……まさか負けるとは

「でもですずかちゃん強いね〜、けん君を全く寄せ付けなかったしね」

「これ以上傷つけるのは止めてくれ、なのは

「ケン、しょうがないわよ、あれは卓球じゃないわ」

おお、アリサが女神に見える

「ば、馬鹿じゃないの、私はもともとから女神よ」

そこですか!?

ってか考えを読むな



「「「かんぱーい」」」

黄金に光る液体、汗をかいているグラス

そう、りんごジュースだ

……俺だってビールを飲みたかったさ

でも桃子さんに止められたんだ

しょうがないけど、俺だって実年齢は19歳なんだがなあ

「さて、それを飲んだら寝なさいよ、けん君」

「しっし」

なのは達は寝たけど、俺はちょっとだけ宴会に参加した

「じゃあ、寝ますか、おやすみなさーい」

「「「おやすみ」」」

!?

また発動したか、本当に空気の読めない宝石なことぞ

【けん君】

【わかってる、バレないように行くぞ】

俺たちがいくと、もうフェイトが封印していた

その近くにいたのは、さっき会ったおばさん

「ジュエルシードをどうするつもりだ!!とても危険なものなんだぞ」

まあそんなことは相手も知っているだろうが……って何かおばさんが狼に変身した

使い魔ってあんなこともできたんだ

そいやあ、どおりで俺に会った時怒ってたんだ

前回、俺に蹴り飛ばされて、主人を殺されそうになったんだ

それで怒るなってほうが無理だろ

飛びかかってきた狼（アルフ？）を抑えようと前に出るとユーノが更に出てきて結界をはった

「おい、ユーノ」

「なのは、あの子を頼む

ケンはなのはのサポートを」

了解、しっかりと役目は果たすさ

「できぬやでも!!」

さらにアルフが体重をこめて結界を破壊しようとする

「できぬや!!」

その瞬間、ユーノとアルフが消失した

なんだこれは

「結界か……良い使い魔だね。ケンスケ」

「ユーノ君は使い魔じゃないよ。私とけん君の大事なお友達」

意思をこめてにらみ合う二人

「で、でどうするの？」

「話し合いがしたい」

いや、俺なのは「あの日のこと話したよな

「ケンスケから聞いてると思うけど、私はあなたの敵」

「でも、話し合いで何とか出来る事ってあるよ」

なのはの言いたいこともわかるが……そんな簡単にはいかないだ  
ろうな

「話し合うだけじゃ、言葉なんでものじゃ何も変わらない、伝わらない  
」!!

始まった

あれは、今から4日前

よし、今から修行するぞ

「は〜い」

ああそつだ、フェイトに会ったって事伝えないと

「そつだ、なのは

あの幼女、フェイトに昨日会ったぞ」

「ええ!?何で」

仮定を説明するのは……メンドイから省こう

とにかく、フェイトが伝えてと言ったことを伝える

「そつか、話し合いじゃ解決しない……か」

で、どうするのか

なのはは諦めるのか？

「諦めないよ、私は絶対に諦めない

あの子と話したいから強くなるんだもん」

そつか、やっぱり決意は固いか

なのはを撫でると気持ちよさそうに目を細める

「あ、そつだ

今度フェイトちゃんに会ったら、けん君は戦わないでね」

「了解」

たぶん、自分でケリをつけたいのだろう

「よし、今度こそ修行を始めるぞ

フェイトに勝てるよつにな」

戦闘が始まってすぐ、フェイトが後ろに回り込んだ

なのはが避けて、空に飛ぶ

「私とお話したいなら、互いのジュエルシードを一つずつ賭けて

フォトンランサー」

小さい魔力弾が10個できる

「レイジングハート、デイベインシューター」

なのはの周りにも8個できた

双方とも打ち落とすが総数が多いぶん、フェイトの魔力弾がなのはに襲いかかる

[ protection ]

それもフィールドで楽々防ぐのは

あきらかに動きが向上している

特訓の成果はでたようだ

機動力で優るフェイトが徐々になのは追いつめるが、最後の一线は割らせないなのは、ついに痺れをきらして

「サンダースマッシャー」

強力な魔法を打ってきた

こちらの唯一の勝ちパターン

「ディバインバスター」

魔力のビームが夜空に輝いて、まるで天の川のようにだ

さて、この状態で力が拮抗しているなら

「なのは、切り札だ!!」

勝てる!!

レイジングハートがリミッターを解除した

80%で拮抗しているなら1.2倍の力には適わんだらう

予想通り、圧倒するなのは

しかし、ここで油断するなよ

って馬鹿、油断しやがった

デイバインバスターの威力で上回ったからなのか、なのはは消えた  
フェイトに対して安堵した

そこにフェイトが上から襲いかかる

もう勝負はついたな

俺は駆け上がりながら

長さは五尺

柄がなくて、持ち手が青と金

粹の極みともいえる日本刀をとりだした

そのまま、フェイトが振り下ろした鎌を受け流す

「けん君」

「……勝負ありだ、レイジングハート」

Yes、とジュエルシードを1個出す

「帰るっ、アルフ」



「ちっすが」

そうか、あの狼はアルフって名前か

「待って!!」

なのはがフェイトを呼び止めた

「もう私たちに関わらないで」

フェイトのこれは純粋な優しさだけじゃないだろう

たぶん、前回とは雲泥の差だったなのはに恐れを抱いている部分もあるはずだ

「名前を教えて」

あれ？俺おしえたじゃん

「ケンスケが知ってるはずだけど」

「あなたの口から聞きたいの」

そういふことね

「フェイト、フェイト・テストロッサ」

なのはが言う前に去っていった

これで、フェイトには2連敗か

今回は経験の差だな

こればかりはどうしようもない

「なのは、帰って風呂でも入ろう」

「え？」

風呂でも入ってさっぱりしよう

走ったりしたから汗もかいたしな

今、俺となのは一緒に露天風呂に入っている

「よし、髪でも洗おうか？」

なのはに提案

すると力なく首をふる

「じゃあ、逆に背中流してくれるか？」

今度は力なく頷いた

ゴシ、ゴシ

草木も眠る中、なのはが俺の背中を洗う音だけが響く

「今回も……ダメだったね」

ポツリとなのはがもらした

「しょうがない、あれは経験の差だよ」

俺も短く返す

「あの子、話し合うだけじゃ変わらないっていった」

「うん」

「言葉だけじゃ伝わらないっていった」

「うん」

「ダメなのかな、私じゃダメなのかな」

洗ってもらっている感覚が途切れて、代わりに重量感と髪感触

「なのははどうしたい？それで諦めちゃうの？」

「嫌だよ!!あの子とお話したいよ……でも……でも……」

熱い液体が背中を滑り落ちる

「なのはが諦めたら終わりだよ、でも諦めなければチャンスはくる」

重要なことはそれ、別にフェイトが嫌がるのが関係ない

「そっか……そっか……よね、ごめんね変なこと言って、私おかしかったよね」

そっ言ってお風呂に向かうのは

たぶん、なのはが弱音を洩らしたのは初めての事だろう

どんなに辛くても、何一つ言わず、笑顔でこなしていたなのはが洩らした不安の言葉

強くなっているという自信から言い訳の理由が消えて、頼りどころがなくなったのだろう

俺は、そんななのはの心より所になりたくて、助けたくて

気づいた時には後ろから抱きしめていた

「いいんだって、ごっつやって頼って

俺はなのはの味方だよ

俺はなのはの不安を背負いたい

哀しみを拭きたい

喜びを嬉しがりたい」

なのはがこちらを向く、その大きな瞳からは今までの不安や恐れを出し切るように、涙が溢れていた

俺はなのはの顔を胸につずめさせて抱きしめた

## 第十二話

前回のあらすじ……温泉に入りました

今日も大判焼きの屋台に行ってみた

フェイトに会えるかもしれないという淡い期待を抱いて

「おお、今日も来たのか坊主、いつものでいいか？」

「はい、お願いします」

いつも通り粒あんの大判焼きを3個

公園で食べる大判焼きは本当に美味しい

「……久しぶりケンスケ」

特徴的な声に後ろを振り向くと、ほほえむ少女とちょっと恐い顔を

した女性がいた

「ああ、久しぶりフェイト、今日はアルフも一緒なんだ」

「あんたにアルフって呼ばれたくないよ」

すかさず飛んでくる言葉

厳しいな

しょうがないことだけど、アルフにはまだ信用されていないみたいだ

「駄目だよアルフ、そんなこと言っちゃ」

「でも、フェイト、こいつはフェイトを」それ以上言ったら怒るよ」「でも……」

俺はベンチの端に移動して二人分の席を作る

するとアルフ、フェイトの順に座ってきた

二人に大判焼きを渡す

アルフは、毒でも入っているんじゃないかと疑ってフェイトに怒られてた

「そういえば、フェイトって何処に住んでいるの？」

「あのビルの最上階だよ」

指をさしている方向を見て言葉を失った

何だあのビル、たぶん億ションの域だお

「もしかなくてもフェイトってお金持ち？」

「ここではどうだか分からない……かな

私とアルフだけで住んでいるから、お金持ちなのかもしれないよ」

嘘だろ

あれだけのビルに親無しとか

ってあれ？フェイトって親いないのか？

「あのオニババがやってくれた唯一のいいことだよ」

オニババってことは母親はいるのか

お、そろそろいい時間だ

なのはも帰ってくるし、俺も帰るか

「じゃあねケンスケ

大判焼き美味しかった」

「あんたのこと許したくないけど、この大判焼きにはお礼を言ってお  
「お」



二人と別れた後、俺は家路を急いだ

「いい加減にしなさいよ!!」

アリサがキレた

「こないだから何よ!!私と話すのがそんなに嫌?私たちがいるのがそんなに苦痛!?だったらケンと二人でぼーっとしてなさいよ!!」

俺もですか!?

そう言ってアリサは出て行ってしまった

チラッとすずかを見ると、どちらへ行っていいのか分からない状態

目が合ったので、アリサのほうへ顎を動かすとアリサを追いかけた  
いった

「ふう〜、まあなんだ

「最近色々ありすぎたからな、気にすんな」

「でも、今のは私が悪かったから……」

「そうだけど、だからといって話せることじゃないしな」

魔法の話なんて体験したことなかったら、ただのオカルト現象だ

あの二人だったら信じてくれるとは思っけど

しょぼくれるのはを置いていくのもあれだけど、アリサの所に行  
くか

どこに行ったかなアリサは

廊下とか教室とか見てきたけどどこにもいない

話し声が聞こえてきた

こっちからかな

近づいてみると

「だって悩んでるじゃない!!あんなの言わなくたって、聞かなくたって分かるわよ!!それなのに……それなのに何にも話してくれないじゃない!!」

そうなんだけどさ、すずかも言ってるけど仲良しの友達にも言えないし……はあるし

あつて当然なんだけどな

と思つたが、アリサの本心はそれでも聞いてあげてあげてあげたい

何か少しでも役にたつてあげたいという優しい心だつた

「ありがとな、アリサ」

「ケン(君)」

「今、なのはは話せない」ことがたくさんあるんだ

なのはは筋金入りの頑固者だから、迷惑をかけると勘違いして話さないと思つ

でも、アリサの優しさはきつとなのははに伝わるよ

「ケンは……ケンはなのはの理由を知っているの？」

「……ああ、知っている」

何故かアリサとすずかはホッと胸をなでおろしている

何でも、俺がいるなら安心だそつだ

そつ言つて貰える事は悪い事じゃない、むしろ嬉しいな

「でも、けん君、話せるよつになつたら話してね

もしかしたら、けん君は自分が心配されてないと思ってるかもしれないけど、私もアリサちゃんも、けん君が無事でいて欲しいと思ってるんだからね」

盲点だった

てっきり俺は心配されてないものだと思ってた

ありがとう、アリサ、すずか

俺となのはの日常がここにある

ってことを再確認させてくれた

「べ、別に心配してるわけじゃないんだからね

ただ、あんたが帰ってこないとすずかが……うにゃー!!」

アリサの頭を撫でる

帰る場所はもうあったんだな、出来ていたんだな

なら俺は、前に突き進むのみだ

「2人で帰るの久しぶりだね」

そういえばそうだな

アリサとすずかが休んだ日以来か

「ちょっと寄り道してっついでいい？」

皆にこんな顔見せられないよ

なのはについて行くと、海の見える見晴らしのいい公園に出た

なんかこのごろ、よくなのは話を聞いてるな

「私たち3人はね、最初はケンカしたんだ」

へえ、少し驚いた

今は例外として、あんなに仲がいいのにな

「原因はアリサちゃんがすずかちゃんのカチューシャをとったからなんだけどね」

どうにも、そのころのアリサはあまり性格がよくなかったらしい

「すずかちゃんもやめてっついでってただけだね、結局私がアリサちゃんの頬を叩いちゃったんだ」

すずかは今よりも引つ込み思案だったらしい

しかし

「痛い？でもね物をとられた人の心はもっと痛いんだよ」

って……高校生でも言えないやつ一杯いるぞ

「アリサちゃんと掴み合いの大喧嘩になって、でも最後はすずかちゃんか

やめて!!

って言うてくれて、その後から一緒にしゃべるようになったよ  
ね

そんな過去があったんだ

「私は、皆に心配かけたくないだけなのに

どっつてこっつなっちゃうのかな」

俯いているのは

でも、それはアリサだって分かってる

それでも助けになりたい

助けになれない自分が悔しい

そう思っているのだろう

凄く不器用な2人だな

俺はそんなことを思いながら、なのはの話を聞いていた

## 第十三話

前回のあらすじ……三人娘の出会いをききました

SIDEフェイト

さっき、アルフに言われた

心配だよと

確かに、このところ食欲がない

ご飯がのどを通らない

でも私は強いから大丈夫

強いつて言葉は不思議な言葉

つぶやけば力が湧いてくる



こんなところで立ち止まれない

立ち止まっちゃいけない

母さんが待っているんだから

## SIDE OUT

今、俺となのははジュエルシード探しをしている

今までとは違い、ゆっくりのんびりと

なのはには、何でもいいからじっくりやってゆっくりする時間が必要だ  
と思う

これまで色々大変だったし、思う事もあったはず

それらを一旦打ち切って、羽を伸ばしながら歩く

季節は春、ちょっと時間は遅いけど気分的にはピクニックだ

「あちゃー、もうこんな時間

もうタイムアップかな」

もつそろそろ我が家では夕食の時間

「僕が残って探しに行くよ」

ユーノの提案になのはは賛成しかけるがとんでもない

【ちょっと待てユーノ、もし、捨てフェレットだー、なんて捕まったら  
どうする気だ

よくて新しい飼い主、最悪保健所行きだぞ】

ユーノは顔色をわるくして、僕も帰るとなのはの肩に乗った

さて、今日の夕飯は何かね

ドロン

「な……」

強烈な音と共に、町の光が消えていく、月が隠れる、雷鳴が轟く

「強制発動!?こんな町中でマズい!!」

叫びとともにユーノが結界を張る

「レイジングハート、お願い!!」

なのはもsetupをして準備万端

しかし、フェイトも思い切ったことをする

光っている場所、あれがジュエルシードだな

「なのは、フェイトより早く封印を」

「わかった、レイジングハート」

しかし、なのはが砲撃をチャージし終わる前に、金色の魔力光が発射される

数瞬遅れてなのはも発射

だがその数瞬は、距離の優位を無くすには十分なもの

事実、ジュエルシードには同時にぶつかった

この場合はどうなるんだ？

ドゴオオン!!

ものすごい音がして、魔力の奔流があたりを包む

くそ、何も見えん

土埃が収まって、ジュエルシードを見ると

封印されていた

よし、成功はしたみたいだな

「やった

急いで確保して！」

違う、そうじゃないんだユーノ

今なのはがすべき事は違うんだ

飛び込んできたアルフをユーノが抑えるが、なのはのシールドを  
フェイトに破られた

なのはが一步踏み出す

「私は高町なのは、なのはだよ」

自己紹介をするなのはに、そんなことどうでもいいとばかりに鎌を  
構えるフェイト

またお話は無理か、でもいい傾向になってはきている

フェイトが宙へ浮かび、そのまま突進してくる

それを飛んでかわしたなのは

「レイジングハート!!」

魔力弾が12個形成されてフェイトに襲いかかる

それらを自分の魔力弾と鎌で的確に消していくフェイト

前回は比較にならないほど素晴らしい戦い

ドクン

なんだ、この感覚……

何か、吐き出しそうな感じ

高速移動を繰り返す二人

裏を取られれば取り返す

なのはとしては、距離をとりたいけどとらせてもらえない

フェイトとしては攻めきりたいけど攻めきれない

ほとんど互角の戦い

隙があるとしたら戦闘経験かな

しかし、さっきの感覚は何だ？

ジュエルシードっばいが……あれは封印されているはず

不安が広がる

何かがおかしい

何か見落としている

……分からない

一応の警戒はしておくか

紅く短い魔槍を取り出した

禍々しい紅き紋が、槍を這う

真名解放をしていないのでそれほど激しくはないが、それでも逃げたくなるような気を発している

なのはが距離をとるのに成功して、チャージ時間は短いながらも  
デインバスターを放った

しかし一度対峙したからなのか、バスターが弱目な事を見計らって  
しっかりと防ぐフェイト

「話し合っただけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言うだけ  
だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとある  
よ!!  
ぶつかり合ったり競い合ったりするのは仕方ないかもしれないけ  
ど

だけど、何も分からないままぶつかり合っなんて、私、嫌だ!!」

なのはは叫ぶ

これまでの思いを言葉にして

その気持ちがフェイトを貫いていく

内側から破壊していく

ついにフェイトから言葉を引き出せるのか？

「私は「答えるな!!」」

破壊を止める声

驚いて動きを止める2人

「そんな甘っちょろいガキに、何も分かってないガキに答えなくていい!」

はっきりとした拒絶の言葉

後少しだったけど、しょうがないか

ドクン

……また

思い出せ、この感覚を

どこかで味わっているはずだ

昔、よく味わっていたはずだ

「……あ」

思い出した

あれは、魔力が暴走する感覚だ

まだ全然魔術が出来ない時に、時々味わっていた

大量の魔力に器が耐えきれなくなる

そしてそれは、少しの衝撃で辺りを破壊する力となる!!

それに気づいた時には、もうなのはとフェイトはジュエルシールドに向かっていた

間に合わない

「止める……!!」

渾身の叫びも虚しく、二人のデバイスがジュエルシールドにぶつかった

キーン

「なのは……!!」

白い光が辺りを包む

その後、天を貫く青き光となって夜空に消えた



どうだ？

二人は……無事か、よかった

だが二人のデバイスはボロボロ

この場合、封印はどうするのだろうか

すると、フェイトが近づいて、その小さな手のひらで包み込んだ

「フェイト、危ない!!」

アルフの叫びを無視して暴れるジュエルシードを抑え込む

手から流れ出る血、苦痛にゆがむ顔

俺は見ていることしかできなかった

SIDEフェイト

今日は母さんの所に報告に行く日だ

お土産のケーキも買った

小さいけど可愛いケーキ

頑張つて選んだんだ、喜んでくれるといいな

「お菓子ね……あのオニババがね」

「でもこつこつなのは気持ちだから」

アルフにちよっぴり嘘をつく

そろそろ時間だ、行こう

「次元転送開始、テストロッサの主の元へ……跳べ」

何度も反復して、刻み込まれた英数字を呟く

あとは、身を委ねるだけだ

ちよつと暗い場所に着いた

ここは時の庭園

私の故郷

母さんは何処にいるのだろう

「あ……」

見つけた、嬉しい

嬉しいけど、それをこらえてゆっくりと歩く

「母さん、ただいま戻りました」

前より元気が無い気がする

「ジュエルシードは？」

ちょっと悲しいな

「……4個です」

その時、母さんの顔色が変わった

杖が変化して鞭となる

魔法の鎖が身体を絡め取る

やだ、恐……くない

ビシッ

「しゅっしゅっ」

声が漏れるけど痛くない、痛くないんだ

母さんはもっと痛いんだ、苦しいんだ

「フェイト、あなたのお母さんが誰だか知ってる？大魔導師ブレシア・テスタロッサなのよ。それに泥を塗られたら私は笑顔にはなれないわね」

やっぱり、私が悪いんだ

母さんだって好きでやっているわけじゃない

私が悪い子だから

頑張らないと

もっと、もっと、もっと、もっと

私に出来ない事なんてなんだから

鎖が解けた

身体が熱い、背中が痛い、腕の動きが鈍い

でも……いやだからこそ私は頑張るんだ

「ハッ!？」

目が覚めるとそこは、いつもの部屋だった

SIDEOUT

SIDEプレシア

……痛い

何が？

心かに決まっている

いくら　　を生きかえさせるためでも、やはり娘を打つのは辛  
い

でも、私は修羅になると決めた

なら、それを遂行しなければならぬ

ごめんねフェイト

ケーキ美味しかったよ

ありがとうねフェイト

SIDE OUT

翌日

俺は、翠屋のシュークリームを持ってフェイトの家の前にいた  
理由はフェイトのお見舞いだ

ピンポーン

チャイムが鳴り響く

「は〜い、新聞ならってマンタ、どうして?」

「お見舞いだよ」

シュークリームを掲げるが、露骨に嫌そうな顔をするアルフ

「ダメだね、フェイトは今、寝ているんだ

また今度にしな」

寝ているのならしょうがないと思い、退散しようとするよ

「ん、アルフ？」

起きてんじゃねえか

しかし苦しそうな声だな

何か消毒液みたいな香りもする

「すまん、アルフいれてくれ」

「ちょ、ちょっとアంత」

アルフを押しつけて家に入ると、そこは吹き抜けの2階立て、マンションとは思えない豪華さ

フェイトを見つげようと階段をあがると、フェイトがうつ伏せで寝ていた

いや、起き上がれないという表現のほうが正しいだろう

息は乱れて、指は布団を握りしめて白くなっている

「あれ……ケンスケ……何で？」

「すまんアルフ、フェイトの背中をめぐって見せてくれないか？」

「それは嫌だね、見てのとおり、フェイトは起き上がれないんだ、そっ  
としてやってくれよ」

そんな事は分かってる

アルフがフェイトを気遣ってるって事も知っている

「大丈夫、俺は回復魔法を使えるから」

その言葉に一応の納得をしながらも、渋々ながらめくると

大量の鞭打ちされた跡だった

「……これは？」

「フェイトのオニババがやったのさ」

本当に治せんのかい？」

当然

「この程度なら朝飯まえだ」

俺はフェイトの前に立って深呼吸

呼吸を整え

集中して



『セラファイエ・カンバセーション治療変換』

自己の血液を治療専用に変換する『癒』の魔術

基本的には自分専用

メリットは、自己回復能力の大幅アップ、骨が折れた程度なら、10分あれば回復する

また、人に向けて血を垂らすことで、少し回復速度は遅くなるが治療効果を

飲ませれば、内臓器官の治療

味は……知らん

デメリットとしては、普通の血液に戻すための10分間、一切の魔術が使えなくなることで、身体能力の低下

俺は、カッターを取り出して、手のひらを裂いた

「アンタ何やってんだい!？」

手のひらから溢れ出た血が、居場所を探してフェイトの背中に落ちる

その瞬間、泡となって消えていく血

フェイトの背中にあった跡は消え、綺麗でスベスベな肌が蘇った

「え？身体が……」

立ち上がるフェイト

「何をやっているのケンスケ!？」

まあ、目の前にポトポト血を流しているやつがいたららびびるわな

しかし……身体の中も悪そうだ

「フェイト、上向いて口開けて」

素直に口を開けるフェイト

その上から血を垂らす

「っ……………!!!!!!  
ゲホゲホ」

「何やってんだいアンタ!!」

アルフに詰め寄られるが関係なし

「気分はどうだフェイト」

「っっ、悪いにきまって……ない

あれほどあった吐き気も身体の痛みもない

何で？」

さすがに魔術をバラすわけにもいかないので、そういう魔法だとう

そをついた

すっかり元に戻った手のひらを見て、俺は通常の身体にもどす

その後はティータイム

この一件でアルフも認めてくれたようで、普通に話してくれるようになった

## 第十四話

前回のあらすじ：フェイトを治しました

SIDEリンディ

現在、私たち戦艦アースラのメンバーは第97管理外世界に来ている

わざわざこんなへんぴな場所にやってきたのは、小規模ながらも次元震が起こっているからだ

「皆、今回の旅はどうでしょう」

各スタッフからの返答を聞くが、航行的には何も異常はない

懸念要素といえば、あの少年と二人の少女かしらね

特に、二人の少女は、また確実に戦うだろう

そうして、もしまた次元震が起こったら危ないかもしれない  
そうなる前にこちらでも動かなければね

何しろこちらには切り札がいるのだから

SIDE OUT

ケンカ続行中

何かって？なのはとアリサだ

なのはとすずか、アリサとすずかが喋ることはあっても

なのはとアリサが喋ることはない

というか、なのはが視線を向けるとアリサが避ける

そこまでツンケンしなくてもいいとは思っただがなあ

いつも仲の良かった2人が喋らないというのはクラスメートにとっても異質のようで、結構話題にものぼっている

さっさとなんとか出来ないもんかね

まあ、あともう少しだ

夏までにはジュエルシードも終わると思うし

そうしたらパーツと遊べばいいか

夕方

ドクン

慣れきった感覚

直ったレイジングハートを持ったなのはと共に、ジュエルシードの近くにいくと、そこには木の化け物がいた

……でかいな

あの木ほどではないが、トップクラスに入るでかさ

ドガアン!!

これは、フェイトか

フェイトが放った光弾は全てバリアで止められた

そして、それに怒った化け物は何本もの根っこをだしてくる

「なのは、ユーノは俺に任せて高く飛べ!!」

ユーノを抱いて少し離れる

「アーク…セイバー!!」

「デイベインバスター!!」

ほぼ同時に放たれた斬撃と砲撃、化け物もバリアで受け止めるが苦しそうだ

後一息

俺は、昼の間最強、王を守り続けた騎士の剣をとりだして化け物に近づくと

「さて、よく持ったが、これで終わりだ」

なのはとフェイトの攻撃を防ぐのに夢中になっている化け物に攻撃はない

「この一閃で、進むべき道を切り開く!!」 転輪する勝利の剣

エクスカリバー・ガラティーン

『!!』

踏み込んで直接斬撃を放つ

アーサー王の剣が極光ならば、この剣は爆発

轟音が鳴り響く

グオオオオオ

断末魔と共に散っていった

さて、頭を切り替える

いま重要な事はなんだ？

俺にとっては、二人に何も制約なく、気持ちよくの対決をしてみよう

また暴走させないように見張り、最悪破壊すること

俺が切り替える間に、二人はジュエルシードの前に立って無言でにらみ合っている

空気が凍る、いや違う

これは嵐の前の静けさとも言つべきか

熱が吸い込まれていく

放出する準備が整った



さて、4度目の戦いが始まる

まずは格闘戦

フェイトの鎌がなのはの杖が、唸りをあげる

さあ……どうなる？

「ストップ!!」

……誰だこいつ？

素手でレイジングハートを、デバイスでバルディッシュを防ぎ、髪から足まで漆黒の服に身を包んだ少年が現れた

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ

市街地での戦闘は危険だ、執務官権限で止めさせてもらう」

ふむ、時空管理局というと、ユーノが話していた組織だな

どうする？相手は仮にも次元世界のアメリカ的存在（少し違うが）

ここは素直に従ったほうがいいのかな

「はじめまして、俺の名前は石神剣介といいます

今回はどういっしょに用件で時空管理局の方がいらっしやっただので  
しゅっか

極めて丁寧に質問を試みる

まずは下手にでて様子をつかがう

「ちつきも言ったとおり、ここでの戦闘行為の中止と、君たち三人からの事情聴取だ」

話を聞く限り、別に危険はなさそうだな

しかし、驚かなかったということと確認もせずに三人と言ったことから、俺の存在も知っていたということか

「フェイト、トンスラこくよ!!」

3〜4個の光弾とともにアルフの声

くそ、こんなことしたら反撃くらうのは目に見えているだろうが

土煙があがるが、その前にフェイトがジュエルシールドのところに向かったのでそこまで走る

手には、紅き7枚の花弁を模した盾

1枚1枚が古の城塞並の堅さを誇る最強の盾

視覚が失われているので、ほとんど感覚で前に掲げる

『熾天覆う七つの円環

ロー・アイアス

『!!』

ギャイン!!

投擲武器ならば、Aランク宝具をアーチャーの苦手な投影でも防ぐことができる最強の盾は、クロノの牽制攻撃程度では傷一つついていない

「ジュエルシードなんてどうでもいいからサツサとフェイトを連れて帰れ!!」

アルフが呼応して無理やりフェイトを連れて行った

ふう、ひとまず安心

「なぜ邪魔した」

冷静に聞いてきた

実戦経験も豊富か……厄介だな

「別に、ただ守りたい人を守っただけだ」

「今のは公務執行妨害と捉えられてもしかたがないことだぞ」

まあ……確かに

「それについてはすまなかった

さっき事情聴取をしたいと言っていたよな

そのの同行で手を打ってはくれないか？」

事情聴取となれば、あくまで任意同行のはず

ならば俺たちを強制的に連れて行くことはできない

さて、相手はどつくるかな

ブオン

いきなり空中に画面が浮き出て、まだ30歳になったかなっていかくらの若い女性の顔がでてくる

「はじめまして皆さん、戦艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウンです

あなた方の要求を呑ませていただきます、アースラに来てください  
「

腑に落ちないことが一つある

そこの方でなく、そこの方々と言ったよな

俺は行くと言ったが、なのはも連れて行くとは言っていない

「ちょっと待ってください

俺は確かに行くと言いましたが、なのはは言っていないはずですよ

正直、どんな目にあうかも分からないから、なのはについてきて欲しくない

でも性格的には、ついてくるって言っただろうな

「な、なんでそんなこと言っの？」

私も行くよ

は、まあいいか

何かあっても絶対になのはだけは守りきると誓って、俺はアースラとかいうところに転送した

SIDEリンディ

危なかった

あの女の子がついていかないと言ったらどうしようかと思った

私の見立てだが、女の子のほうは間違いなく天才

この歳であれだけの砲撃を打てる子供なんて一人いるかいなか

だろう

あの子が戦力となってくれるなら大歓迎だ

そしてあの男の子、デバイスも持たずにSランクの攻撃を放ち、牽制とはいえ、AAA+ランクのクロノの弾を軽く防いでみせた

あれが真名解放と言っのだろう

できればこちらの技術に応用したい

あの方は秘匿するものだ一点張りで教えてくれなかったが、あの子なら教えてくれるかもしれないから

置いてある緑色の甘いお茶を楽しんでいると、私の部屋の扉が開いて、待ち人達がやってきた

SIDE OUT

光り輝く部屋に着いた

後ろには巨大な魔法陣、無機質というわけではないが、かといって豪奢でもない部屋

「じじじっ……」

不安そうなのは

ユーノによると時空管理局の時空航行船の中だという

本当にSFだな

時空……か、ゼル爺の平行世界とは全然違うし、どちらかというと宇宙の支配者

スターオーシャンでいう銀河連邦みたいなものなのだろう

俺は漫画知識で強制的に納得したが、なのはは出来ていないようです、ユーノもどう説明すればいいのか困っている

「ユーノ、要するに俺たち以外の星にも人が住んでいて、それを統括する機関ってことでいいんだよな」

出来ているかどうか分からないが、一応の要約を試してみた

これでなのはもう少し納得してくれたようだ

「ここではバリアジャケットなどを解除してくれるとありがたい」

クロノに言われてなのはが解除する

「その君も」

……俺？

何も着ていないが

「そうですね」

ユーノが返事をした、なぐんだユーノのことだったのか……ユーノ  
!?

もしかして……アルフみたいに変身するのでは……

髪は金に似た茶色、服は洗練された民族衣装のような、女顔の少年  
が現れた

「ふええええええええええ!!!!!!」

「……………っそ」

なのはの絶叫に俺の眩き

「たしか、この姿になるのは久しぶりだね、なのは、ケン」

いや、少なくとも俺は初見だが……

なのはの方に目を向けても、なのはは目を逸らす

「あれ、最初に会ったとき、この格好じゃ」

「「なかつたぞ」」



ビックリの告白をつけてしまった

「艦長、きてもらいました」

クロノに続いて部屋にはい……

部屋には美しい盆栽

ずっしりとした安心感を与えてくれる茶釜

心地よい音が心を吹き抜ける鹿威し

「お疲れさま」

赤い絨毯の上に正座している人は、この風景にはまるで似合わない  
だろうエメラルドグリーンの髪をした、美しい人だった

ってなんだこの部屋

たぶん、ユーノはこういう日本文化を知らないのだろう

呆氣にとられている俺となのはを不思議そうにみてきた

現在、どついつ経緯でジュエルシード搜索にあたったのかをユーノ

が説明した

「なるほど、あのジュエルシードを発掘したのはあなただったのですね、スクライアの一族とは聞いていたのですが」

しみじみと頷く、リンディさん

「僕が責任を持つこと」

重たい言葉で話すユーノ

「立派だわ」

「でも無茶だな」

正義感に燃えているクロノとのバランスを上手くとるリンディさん

出来る人というのはこういう人なのだろう

人を配置すべき場所に配置して、なおかつ自分の得意なところはしっかりと出す

素晴らしいと思う

まあ、ちょっとクロノの言い方はキツいが

そして一通りの説明を受けてリンディさん達の出した答えは

ジュエルシードの回収は時空管理局が全権を持つというもの

俺は予想していたから平気だが、なのはは驚いていたし、絶望的な顔をしていた

「まあいきなり言われても困るわよね。いいわ、明朝までに返事を聞かせてください」

「前の場所に転送するということでもいいかい？」

有無を言わずぬクロノの言葉に、なのはは黙らざるをえなくなった

SIDEクロノ

今、僕は戦闘の映像を見ている

「二人ともすごいねえ。魔力だけでなくクロノ君を上回るんじゃない？」

エイミイの言葉にムツとする

魔法は魔力だけで決まるものではない、状況に合わせた応用力と、

的確な判断力だ

そう伝えるけど、軽く流されてしまう

僕はエイミーには適わないんだろうなと、本能で理解した

「わ……何あれ」

「画面をみると、ちょうど石神剣介とかいうやつが、剣を振って大爆発を引き起こさせていた

「推定ランクス……なのに全く反動もなければ疲弊もない」

驚きの声をあげるエイミー

そう、僕も不思議だった

あの魔法？には非殺傷設定がついていなかったからだ

「石神剣介……危険だよ」

SIDEOUT

夕食を食べ終えて、俺はなのはとユーノとこれからどうするかを話し合っていた

「えっと、ケンはどうするつもりなの？」

それは決まっている

「俺はなのはについていくだけだよ」

本音を言えば、こんなことは止めて欲しい

もしかしたら止めるべきなのかもしれない

でも、俺はなのはの意思を尊重したい

どれだけ本気なのかを知っているから

「私は、ここで止めたくない」

やっとあの子と、フヘイトちゃんと対等に戦えるようになったのに、やめたくない」

じゃあ、決まりだな

「……といつわけで、なのはの魔力の事もありませんし、そちらにとって  
は悪い話ではないかと」

現在交渉中

やはりクロノは渋い顔をしてダメだと言ってきた

これは想定内なので、今度は向こうにとってのメリット

すなわち、戦力的な面での増強の話をした

前から、なのははバカ魔力だと聞いていたので

たぶん、戦力として欲しいだろうと思ったのだが、この作戦はハマったようで、クロノが更に渋い顔になり、横にいるリンディさんの顔は心なしか輝いて見える

「わかりました、なのはさん達の乗艦を認めましょう」

「艦長!？」

よっしゃ!!交渉成功

「ただし、

管理局所属待遇の魔導師であること

指示には絶対に従ってもらうこと

皆さんの能力を把握するために、自分の力は全て教えること

この3個を守ってもらいます」

……おかしくないか？

一つ目と二つ目は分かる

一つ目は、むこうとしても管理局手伝いでもないのに子供を事件に関わらせるわけにはいかないのだろう

二つ目も、組織に協力するなら当然のことだ  
守かどうかは分からないが

しかし、三つ目は必要なのだろうか

これまで見たところ、魔導師の戦闘は基本的に個人戦

ならば、周りに迷惑がかからないから教えなくてもいいのではないか？

「ちょっと待ってください

最初の二つは納得したけど、最後は納得できません

最後のは撤回させてもらえませんか？」

だが、むこうとしても、ならば関わるなど言える以上、強気にでてくる

「それは、いけません

指揮官として部下の能力は把握しておかねばダメです」

くそっ、理由ももつともだ

「ちらは秘匿したいという俺のワガママ

ならば聞き入れるしかないじゃないか

「……わかりました

その条件でよろしくお願い致します」

やっぱり俺は交渉ごとは苦手だと再認識して、悔しいが通話を切った

【なのは、交渉成功、あとは桃子さんを説得するだけ】

なのはに念話を送る

たぶん、今はお皿を洗っている最中だろう

俺とユーノは階段を降りて居間へ向かう

「さて、話したいことってなあに？」

それからなのはは話した

ユーノのこと、フェイトのこと

もちろん魔法に関してはぼかしたが、その言葉はなのはの本心

俺は口をださなかった

なのはが嫌だといったから



それは、心のこもった優しい言葉

なのはらしい言葉

それを聞いた桃子さんは、悲しいと言いなながらもOKを出してくれ  
た

さあ、行きますか

SIDEリンディ

正直ホツとしていた

最初に会ったときは艦長として、搜索を一任する方向に持って行か  
ねばならなかったから

本当に、天に祈る気持ちだった

なぜなら魔術はそれほどの価値があるものだから

SIDEOUT

SIDEフェイト

夢を見ていた

昔の楽しかった夢

母さんと二人でのピクニック

美味しいお弁当

心地よいそよ風

全てが美しいから夢だとわかった

頭上には無機質な天井

頬からは冷たい涙

「フェイト、それは夢なんだよ

あのオニババが優しいわけあるもんか」

横でアルフが泣いていた

そんな風に思ってしまったのが哀しい

何のためにジュエルシードを集めるのかは分からない

でも、これは優しい母さんと、また笑いあうための第一歩なんだ

お願い!!

分かって!!

「私は、フェイトの使い魔だ

フェイトのためなら何でもする

それが、フェイト自身が自分で決めたことなら……

でも、今のフェイトはオニババの言いなりになっているだけじゃないか!!」

目からは更に温かい涙

何なんだろう

哀しいけど嬉しい

「ありがとうアルフ

でも、これは自分で決めたことなんだ

だから……ついてきて欲しい」

私の一番の味方

いつだって身を案じてくれる優しい子

「……わかったよ……」

でも、一つだけ……一つだけ約束して

フェイトは自分自身の幸せのためにやるんだって」

うん、約束するよ

だって、私の幸せは母さんの幸せだから

これは、私の幸せなんだ

さあ行こう

STRUCTURE

## 第十五話

前回のあらすじ：管理局待遇の魔導師になりました

SIDEプレシア

終わりが近い

この身体はもう限界

せめて、せめてフェイトに教えたい

フェイト個人として、どうやって生きていくかを

でも、私ができる方法は限られている

なら、私ができる道で精一杯作っていこう

チヨポチヨポチヨポ……コーン

やはりいい音だ

俺は、また艦長室でお茶を飲んでい

リンディさんに自分の力を話すために

先になのはとユーノが話したが、リンディさんは熱心に聞いていたものの、どこか投げやりな感じがした

さて、リンディさんと話す前になのは達との会話から、リンディさん達がどこまで知っているかを確認しておこう

まず、木の化け物との戦いのことを最初に話していたから、あの戦いのことは知っている

ということとは『転輪する勝利の剣

エクスカリバー・ガラティーン

』のことは知っているだろう

そして、それ以前についてあまり突っ込んでこなかったから、あの戦いしか知らないのだろう

ということは、『複製』の魔術は知られていないわけだし、とにかくガラティーンを誤魔化せば話しが収まると考えられるな

「じゃあ、次は剣介さんね

まず、あの爆発した剣は何だったのですか？」

早速その質問か

「はい、あれは俺個人が保有しているデバイスですね」

【け……けん君、嘘は駄目だよ】

なのはから念話ができるけど気にしない

リンディさんの表情は変わらないから何を考えているか分からないが、魔術を知らない以上押し切れるはず

「では、何故待機状態で近くに置いておかず、背後の何かから取り出したのでしょうか？」

ふむ、これも想定内

「俺は転移魔法ができるので近くに置いておいてなくしてしまうより、そこから取り出したほうが効率がいいと考えているからです

背後から取り出したように見えるのは……俗に言うモーションですかね」



「どういえば、効果的な質問はえきなくなるは……ず

何故、余裕の表情をしているんだ？

「剣介さん……茶番はやめにしましょう」

……どういことだ？

「剣介さんの使った道具は、宝具と呼ばれるものでしょう」

なんで……なんで宝具がばれているんだ!?

「あの剣を取り出す行為も魔法ではなく魔術なのでしょう？」

落ち着け、まず相手は魔術を知っている

これはありえるのか？

「この世界に魔術は無いはずでは……ない

これは俺が勝手に思いこんでいただけで、本当はあるのかもしれない

い

裏の世界なんてなのはが知っている訳もないし

士郎さん達だって系統が違うから知らないだけなのかもしれない

でも、ならば何故最初から、魔法ではなく魔術ではないのかと聞か  
なかつた？

もしかしたら、確証がとれていなかったからかもしれない

しかし……

とりあえず何故魔術をしているのかを聞いてみよう

「何故、魔術を知っているんですか？」

「それは、肯定の合図ですよね」

ああ、そうですよ

「そうです

ですが、まずはそちらの話聞いてからでもよろしいですか？」

う  
向こうとしても話してはいけない理由があるわけではないのだろ  
う

あっさりと話してくれた

「いこうじゃい

まずは、この時空管理局の黎明期まで話が飛びます」

約65年前、伝説の三提督と呼ばれる人達がいたらしい

その人達が管理局をまとめ上げた張本人なのだが、更にもう一人

黄金の鎧を身にまと

空間を穿つ短剣で、無限の光弾を放つ

流れる銀の髪を後ろに束ねた、伝説の提督がいたらしい

その名も

『ホセ・マヌエル』

初代魔術研究室室長

現在、この研究室は無くなってしまったが

今でも、この研究所に在籍していた多くの人は、魔術の特異性を生かしてそれなりの地位に着いている人が多いらしい

これを聞いてゼル爺の宝石剣を思い出したが

原作でも物になる弟子がいなかったと言っていたのを思い出し、その考えを否定する

リンディさんは、魔術回路が無かったため研究室に入ることはなかったが

個人的には親しくしていたらしい

今はどこにいるのか聞いてみたが

リンディさんが17歳になった次の日

机の上に辞表を置いて、何処かに失踪してしまったらしい（非常に残念なことだ）

そして、その人が話していた事の一つに宝具があったらしい

リンディさんは、俺が戦っていて、真名解放をした瞬間に魔力値が跳ね上がり、莫大な力になった

そういうところから、宝具に違いないと確信したという

さて、ここまで話をしてくれたのならば、俺も話さなければならぬ  
と思うので

宝具と魔術について話そう

「まず、先ほどの戦いで俺が使ったこの光る剣、これが地球にあるアーサー王伝説に登場する忠義の騎士、『ガウエイン卿』が使っていた『転輪する勝利の剣

エクスカリバー・ガラティーン

』です」

俺がバビロンから取り出すと、皆は食い入るように剣を見ていた

言葉を失うほど綺麗な剣

やはり、伝説にもなっている英雄の宝具は人を惹きつける何かを

反英雄の宝具は人に畏怖を感じさせる何かを持っている

「これは……凄いな

内包されている魔力も相当なものだ」

クロノの評価、自分で使っていて気づかなかったがそうらしい

「いつみても思うけど、けん君の持っている武器って大半が綺麗だね」

まあ、さっきも思ったけど、英雄の宝具だからな

「で、次に魔術についてです

俺の使える魔術は『癒』と『偽』の二つです」

そう、俺は五大元素なんか使えない

色々な魔術の末端にある魔術属性だ

言うならば、士郎の『剣』と同じようなもの

素晴らしく応用が効くような属性ではないが、物になれば五大元素よりも、場合によっては強くなる

「その魔術は聞いたことがありませんね……」

どのような魔術なのですか？」

魔術の属性は、それこそ星の数ほどあるからな

「そうですね

『偽』は、複製です

その名の通り物を複製する魔術です

あくまで複製するだけなので、形だけ同じ物が出来ますね」

「例えば、デバイスを複製しても……レイジングハートさんを複製しても丸い宝石にしかならない、ということなのかしら？」

さすがは魔術を知っているだけある

理解が早くて深い

「そうですね」

次に『癒』ですが、これも名前の通り治療の魔術です

まあ、何もしなければ切り傷を治せる程度ですが……」

自分の血を使えばたとえ骨折していようが治せるが、これを教えて皆に無茶をさせたくない

俺も辛いから

「そうですね」

ありがとうございます

一つお願いなのですが、この艦に魔術回路を持つ者がいるかどうか調べてくれませんか？」

……あれ？マヌエルさんとやらは、やり方を教えなかったのか？

俺も副産物？のようなものだから、魔術回路調査のやり方は知らん

それを伝えると、もの凄くガツカリしていた

何でも、マヌエルさんもやり方を教えず失踪したらしい

「そうだね、一つ忘れていました」

クロノ執務官と戦ってください」

……はい？

なんで？

「そのフェレットもどきとなのはに関しては、魔法だからどの程度強いのかしつかり分かったんだが……」

君は魔術とやらを使っていたから分からなかったんだ

だからよろしく頼む」

そういう事ね

OKです

俺は、訓練室に向かった

## 第十六話

前回のあらすじ…この世界には魔術が存在しました

「では、1本勝負

これ以上危険と判断した場合、こちらから止める場合もあります

初め!!」

リンディさんの号令で戦闘開始

まずは、空に飛び上がるクロノ

クロノが遠距離攻撃が出来るのは分かっているし、なのはとフェイトに介入したことや、執務官の仕事内容を聞いたりしたことから、近距離攻撃もそれなりに出来るのだろう

俺は、黄金に光り、青の装飾が美しい王の剣を取り出す



それを見たクロノの顔が少し歪んだ

たぶん、見ただけで分かる剣のオーラから、相当凄い宝具なのだと理解させられたからだろう

「ステインガー・レイ!!」

クロノが俺を指差す

その指先から光弾が……ってまるでガンドだな

持っている黄金の剣を振って、光弾を消し飛ばす

「この程度は打ち払えるか」

そう言つと、またもステインガー・レイを連続で放つ

直線的で威力もあまり無いとはいえ、速い魔法なので打ち払うのが困難になる前に回避をする

やっぱり接近戦をしないと勝てないな

俺は空中を駆け上がると、かなり驚きながらも迎撃用のステインガー・レイを放ってきた

なのはの魔力弾より軽いとはいえ、実戦慣れしているぶん

嫌な場所に嫌なタイミングで撃ってくる

多少なりとも進みが遅くなったのをみたクロノが、フェイトのバル

ディッシュユミみたいな鎌を増やし始めた

これは……どれだけ増えるんだ？

周りを埋め尽くす量の魔力鎌に少し驚く

「いくぞ!! スティンガーブレイド・エクソキューションシフト!!」

グオンッ

唸りをあげて飛んでくる鎌・鎌・鎌

さしずめ台風といったところか

俺は、地面まで落ちて、石を削りだしたかのような巨大な斧剣を複製して小さな部屋を作る

これでやり過ぎそうと思った

だが……

「ブレイズ……」

やばい!!

クロノの杖に魔力が溜まっていく

それを見た瞬間、なのはのディバインバスターを思い出した

鎌の暴風に身を踊らせて、観察をする

どこが一番鎌が少ないか

……ここだ!!

「キャノン!!」

「おおおおお!!」

斧剣を横にして広範囲を一気に風はらい、少しの隙間を作って身体をねじ込む

ザシュッ、グシュッ

身を切られても、まずは回避だ

何とか回避して一息つく

だが……

「つな……」

気づいたときには、四肢をバインドで固定されていた

「終わりだな、石神剣介

ブレイズ……」

別にこれで死ぬ訳じゃない

拷問にかけられるわけでもない

だが

負けられない

いや

負けたくない

ならばどうする？

この状況を打破する力があるのなら、それを使っしかねえだろ!!

「構造把握」

眩きは誰も気づかないほど小さい

だがそれは、一つの生命の誕生を促すものだ

いや違う

生命ではない、石神剣介という外見を持った薄っぺらい何かを創り出すための眩き

「現世展開」

これは、創り出したそれを現世に持ってくるための眩き

そして……クロノのチャージが終わった

「……キャノン!!」

「位置変移」

身体が引つ張られる

内臓が遅れて持っついていかれる

意識は一度ホワイトアウトして、もう一度色が戻ったときにはクロノの背中が見えた

もう一度、青き豪華な紋様の入った黄金の剣を取り出して

クロノの首筋に当てた

「そこまで!!」

「……そんな……」

眼下には砲撃による爆発と驚きの目をした皆が

目の前には、啞然とした顔のクロノがいた

ゴルッ

胃の中で、何か別の生き物が動いている気がする

地面に降り立った俺は、なのはの賞賛を受け

リンディさんの賞賛と質問に答え……

ゴリユ

「ゴプッ……グウオエ」

粘度のある赤黒い血を大量に吐き出した

SIDEクロノ

信じられない

バインドの流れまでは完璧だった

速度のあるスティングー・レイで動きを止めて

大量のスティングー・ブレイド・エクソキューションシフトで周りを取り囲む

それをやり過ぎそうとした壁に向かって砲撃を放つ

でも、それすらも囷

わざと鎌の暴風に薄いところを作って、試合開始直後に仕込んだ罠を解放させる

バインドで四肢を固定したときには勝った!!と思った

……でも

いきなり首筋に剣を突きつけられたら

意味が分からない

肉体のスペックで負けても戦略で上回っていたから慢心したのか  
もしれない

駄目だ、こんなことじゃ正義の味方は目指せない

そう思いながら地面に降り立つと

いきなり剣介が血を吐き出した

「けん（ケン）君

さん

!?!?

なのはが涙目で駆け寄ってくる

リンディさんが大声で救急の指示をだす

ああ、心配すんなって大丈夫だから

身体に力が加わらないのでふらっとする

それでも、丹田に力を加えて何とか姿勢を保つ

「ゲフッ

ハア、『治療変換

セラファイエ・カンバセイション

』

一気に楽になる

ふらついていた身体も、ぐらついていた景色も

全て元通りになった

グイッと口元についた血を拭ってなのは達に笑いかけると、なのはは安心したように動きを止めた

「医療班到着しました」

おお、速い

まだリンディさんが指示を出してから5分とたっていない



「あ……ありがとうございます」

でも、もう大丈夫です「剣介さんを連れて行ってください」……リ  
ンディさん」

心配いらないうって言っているのに

まあ、仕方がないのかな

「行ってきなよケン」

ユーノが少し恐い感じで言う

なのはもフルフルと首を縦に振る

……特に断る理由もないし行くか

「わかりました」

よろしくお願いします」

俺は重い足を引きずりつつ医療室に向かった

S I D E リンディ

驚いた

クロノに勝つとは思わなかった

最後、クロノがブレイズキャノンを放って勝負有りだと思ったら、いきなり後ろに現れた

あれは魔術なのかしら？

そうでなければ説明がつかない

あの状況で逃れるなんて、たとえクロノ執務官でも無理なのだから

「艦長、御覧になりますか？」

エイミイの言葉に振り返ると、ちょうどクロノと剣介さんが戦っているところだった

「ええ、見させていただくわ」

問題の最後のシーン

クロノにバインドをかけられた剣介さんが何かを呟いている

集音機でも拾えないほど小さな呟き

そして……!?

「エイミィ、止めてくださる？」

一瞬

本当に一瞬だけ、クロノの後ろに何か見えた

これは……剣介さん？

……何にせよ、これに関してはもう一度聞かなければなりませんね

検診が終わって、なのはと雑談をしているとリンディさん達がやってきた

手には薄いファイルを持っている

「え〜、先ほどの検診結果ですが

異常なしですね」

当然だ

この魔術はたとえ複雑骨折だろうと自分なら30分で治る

「あとですね

勝手ながら、先ほどの戦闘と検診結果から

剣介さんの管理局魔導士としてのランクをつけました

これは、管理局魔導士になるためならば必須なので……勝手にやっ  
てしまったことは申し訳ありません

なのはさんは、前回の戦闘から判断させていただきましたが、デー  
タが少ないので魔力量だけになっています」

いや……別にいいけど

「それで、まずなのはさんから

魔力量のみですが、魔力量はA A A +

これは管理局でも5%に入るほどです

総合もA A A +ですね」

なのはもびっくりしている

そんなに凄いのかなのはの魔力は

「ユーノやレイジングハートの言っていた通りだな

「次に剣介さんですね

陸戦 A A +

空戦 A +

魔力量 S S S 「 S S S !? 」 なのですが、理由は分かりませんが、魔法を使うために動かす必要のある歯車が一つだけ足りないので、魔法を使うことができません

ですので実質魔力無しです

「この結果から総合 A + となります」

クロノが確か A A A + と言っていたから……妥当だな

しかし、歯車が足りないって……どんな残念加減だよ

あれちよつと待て

ならば何故、念話が出るんだ

「念話はリンカーコアがあれば使えるものなんだ」

クロノの言葉に納得

「それで……どうします？」

管理局に登録する際は、陸戦、空戦、総合のどれかで登録出来ますよ

それに、今、低いランクでも、ランクアップの試験を受ければ上げることが出来ますし、陸戦から空戦というように変えることも可能です」

どうしよっかな

陸戦や空戦だけで登録するのはもったいない気もするから総合にしておくか

「わかりました、剣介さんもなのはさんも総合で登録しておきますね」  
りょーかいです

踵を返そうとするとガシッと肩をつかまれた

相手はリンディさんだ

「あの魔術の説明をしてくださいますか？」

笑っているけど怖い

あれってのは、クロノを倒した時のだろう

「えっと、あれは

『偽』の魔術の一種で

自分の身体を複製して、複製したものと自分の場所を入れ替える魔

術です

入れ替わる時に急激なGがかかるので、内臓系にダメージがいきますね」

正直、まだ練習中だったので使いたくなかったけどな

「なんでそんなに危険な魔術を使っただ君は」

そんなの負けたくないからに決まっているじゃないか

胸をはって言うとクロノが呆れていた

そんな感じで新しい生活は始まった

## 第十七話

前回のあらすじ：クロノと戦って勝ちました

「クエエエエエ!!」

ああ、うるせえなあ

フェニックスみたいな赤い怪鳥が吼える

俺となのはは、順調……ではないけれどジュエルシードを集めている

アースラと協力関係を結べてからは、前よりもジュエルシードを見つけるペースが遥かに上がっている

気になるのがフェイトだ

アースラの探査ではもう4回ジュエルシードが見つかっているが



俺たちが確保したのは僅か2個

つまり、自分の足で探している女の子に負けているのだ

でも、アースラの仕事が遅いわけではない

ということは、フェイトが動く範囲が広くなったということ

それは同時に、更に無理をしていることになる

フェイトは大丈夫かな

アルフがついていても無茶ばかりするみたいだから心配だ

ん？何でこんなに余裕なのかって？

あの程度なら俺が出る必要がないから

現に、今ユーノが鎖で縛ったした敵をなのはが封印して終了

うーん、この二人の息が合いすぎてて恐いくらいだな

「お疲れ、なのは、ユーノ」

声をかけて、アースラに戻った

SIDEフェイト

ダメだ……今回も空振りみたいだ

やっぱり管理局相手じゃ厳しいのかな

このまま集められないで終わるのかな

……ダメだ、そうやって考えるから先に奪われるんだ

私はフェイト・テストロッサ

大魔導師プレシア・テストロッサの娘

だから不可能はない

……そうだ!!

まだ搜索していない所があったじゃないか

きっとそこに違いはない

絶対に持ち帰るんだ、母さんの為に

「ッフ、ッフ、ッフ……ハア……」

俺は日課の訓練をしている

一日でもサボると鈍るので、少しでもやるようにはしている

継続は力なりってやつだな

なのはとユーノはおやつを食べているところだろう

そう言えば……桃子さんから、なのはの過去を聞いたな

そうして、俺は思考の海に入っていた

SIDEなのは

チョコ味で中はしっとりとしている美味しいクッキーを食べ  
ています

飲み物はジュース

当然だけど砂糖と牛乳を入れた甘いお茶なんかじゃないの

「なのはは、親御さんと離れて寂しくないの？」

前にいるユーノ君が聞いてきた

寂しい……か

それはとっくの昔に忘れてしまった感情

いや、覚えているのだからうけねど

無意識のうちに抑えてしまっている感情

だから寂しくなんかない

「寂しくないよ。ユーノ君にけん君もいるし、私は小さい頃から慣れ  
てるから」

あれ？何を言っているのだろう

「私がまだ小さいときにね、お父さんが仕事で大けがをして入院したことがあるんだ」

けん君にも話したことないのに

でも、止まらない

相手がユーノ君だからじゃない

抑え続けていた気持ちがあふれ出したのだろう

こんなこと話すつもりじゃなかったのに

「喫茶店も始めたばかりだったからね、お兄ちゃんもお姉ちゃんも大忙しだった」

あの時は大変だったと思う

いつもいつも遅くまで働くお母さん

それでもお父さんのお見舞いは欠かさず行って、凄いなって思ったりしたっけ

私も……手伝いたかった

でも、それはワガママだと思ったから、言い出せなかった

皆を困らせたくないから

それは、今も同じ

でも、この頃

ちょっと間違っているのかなって思ってきた

アリサちゃんとのケンカもそうだし

何より温泉で、けん君に言われた言葉

『なのはの全てを受け止めたい』

嬉しかった

純粹に嬉しくて……涙が止まらなかった

「だから、一人は慣れてるんだよ」

ここからは絶対言わない領域

私は、けん君が家に来てくれたから救われたんだ

私にとって、雨雲を吹き飛ばす風であり

柔らかく包み込んでくれる太陽でもある、けん君

恥ずかしくて言えないし、言いつもりもないけど

すっごい感謝をしてるし

すっごい大好き

お父さんやお兄ちゃんに向ける感覚とは少し違う

……よく分からないや

もう少し大人になったら分かるのかな？

そうだといいな

## SIDEOUT

桃子さんに言われた言葉

「だから、なのはのそばにいてやってほしいの」

それは騎士の誓いのように洗練されているもの

俺はそれを了承した

だから裏切る気など、サラサラない

なのはが行く道を共に行く

それが明るい道なら後ろから

暗い道なら照らしながら

「エマージェンシー！探索海域にて魔力を感知！」

現実に引き戻された

艦橋に向かうと、ちょうどフェイトが海に向かって魔力流を打ち込むところだった

何て力

魔法には疎い俺でも分かる

もしかしたら、なのはが俺に秘密で練習したと思っている魔法並じゃなからうか

でも、あれだけの魔力を海に打ち込んだあと

もし、残っているジュエルシード6個が全部発動したらどうするつもりだ？

いくらフェイトが天才でも、アルフが優秀でもそれは無理だろう

本当に……無茶をする



轟音と共に、海に6個の竜巻ができた

最悪の事態か

「なんとも……無茶をする子ね」

リンディさんが頭を抱えている

「このままでは自滅をしてみよう」

早く助けに行きましょう」

クロノがバリアジャケットを装備しようとする

なのはも同じようにいつもの姿に着替える

「いけません」

この勢いを阻害する声

リンディさんだ

SIDEクロノ

なんて無謀な子なんだ

早く助けに行かないと

む  
いつもよりも、どこか柔らかい色合いのバリアジャケットに身を包

さあ、早くいかなきゃ

「いけません」

え……？

何で？ 意味が分からない

だから叫ぶ

「何故ですか!?! 母さん!!」

助けが必要なら颯爽と現れて助ける

それが正義の味方じゃないか

母さんなら分かっているはずなのに、なんで

「わきまえなさい、クロノ『執務官』」

この状況で、一番合理的にジュエルシードを回収する方法は？」

……そうだった

今の僕は、クロノ・ハラウンじゃない

クロノ・ハラウン『執務官』なんだ

でも、こんな人達を全員救うために管理局に入ったんじゃないの  
かよ

これだけの力があるのに、破滅に向かう一人の少女も救うことが  
できない

何が……何が正義の味方だ

「すいませんでした、艦長」

この次は、この次こそは正義の味方として振る舞おう

SIDEOUT

腐ってやがる

いや、腐ってはいない

あれが組織としては一番の判断なのだろう

よく考えてみれば確かにそうだ

この場での最善は、フェイトを見捨てて消耗したところで

フェイト共々捕獲することだろう

そうだ、確かにそうだ、それが最善だ

理解できる

だが

納得がいかねえ

これが、どいぞのおっさんだったのならばやうでもいい

フェイトの鬼婆（プレシアだったか？）でもそつだ

でも、今戦っているのは、待っているのは絶望しかないと分かっていても、戦っているのはフェイトだ

俺の守りたい一だ

どうすれば助けられることが出来る？

リンディさんを脅す？

無理だ、あの人がそんなことに屈する人だとは思えない

艦を沈める？

なおさら無理だ、ここは宇宙空間だから、そんなことしたら皆死んじまう

ワープの制御の仕方なんて分からないし……

【行って】

それは希望の声

「なのは、ケン、行って」

これまでの戦いでも、幾たびの危機を救うための原動力になった声

「僕がゲートを開くから……早く！」

思わずにやける

ありがとう、ユーノ

助かった

「誰か、あの子を捕まえて!!」

させるかよ

取り出したる剣は、クロノとの戦いでも出した剣

『勝利すべき黄金の剣

カリバーン

』

「お前もいけ、ユーノ

「ここは俺が止める」

階段を上がってきた局員の足下に、複製した剣を突き刺す

まさか剣を出すとは思わなかったのだろう

動揺が広がる

「ほら……さっさと行け

フェイトが辛そうだぞ?」

この一言で、これまで死んでいたなのは目に気力が戻る

「分かった!!」

「一緒に行こうユーノ君」

そう言って飛び出していった

「これは、契約違反ですよ?」

リンディさんの静かな声

どちらかというと、怒りを押し殺した声かな

そついや、契約なんてものも存在したな

すっかり忘れていたよ

「あちゃ〜、それはすいません

俺の独断での契約違反ですね

申し訳ない」

「……あくまで、剣介さんが全て計画したと言っつのですね

頷いて肯定をする

泥を被るなら俺一人で十分だ

「わかりました

皆さん、剣介さんを捕まえて」

【じゅめんなさいね】

非情な決断命令と共に、念話で謝罪をしてくる

そこで悟る、別にリンディさんも強要したかった訳ではないと言っ  
じつじ

【大丈夫ですよ

それより、どの程度までぶっ飛ばしていいんですか？】

【そうですね

周りの機器が壊れない程度にお願いします】

りょーかいです

さあ、こっちはこっちで開幕だ

「死に物狂いでかかってこい

そして、その全てを封殺してやらあ「!!

第2幕が始まった



SIDEなのは

転送された先は、いつも通り空の中

前までだったら驚いて何も出来なかったかもしれないけど、今は違う

雲の切れ間から降りると、そこには消耗したフェイトちゃんと、何か光のような物に捕まっているアルフさんがいた

それでもアルフさんは私の姿を見ると、光のような物を噛みちぎって飛びかかってくる

恐ろしくなんかない

「僕たちは戦いに来たわけじゃ………ない!!」

ユーノ君がいるから

激しい音がして、アルフさんの一撃を止めた

フェイトちゃんを探さなきゃ

えつとーいた!!

ジュエルシードの近くで辛そうにしながらも、封印をしようとして  
いる

「フェイトちゃん!!」

振り向いた顔は恐かった

「一緒に止めよう」

今度は驚きの顔

さあ、私の魔力を受け取って

ピンク色の光がフェイトちゃんのバルディッシュを包む

これは決意の証

フェイトちゃんと対等に話し合いたっていう、決意の証

「二人で半分こしよう。一緒に封印だよ」

それだけを告げて距離をとる

私には経験があるから少しだけわかる

一人ぼっちの時に一番やってほしいことは、大丈夫?とか声をかけ  
てもらったことじゃない

「ディバインバスターフルパワー」

[Yes my master]

フェイトちゃんの準備もできた

「サンダー」

「デイバイン」

一人ぼっちの時に一番嬉しいのは、同じ気持ちを分けあえること

寂しいのも、悲しいのも半分こにして分けあえること

「レイジ!!」

「バスター!!」

やっと分かった

「友達になりたいんだ」

SIDE OUT

なのはがフェイトに魔力を分けた

俺はそれを見ながら、また一人を縛り終えた

「さあ、次はどうだ？」

今度こそ誰も近づいてこない

そりゃそつだろう

俺の周囲には、神の牡牛をも縛り上げる鎖で縛り上げられた局員が  
たくさんいるのだから

「待て待て待て待て、分かったよ剣介」

クロノ？ どうしたんだ？

「こつちとしても、もう作戦は失敗したも同然だ

だから、僕も出る

君も出てくれないか？」

やっとか、今か今かとずっと待っていたんだぞ

局員を『天の鎖

エルキドゥ

』から放す

「ゲホッ、ゲホッ」

ちょっと咳き込んでいるけど気にしない

「よし、じゃあ行くぞクロノ」

堅い漆黒のバリアジャケットを纏ったクロノと共に転送された

おお、いつも通り空中だな

「剣介」

どうしたんだ、クロノは？

「その……ありがとう」

は？ 何が？

そう言って飛び立ってしまった

本当にどうしたんだ？ あいつ

ドゴオオン!!

『転輪する勝利の剣

エクスカリバー・ガラティーン

』のような爆発がおきた

うわぁ、何ぞこれ

どうやら、なのはとフェイトのタッグ攻撃のようだ

もの凄いなこれは……

兎にも角にも、ジュエルシードを封印できたからよしとするか

なのはとフェイトの近くによっていくと

「友達になりたいんだ」

なのはがやっと伝えられた素直な気持ち

結果がどうでも、これはきつとマイナスにはならない

轟音と共に、海に雷が落ちた

どづいことだ

「か、母さん」

フェイトの眩き

これが、プレシア・テストロッサの攻撃か

次はどこに……フェイトか!?

何でか分からないが、直感でフェイトだと思って、フェイトの前に  
でる

本当にきた!!

「治療……」

ダメだ、癒の魔術を使えば10分間宝具は使えない

ということは、『天地統一  
エインヘルト・ワールド

』が消えて海に落ちるということになってしまっ

「ぐああああああ!!」

飛ぶな、保て……意識よたも……

「けんくーん!!」

目の前が真っ白になった

## 第十八話

前回のあらすじ：雷をくらいました

SIDEプレシア

良かった

あの雷撃がフェイトに当たらなくて本当によかった

意識を奪うことに専念して、それほど痛くもないし、後にダメージが残らないようにした

けれどもフェイトに当てたくはなかったなので、どこの馬の骨とも分からないガキに当たってくれてよかった

でも、感謝しないとね

だってあの子はフェイトを守ってくれたのだから



さあ、待っていて

あなたを諦めたわけではないのよ

あと少し、あともう少し

あるわけもない、それでもあると信じたい

アルハザードはあると

「つつ、ああ〜」

起きるとそこは見慣れた天井だった

大好きだったぬいぐるみ

好きな女優のポスター

何もかもが変わらない完璧な朝

変わっているとすれば――

「おい、べっじした華音

何故俺をのぞき込んでいる？」

「だって、その、お兄ちゃんが起きないから」

心配になったってことか

いつも通りの優しい妹だことか

「ありがたいけど、時間大丈夫なの？」

俺の通っている中学よりも30分ほど早く始まる華音の小学校

で、俺はよく遅くに起きる

それは今日とて同じ事だから

「あ……べっじつめっじ

走らないと……」

べっじつじつじつじつになる

はあ、俺を起こしていたせいでし

華音を走らせるわけにもいかない

「ちょっと待ってろ

すぐに着替えて、学校の近くまで乗せて行ってやるから」

「うん……その……あの……あ、ありがとう、お兄ちゃん」

ものの5分で全ての用意を整えて家をでた

舞い散る紅や黄の葉っぱ

特徴的な銀杏の匂い

起きたてには少し寒いけど小学校に向かって自転車をこぐ

さて、そろそろだな

山田さんの家の角を曲がると、少し遠くに小学校が見えた

「はい、到着」

「あの、ありがとね お兄ちゃん」

はいはい、転んで怪我するなよ

秋の少しずつ枯れゆく空を潤すような笑顔で歩いていった

さて、朝飯どうすっかな

俺は俺の学校に向かって車輪を回した

「っは!?」「っは?」

見覚えのない天井、清潔感のありすぎる白で覆われた空間

「けん君!!」

うわっ!!

なのはか、何で涙ぐんでいるんだ?

ちょっと待てよ、俺はあの時、フェイトを助けようとして……そう  
だ雷撃されたんだ

「ジュエルシードは!?!」

すると、横にいたクロノが状況報告

が  
クロノによると、フェイトからジュエルシードを奪い返そうとした

い  
アルフに邪魔をされて3個しか取り返すことが出来なかったらし

ないらしい  
3個も取り返せれば上等だと思うけど、クロノにとってはそうでも

生真面目だからな

「けん君、身体は大丈夫なの？」

そういえば、目立って傷もないし、身体も痛くない

「それなのですが

剣介君が当たった雷は、意識を奪つことを目的としていて

当たっても内外ともに傷が出来るようなものではありませんでした」

ふうん

俺を見てくれたらしい医師の人からの言葉に違和感を感じる

確か、フェイトは母さんって言っていたよな

どっついう意図だ？

攻撃を主とするなら分らないでもないが

「剣介さん、目を覚ましたようですね」

リンディさんだ

迷惑かけたし、心配かけたな

「全員、席を外してくれるかしら？」

その言葉に、皆が席を立つ

いきなり説教か

命令違反した上に、撃墜されるって

言い訳しようがないな

「さて、単刀直入ですが

あなたの命令違反と同員への暴行について、弁護の機会を与えます

何か言うことはありますか？」

「何もありません」

もう一方的にこっちが悪いからな

「罪を認めるという事ですね」

念押しという言葉

本当に謝ることしか出来ないな

「そうです

申し訳ありません」

深い溜め息を一度つく

「わかりました、では罰を与えます

学校にも行かなければいけないので、一度、家に返そうかと思っ  
ていましたが、あなたはこの艦で謹慎

また、3回、艦の掃除をしてもらいます」

うん、とても寛大な処分だと思うけど、学校に行けないのは痛い  
な

なのはとアリサもそうだし

なにより、アリサとすずかに顔を見せておきたかった

でも、あれだけの事をして、この程度なら感謝しなくちゃいけない  
な

「分かりました

寛大な処分ありがとうございます」

リンディさんの顔が変わった

「そして、お帰りなさい

凄く心配したわよ」

フワッと、気づいたときにはリンディさんの胸の中だった

柔らかくて暖かい

「……………本当にすいませんでした」

それが思いのほか気持ちがよくて、俺は身体を預けた

ところかわって、ここは会議室

日本の会議室よりスタイリッシュな感じ……かな？

そこに、俺となのはとユーノ、それにクロノとリンディさんとエイ  
ミーさんがいる

「わっ、これからのことを話さなくちゃね」

これからのこと……この事件の黒幕というべき存在に対してだそ  
うだ

エイミーさんが映し出してくれた写真には、紫髪の女性が映ってい  
る

これがプレシア・テストロッサ

あのフェイトの母さんという言葉

あれはどこか恐がっているような響きだった

それにアルフも鬼婆っていつていたし

そして、詳しいデータをエイミーさんが話し始めた

「プレシア・テストロッサ、ミッドの歴史で26年前、中央技術開発局  
の第三局長でしたが、当時彼女が開発していた……」



な……長い……

第三局長だったときの話しから

亡くなった二代目魔術研究室室長であるエッジ・テストロッサのこと

そして、魔法研究の失敗で中央を追われたこと

全部聞いて思ったことは、頼りになりそうな手がかりが残っていないということ

ジュエルシードは願いを叶えるもの

だが、エッジ・テストロッサとプレシア・テストロッサは最後の方、不仲だったようだし

魔法研究を成功させるために、わざわざジュエルシードを使うとは思えない

「ふう、プレシア女史も、フェイトちゃんもすぐには動けないですからね、あなたたちには休暇をとってもらいましょうか」

何ともちよつどいいタイミング、これもリンディさんの策か？

「あれ、けん君はどつするんですか？」

どつしよつ、まだ話してない

というか、話したら絶対自分のせいだ、って落ち込むから話したく

ない

……ああそうだ

「ちょっとこっちに残ってやりたいことがあるからな

アリサとすずかにはよろしく言っておいてくれな」

「こんな感じでどうだ？」

「ええ〜、まあしょうがないか

アリサちゃん怒るよ〜」

ふう、あぶねえあぶねえ

どうにか誤魔化せたみたいだ

アリサが怒るか、恐いな

帰ったら平謝りだな

SIDEプレシア

バチンッ

もう嫌だ

バチンッ

やりたくない

バチンッ

ごめんね、ごめんね

バチンッ

こんな形でしか自分を通せない母さんを許さないで

そうしてフェイトを放り出した

そう、いつも通りに

「グ、ゴフォ」

舞い上がる鮮血

ダメだ時間がない

もう少し、後少し

お願いだからもってちょうだい

その時、轟音が響いた

「ウワァァァ!!」

飛びかかってきたのはフェイトの使い魔……確かアルフって言う  
たかしら

この程度の攻撃など効かないことが分らないのかしら

それでも、手から血をだして障壁を破ってきた

ウザったいわね

「あんたは母親で、あのこのあんたの娘だろ!!」

あんなに頑張っている子に、あんなに一生懸命な子に、何であんな  
に酷い事ができるんだよお!!」

そんな事は分かっている

痛いほどわかっている

でも、それが私の選んだ道

もう引き返せない

もうやり直せない

だからアナタも近寄らないで

死なないように手加減はするから

とつとつ、ここから失せなさい

「フェイトは、あんに笑ってほしくて

優しいあんに戻って欲しくて」

わかってる!!

言われなくてもわかってる!!

ここから消えろお!!

転移したようだ

別にあれがどうなるかと知ったことではない

今はフェイトに『演技』をしなければ

ベッドに横たわっているフェイト

傷が疼くのだろう

治癒魔法を使いそうになる右手をギュッと抑える

「起きなさい、フェイト」

まるで操り人形のように起き上がる

あと5個ジュエルシードを集めてきなさい

無茶な命令だ

管理局が来ているし、相手には若き執務官クロノ・ハラオウンや、身を挺して庇った男もいる

それでも起き上がるフェイト

だが、あの使い魔がいなくなったのに気がついたようだ

だから楔を撃つ

「あの子は逃げ出したわ、あなたを置いて、しっぽを巻いて、忘れないで、あなたの本当の味方は母さんだけいいわね、フェイト」

「はい、母さん」

SIDEOUT

SIDEなのは

つまんないの

けん君と一緒に帰りたかったのにな

やりたいことって何だろう？

魔術の鍛錬かな？

うーん、気になる

でも、たぶん教えてくれないだろうな

魔術は危険だーって

いつもそればかりだもん

届くかな……

町は変わってないよ

「なのはちゃん!!」

「ありがとうすすずかちゃん

アリサちゃんも、じゅめんね心配かけて」

「まあ、よかったわ元気で

で、ケンは？」

「実はね……」

「ウガァー、あいつ帰ってきたらたっぷり説教してやる」

「だ、ダメだよアリサちゃん」

いいなあ、こつこつの

帰ってきたなって感じ

「え!?また行かなくちゃいけないの」

「うん、でもきょうなら大丈夫だよ」

「じゃあうちに来ない？」

昨日怪我してる犬を拾ったの」

へへ、楽しみだなあ

そして、アリサちゃんの家に行って犬を見せて貰つと

え!? アルフさん!?

なんと、アルフさんでした



S  
I  
D  
E  
O  
U  
T

## 第十九話

前回のあらすじ…命令違反の処分を受けました

床をモップで擦る音が聞こえる

「ケンスケ、頑張る」

「あなたも働きなさいリス!! それに呼び捨てにしない!!」

「まあまあセラ、そんなに怒らなくても大丈夫だよ」

「しかし」

「わかった頑張る」

「おう、よろしくな」

働いているのは俺とホームクルスであるセラとリス

何となく探してみたら、道具という区分でバビロンに入っていたから手伝って貰っている

しっかし広いな、6時間ぶっ続けて働いてやっと終わりそんな気配がでてきた

「あれえ〜、罰を受けた剣介君じゃあないか」

粘つく声とともにやってきたのは、確かローデスとかいう名前のクルー

フェイトを助けにいった時に、局員に暴行を働いたのが許せないらしい

そりゃそうなんだけど

正直、今日三回目なのでウザりたい

「リリディ艦長も甘いよな

クルーを攻撃したやつをこの程度で終わらすなんて

確かにこっちが悪かったので何も言えない

さっきから飛びかかりそうになるセラを、リズに止めて貰っている

「おい!! 聞いてんのかよ!!」

バシャという音とともに、水の入ったバケツが俺にかかる

「ご主人様!!」

「ケンスケ」

ああああ、ビシヨビシヨじゃねえか

「わたしも限か……」

飛びかかろうとするリズとセラ

それを目で抑える

でも、さすがにイライラしてきたな

ここでキレたら終わりだと言い聞かせて怒りを静める

その気配を察したのか、やりすぎたと思ったのか

ローデスは去っていった

「ご主人様、大丈夫ですか!？」

まあ大丈夫だが……とりあえず着替ええないとな

二人に床を拭いておいてくれと言い残し、一度部屋に戻った

「あんのやるつ、髪までビシヨビシヨじゃねえか」

バビロンからドライヤーを取り出して髪を乾かす

服も着替えて、さあいくか、と思っていたら軽くドアを叩く音がした

誰だろうと思って開けてみると、クロノがいた

「少し、話がしたいんだ」

SIDEクロノ

さつきまで、艦の掃除をしていたので探してみたが何処にも見当たらない

しょうがないから、一緒に掃除をしていたメイドの一人に聞くと部屋だと言ったので部屋に向かった

扉を叩くとすぐに剣介が出てきた

開口一番、単刀直入に話を伝えたいことを話すと、いいよと部屋に入れてくれる

どこからだしたのか、ティーポットとお茶菓子がでてきた

「この色と匂いはダーズリンかな」

うん、やっぱり

「このふくよかな香り、舌の上に味のピラミッドを造り上げる……」  
んなことをしにきたわけじゃないな

「まず、あの時フェイトを助けてくれてありがとう」

それが一番伝えたかった言葉

立場的に何も出来なかったなか、全部無視して動いてくれた剣介には感謝したい

そしてもう一つ、剣介に聞いて貰いたい話

剣介ならわかってくれる

理想を理解してくれる

あの時、フェイトを守ってくれた剣介ならきつと

「あれは、今から11年前のことなんだ」

そう、あれは今から11年前

僕の父さんであるクライド・ハラオウンはロストロギアの運搬中に死んだ

11年前というと、僕は3歳なので、うる覚えだけど大泣きしたっけか

そして、それから5年後のある日

父さんの部屋から一枚の手紙が見つかった

それは僕に宛てた物

もっと大人になったら渡すつもりだったんだろっけど見つけてしまった

それには、父さんの生い立ちから母さんとの馴れ初めまで

全てのこと書いてある手紙だった

そして、その中に興味深い言葉があった

それは

《この世界は、こんなはずじゃないことばかり

大切なことは、それに向かってどう立ち向かうかなんだ》

この言葉は僕の人生を大きく変えた

これを読んで、考えて

また読んで、考えて

何度も何度も繰り返し読んでみると、自分のやりたい道が見えてきた

それは、こんなはずじゃないことに巻き込まれた人のことを救いた  
い

どんなことから世界中の人々を救いたい

とても綺麗な願い

それが一番の近道だと思ったからこそ管理局に入った

でも、現実は厳しかった

最初の頃は良かった

師匠に稽古をつけて貰って、困った人がいれば助けに行く

助けた人の笑顔を見るのが楽しかった

ありがとうと言われるのが嬉しかった

それが変わり始めたのは、執務官になってから

自分の立場が上になったから、責任が大きくなった

助けられる人なのに助けられないことが多くなった

考えた事もある

でも、思考が止まった

どう考えても、先に進まなくなった



それでも、頑張ろうと思った矢先にフェイトの事件

また守れなかった

また苦しんでいる人を救えなかった

あれ？ 話をしにきただけなのに

別に質問をしようと思った訳じゃないのに

でも、もう止まらない

「どうすねばいいのかな」

気づいたときには問いかけていた

SIDEOUT

「どうしたらいいのかな」

クロノの過去というか理想を聞いていたら、最後に問いかけられた  
全ての人を救いたい……

要するに正義の味方ってわけだろ

こんな、昨日今日あったやつに重い事を聞くのか

よっぽど信頼してるのか、せっぱ詰まっているのかしらないけど

この理想は素敵だ……でも、俺は嫌いだな

「俺はー」

その時、大きな音がして、ドアが開いた

「ケンスケ、掃除終わった」

何というリズ

この見計らったようなタイミングは何だ

てか、あの後二人で終わらしたのかよ

「すまなかったな、この話は忘れてくれ」

そう言ってクロノは去っていった

「ケンスケ、いいの？」

お前のせいなんだけどな

まあ、このまま話しても良い結果にはならないだろうから、いいけどね

二人にはバビロンに戻ってもらい

特にやることもないので部屋でゆっくりしていた

そういえば、久しぶりに華音

かのん

の夢を見たな

やっぱり可愛かったな

でも、何で今になって見たんだろう

家が懐かしい……ないな

思い出したのかな

あの事を

「石神剣介は、至急通信室に来てくれ

繰り返す、石神剣介は至急通信室に来てくれ」

おいおい、休む暇を与えてくれないな

通信室ということは、なのはからの緊急かなんかか？

何にせよ急ぐか

通信室に着くと、アリサ家の庭が映っていた

大きな檻があつて、そこに居るのはユーノと……アルフ!?

なんでアルフがここに？

「昨日、大怪我していたところをアリサとかいう子が保護したらしい

これから、詳しく事情を聞くところだ」

ふむ、そういうことが、ユーノみたいだな

《全てを話すよ》

でも、約束して、フェイトを助けるって

あの子は何も悪くないんだよ》

やはりフェイトを見限ったわけではなさそうだな

それに、あの怪我……フェイトを助けるためにプレシア・テスト  
ロツサに挑みかかってやられたとありえそうだな

「わかった、約束する」

クロノにとっては、やっと理想と現実が一緒になったから嬉しいだ

ろくな

「じゃあ話すよ、フェイトの母親プレシア・テストロッサが全ての始まりなんだ」

「聞いたか？　なのは」

アルフが話し終わった後、なのはに話しかける

《うん、聞いた、これからどうなるのかな》

クロノ曰わく、艦の方針はプレシア・テストロッサの捕縛になるぞうだ

聞くまでも無いことだろうが、一応これからどうするのかを聞く

俺たちの当初の目的は、ジュエルシードの回収だからな

《私は、フェイトちゃんを助けたい

アルフさんの願いと私の意思

フェイトちゃんの悲しい顔は、私も何だか悲しいの

だから、助けたいの、悲しい事から

それに、友達になりたいって聞いた返事も、まだ聞いてないしね》

やっぱりか

それでこそ高町なのは

こういうやつだから俺は守りたいと思った

今回も同じ事

《剣介と……なのはって言ったっけ、私が頼めた義理じゃないけど、フェイトを助けてやってくれ、あの子には誰もいないんだよ》

そんなこと、頼まれなくてもやってやる

「分かってるから、今はゆっくり休め」

もう、いくら拒んでも助けてやるから

待ってるよフェイト

SIDEなのは

「なのは、おっそ〜い」

待たせちゃったかな

にゃはは、ごめんね

やっぱり楽しいや

こうやって三人で笑って、恐がって、楽しんで

すごく楽しい

前だったら、やらなきゃいけないことがあるからと素直に遊べな  
かったかもしれない

でも、今は違う

この日常が大切なんだって気がついたから

ここでまた遊ぶために、やらなきゃいけないことをやっているん  
だって気がついたから

ありがとう、すずかちゃん、アリサちゃん

また、絶対に帰ってくるよ

今度は二人……うんうん三人でね

朝

まだちょっと肌寒いけど、気持ちいい朝

アースラに行こう

けん君が待ってる

走っていると、横からアルフさんが追いついてきた

もう治ったんだ、よかった

そして、いつもの場所に着くとけん君がいた

「よう、なのは

お待ちしているようだよ」

うん、気がついてるよ

「じいならいいよね、フェイトちゃん」

[scythe for] [E]

その言葉を待っていたというように、バルディッシュを構えたフェイトちゃんが現れた

「フェイト……もう終わりにしよう、鬼婆の言うこと聞いたって何も変わりゃしない!!フェイトが傷つくだけなんだよ!!」

祈るような叫ぶようなアルフさんの言葉



でも、今のフェイトちゃんには届かない

軽く首を振って

「それでも私は、あの人の娘だから」

それは明らかな拒絶

だから、私はレイジングハートを構える

「ただ頼ればいいってわけじゃないのは分かってる、でも人に頼るのはとても大切なこと、かけてフェイトちゃん、お互いのジュエルシードを全部!!」

空に浮かぶ、たくさんのジュエルシード

「それからだよ、全部それから

私達の全ては、まだ始まってもない

だから、本当の自分を始めるために

始めよう

最初で最後の本気の勝負!!」

## 第二十話

前回のあらすじ：フェイトと戦います

二人の身体から、抑えきれない気が立ち上る

それは、風のように辺りを吹き散らし、全ての邪魔を排除していく

この場にいられることが僥倖と言っても過言ではない

睨み合う、動き出しまで後少し

さあ、刮目しろ

まばたきをするな

これこそ、今までの戦いでの頂上決戦

全てが決まる戦い

さあ

開幕だ

始まった

まずは、フェイトが飛び上がって魔力弾を5個作り出す

「フォトンランサー」

それに対応して、なのはも魔力弾を5個形成する

「デイベインシューター」

「ファイア（シュート）!!」

飛び交う金と桃の魔力弾

それは、お互いを相殺せずに、真っ直ぐ貫くべき敵のもとへ飛んでいく

ただ、その能力の違いから、錐揉み状に回転して魔力弾を避けるのはと、追ってくる魔力弾を防御するフェイトという形になる

戦闘というのは、一瞬の遅れが命取りになるもの

なのは、フェイトが受け止める数瞬の隙に、さらに6個の魔力弾を形成して打ち出す

しかし、そこはフェイト、鎌状に変形させたバルディッシュで、なのは近づきながら弾を撃ち落としていく

そうして間合いに入った瞬間に鎌を振り上げた

少し驚きを見せたのはだったが、シールドでそれを受け止めると

ただ一つ、遠くから迂回させた魔力弾を背後から襲わせた

まるで、干将・莫耶のように戻ってくる魔力弾

間一髪のところまで防御をしたフェイトだったが、なのはを見失う

ここで、冷静にいけよ

焦って接近戦などを……しかけやがった

「せええええ!!」

気合いとともに、レイジングハートに魔力を纏わせて接近戦をする

だが、それは下策

考え得る限り最悪の手

素直に砲撃なりバインドなりをしておけばよかったのだが、これでもざむざフェイトの間合いに入ってしまった

そんなのはをフェイトが見逃すはずもなく、機動力を生かした攻めにでる

右、左、上、下

嵐のようなフェイトの攻撃を、一瞬の動きで回避するのは

全てレイジングハートの指示だろうけど、成長したことを実感させてくれる

だが、それにも限界は来る

フェイトの鎌がなのはを捉え……ない

爆発音とともになのはが強制的に距離をとる

速効で魔力弾を作り、それを爆発させることで距離をとったのだ

至近距離からの爆風により、胸についているリボンはポロポロだが気にはしない

しかし、恐怖は終わっていないかった

距離をとった先には4個の魔力弾

それは、なのはの動きを止めるには十分な量だった

かるうじて防いではいるが、そちらに気をとられるなのは

フェイトはその間に、準備を整えた

全て防ぎ終わり、肩で息をするなのは

その周りに金色の魔法陣がいくつも出来上がる

あれは、まずい

「まずい、フェイトは本気だよ!!」

四肢をバインドで固定されたなのは、何処にも逃げ場がなくなっ  
た

「なのは、今サポートを「やめねえか!!」ケン!」

この戦いに介入する馬鹿が何処にいる

これは、なのはのための戦い

フェイトのための戦い

二人だけで戦う美しき聖戦

これは、誰にも邪魔はできない、否、させない

固く握りしめた拳からは、生温かい朱き血がしたたり落ちていく

「アルカス、クルタス、エイギアス……」

あの呪文か

当たったら負けは確定だろう

俺には祈ることしか出来ないけど、頑張れなのは

「フォトンランサー、ファランクスシフト

打ち砕け、ファイア!!」

まるで城に向かって射かけられる弓矢の如く襲いかかる光の数々

打っているほうも魔力を使うらしく、苦悶の表情を浮かべるフェイ

ト

それでも、最後の一撃として、魔力を濃縮させる

この煙が晴れたら放とうと用意した魔力弾

しかし、煙が晴れたとき、それが喰らうべき敵はいなかった

そこに居たのは、不屈の心を持ちし者

無事に避けたか、よかった

いや、喰らったのか？

なら凄いな、あれだけの魔力弾を喰らっても倒れないとは……正直見直した

「デイバイーン、バスター!!」

なのはの砲撃

フェイトも濃縮弾によって反撃を試みるが、いくら濃縮しようが銃弾は銃弾、砲弾に勝つことは出来ない

軽く消される濃縮弾

分かっていたというようにシールドを張るが、それを飲み込んでゆ

手袋が破れる

マントが破れる

それでも、防いだフェイトだったが、さらにバインドで固定される

あれは……俺に内緒でやっていた収束砲か

見ただけでわかる莫大な魔力

星の一つは軽く破壊できそうな収束砲

「受けてみて、これが私の全力全開!!」



スターライト……ブレイカー!!」

海をも断ち割るそれは、もはや冗談に近いレベル

宝具といっても過言ではない

フェイトは生きているのか?

海に墜ちていくのを見て駆けだす

「よつと、大丈夫か?」

海に墜ちる直前、何とかフェイトを助けることに成功した

そして、ここに頂上決戦は終結した

「フェイトちゃん大丈夫?」

なのはの問いかけに薄目を開けて大丈夫だよと答えるフェイト

いや、あれだけの砲撃を喰らったら大丈夫ではないだろう

「私の……勝ち……だよね」

信じられないような事なのだろう

その言葉に力はない

それでも、それは事実

「……みたいだね」

そして、バルディッシュから、争いの原点であるジュエルシードが  
はきだされる

あれ？ 前にも同じようなことがあったよな

あの時と同じなら、皆が危ない!!

「すまん、フェイトを頼む」

なのはに預けて、バビロンから、ケルト神話における最強の槍兵で  
あるディルムッド・オディナの赤き魔槍を取り出す

これが杞憂に越したことはないが、もし本当にやってきたらこれで  
止める他は無い

《きたよ!! 剣介君!!》

やっぱりか

エイミィさんの言ったとおり、空が妖しく光る

雷鳴が轟く

来るなら来い

この槍にかけて、俺に負けはない!!

目標に向けて唸りを上げる雷撃

でも、届かせはしない

『<rb>破魔の紅薔薇(ゲイ・ジャルグ)』!!

真名解放したとたんに、気持ちが悪くなるような気が辺りを支配する

だが、これしきで引いてはられない

「せやあぁあ!!」

気合いと共に上空へ突き出す

彼の騎士王の鎧でさえも打ち消したそれは、その効果を如何なく発揮して『魔』という分別の雷撃を切り裂いていく

それは小さい穴だったが、なのはとフェイトに届かなくするために十分

だが、俺は気がつかなかった、もう一つの魔法に

「ジュエルシードが!?!」

ユーノの叫び声で後ろを振り向くと、雷の中心部へ向かっていく9個のジュエルシード

くそっ、こっちはこっちで手一杯だ、止められない!!

そして、数秒後

雷撃が終わる頃には、とっくにジュエルシードは無くなっていた

</rb><rp>(</rp><rt>……お疲れ様、今、ゲート  
を開くから待っていてくれ</rt><rp>(</rp><rt></ru  
by>

試合には勝ったが、勝負には引き分けたか

悔しさを噛み締めながら、アースラへと戻った

SIDEロードス

使えねえな

結局、ロストロギアの確保は出来なかったじゃねえか

これは、ガキのお遊びじゃねえんだ

宝具だっけか？

確かに、もの凄く強いけど、あいつらには欠けている物がある

それは、プロ意識だ

今から向かう、プレシア・テストロッサ捕縛で、あいつらにプロ意識つてものを思い知らせてやる

「武装局員、転送ポートから出動

任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です」

よっしゃあ、血沸き肉踊るぜ

やってやらあ!!

転送ポートから転送された先は、どこぞの王宮みたいな場所

「どうした、緊張してんのか？」

まだ、武装局員になって日が浅い後輩に話しかける

俺だって初めはブルったさ

でも、回数を重ねるたび、凶悪犯を捕縛していくたびに分かっていることがある

それは、笑顔

それがどういふ思いであるかと笑顔は美しい

そして、それを見るからこそ俺は頑張れる

突入すると、一人の女性が座っている

あれがプレシア・テストロッサだろう

あの余裕が気に入らねえ

更に奥まで進むと、ポッドがあった

あれは……人!?

何故か金髪の人がポッドに浮かんでいる

あのガキ達が戦っていたフェイトとかいうのに似てる、いや、その  
ものみたいだ

「私のアリシアに触らないで!!」

あのババアが来やがった

アリシアなんざしらねえ

お前を逮捕するだ……け

意味が分からなかった

溢れ出る液体が赤い色をしていることも

「ぼれでる臓腑が紫色をしていることも

「なん……だ……」

周りを見ると、腕を干切られて悶絶する仲間

あるべきはずの顔が失われている仲間

足が無くなったあの新人

なぜ……なぜだ

デバイスをとり、プレシア・テストロッサに向ける

「てめえ、俺の仲間……俺の家族に何しやがった!!」

声がかすれる

涙がこぼれる

もう立てない身体で這いつくばりながらにじり寄る

せめて一撃

仲間の無念をはらすため

美しい笑顔を見るため

「邪魔よ!!」

もう何も聞こえない

何も見えはしない

SIDE OUT

「いけない、同員達の送還を!!」

俺たちが帰ってくると、そこには地獄絵図が広がっていた

溢れ出す血

飛び散る臓腑

ゴロゴロと転がっている四肢

「う………ゲェェ」

なのはが吐く

ユーノが吐く



俺も吐き気に襲われるが何とか保つ

早くこの場を去らないと

「……なに……あれ」

それは見せてはならないものだった

ポッドに浮かぶ人

フェイトとまるで同じな髪、顔、身体

なんだあれは？

「もう駄目ね、時間が無いわ

たった9個のロストロギアでは、アルハザードにはたどり着けないかも知れない」

アルハザード？　なんだそれは？

憑かれたように語り出すプレシア・テストロッサ

その言葉に呆然となって、なのは達を連れて行くのを忘れていた

「でも、もういいわ

終わりにする

「この子を亡くしてからの暗鬱な時間を

「この子の身代わり人形を、娘扱いするのモ」

何を……言っている？

人形？

誰が？

フェイトがか？

「聞いていて、あなたの事よフェイト

せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは外見だけ

役立たずでちっとも使えない

私のお人形」

だから意味がわからない

誰か説明をしてくれ

「最初の事故の時にね、プレシアは、実の娘、アリシア・テストアロッサを亡くしているの

彼女が最後におこなっていた研究は、使い魔とは異なる

使い魔とは異なる、人造生命の生成、そして、死者蘇生の秘術

フェイトって名前は、当時、彼女の研究に付けられた開発コード

プロジェクト『F・A・T・E』

そういうことか

やっと納得がいった

要するに、娘を亡くしたから変わりを造りましょ

ってことだろ

「よく調べたわね

そうよ、その通り

だけど、駄目ね

ちっとも上手くないかない

作り物の命はしょせん作り物

失った者の代わりにはならないの

アリシアはもっと優しく笑ってくれた

アリシアは時々反抗するけれど、とてもよく言うことを聞いてくれた」

「やめて」

なのはの声

聞くに耐えなくなったのだろう

だが、俺の今の感情はなんだ？

喜びと……疑念？

「アリシアは、いつでも私に優しかった

フェイト、やっぱりあなたは、アリシアの偽物よ

私がアリシアを復活させる間の慰み物

だから、あなたはもういらないわ

何処へなりと、消えなさい!!」

なぜ、プレシア・テストロッサは震えている？

なぜ、プレシア・テストロッサの顔は歪んでいる？

なぜ、プレシア・テストロッサは泣きそうになっている？

微妙な、本当に微妙な変化だけど

俺は気がついた

それでも、プレシアはやめない

「……」を教えてあげるのは



「アリシアを救つたためならば人を殺しても構わないというその傲慢さ!!

フェイトを簡単に切り捨てる非情さ!!

大切な一以外はどくなつても構わないというその考え方!!

全てが俺に合っている」

そう、本当に全て合っていた

恐いくらいに

何から何まで

「あなたは、分かっているみたいね

ならば、私と一緒に来ない?

楽しい旅になるわよ」

「はっはっは

それは楽しいな

是非ご一緒させていただこう」「けん君!」「と言いたいが

残念だな、プレシア・テストロッサ、貴女なら分かると思うが

今の俺にとっての大切な一はこいつらだ

なのはだ、ユーノだ、アルフだ、フェイトだ

だから、ついて行くことはできないな」

「そう、それは本当に残念だわ

一つだけ教えてちょうだい

あなたの名前は？」

「石神の剣介だ」

「石神剣介ね

覚えておくわ」

「はーはっはっはっはっは」

こうして、俺とプレシア・テストロッサの会談は終わった

## 第二十一話

前回のあらすじ：アリシアの事を聞きました

SIDEなのは

今、プレシアさんがいるところに向かうための準備をしている  
でも、ちっともはかどらない

考えるのは、けん君の事

プレシアさんと話していた時のけん君は本当に嬉しそうだった

あれが、けん君の本当の姿なのかな

ああ、どうすればいいのか分からない

けん君を否定するべきなのだろうけど



私は守りたいって言われちゃったし

今までも守ってもらっている

どうすればいいのかな

私はけん君について行くべきなのかな

分からないよ

本当に分からない

でも、一つだけ

とにかく今の所はけん君について行こう

これまでもそうしてきたのだから

S I D E O U T

S I D E プレシア

いじめんねフェイト

でも、もう伝えるべき事は伝えた

あとは、気づいてくれるかどうか

あの様子では気づいてないだろう

でも、石神剣介とかいうのがいるから、そこまで心配はしていない  
同じような理想を持っているから分かる

彼は、最期の時までフェイトを守り続けてくれるだろう

どうか、お願い

神様

あの時にもう頼まないと決めただけど、一回くらい、いいわよね

あの子に祝福がありますように

そして、私とアリシアにも

SIDEOUT

俺は覚悟を決める

あれだけの事を言ったんだ

この戦いが最後だ

これが終わったら……

これ以上、迷惑をかけないように……

そういえば、フェイトは大丈夫かな

倒れた事じゃない

プレシア・テストロッサが伝えたかった事を分かっているかだ

医務室に着くと、アルフと、目の輝きを失ったフェイトがいた

「あんな……

……近づくな

あなたはフェイトに近づくな

それを無視して近づくと、行く手を遮られる

「そこをどいてくれ」

「嫌だね

あの鬼婆と同じような考え方を持っているあなたは、フェイトに近づくと資格なんてないよ」

はあ……あまりこの手は使いたくなかったが、仕方ない

「すまん、アルフ」

その瞬間、四方八方から飛んでくる鎖で、アルフを絡め捕る

「あっ、くそっ!!」

近づくな!!

それ以上フェイトに近づくな!!」

うるさい、少し黙ってる

口の中に布を入れて黙らす

縛って墮とすことも出来たが、アルフにも聞いてほしい話なので黙らすだけにする

胸が上下するだけで、他には何も意思をしめさないフェイト

「そのままでもいいから聞いてくれ

プレシア・テストロッサが言いたかったことはこつこつと事だと思っ

俺は、あの人と同じような考え方だから、よく分かるんだ

たぶんね

フェイトは、フェイトの人生を歩め」

それまで、何も反応を示さなかったフェイトの身体が、ピクリと跳ねる

「あの、大嫌いという言葉もそうだ

作り物の命はしょせん作り物？

そうかもしれない、だからこそ、私にはいらなから好きな道を行ってことだろう

アリシアとの違いだってそうだ

それに、本当は大好きなのだろう

そうでなければ、嫌いと言った時の、唇の震え、顔の歪み

説明がつかない

不器用だ、プレシア・テストロッサは本当に不器用だ

でも、フェイトに向けた愛情は本物だと俺は思う」

時間が止まる

それまで、ずっと唸っていたアルフも静かになる

これで、俺の伝えたい事は全部伝えた

もう、伝える事はない

「じゃあなフェイト

今からプレミアのところに行ってくるけどー

待ってるぞ」

そう言って、アルフを解放した後、扉を閉める

すぐに、転移ポートのところに行くと、なのはとユーノとクロノがいた

「君も行くのかい？」

石神剣介」

嫌そうなクロノの声

そりゃ、嫌だろう

自分の理想とおよそ正反対の理想を持っている人を好きになるのは難しい

「やめなさい、クロノ」

「「リンディさん(母さん)!!?」

そういえば、リンディさんも行くって言っていたな

「今すべき事を最優先しなさい

剣介さんにもついて行って貰います

任務はプレシア・テストロッサの……身柄確保」

一瞬戸惑ったのは何でだろう

部下を殺されているからかな？

とにかく行くか

最後の戦いに

転送ポートを抜けると、そこは城への入り口だった

玄関前には、15体ほどの機械兵

その一体一体がAクラスの敵らしい

こりゃ〜、盛り沢山だねえ

広範囲をなぎ倒せる武器でいくか、魔力を節約して地道にいくか

「ここは僕がいく、こんなところで立ち止まっている暇は……ないよ!!」

クロノのステインガー・スナイプからスナイプショットの連続攻撃  
凄いののは、速さ、威力はもちろんだが

何より、敵を殲滅するのにたった一つの魔力弾で足らしてしまう

その有用性にあつた

それは、鎌のように姿を変えて敵を切り刻んだ後、一本の槍のよう  
になって敵を貫いていく

だが、それが通用しない敵が一体だけいた

かき消えたのを見た瞬間、飛び出して行って敵の斧をかわして背中  
に着地

「ブレイクインパルス!!」

そして数秒止まった後に、微振動の攻撃で、内部から敵を破壊した

さすがは執務官

これらを朝飯前のようにこなしていく

なのはとユーノも目を丸くしている

「次に行くよ!!」



おっと、そうだった

突入しなきゃな

ようし、行こうかい

城に入ると、そこにも機械兵がウジャウジャいた

クロノがブレイズキャノンが打とつとするがそれを制す

「お前ばかりが魔力を消費しちゃダメだろ

ここは俺に……任せとけて」

取り出したのは斧

いつものバーサーカーのものではない

ハルバードと言われる種類の斧だ

リズがよく使っているものと同じタイプ

それを複製して頭上にセットする

そして、いつも通り落とす

だが、いつもと違うのはさらに高い所から落とし、錐揉み状に回転を加える事によって威力を倍増させる

かなりの敵を排除して、クロノの道を作る

「お前はプレシア・テストロッサの所に行くんだろ？」

なら、さっさと行け」

無然とした顔で、礼は言わないよと飛んでいった

その後、俺たちも道を切り開いて駆動炉に向かう

だが、道の先にはまたも機械兵の軍団

今度こそ、となのはが構えるが

またも、それを制す

「お前は封印のために魔力を残しとけて」

数には数だ

号令をかけるは大船団

あの『太陽の沈まぬ王国』を、歴史の盟主から引きずり落とした悪魔の船団

「さあ、ワイルドハントの……始まりだあ!!」

バビロンから出てきたのは無数の船と狼達

機械兵たちを食い尽くし、破壊し尽くす最強の船団

その名も、『黄金鹿と嵐の夜

ゴールデン・ワイルドハウンド

」

フランスス・ドレイクが指揮したと言われる船団は、余すことなく力を発揮し、打ち終わった時には全てが消え去っていた

「相変わらず、宝具ってのは凄いな」

無邪気なユーノの言葉だが、さすがにここまででは予想していなかったのでビックリだった

SIDEフェイト

私は何をしているんだろう

やっと心を通わすことが出来たって言うのに

ああ、そっか

私はいらない子なんだ



何度も何度も私の名前を呼んでくれて、私をフェイトとして扱ってくれた

脳裏に浮かんできたのは黒髪の男の子

出会いは最悪だったけど、私が怪我をしていた時に助けてくれた優しい人

そうだ、そんな人達が私を、アリシア・テストロッサの人形じゃない、フェイト・テストロッサを待ってるって言ってくれているんだ

そういう人がいる限り、私は人形じゃない

そうだ、私の……いや、私達の全ては、まだ何も始まっていない

だから、本当の自分を始めるために

行こう、バルディッシュ

これが、フェイト・テストロッサとしての第一歩だ

SIDEOUT

っか、数が多い

後から後から、まるで蠅のように湧いてくる機械兵を倒していく

広域宝具を使うことが出来ればいいのだが、残念ながら、さっきの一撃で城自体がダメージを負ったので、これ以上使うとまずいらしい

「なあにこんな相手に苦戦してんの!!」

近くにいた機械兵を切りつけていたら、アルフがやってきた

これで少しは楽になる

次の獲物に向かって飛び込んでゆく

切って切って、切り倒す

今度はユーノの鎖が千切れた

ユーノは、得意のバインドでかなりの量の敵を止めていたので

一気に敵が放出される

その大半がユーノに襲いかかっていく

くそっ、間に合わない

何本もの剣を射出させるが、それよりも機械兵のほつが早い

アルフとなのはは遠くにいるし……詰みなのかよ、畜生

「サンダーレイジ!!」

降りかかったのは雷撃

舞い降りてくるのは金の姫

遅かったじゃねえか

てか、登場がはで過ぎるんだよ

「フエイト(ちゃん)!!」

そのまま大量の機械兵を一気に排除する

だが、驚異はまだ去っていない

壁を突き破って、大型の機械兵がでてきた

「こりゃ、でけえな」

「そうだね……」

「あれはバリアがある……でも二人なら」

そっか、仲間と認めてくれたんだな

なら、俺がやることと言えば、倒すことが出来る二人の手助けをする……じゃねえか

「よっしゃ、俺があいつの攻撃を防ぐ

その間によろしく頼む」

取り出したるは7枚の花弁

英雄ヘクトールの槍を防いだ唯一無二の盾

『熾天覆う

ロー

』

機械兵は、背中についている大型の砲台にチャージをするが

この程度、問題ではない

こんなものに負けるほど、宝具は脆弱なものではないのだから

「サンダー……」

「デイバイーン……」

七色に輝く光が迫る

高火力だけど、負ける気がしない

『七つの円環

アイアス

』

轟音がして、弾け飛ぶんじやないかというほどの衝撃がくる



でも、弾け飛ぶなんてありえない

だってすぐに衝撃なんてなくなるんだから

「バスター!!」

強大な魔力の奔流が機械兵を貫く

爆発音がして消え去った

「お帰り、フェイト」

待っていたかいたが あったよ

そう伝えると

意思を持った瞳で頷いてくれた

その後、フェイトとアルフはプレシア・テストロッサの所に行くというので、そちらについて行くことにする

「じゃあユーノ、なのはを頼むぞ

なのはも頑張れよ」

「うん、ケンもフェイト達をよろしくね」

「けん君、ありがとね」

そう言って別れた

SIDEなのは

初めての……うっん、二回目かな

けん君がいない戦い

あの時と違うのは

私が強くなったことと

ユーノ君がいること

どんなときでも私達の背中を守ってくれた、けん君と同じくらい大事な人

ユーノ君がいるから私もけん君も安心して戦えたんだ

ここまで来れたんだ

こんな私でも出来る事が見つかったんだ

やりたい事が見つかったんだ

エレベーターを降りると、大量の機械兵

でも、これまでクロノ君が、けん君が魔力消費を抑えてくれたんだ

だからいつも通り全力全開で戦うだけ

「レイジングハート」

【Yes my master】

「デイベインシューター!!」

ここは任せて、駆動炉は絶対に封印してみせるから

SIDEOUT

長い廊下を駆け抜けている

ムチャクチャ長いな

まだ先が見えないぞ

「ねえ、ケンスケ」

フェイトの呼びかけに振り返る

「あの、ありがとね

あの言葉が、私をフェイト・テストロッサにしてくれたんだよ」

そんなこと感謝されるほどでもないのにな

俺はただ、プレシア・テストロッサが伝えたかっただろうことを伝えただけだ

まあでも、感謝されて悪い気はしないな

それつきり、誰もしゃべらない

最後の戦いが近いことが肌で感じられるようになったのだろう

長い廊下を抜けると、でかい広場のような所にでた

その端には、アリシアが入ったポッドとともにプレシア・テストロッサがいた

そして、頭から血を流したクロノもいた

そこに降り立つ俺とフェイトとアルフ

フェイトに行けと促すと前に出た

「今更、何のようかしらフェイト」

威圧するような視線でフェイトを睨むプレシア

その視線にもまったく怯まず近づいていくフェイト

「あなたに、言いたいことがあって来ました」

初めてのフェイト自身の言葉

「私は

私はアリシア・テストロッサではありません

あなたが造った、ただの人形かも知れませんが

だけど私は、

フェイト・テストロッサは

あなたに生み出してもらって

育てて貰った、あなたの娘です

あなたが、まだ私を娘と思ってくれるのなら

世界中の誰からも

どんな出来事からも

あなたを守る

私が、あなたの娘だからじゃない

あなたが、私の母さんだから」

そう言って手を伸ばす

これが、フェイトの気持ち

それをどう受け止めるのか

「ふ、ふふふ、あーっはっはっは!! 娘ですって? 思い上がるのもいい加減にしなさい人形が!!」

伸ばした手がだらしなく落ちる

やはり駄目か

説得は出来ないのか

《皆、大変だよ!!

リンディ艦長がジュエルシードを抑えてくれているけど、あと10分が限度だって

だから早く逃げて!!》

あと、10分か

なら、少しくらい話是可以るな

まあ、もし時間になっても手はあるが

「クロノ、フェイト達を連れて逃げる

あとは俺の出番だ」

ふざけるなと返される

ここで最後まで残るのは執務官だと叫ぶクロノ

しょうがないか

俺は、バビロンからリズと一枚の赤い布を取り出す

それをクロノに投げつけて

「我に触れぬ

ノリ・メ・タンゲレ

」

その瞬間、赤い布は本来の力を発揮してクロノを縛る

離せ!!

って言ってるけど、構うわけがない

そして、リズに三人を連れて行って貰おうとするが

「私は残らせて」

フェイトか、どうしようか……

もしかしたら酷な所を見せるかもしれないけど

「わかった

リズ、二人をよろしく」

わかったと言って、暴れるアルフとつるさいクロノを担いで走って  
いった

さて……

「……プレシア・テストロッサ

最後にもう一度聞く

フェイトの母親になる気はないのか？」

「くだらないと言ったでしょう

あなたなら分かるはずよ

石神剣介」

「ああ、わかる



だが、アリシアを助けられるとしてもか？」

これは、一種の賭けだ

遠坂の宝石を持っているので、もし管理局に宝石魔術の使い手が  
いれば、俺自身の魔力とあわせて一瞬だけ息を吹き返させる事ができる  
……かもしれない

その瞬間に『全て遠き理想郷

アヴァロン

』を埋め込めばあるいは

「それでも……よ」

【私を殺しなさい】

な!?

思わず息が詰まる

【私がいてはフェイトが私に依存する

それはフェイトのためにならない……だからお願い】

【俺を人殺しにしてもか？】

【ええそうよ

あなたは、私を殺してフェイトを解放させる道具

分かるでしょ？】

思わず笑みがこぼれる

そうか……そこまで考えているのならば

ここで助けるのはかえって迷惑

俺は、ケルト神話に出てくる

アイルランドの光の御子が使っていた槍を取り出す

「分かった

最後に、何か言うことはあるか？」

「何やってるの!？」

やめてよケンスケ!!」

俺は、セラを出して、フェイトを捕まえているように言うておく

「……何も言う事なんて無いわ」

【フェイトを頼むわね

あの子は強い子だけど脆いから……】

「了解した

『刺し穿つ

ゲイ

『「「やめるー……!!」」

【じゃあねフエイト……愛しているわ】

『死棘の槍

ボルク

!!  
『』

「母キーーん!!」

因果をねじ曲げる槍は、寸分変わらずプレシア・テストロッサの心臓に命中して、千の棘を生やして……絶命させた

## 第二十二話

前回のあらすじ：プレシア・テストロッサを殺しました

「ただいま戻りました」

右脇にフェイト、左脇にプレシア・テストロッサの遺体を抱えて  
アースラに戻った

それから、とりあえず返り血で真っ赤になった身体をシャワーで洗  
い流して

その後、クロノを強引に連れ戻した事をちょっと怒られて、プレシ  
ア・テストロッサを殺した時の事を聞かれた

クロノは苦虫を噛み潰したような顔をして、リンディさんも複雑な  
顔をしている

「あの時、捕縛できる位置にいたのに、なぜ殺したのですか？」

やっぱり聞かれたか

でも、あのプレシアとの話を誰かに口外するつもりはまったくくない

「俺の独断です」

どんな罰でも甘んじて受けますので」

いや、そういうことではないらしい

というか、上層部のほうから殺傷許可が出ていたらしく

俺を責めることは出来なく

むしろ表彰されるべき事らしい

リンディさんは、ただ、なぜプレシアを殺したのかを俺に問いたい  
みたいだ

絶対に言わないけどな

フェイトは、今は霊安室にいるらしい

怨まれているだろうな

いくら目の前で拒絶されても

大好きだった母親を、俺がこの手で殺したんだ

なのはも部屋にいて、今は休んでいるらしい

でも、俺がプレシア・テストロッサを殺した事は相当ショックだったみたいだ

まあ、艦に帰ってきたときの出迎えに、なのはもいたからな

顔は真っ青になっていたけど

「ありがとうございます……」ぐいきました

剣介さんは部屋に戻っていてください」

こうして解放されたけど、部屋でくつろぐ気分ではない

かといって、特にやることがあるわけでもないので食堂でボーっとしているとクロノがやってきた

「ちょっと話をしないかい

執務官という立場じゃなく、クロノ・ハラウンという人間で話をしたいんだ」

特に断る理由もないので

いいよ

と返事をする、対面にクロノが座った

「なぜ、プレシア・テストロッサを殺したんだ？」

そっくると思っていたよ

「ここでプレシア・テストロッサとの念話の事は話したくない

だから少し真実の嘘をつく

「理由……か、簡単なことだ

俺の大事な一であるのはやフェイトを殺そうとした

それ以外に理由があるか？」

それも一つの理由ではある

「ならば、その大事な一であるフェイトにとっての大事な一を殺したんだぞ

だから今フェイトは悲しんでいる

それは君の理想に反しているんじゃないのか？」

やっかいだな

そつくと何も言えなくなる

論点をずらしてみるか

それも、クロノには答えづらい方向に

「じゃあクロノ、一つ質問だ

「ここでプレシア・テストロッサを捕縛したことは、君の理想に反し

はしないのか？」

「ちっきの質問の答えはどうした？」

と言いたところだけど、まあいいか

なぜ反することになるんだ？

僕の理想は困っている人を全員助けるだよ」

そう、『全員』というところに問題がある

「もう一つ質問だ

これだけのことをしたプレシア・テストロッサは捕まえられたら後、死罪になるのか？」

これは前にリンディさんに聞いたことだが、殺傷許可にされている人物でも、捕まえることができれば更生を第一にするから、基本的に管理局法の中に死罪はないらしい

だからクロノも違うと答えた

それが問題なんだ

「なら、プレシア・テストロッサに殺された人物の親族はどうなるんだ

親族だけじゃない、友達、彼女、彼氏

皆どう思うだろうな



殺してほしいと願うんじゃないのか？」

ハツとした顔になった

クロノはそこを考えていない

「プレシア・テストアロッサに殺された人が何人いる？」

その人数分、不幸に陥るんだぞ

捕まったプレシアを殺そうとする人が出てくるかも知れないな」

「それなら……それなら、その人達にも幸せになってもらえる何かを考える」

甘いな

サトウキビより甘い

「いい加減理解しろクロノ・ハラオウン

その人たちを幸せにする何かには、確実にその人数分＋で不幸になる人がいるんだ

そのようなイタチごっこに何の意味がある

結局かなわない夢のために年月を使い減らす、無駄な人生になるぞ」

そんな人生、端から見ていたら空しすぎる

だから俺は、それならせめて一を守りきり、他なんかどうでもいいという考え方にしたんだ

「なら……プレシアを殺したのは正解だったって言いたいのか君は」  
バカやろう

そんなもの不正解に決まってる

「そんなものダメに決まってるだろ

殺してのは言い訳の聞かない最悪手だと思っている

だが、俺はそれがフェイトにとって、よりベターだと思ったからやっただ」

「じゃあこの結果はフェイトのために、いや、フェイトが望んだと思っただけだって言っただな」

「それは違う」

「この結果をフェイトのせいにするつもりはない

これはあくまで俺が独断でやった事だ

プレシア・テストロッサを殺したのは俺のエゴだ

おせっかいだ

俺はこんなにも最悪なやつだったんだよ

分かったか『なのは』」

SIDEなのは

………怖い

けん君が怖い

でも、嫌いな訳ではない

私はけん君のことが好きだし、今回のことも納得できた

ちょっと食堂で飲み物でも飲もう

そう思って食堂に行くと、クロノ君とけん君がいた

自分では隠れたつもりだったんだけど、けん君に見つかっちゃった

なんて言葉を返せばいいのかな

プレシアさんを殺したことを責めるべきなのかな

私がいるよって支えてあげればいいのかな

どっちも違う気がする

必然的に返事も詰まっちゃった

「軽蔑せざるをえないよな

フエイトを殺そうとして

勝手に助けて

今度は母親を殺して悲しみを負わせている

こんなやつ軽蔑されて当然だ」

違う、違うよけん君

そんな悲しい事を言わないで

「俺は……日常には戻らないほうがいいのかもしいかな」

なんでよ

けん君だって頑張ったんだよ

お願いだからそんなこと言わないでよ

どうして、この口からは言葉が出てこないの

何も言えない自分が悔しくて、情けなくて、私は食堂から逃げ出した

SIDE OUT

やっぱりこうなっちゃうんだよな

人の命を奪うってのは重いものだ

それでも殺した

それは後悔も反省もしていない

ただ痛いだけ

表面上は、冷静さを保っているようなふりが出来るほど歪んでいる  
俺が気持ち悪くて痛いだけ

なのはが走り去って、クロノも気まずそうに帰っていった

一人の食堂で冷たいジュースを飲む

美味しいけど美味しくない

部屋に帰っても……何も無い

どんなに責められるか分からないけど、フェイトのところに行ってみるか

霊安室で、一人フェイトが座っていた

ベッドの上に寝ているのはプレシア・テストロッサ

まるで生きているかのように穏やかで

だけど青白い顔と、上下しない胸が、もう立ち上がることはないということを教えてくれる

フェイトの横に立って、祈りを捧げる

同じ思考を持つ同士に

また、プレシアの最期の言葉を聞いたものとして

「……………どうしたのケンスケ」

意外なほど静かな声

横を見てみると、泣きはらして真っ赤に腫れ上がった目をしている  
フェイト

「俺を……責めないのか」

酷な質問をしてみる

簡単に考えれば、俺は母親を殺したクソやるうだ

どれだけ責められても文句は言えないし、言うつもりもない

「あれから、何度も考えてみたんだ

母さんが言った言葉と、ケンスケが伝えてくれた言葉をね

でね……それでね」

ガバツと、腰にフェイトが抱きついてきた

「ケンスケの事を許したくない

母さんを殺したんだから

でも、今までの優しいケンスケを知っているから

助けてくれたケンスケを知っているから

憎むことが出来ないんだよ

どっすねばいいの？」

私はどうすればいいのかな

答えてよケンスケ!!

ヒグツ、ウワァァァン」

腰に抱きついたまま泣くフェイトのぬくもりを感じながら

何も答える事が出来なかった

守ることと不幸にすることが違うことだとは分かってるけど、それでも辛い

謝るつもりはない

自分の罪を認めて、それを背負っていくこと

それが一番の反省だと思っているし

謝ったらプレシアに失礼だから

ただただ、泣き声だけを聞いていた

それから三日後、俺となのはは地球に帰ってきた

「」  
「ただいま」

皆、出迎えてくれて



久しぶりに桃子さんの料理を食べて、アリサとすずかと電話で話して

そんな最後の一時を楽しんで、楽しんで、楽しんで、慈しんだ

俺がいたら、なのはの邪魔になる

リンディさんに言えば管理局に入れてくれるだろう

これでお別れだな

「おやすみなさい、けん君」

「ああ、おやすみなのは

そして、さようなら

朝、いつもより早い4時起床

必要な物はバビロンにいれたから、後は出るだけ

玄関を開ける

これまで……ありがとうございます

本当に、本当に嬉しかったです

そうして道にでると、土郎さんがいた

「こんな朝早くからどうしたんだい？」

……ハア

なんでバレたんだろうな

あんなにも冷静にすごしていたんだけれどな

「なんで分かったんですか？」

俺が出て行くなって

士郎さんがにこりと頷いた

「昨日の夜に、なのはから聞いたんだ

人を殺したらしいね」

「……はい」

「人殺しをした理由は聞かないでおこうか

なぜ、この家を去ろうとしているんだい？」

「俺がいることで、石神剣介という人殺しがいることで、この家に迷惑がかかると思ったからです」

バキッ!!

……殴られた

錆びた鉄の味が口に広がっていく

「迷惑がかかる……だと？」

別に逃げることは構わない

だが、君がここから逃げる理由に私達を使うな!!」

逃げるなんて言っていない

俺はただ皆のことを思って……

「それが逃げてると言っただよ

たかが人一人殺したくらいで、胸を張って生きることが出来なくなるような弟子を持った覚えはない

それに、けん君は知らないかもしれないけど、私も、人を殺した経験は何度もある」

そう……なんだ

まあ、少し考えれば分かることだけど

どう考えても、御神流は実践を主とした流派

そして土郎さんは、その師範代並の使い手

本当に一度や二度ではないのだろう

でも、だからといって俺がここにいる理由には――

「なるよ

けん君がここにいる理由ならある

けん君よりも汚れた手をした私達だって、平凡な生活を送ることができてるんだ

重要なのは本人の意思だ

私は、けん君と一緒に暮らしたい」

そう言って、右手を伸ばした

剣術家らしい、大きく、ゴツゴツとした無骨な手

しばし悩む

本当にこの手をとっていいのかと

あんなことをしながらも、平凡な生活を送っていいのかを

そうして

「よろしく………お願いします」

俺は土郎さんの手をとった

暖かく、大きな手を

## 第二十三話

前回のあらすじ…まだ、なのはの家にいます

あれから数日

朝っぱらから、クロノが電話をしてきた

A M 6 時 3 0 分

なのはに繋がらないので、俺にかけたみたいだけど、当たり前だ

こんな時間は、普通寝ている

「で……どっつしたんだ？」

フェイトの件か？」

エイミィさんに密かに聞いたのだが、アースラで別れてから、クロ

ノはずっとフェイトが有利になる証拠集めに奔走していたらしい

本来なら数百年の次元幽閉の罪に問われるところ

状況が特殊で、フェイト自身、望んで犯罪に荷担してないことも明らか（明らかなのか？）

なので、クロノが時空管理局のお偉いさん方を納得させられるだけの証拠を集める事が出来れば無罪にすることも出来る、らしい

そして、結果はー

「間違いなく無罪になるだろつた」

さすがは次元航空艦アースラの切り札

どれだけの時間と人、お金を使ってくれたのか分からないけど、とにかく頑張ってくれた

それに対して、感謝と労いの言葉を投げかける

最近分かったことだが、俺とクロノは友達という真柄、ましては親友なんぞには絶対になれないみたいだ

だから、あくまで俺やなのには対する情報供給者という立場になっている

なぜ基本的に俺が受けてるかって？

なのはより状況判断力があるからだ

「それで、フェイトは本局に移動して事情聴取と裁判があるんだが」

なんでも、この事情聴取と裁判が長いものなので、フェイトにはしばらく会えなくなるらしい

それで、フェイト自身の希望により

俺となのはに会う時間を作ってくれるとつのだ

時間はそんなにはないみたいだが、その心遣いがとても嬉しい

「ありがとな、クロノ」

さっそく今から向かうよ

それだけいって電話を切る

【なのは……起きろ〜

なのは……なのは!!】

起きる気配がない

しょうがないから無断で部屋にはいると、なのはの姿はなく

代わりに山みたいに盛り上がった布団があった

俺は、布団の端を持って

「おはよう、なのは!!」



一気に引っ剥がした

「うっむ……けん……君？ けん君!？」

「じゃああああああああああああああああ!!」

うおお、うるっせえ

そして、ベッドの隅に逃げ出した

「まあまあ落ち着けなのは

さっきクロノから電話があつたんだ」

真っ赤になって涙目のなのはに伝えると

どんと顔が輝いていって

「早く行こう!! けん君!!」

と言って着替え始めー

「じゃああ!!」

けん君のエッチ!!」

おっと、すっかり忘れてたよ

そうして、10分後

俺となのはは家を出た

## 海鳴公園

文字通り、海の声が聞こえる公園で、夕日が美しい、カップルにもお勧めというか人気のスポットである

そんな人気の場所にもかかわらず、朝だからなのか、人はほとんどいない

いるのは、赤髪の女性に、黒い服を着た黒髪の少年、同じく黒い服で金髪の少女だった

「フェイトちゃん!!」

その三人を見つめるやいなや走っていくのは

あ、ころんだ

それを見たフェイトも走ってきて、俺と一緒になのは起こす

「大丈夫

か

「？」

「うう〜

と、うなり声をあげながら身体を起こしたのはのおでこはちょっと赤くなっていた

「久しぶり……にはちょっと早いかな、フェイト」

「そうだね、二人とも」

クロノとアルフ、それにユーノは向い側のベンチで座って待っているみたいだ

潮風に、春風が混じってとても気持ちがいい

「で、なんで俺となのはに会いに来てくれたんだ？」

なのはは分かるが、俺に会いたい理由が分からない

「今日は、二人に言いたいことがあるんだ

まずは、ケンスケ

出会いは最悪だったよね

敵同士ってだけじゃなくて、生き死にの争いまでした」

そつえばそうだったな

俺が初めて自分の歪みを見つけた日

それはフェイトがいなければ見つけれなかったと思う

「そして、互いにより知り合うようになってから、あなたの中の優しさに触れた

私を癒してくれた暖かい温もりは忘れない」

まあ、美味しくはなかったらうけどな

俺の血だし

「でも、あくまでも私達は敵同士

競い合って、奪い合って

そして、最後には悲しい結果が待っていた」

俺が一生涯背負っていくべき業

プレシアの意思はフェイトに伝わっただろうか

このフェイトを守ることが、俺に伝えられたプレシアの意思

「あれから、考えて、泣いて、考えて、泣いて、考えて、を繰り返した

時間はたくさんあったから

ケンスケが教えてくれた、母さんの意思

ケンスケが示した行為の意味

そして、新しい私、フェイト・テスタロッサとして生きていくために  
どうすればいいのか

ずっと考えた」

あれから日にちにしていって一週間程度、時間にして168時間

フェイトはずっと考えていてくれていたのか

「そうして、一応の答えは出した

やっぱり、ケンスケのした事を許すことは絶対にできない

でも、私は、ケンスケ達と一緒に歩んでいきたい

辛いことも、楽しいことも、全部ケンスケ達と分け合いたい、だから、

私と、友達になってください」

俺の、いや、プレシアの伝えたい事がわかってくれて嬉しい

友達になってくださいだって？

なるに決まってるじゃねえか

「あ、あ、あのね」「何だ？」

いきなりどうしたんだフェイト

「その、彼女とも話したいんだ」

そういうことなら、全然いいけど

そして、フェイトはなのとはとも語り始めた

「じゃはは、いっぱい話すこと考えてきたんだけどな……」

「私は……そうだね、私も上手く言葉に出来ない」

「二人とも、それでも通じ合っているように見える」

「私はとても嬉しかった。なのはがずっと向かってきてくれて」

「そうだよな、なのはほどまっすぐに向かってきてくれた子はいなかったんだろう」

「私は友達になりたかったただだから……これから遠くに行くんだよね」

「待っているのは、無罪という結果が見えてるだけに辛い旅路」

「そうだね、少し長くなるかな」

「また会えるんだよね」

その言葉に深くうなづくフェイト

「少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから」

来て貰ったのは、返事をするため

友達になりたいっていう言葉への返事

すごく嬉しかった

私に出来るなら、私でいいならって

だから、ケンスケとも、君とも友達になりたいんだ

だけど私、どうしていいのかわからない

だから、教えてほしいんだ

どうしたら友達になれるのか

そんなの

「簡単なことだ(よ)」「

俺となのはの声がハモった

「そんなの簡単なことだ」

「友達になるの、すごく簡単なんだよ」

「それはな」

「名前を呼んで」

「はじめは、それだけでいいの」

「君とかあなたとか、お前とか、そんなんじゃないなくて、相手の目を見て、名前を呼ぶんだ」

「私、高町なのは、なのはだよ」

「俺は、石神剣介、ケンスケでって、いつも呼んでるから俺のはいいか」

「なのは」「うん、そう!!」

なのは……なのは

ありがとうなのは

感極まったのが、なのはは、泣いてフェイトの胸に抱きついた

それを優しく受け止めるフェイト

「俺からも、さっきの返事だよ」フェイト

そういつて、微笑んだ

「時間だ、そろそろ行こう」

もう、そんな時間が、早いもんだな

「フェイトちゃん!!」

そう叫ぶと、自分の髪を結んでいた桃色のリボンを差し出した

「今あげられるもの、こんなものしかないけど」

「じゃあ、私も」

そういつて、黒いリボンをほどいた

「ありがとう、なのは、ケンスケ」



「うん、フェイトちゃん」

「ああ、フェイト」

「じゃあ、きつとまた」

「うん、きつとまた」

そういって、光の中に帰っていった

手を振りながら、笑いながら

「いっちゃったね」

「そうだな……俺たちも帰ろう」

今いるべき場所へ」

「うん!!」

## キャラ設定

名前：石神剣介  
いしがみけんすけ

### 『転生前設定』

家族構成：父・母・妹（華音）

容姿：黒髪・黒目 かつこよくも悪くもない普通の顔立ち

### 『転生後設定』

家族構成：なし・居候として、高町一家withユーノ

容姿：黒髪・琥珀目 まんま空の軌跡のヨシユアなので、かつこい  
い

特技：スポーツ全般、特に弓道

性格：基本的に冷静でギャグも言える

だが、自分の理想である『大切な一を守る』というものを侵されると、侵され具合と優先順位によるが、凶暴化する

凶暴化すると、相手を殺そうとすることさえある

剣介の理想、『大切な一を守る』とは

剣介が勝手に決めた、守りたい人たちを守ること

守ることと幸せにすることは違うので、結果的に、不幸にすることもある

他の九に関しては、生きようが死のうがどうでもよい

能力：

大天使に転生記念として贈られたのは

一つ目、Fateシリーズに出てきた宝具と道具の譲渡

二つ目、身体能力と五感の大幅な強化

三つ目、オリジナル宝具『天地統一

エインヘルトワールド

↳

四つ目、条件を満たせば勝手に使用可能になる

なのは風に表すと、総合A+（レアスキル持ち）

FATE風に表すと

筋力B、耐久A、敏捷B、魔力EX、幸運A、宝具E）A++

保有スキル

・直感（偽）C

強化された五感で、相手を見る能力

嘘を見抜く程度でしか使えない

・心眼（真）E

修行や、鍛錬で得た洞察力と戦闘論理

まだ、剣術を始めて一年なので、これくらい

・戦闘続行B

大きな傷を負っても戦闘が可能

致命傷でも、短時間なら動くことが出来る

・魔術D

『癒』と『偽』の魔術を修行中

ものになれば、エミヤの『剣』には及ばないが、かなり強くなる

・騎乗（竜） A

竜種を乗りこなすことが出来る

このクラスになると、神竜クラスも騎乗可能

・金羊の皮

金羊の皮を所持している

宝具

・『王の財宝

ゲート・オブ・バビロン

↳

ランク E〜A++

種別 対人宝具

レンジ ー

大天使から貰った

擬似黄金の京へと繋がる

本家は鍵状の剣だが、こちらでは言葉で開く

FATEシリーズに出てくる、全ての宝具と道具が入っているの  
で、乖離剣エアから、焼き芋まで入っている

冷凍も保温も可能なので、そこの、百人乗っても大丈夫な物より  
も使える

・『天地統一

エインヘルト・ワールド

↳

ランク B+

種別 対人宝具

レンジー

最大補足 ひとり

大天使から与えられた宝具

まるで、平地を歩くように、階段を昇るように、坂道を駆け上がるように、空を自在に動ける概念宝具

## 第二十四話

AM 6時35分

「おっし、今朝の仕上げ、シュートコントロールやるつか」

今日は、朝からなのはの練習につきあっている

最近のなのはは、少しオーバーワーク気味だから、止めて欲しいとレイジングハートに言われたので見ているのだが……確かに朝にしては飛ばしすぎだ

練習メニューは俺とレイジングハートで決めた、身体に負担をかけるレベルでの限界メニューだ

だから、それに加えた自主練をされると、身体に負担がかかる

その負担を取り除くために睡眠をすればいいのだが、なのはは真面目だから学校で寝ることはほとんど無い

だからどんどんと疲労が溜まっていく

今朝も、練習メニューの1.5倍くらいやるつもりから止めた

[one hundred]

空き缶を地面に落とさないように、誘導弾をコントロールするだけの練習だが、なかなか難しいようで、最初のうちは十回もできていなかった

「ラスト!!」

掛け声とともに誘導弾が動いて、空き缶をゴミ箱に向けて放つのは

ゴミ箱の枠にあたって地面に落ちるところを、バビロンから射出したナイフでなのはと同じように落とさないようにしてゴミ箱に入れた

「やっぱり、けん君は凄いな」

私はあんなに綺麗に入らないもん」

感嘆したように話す、なのはだって惜しかったじゃないか

「さっきも言ったように、疲れてるから入らないんだよ  
分かったら、激しい自主練はやるなよ」

まあ、このミスも疲れのせいにするけどね

そんな感じで練習終了了っつと

さっさと帰って、朝ご飯食べよう

朝ご飯の準備をしていると、恭也さんがリビングにきた

手には小さな小包を持っている

あの大きさなら、俺達の物かな？

「なのは、郵便が来てるぞ、フェイトちゃんだ」

やっぱりか

あの事件の後から、フェイトとはビデオメールで話をするようになった

ユーノがアースラに戻ってからは、俺達にとって魔法世界を思い出させてくれる物の一つだ

そう言えば、フェイトの裁判がそろそろ終わるらしい

最初の予想通り、判決無罪、数年間の保護観察に落ち着くことが濃厚らしい

そうなれば、地球に遊びに来ることも可能だから、楽しみだ

あとで、アリサやすずかと一緒にビデオを見よう



夜

俺はなのはの部屋にいた

特に理由はなく、ただおしゃべりしているだけ

[continuation]

警告!?

どういう事だ？ 今、地球にいる人で俺となのはのを知っている人はいないはず

だが、こうしてレイジングハートが警告している以上、何かしらの危険が迫っていることは確かなのだろう

ここで待ちかまえても戦いづらいため、近くのビルの屋上にも移動しよう

「で、何か心当たりはある？」

ちよっと離れた位置にあるビルの屋上まで移動してきた

「あるわけないよ」

そうだよな、俺もない

あれから誰にも魔法の事は知られていない

ということとは、相手は偶々俺達を選んだという事なのだろうか

さて、そろそろ来るな

最初の攻撃は高速で飛来する鉄の球

バビロンから黒白の双剣を取り出して受け止める

「グウ………!？」

一撃がかなり重い

最初の選択をミスったかな

あそこで受け止めずにそらしておけばよかったのだが、今はそんなこと考えている余裕はない

だが、手間取っている間に本体が到着した

「デートリヒ・シュラーケ!!」

「けん君!?!」

相手の攻撃をなのはがシールドで防いでくれるが、徐々にヒビが入っていく

「おおおお!!」

何とか鉄の球を押し返して、なのはを襲う赤い服の少女の後ろに回る

狙うは首

このままならいける

「せやあああ!!」

もし、あと数瞬なのはが持ちこたえていたら、少女は首無し死体になっただろう

だが、俺の刃があたる、ほんの数瞬前なのはのシールドが破られた

その勢いで少女の身体全体が前のめりになる

それによって、刃は首の皮一枚を斬ることしかできなかった

なのはがビルから落ちていくが、レイジングハートを起動すればいいだけなので心配はない

今は、この少女を捕まえるほうが先だ

そう判断して、相手の脚や腕の腱を斬ろうとするが、相手も重いハンマーを巧みに操って防いでくる

【けん君避けて!!】

なのはからの念話が入ると同時に桃色の砲撃が迫ってきた

あの馬鹿やろうがー

俺の持っている双剣に魔力を大量にぶち込んで、大きくする

【お前は俺を殺す気か!!】

俺はなんとか防いだが、幼女のほうは直撃こそしなかったものの、被っていた帽子ごと吹き飛ばされたようだ

だが、その帽子によほど思い入れがあったのか、すぐに立ち上がった憤怒の形相でこっちを見てくる

「許せねえっ!! グラフファイゼン、カートリッジロード!!」

掛け声とともに、ハンマーから、まるで散弾銃の薬莖を取り除くように丸い物が飛び出ていく

そして、いいなりハンマーのフォームが変わった

ハンマーの先に尖った槍のようなものがついた

「ラケーテン……」

しかも、後ろはジェット噴射装置だ?!

その場でくるくる回り始めて遠心力をつけた後、なのはに向かって

飛び出した

その時、この幼女の近くにいたのは俺

だから、俺に攻撃がくると思って、その準備をしていたので完全に遅れた

なのはも、ギリギリのところまでシールドを張る

「ハンマー!!」

だが、普通の一撃すら防げなかったシールドが、明らかに強くなつた攻撃を防げるはずもない

すぐに突破されて、なのはに直撃する

ところで追いついた

「ガアアアアア!!」

元から虚をつかれた中での全力疾走

防ぐためにあるものは自分の身体のみ

左腕はなのはをしつかりと抱きしめていたが、右腕は犠牲にした

肩の、骨が碎かれる感触がする

筋繊維が削ぎ落とされていく

完全に腕一本なくなる前に吹き飛ばされた

たぶん、これが普通の人間だったら、とっくの昔に腕が無くなって  
いるだろうし、意識も飛んでいる

だが、サーヴァント並みの耐久力があるから俺は助かった

激痛は走るけど、頭の中は冷静

近づいてくる窓ガラスになのはの身体をぶつけてはいけないので、  
なのはを抱きしめている左腕を強引に回して体制をかえる

そして、窓ガラスにぶつかり、床を滑って壁に激突した

もはや右腕の感覚はほとんどない

ここで時間があつたのなら、『全て遠き理想郷  
アヴァロン

』を取り出してすぐにでも治した

だが、あの少女はそんなことすらも許してはくれないらしく、すぐ  
に飛び込んできた

俺を庇うように、なのはが立つが、なのはだってかなりのダメージ  
を負っているし、勝ち目は薄い

「やめろ……いいから、お前は逃げろ」

嫌だ、と涙でいっぱいになった眼で返される

もう、こつなったら手段は選べない

ギリギリの賭だけど、これしかない

もう少し近づいていい、あと数歩

だが、それ以上近づくことはなかった

「ごめん、遅くなった」

俺の前に三つの人影

「……仲間か……」

一人は、なのはを庇うようにして、もう一人は金色の鎌を携えて幼女を牽制する

「友達だ」

そこには、俺たちの友達がいた

## 第二十五話

前回のあらすじ：フェイトが来てくれました

『治療変換

セラフィエ・カンバセーション

』

フェイトが来てくれたことで、ようやく安心して治療することが  
きる

相手の狙いは分からないけど、なのはと違ってフェイトは近・中距  
離主体

加えてアルフがいるのならば、10分くらいは持ちこたえることが  
できるだろう

なのはもユーノの治療を受けている



さて、戦況はどうだろう

千切れかけの腕を切断面にくっつけながら、外が見える位置まで歩

く  
そうして外を見ると、鎌で迫るフェイトがいた

あの幼女のほうが、確実にフェイトより強い

対するフェイトは、アルフとの巧みな連携で徐々に追いつめていっ  
ている

しかし、あの幼女、さっきの銃みたいなのはやらないのだろうか

あれを使えば、この場から逃げることもくらい簡単だと思うが

そうこうしているうちに、フェイトがバインドで幼女を捕まえた

これで勝ち確定だろう

しかし、じっくり見ると変な動きだったな

相手を倒すでもなければ捕まえるでもない

まるで、相手が意識を保ったまま、戦闘をできなくなるように戦っ

上手く言えないけどそんな感じ

生け捕りなら、気絶させればいいだけだし……!?

【避ける!! フェイト、アルフ!!】

視覚の範囲外から、いきなり筋肉質な男と騎士のような女が飛び出してきた

「ふっ!!」

女のほうで、剣の一撃でフェイトを押し戻して少女との間に立つ

「うおおおりゃあああ!!」

男のほうで、アルフを蹴り落とした

くそっ、まさか増援がいるとはな

宝具使用可能まであと3分

それまでにどれだけ耐えてくれるか……

「レヴァンティン、カートリッジロード」

「まただ、あの銃みたいな事をしたあとに、形態が変わって魔力も大幅に上昇する」

フェイトも、相手の炎を纏った攻撃を受けきれずにビルに落下する

「ユーノ、フェイトを助けにいつてやれ、あと2分したら俺も行く」

ユーノをフェイトのところに向かわせるが、厳しいだろう

現在、戦闘可能なのが、こちら三人、相手三人

しかも、こちらには攻撃タイプでないのが一人いる

なのはがいれば少しは変わるのだろうが、さっきの戦いでかなり消耗しているから、戦える状態ではない

俺の魔術では、なのはの傷は癒せても体力を戻すことは出来ない

「フェイトちゃん……」

心配そうにつぶやく、なのはの頭を撫でてやる

今、俺が出来ることは何一つない

ただ待つことしかできないのは悔しいが、今の俺はただの9歳の餓鬼

出て行ったところで相手にもされないだろう

あと、1分45秒

SIDEフェイト

強い

あの騎士の人、あんなデバイスは見たことがない、それにカートリッジとかいう物

あれを使わせれば、万が一にも勝ち目がなくなる

その前に決めないと……

バルディッシュで攻撃をするけれど、全部防がれる……何で、何で

早く決めないといけないのに、なのはをケンスケを安心させてあげないといけないのに

近距離で防がれるなら、中距離からしかければいい

「フォトンランサー」

いつもより、威力を重視したフォトンランサー、これで

「レヴァンティン、甲冑を」

「撃ち抜け、ファイア!!」

え………笑った?

なぜか、避けも防ぎもしようとしない

そのままフォトンランサーが命中する

「……嘘」

全弾命中したにも関わらず、あの人はダメージを受けていなかった  
「わるくない一撃だ、だが我らベルカの騎士を相手にするには……まだ足りん!!」

消えた!?

いや、目の前に出てきた

シールドを破られながらも何とか受けきるけど

「レヴァンティン、カートリッジローブ」

まずい、あの攻撃だ

「紫電一閃!!」

やられる!?

ギヤイイイイン

……あれ……衝撃がこない

「待たせたなフェイト、これでようやく役にたてる」

ああ、これで勝てる

ケンスケがいれば

SIDEOUT

「ケン……スケ」

危ない危ない、ギリギリ間に合った

もう少し遅れていたらフェイトはやられていたかもな

【アルフ、ユーノ、こっちに集まれ】

まずは戦力を集中させる

「一対一の勝負に介入するか、感心しないな」

なんか女剣士が言ってるけど気にしない

だって、俺は別に騎士なんかじゃないもん

どんな手を使おうが勝ちも勝ち

「そうか、ならば、「」で斬り捨てられても異論はないな……レヴァン  
ティン!!」

また、カートリッジかい

さっきの一閃を防いだ黄金の剣を構える

考えたのは、土郎さんの修行

まだ成功率は低い、だが、やってみる価値はある

女剣士が近づいてくる

「紫電……」

対して、俺が考えていたのは別のこと

今まで教わってきたことを思い返す

まだまだ、失敗ばかり、でも、成功すればアルフたちがくるまでの  
時間稼ぎになる

「一閃!!」

「ハア!!」

一際甲高い音がした

感触的には成功したが……大丈夫、成功だ

「貴様……何を」

腕をだらんと下げてこつちを睨む女剣士

「御神流、『徹』」

相手の内部に衝撃を伝える技

恭也さんは、せんべいを三枚重ねて、上から手刀をしたら、真ん中一枚だけのせんべいが割れていたってのを見せてくれたっけか

これで少しは動きを止めれた、後は二人を待つだけだ

「フェイト、大丈夫か？」

左腕を怪我している

でも、ここで魔術を使うわけにもいかないし

「大丈夫だよ、バルディッシュも無事だから、戦える」

そついうことを聞いているんじゃないけど、まあいいか

お、きたきた

右と左から、それぞれ赤と緑の魔力光が近づいてきている

「ケン」

ユーノの後ろからは幼女、アルフの後ろからは犬耳くっつけた兄ちゃんが近づいてきた



「シグナム!？」

二人とも、女剣士を見つけて近寄っていく

さて、作戦の説明だ

まあ、作戦といっても特にこれといって難しいことはない

フェイト、アルフ、ユーノで、女剣士を担当しながら結界の解除と転送を

俺が幼女と犬耳兄ちゃんを担当する

「そんな、それはケンが危ない」

そう思っなら、さっさと結界を壊すか、結界外に皆を転送してくれ

じゃあ、作戦結構だ

「てめえ、よくもシグナムを」

ほお、あの女剣士はシグナムっていうのか

「おい、赤髪幼女と犬耳兄ちゃん、名前を教えてはくれないか」

「うるせえ、誰がてめえなんか「ザフィーラだ」……ザフィーラ、わーったよ、あたしはヴィータだ」

「へえ、ヴィータにザフィーラか、俺は石神剣介

少し、遊んでくれよな!!」

俺とフェイト達との間に複製させた剣を展開させる

「ほお、我ら二人を相手に一人で勝てる」と

そんな大層な自信は持っていない

ただ単に、足止めくらいなら余裕ってことだ

「こつちとしても余裕はないからな……死ぬんじゃねえぞ」

剣の壁から、何本か発射させる

それを苦もなくよけるザフィーラと、ハンマーで叩き落とすヴィータ

そして、ザフィーラが一気に距離をつめて体術を仕掛けてきて、ヴィータが誘導弾を撃ち出してくる

士郎さんの修行のおかげで、この程度なら受けきれ

ヴィータの誘導弾も、受け止めずにそらして、後ろの剣で破壊すればいいから辛い

怖いのは、バインドだな

相手が二人なら、俺の隙をつくことくらい出来るだろう

いかにバインドをくぐり抜けるかが勝負だ

「せやああ…」

ヴィータがハンマー片手に特攻してきたので、それを下に避けると、申し合わせたようにザフィーラの蹴りがきたので受け止める

それを見たヴィータが、脳天を貫くようにハンマーを振り下ろしてきたので、空いているほうの手で横にそらす

これじゃあ、攻めることもできないな

一度、斧剣で弾き飛ばすか、干将・莫耶で両方とも受け止めるか、はたまた天の鎖で動きを止めるか、どうしよう

「グラーフアイゼン、カートリッジロード」

またか、だが、今度は負けない

万全の状態、護るべき仲間がいなければ、俺が負けるなどありえない

「ちあ、うごよ、うの盾を貫いてみる…」

その盾は七枚の花弁

一枚が古代の城壁にも匹敵すると言われている

「ラケーテン・ハンマー…」

『熾天舞う七つの円環

ロー・アイアス

』

轟音が鳴り響く

「ぶち抜けー!!」

さらに、勢いが……

だが、宝具はその真価を發揮した

二枚砕けただけで、ヴィータの必殺技（たぶん）とも言つべき技を止めた

「な、あたしのアイゼンが」

まさか、二枚も破壊されるとは思っていなかったが受けきったことでヴィータも動揺している

勝負をかけるなら、今だ!!

【今から、スターライトブレイカーで結界を壊すね】

なのは!?

大丈夫なのだろうか

【危ないよ、なのは】

ユーノが止めに入るが、大丈夫と言って聞かない

【やれるんだな、なのは】

どつせ、止めても聞かないだろうから、最後の確認をする

【うん、レイジングハートと一緒になら】

言っと思ったよ

【じゃあ、やってくれ】

【うん】

そして、カウントダウンが始まった

俺がやることは、ヴィータとザフィーラを近づけさせないこと

「邪魔だー!!」

突進してくるヴィータを受け止める

それを見たザフィーラが抜け出そうとするが、斧剣で壁を作ってそれを阻止する

[ 8、7、6 ]

あと少し止めれば

[ 3、2、1 ]

よし、これで……あれ？

「なのは!?!」

その切羽詰まった声に慌てて振り向くと、信じられない光景があっ

た

最初は理解出来なかった、だが、一度引っ込んで、また飛び出してきた物は理解しなければいけないかった

それは

手

だった

なのはの身体から生えている手

なん……で

いや、なんてとか考えている場合じゃない

さっさと助けにいかないと

そして駆け出そうとした瞬間、四肢が固定された

ミスった、これはバインドか……こんなことしてる場合じゃねえつてのに

しかも、三重だと

「あ……ああ」

その苦しそうな声を聞いた瞬間に、切れた

「おおおおお、邪魔を……するなあああ!!」

力任せにバインドを引きちぎる

「あああああ!!」

血が飛び散り、肉が千切れる

だが、それでも止まらない

「くそっ、くそっ……」

バキイン

外れた瞬間に飛び出していく

バビロンから取り出したのは、短鎗

『輝く貌』のディルムッド・オディナが持っていた槍

それは、不治の呪いを持っている呪いの槍

俺はそれを構えて

『必滅の黄薔薇

ゲイ・ボウ

』!!」

なのはの身体から生えている手を目掛けて、投げた

その腕は慌てて引いていったが、少し遅かったのか、微妙に指先を傷つけた

そして、腕が引いてすぐに、なのはのスターライトブレイカーが炸裂した

極光が、辺りを取り巻いていた結界を破壊した

「なのは!!」

俺が駆け寄ってすぐに、なのはは倒れた

「早く……早く医療班を回せ!!」

そうして、なのはは運ばれていった



## 第二十六話

前回のあらすじ…なのはが蒐集されました

SIDE シグナム

「ほな、お先にな」

「お休み」

主とヴィータが眠りについた

私も時間まで身体を休めようかと思ったが、まずはシャマルと話をした

「ねえ、シグナム、今日お風呂に入らなかったのって……」

ザフィーラといい、シャマルといい聡い

あの金髪の少女、テストロッサにつけられた、腹の傷がまだ癒えて

いないのだ

だが、だからといって戦闘に支障が出ることはない

私はヴォルケンリッターのリーダー『烈火の将』シグナムなのだから

「あの子達強かったわね」

テストロツサは、確かに強かった

パワーや耐久力はこちらの方が上だが、ことスピードに関しては私より速いだろう

あの一撃も澄んだ良い太刀筋だった、良い師に恵まれたのだろう、武器の差がなければ苦戦していたかもしれない

「シャマル、その傷はどうした？」

主には、少し包丁で切っただけと言っていたが、『風の癒し手』シャマルならば数分で治せる程度の傷が、中指の先にあった

「これは、あの男の子が投げってきた槍にかすっちゃったの、治癒魔法をかけても治らなくて……」

我らヴォルケンリッターは、元から治癒能力が備わっているが、それだけでなく治癒魔法をかけても治らないとは、あの黄色い槍の能力だろうか

戦闘に影響する傷でもないから大丈夫だとは思って

しかし、あの少年、石神剣介とやらの力には恐れ入る

あの歳で、私やヴィータを上回るパワーを見せ、一対一ならば負け知らずのベルカの騎士相手に一対二でそれを上回る動きをみせたのだから

弱点はある、彼は仲間を守ろうとしすぎる傾向があるから、そこを  
ついでにいけば良い

「そろそろ時間だ、シグナム」

ザフィーラに言われて時計を見ると、驚くほどの時間が経過していた

いつものビルの屋上に集合して、少し遅れてヴィータも来た

切り替えよう、我が主のために

「我らヴォルケンリッター、これより蒐集を開始する」

今、俺の前にはなのはの寝顔がある

あの戦いの後、気を失ったなのはは時空管理局本局で治療を受けている最中だ

治療と言っても、検査の結果、怪我は大したことないらしい

ただ、魔力の源であるリンカーコア（魔術回路みたいなもの）が異様なほど小さくなっているの、その治療と言っわけだ

なのはの顔が少し歪んだので、髪をそつと撫でてやると、落ち着いた顔に戻った

「失礼するよ、少し検査をするね」

優しそうなおじさんが入ってきた、この人が主治医だ

特に、退出しなければいけない訳ではないのだが、なんとなく外に出た

フェイトは怪我の治療で、クロノはその付き添い

エイミィさんとリンディさんは仕事なので、特に話し相手がないから飲み物売り場にも行くか

俺は、なのはを守れなかった

何がーを守るだ

その大切なーすらも守りきれなかった自分に腹が立つ

異様にムシヤクシャして、飲み物売り場の壁を蹴った

「じら!! その少年、公共物を蹴ってはダメだろう!!」

ヤベツ、怒られたか

見ると、ガツシリとした体躯で、立派に髭を蓄えたオッサンがいた

「……すみません」

謝ると、フンツと鼻を鳴らした、何か恐そうなオッサンだな

「して、何故そんなにイライラしているのかな?」

人の秘密にそんなズカズカ入られても困る

じゃあっ、と言って去ろうとしたが、ガシツと肩を掴まれた

「わしが話を聞いてやるんだ、少しは話していけ」

かなり強い力で（とは言っても、人間レベル）椅子に座らせられて、  
飲み物を渡された

何か、話さなければいけない雰囲気になってしまったな

その横にオッサンも座って、飲み物を飲んでいる

「俺は、守りたいやつがいたんだ、でも、守ることが出来なかった  
だから、その償いのためにも、今度こそ守りきろうと思っ  
て守って  
いたやつがいる

でも、結局そいつも守り切れていないんだ」

「これが、俺のギリギリの妥協点

そんなに多くの事を話すことは出来ない

でも、こんなショッパイ話を、真面目な顔でオッサンは聞いてくれた

「名前はなんという？」

「石神剣介」

「状況が分からないからあまり言うことはできないが、石神、人間というものはな、失敗するものだ

よく、失敗しても二度と繰り返さなければいいというが、そんなことは出来ない

同じ失敗は、二度も三度もするものだ

だが、そうやって何度も、何度も失敗を繰り返して、最終的に目的を達成することが出来ればいいのではないかと、ワシはそう思っている」

ちょっと肩の荷が下りた気がした

結局、最終的に達成できればいい

これが、今の俺が欲しい言葉だったのかな

だから、素直になれた

「あの、名前は何ですか？」

「レジアス・ゲイズという」

「レジアスさん、ありが」レジアス中将、こんなところにいらっしやっ  
たのですか!!」「中将!」

「ただけ偉いんだ、この人は

レジアスさんは、「見つかってしまったの」と呟いて、去っていった

「なんだか、好感の持てる人だ

「やあ、剣介」

「ありや、クロノ、フェイトと一緒にだっただけだ

「フェイトは、先になのはの病室に行ったよ」

「ふん、そうだ、レジアスさんについて聞いてみるか

「レジアス中将か……どこでその名前を聞いたか分からないけど、一  
言で言えば豪腕で武闘派な人だよ、正義感も厚いけど、黒い噂も絶え  
ないかな

「管理局地上本部総司令で、入局30年のベテランだよ」

「俺は、そんな人を相手にしてたのか、今更ながら恐ろしいことして  
いたな

「でも、クロノの言う豪腕とかは思わなかったな、どっちが素なんだ  
ろう」

「クロノと共に、なのはの病室に向かって、そのドアを開けた

……何をしているんだろう

二人は、どんな経緯があったか分からないけど、抱き合っていた

「っと、お邪魔だったみたいだな、クロノ、外に出よう」

そう言って、後ずさりをする、慌てた顔でフェイトが追いかけてきた

「違う、何を勘違いしてるか分からないけど、違うからね」

いや、まあ、そこら辺は人それぞれだし、俺もクロノも何も言えないもの

クロノと俺は、顔を見合わせて、意志疎通をした

それから少し、フェイトを弄ったあと、病室に入った

「気分はどう？　なのは」

寝ているなのはに問いかけると、元気だよと返ってきた

空元気なのは見え見えだったけど、それをする元気が出てきた事に安堵した

もう家に帰っても構わないらしいので、早く帰らせてやりたいが、この後フェイトの保護監察官と話をしなければいけない

面倒だが、頼まれたことなのでしょうがない



なのはを起こして、着替え……は出来ないでフェイトにやってもらい、外にでる

そんな距離はないのだけれど、なのはを真ん中にして、俺とフェイトで手を繋いで歩いた

「失礼します」

それほど大きい部屋ではない

中央に備え付けられたらソファーに座ると、紅茶が出された

「君がフェイト君だね、私は保護監察官のギル・グレアム。とはいえ形だけだがね」

さっきのレジアスさんと一緒に髭を生やしていたが、雰囲気は別物で優しいオジサンといった感じ、第一印象がこれだけ良い人も珍しいな

その後は、グレアムさんの過去を聞いた

グレアムさんはイギリス人だったらしい、なのはと同じように倒れている局員を発見して介抱したところ、魔法の才能が発揮されてそのまま局入りしたというわけだ

地球人は基本的にリンカーコアがないが、例外的にある人は才能が飛び抜けているらしい、だからグレアムさんも将官クラスの地位を得たことがあるしね

そして、フェイトへの約束事

「友達や自分を信頼してくれる人のことは、決して裏切ってはいけない」

良い言葉だと思う、俺は守ることが出来なさそうな約束だけどな

「して、石神剣介君だったな」

おお、俺か、何だろう

「君は魔術を使えるらしいね」

そこら辺も調べたのかな

「君のような若い子で魔術を使えるのは珍しいよ、大体は、マヌエルさんやエッジ君が指導してきた40代くらいまでしか使えないからね」

エッジ・テストロツサ……アリシアのお父さんが、フェイトは知らないだろうからここではスルーしておこう、グレラムさんも気を使ってくれているみたいだし

「君は、どんな魔術系統なのかね？」

「俺は、『偽』と『癒』ですね

グレラムさんも使えるんですか？」

「うむ、私もマヌエルさんに習ったよ

私は『氷』系統だね、魔術回路が20本ほどしかないから、大したことはないが」

へへ、グレラムさんも魔術を使えるのか

話には聞いていたけど、実際に使える人には出会っていないから嬉しいな

その後、魔術関連でちょっと盛り上がった後に、退出してデバイスルームに行った

バルディッシュはかなり破損しているから、レイジングハートは破損こそしていないものの点検も兼ねて、エイミーさんに預けてある

「なのは、フェイト、剣介!!」

アルフが尻尾を振りながら駆けてきた

ユーノも一緒だったようで、こっちに来た

「ユーノ（君）、アルフ（さん）」

二人とも、あの場ではしっかり挨拶も出来なかったからな

「久しぶりだね、なのは、ケン、元気……じゃあないか」

ユーノも本当に久しぶりだ、前よりも少し身長が伸びたかな？

「ユーノ君、本当に久しぶり、私は元気だったよ

前は助けに来てくれてありがとう。すっごく助かったよ」

申し訳なくも嬉しそうな顔のなのはに、全然と首を振るユーノ、やっぱりパートナーだな

そんなユーノとなのはを見て、アルフが近づいてきた

「いいのかい剣介？ユーノに取られちまつよ」

それは、なのはの事なのだろうか？

なのはは俺が護る対象というだけで恋愛の対象になっていない

俺が誰かを恋愛対象として好きになる事なんて『ありえない』だろう

「別に、俺には関係ない問題さ」

素直じゃないねえ、とでも言いたげな視線だけれど別にどうでもいい

で、レイジングハートとバルディッシュは平気なのだろうか

「うん、レイジングハートはすぐにでも持ち帰ることが出来るよ、バルディッシュはちょっと厳しいね、自動修復はしているけれど内部機能が壊れているから部品の交換が必要なんだ

早く返してあげたいんだけど……」

結構ひどい壊れ方だったからな、それ相応の時間が必要になるだろう

「なのはちゃんは持って帰るよね」待ってください」レイジングハート

エイミーさんが取りだそうとするとレイジングハートが拒否した

「私は、帰りたくありません」

えっと……どういふことだこれは？

マスターの下に帰るのを拒んだのか？

「なんでそんなこと言っつ？」「これからも一緒に戦おうよ、レイジングハート」

悲しそうなのはが言っ

エイミーさんや俺を含めて、その他の皆も困惑している

「マスター、私はマスターを嫌いになった訳ではありません  
ケンスケさんなら分かるでしょう」

俺がか？ ……ああ、そういふことが、ならばしょうがないな

「わかったよ、レイジングハート」

大丈夫だなのは、レイジングハートは絶対に帰ってくるから」

「何が分かったの、けん君!？」  
分かったなら、レイジングハートを説得してよ!？」

戸惑ってるな、冷静な判断が出来そうにない、一人になることを極度に恐れる所は治ってないか

まあ、そんな簡単に人は変わらないさ

「なあ、なのは、今はレイジングハートを待っていてやるっよ  
何をするのか具体的に分からないけど、それがなのはに出来る最善  
だと思っっよ」

肩を掴んで、眼を見て優しく語りかける

そうすると、濁っていた眼が、ゆっくりといつもの透き通るような眼に戻った

「うん……わかったよ

レイジングハート、絶対に戻ってきてね」

「当たり前です、あなたは私の誇りですから」

「エイミー、いるかい？」

ドアが開いて、クロノが入ってきた

「ああ、なのは達もここにいたのか

ちょうどよかった、艦長から話があるから皆集まってくれ」

今回の事件についてだろうか、そういえば担当になるとかならないとか言っていたな

クロノについて集合場所に行くと、たくさんクルーの人たちが待っていた

「来たわねクロノ

では、アースラメンバーは今回のロストロギア『闇の書』の搜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました

ただ肝心のアースラが事情があつてしばらく使えないです、そこで事件発生地付近に臨時作戦本部を置くことになりました

分轄として監督スタッフと捜査スタッフ一室、司令部は、私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、フェイトさん、以上三組に分かれて駐屯します」

「はい!!」

「ちなみに司令部は、なのはさんの保護も兼ねて、なのはさんのお家から目と鼻の先にあるマンションにしました」

へへ、なかなか粋な計らいをしてくれるなリンディさんも

なのはとフェイトも喜んでいるし、俺も嬉しい

でも、あの近くに今すぐ入れるようなマンションなんて……あった確かこないだ出来たばかりの高层マンションがあったはずだ、あそこなら、徒歩でいける距離だしな

「ケンスケ、私……私」

嬉しそうだなあフェイト、珍しく顔がにやけてるもん

そんなフェイトの頭をポンポンと撫でて席を立つ

なのはの部屋に行って、帰り支度を始めなきゃな、いくら着のみ着のままといっても少しは荷物がある

泊まりがけだったから、下着とか買っていたからそれを仕舞わないといけないだろう、バック持ってなかったし

なのはの部屋に入ってベッドの下から、着替え（使用済み）を取り出し

「じゃあああああ!! 何やってるの……!!」

何って、なのはの着替えをバビロンに仕舞おうとしているだけ  
ど

なんでそんなに怒ってるんだ？

「ちょっとはデリカシーってものを覚えてよー！ー！！」

……ああ、そっか、着替えだもんな恥ずかしかったのか、俺は  
まっつったく気にしないけどな

涙目のなのはに部屋を追い出されてやるのがなくなった、しょう  
がないから散歩をしていると、リンディさんとフェイトに会った

「剣介さんは、私とフェイトさんってお似合いだと思いますか？」

なんだろう、凄く誤解されそうな聞き方なんだけれど、たぶん、前  
に聞いたフェイトをリンディさんの養子にするっていう話について  
なんだろうな

「俺がどうこう言える問題じゃないですけど、俺はお似合いだと思  
いますよフェイトもリンディさんの事好きでしょ」

「……！！ そっ………だけど」

じゃあ良いと思うけどな、俺は応援したい

そっ伝えると、二人は去っていった

そろそろ、帰る時間だから、転送ポートに行くかな



「本当に近いところだねー」

いや、そういう感想よりも、もっと言う事があるだろ

俺たちは、司令部となるマンションに来ているのだけれど、想像以上に豪華だ

たぶん、億ションレベルだと思う、だいたい、なのは友達には大金持ちばっかだから感覚が狂っているのだろう

おっと、ユーノが肩に登ってきた

「そっか、ユーノもアルフもこっちではその姿って、アルフどうしたの？」

前みたいな大型犬（もはや狼）並みにでかい身体はやめてしまったのだろうか

「新形態、小犬フォームさ

」の姿なら、フェイトの魔力消費も少なくて済むし、町を歩いても

何の問題もないだろ」

「なのはの関係者に会うためには、この姿じゃないとね……」

お前等も大変なんだな

「剣介、友達だ」

お、もう来たのか

「こんにちは」

「来たよ」

つい一昨日にも会っているのに、すごい久しぶりな気がする……具体的にはピー話振りくらいな……

「何考えてるのよ、ケン」

相変わらず、一丁いつことには鋭いな

「あら、お友達？」

リンディさんが、ナイスタイミング

「「こんにちは」」

「アリスさんとすずかさん……よね」

あれ、知ってるんだ、リンディさん

フェイトと一緒にビデオメールを見てたってことかな

さて、じゃあ約束通り翠屋に行きますか

SIDEエイミー

初めての地球だけれど、良い星だなあ

文化的ではあるけれど、進化しすぎていないってのが嬉しいところだし、出来ればこのまま住んじゃいたいくらい

あれ、通信だ、誰からだろう

「本局メンテナンススタッフのマリーです」

マリーか、どうしんだろう、レイジングハートのことかな

「先輩から預かっているインテリジェントデバイス二機のことなんですけど、変なんです

部品交換と修理は終わっただんですけど、必要な部品が足りないってずっと言っていて」

しっかりと発注したつもりなんだけどな、それにマリーなら、失敗しないだろうし

どんなものが必要って言ってるのか見せてもらおう

「今、データを送りますね」

眼を疑った

送られたデータを見ると、そこに書いてあったのはCVK1792

通称ベルカ式カートリッジシステム

## 第二十七話

前回のあらすじ…家の近くにフェイトが引っ越してきました

「やて、皆さん

急に決まったことなのですが、今日は転校生がきます」

え、とか、誰だろう、とか皆が騒いでいる中、俺となのは、すずかにアリサはもう知っているのどこか勝ち誇った顔をしている(特にアリサ)

フェイトが引っ越して来た日に翠屋でお茶をしていたら、アースラ勤務の局員であるモブキャ……人が来て、フェイトに聖祥小学校の服を渡したのだ

「失礼します

あの……フェイト・テストロッサといいます  
よろしく願います」

緊張してるな、まあでも、ここのクラスというか学校自体がアットホーム的な部分があるから平気だろう、その証拠に拍手で迎えられているし

キーンコーンカーンコーン

「ねえねえ、何処に住んでいたの？」

「向こうの学校ってどんな感じ？」

「大相撲の八百長問題について、外国人の視点から見てどう思うのか聞かせていただきたいです」

もみくちやにされている、基本人見知りだから大丈夫かな

「はあ、もうしょうがないなあ」

アリスがフェイトの助けに入ったか、面白そうだから俺も行こう

パンパンと手を叩いて注目させた後に、質問は一人一つで順番に、ということ皆に伝えた

アリスはリーダータイプだよな

「はい、じゃあ僕が質問ね

向こうの学校って、どんな感じなの？」

「えっと、私は……普通の学校に行ってなかったんだ……家庭教師と  
いうか、そんな人に教わっていて」

へへ、誰だろう、プレシアは教えられそうだけど教えないだろうし、  
アルフは無理だろうし

「じゃあ俺な

フェイトさんのスリーサイズを教えてください」

「えええ!？」

「ケン、またあんたか!!」

ドドッ!!

「場を和ませるジョークだって」

首に回し蹴りって、俺が相手じゃなかったら怪我してるぞ

あ、あと勘違いするなよ、俺は小さい子供が大好きな人じゃないからな

「けん君って、ちょっと変態さんだよな」

いやいやいやいや、あくまでジョークですから

え……何その汚物を見るような目は、その目はやめてください

昼休み

お弁当を食べながら、世間話をしていた

「そういえばさ、フェイトのお弁当ってリンディさんの手作りなの？」

なんか、タコさんウインナーだとか、ご飯の上にアルフの絵が書いて

てあるとか、すごい凝ったお弁当だ

「でもいいなあ、私もそんな可愛いお弁当が食べたいよ」

鯖だとか、フグだとかが入っているお弁当に文句をいって欲しくはないけれど、やっぱり女の子は可愛いお弁当が好きなのだろう

桃子さんも、例えば今日のウサギのリンゴみたいに色々工夫してくれている

ほとんど毎日のように俺より早く起きているもんな、何時間寝ているんだろう

「あ、フェイトは水筒も持ってきているんだあ、一口ちょうだい」

スージーズウの柄がついている小さめの水筒から出てきた飲み物は白く濁った緑茶だった……まさか

ぶろうううう!!

「なにこの、甘い中にかすかな苦みがあって、緑茶の薫りに牛乳を入れた飲み物は……味の反乱よ!!」

それは、不味さでということなんだろう

フェイトが止めようとしていたのに、飲んでしまったアリサが悪い

なのはも微妙そうな顔をしている、前に興味本位で飲んで、偉い目にあわされたからな

「これは、私のかあ……リンディさんの趣味で……」



可愛い水筒から出てきた悪魔の飲み物か、笑っている熊が極悪に見えてきたよ

「そついえばフェイトちゃん、私たちが遊びに行ったときに出迎えてくれた黒い人って誰なの？ 同い年くらいだったけど」

俺となのはとフェイトが一斉に吹き出した、汚いとか言うなよしよ  
うがないだろ、あいつが小さくて童顔なのは認めるけど、中2が小3  
に間違われるなんて面白すぎる

「クロノは、私のお兄さんになる予定……の人かな」

「お兄ちゃんかぁ、私も欲しいなぁ

その点なのは良いわよね、恭也さんっていう素敵なお兄ちゃんがいるんだから」

趣味が盆栽という、大学生にしては渋すぎる趣味を持った人だけだな

ま、人格者だし強いイケメンだから人気があるんだろう、確かに兄らしい兄って感じがする

「そついう視点で見ると、ケンも人気があるのよね」

「え、そつなの？」

まあ……机にラブレターが入っていたのも一度や二度じゃない

「先週にも、B組の子に告白されて断りをいれていたわよね」

どつして知っているんだろうな、バレないようにはしていたのに



「こんなこと言つつもりなかつたけど、流れるにどうしようもなかつたんだよ」

別にこいつら相手に恋愛感情を持っているわけじゃないしな

「えっと……そうだ!!」

私ね、最近新しいお友達が出来たんだ」

まだ赤い顔をしながらも、すずかが強引に話題を変えてくれた

新しいお友達か、まさかフェイトの事じゃないだろうし、この学校の生徒でもないだろう

生徒だったら、俺らと一緒にご飯食べたりしているはずだからな

「え、どんな子、どんな子?」

「この子だよ、八神はやてちゃんっていつの」

見せてくれた写真には、すずかと、車椅子にのっている栗色の髪をした女の子がいた

「可愛い子だね、すずかはどこで出会ったのかな」

「えっとね、図書館で本を探していたら、一番上の本を取ろうとしていたはやてちゃんを見つけて、その本を取ってあげてからお話するようになったんだ」

優しいすずからしい行動だな、まあ、ここにいるやつらなら皆、同じ行動を取るんだろうけど

車椅子か、大変だろうな、元の世界で死んだ祖父さんが車椅子だったけど、お尻の筋肉がなくなって痛いつてよく言っていた

「けん君、今度一緒に図書館に行こうよ

もしかしたら会えるかもしれないよ」

そうだな、久しぶりに行ってみたいかもしれない、その時は、なのはやフェイトにアリサも一緒に行ったほうがいいのだろうけれど

今日は、家にも遊びに来た

男と違って遊びと言っても、やっぱりお茶しながら話すくらい（あとはゲームだけれど、あいにく高町家にゲームはない）

そして、高町家の面々を加えたグループ内でも女子が強い、ということ、俺や恭也さんはすぐにイジられる（俺の場合はイジりかえすけど）

それを察知したのか、いつのまにか恭也さんがいなくなってしまった、逃げやがったぞ、あの人

「本当にケンってきめ細やかな肌してるわよね」

頬をツンツンとつついてくるアリサ

「ほんとう、男の子とは思えないよ」

顔を覗き込むのはとフェイトとすずか

「可愛いよね〜」

頬をグニグニとイジる美由希さん

俺はおもちゃなんだろうか、今ならユーノと小一時間話せると思う

【ケン、頑張って】

遠くから、被害に遭わないように見ているユーノからの念話

「ねえねえケンってさ、メイド服とか似合いそうじゃない」

……よし、逃げよう

もう女装するのなんて嫌だ、あんな姿を見せるのは霞義姉さんだけで十二分だ

「あ!？」

大声をあげて、皆が何事かと動きを止めたその一瞬で腕をすり抜ける、今の内に……

「甘さよ」

なっ!? 神速……だと だけどまだまだ

美由希さんが立ちふさがって右腕を掴んだので、そこを軸にして回転、最後に腕を捻って掴みキャンセル

後はドアを抜けるだけだ

「ダメだよケンスケ」

なんとここでフェイトが立ちふさがってきた

美由希さんとの戦闘？の隙をつかれたか、しかも相手はフェイト、多少乱暴でも大丈夫な美由希さんと違って、優しく振り切らなければいけない、かといって少しは実践をこなしているから中途半端では抜くことが出来ない、もしかしたらこの場で一番の強敵かもしれない

一つ方法はあるが、これを使ってもいいのだろうか

後ろからは美由希さん以下四人が迫ってきているし、やるしかないか

「フェイト!!」

俺はフェイトの手を取って、そこに口づけをした

「ふええええええ!!」

皆が動きを止める、ここだ!!

「アディオス!!」

勝った、かなり汚い手を使ったけれど勝った

俺は自由だーーーーー!!

その後、室内

「お〜い、フエイトちゃん」

「ケンスケが、ケンスケが私に……キ……キスを……」

「聞こえてないみたいね、しかしあいつは、また厄介な事をしてくれちゃって……」

「なんでやっかいなのかな、アリサちゃん」

「え!? いや、何でもないですよ美由希さん、アハハハハ」

「そこについて詳しく聞かせてもらおうかな」

「ヒヤアアアア!!」

とっつてもカオスな光景が広がっていたという

## 第二十八話

前回のあらすじ…フェイトにキスをしました

プシュー

「どうだった？」

「無事、完治!!」

「そりゃ良かった」

やっとなのはリンカーコアが完治した、あとはレイジングハート  
だけだが

「なのは？」

きたきた、ユーノたちだ



俺以外の三人は、レイジングハート（フェイトはバルディッシュを  
だが）取ってきてくれた、じゃあエイミーさんに呼ばれているし、す  
ぐに帰るかな

最近頻繁に時空管理局本局にきているから分かったのだが、ワー  
プってのも意外と時間がかかる、ワープというくらいだから一瞬で移  
動出来るのかと思ったら、場所の入力から始まって、入力した場所の  
検索、座標特定、ワープ準備と30分くらいかかる（地球が管理外世  
界だからというのも関係しているけれど）、まあそれでも、普通に歩い  
たりするよりは段違いの早さだけど

「やっぱり、エイミーだよ  
今どの辺りにいるのかな」

空中に画面が浮かび、その中のリンディさんが聞いてきた

今は二つ目の転送ポートで手続き中だから、あと20分くらいだろ  
うか

「了解だよ」

あの人も大変だよな、俺たちのお守りをする立場でもあるんだか  
ら、良きお姉さんって感じかな

さて、暇だしお茶でも買ってこようかな

「あ……ケンスケ」

飲み物売場でフェイトと二人になった

あのキスの件があったから、皆といるときは何ともないのに、二人

きりになると微妙な反応を見せるようになってしまった、酷い言い方になるけれど、面倒くさい

フェイトの事を恋愛的な意味で好きだからした、という訳ではないので意識されてもなあ、という感じなのだ

「あのだなフェイト、何度も言ってるけれど普通にしてくれよ、あれがやりすぎだったのは分かるんだけど、俺としてもどうすればいいのかわからないんだ」

「う、うん、気にしてないから、だ……だいじょ……ぶだよ」

明らかにガツチガチだよ、まあ、もう少しすりゃ元に戻るだろ

「フェイトは何飲む？」「え、いいよ自分で買うから」「そっいえば、この紅茶をよく飲んでいたよな」「う、うん」「よっつと」

ガコンッ

強制的にフェイトに握らせて、その場を去った

調子くるっな

その後、アルフやユーノと話していたらエイミーさんからの緊急通信が入った

「皆聞」える!!

海鳴市上空に搜索対象の二人を発見したの、現場にはクロノ君が向かってるけど……地球についたら、すぐに向かってくれる」

「」了解

よっし、今度こそ完封してやるっ、と意気込んだところで、今は待つしかできないんだけどね

ついたら、そこではクロノが、赤髪幼女……ヴィータだっけか？  
と、犬耳おっさんのザフィーラと戦っていた

「よお、ヴィータにザフィーラ」

一斉にこっちを見て、顔をしかめた、一応この二人がかりでも俺に勝てなかったからな

横に降りたつたのはなのはとフェイト

「私たちは、あなた達と戦いに来た訳じゃない。まずは理由を聞かせてもらえるかな」

ふと思ったんだが、この状況っていじめだよな、周りには大量の局員にクロノ執務官、そして俺になのはにフェイト、これで話を聞かせ

てって脅迫に近い気が……俺としては問題ないけれど、なのはとか無自覚でやっているんだろうな

「あのさあ、ベルカの諺にこんなのがあるんだよ

『和平の使者なら槍は持たない』ってな、話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴がいるかバカ!! ってことだよ、バーカ」

うわ、正論だな、何も反論できないよ

あの少女は間違っていない、こんなのは脅迫同様だ、将来こんな事ばかりにならないかとお兄さんは心配だよ

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

「セーットアップ!!」

いつもと同様に、なのはとフェイトが変身を開始した、あれ、なんか違う?」

そうして変身が終わったとき、レイジングハートとバルディッシュの形状が変わっていた

特にバルディッシュとか、完全にリヴォルヴァーがついている、あれはもしかしたらカートリッジシステムかな

ドガアアアン!!

空から赤い魔力光とともに、一人の女性が降ってきた

「シグナム!?!」

ヴィータたちにとっては心強い援軍だろう、たぶんこいつらのリーダーであり、エースだから

「結界破られました!!」

いや、もう知っているから、シグナム相手に局員の結界では厳しいだろうしな

「けん君、ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね」

え、そしたら暇じゃん、なのははそつ言つ奴だったのは分かっているし、予想していたからいいけど

「じゃあクロノ、俺らは何してる?」

「こつでの指揮官はクロノなので、聞いてみる

「じゃあ、フェイトの援、私も、一人でやらして欲しい」「どうしてそつなんだ君たちは……」

クロノが頭を抱えている、数的有利なのにそのアドバンテージを放棄しているからな、この事件を早く解決させたいクロノとしては、何でだよって気持ちだろうな

「あたしはあのザフィーラつてやつとやらせてもらつよ」

前に戦った時はフェイトが劣勢で、それに気を取られながら戦っていて完全に負けていたから今度こそという気持ちがあるんだろう

「本当に君たちはしょうがないな、じゃあ、僕と剣介、それにユーノは

術者の探索をしよう」

やっぱりそうだよな、なのはから蒐集したとき、四人目がいたのは  
確実、ということとは、またここでフェイトが蒐集される可能性がある  
るってことだからな

「じゃあ、僕は結界内を担当するよ、クロノとケンは外を見てくれるか  
い？」

無難だな、ユーノは機動力があるわけじゃないから腰を落ち着けら  
れる中がいいだろう、俺やクロノはそこそこ機動力があるし外は広い  
から適任だ

「じゃあ、解s」ああ、ちょっと待て」剣介？」

少しは役に立つ情報だろう、一様一般人に化けていても手がかり位  
にはなる

「相手の術者は左手の中指に傷があるから包帯なりなんなりしている  
はずだ、それを目印にすると良いかも知れないな」

『ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇』で攻撃したので傷は癒えていないはず

さて、捜しますか

SIDEなのは

離れようとするヴィータちゃんを追っていた、前は負けたけど今度  
は大丈夫、レイジングハートも強くなって戻ってきてくれた

「はっ、なーにが話し合いだ。結局戦うんじゃないか」

ヴィータちゃんがお話を聞いてくれないから仕方ないじゃない、言  
葉を聞くための戦闘だってあるんだから

「私が勝ったら話を聞いてもらうからね」

「やれるもんならやってみろ!!」

指の間から、鉄球をだしてきた、あれは威力も高いし速い、前はあ  
れをシールドでギリギリ防げたくらいだけど、誘導弾ではないので上  
空に飛んでよけた

「カートリッジロード……おちろおおお!!」

前に落とされた技、怖いけど、止めなきや!!

「プロテクション」

……あれ?

「つくそ！」

こんなに軽かったっけ、あの攻撃

違う、私のプロテクションが堅くなったんだ

〔バリアバースト〕

何その技、え、バリアが集まって……爆発した!?

「うわぁ!!」

レイジングハートのおかげで、私のレンジ距離になった

〔アクセルシュートを撃ってください〕

「アクセルシュート!!」

放射状に光線が飛び出してってえええ!?

〔コントロールをお願いします〕

そ、そっだね、コントロールしないと、でも出来るかな、こんなたくま

〔出来ます、私のマスターなら〕

……ありがとう、レイジングハート、絶対にやってみせるよ

私の周りにヴィータちゃんの鉄球があるけど、それなら、アクセルシューターで撃ち落とす!!



「アクセル」

それを見たヴィータちゃんが、防御のためにバリアを張った

たぶん、前だったら抜けなかっただろう、でも、今は抜ける!!

「シューーート!!」

レイジングハートが信頼してくれているから、私は戦えるんだ

SIDEOUT

SIDEフェイト

「はああああ!!」

「せええええ!!」

やっぱりシグナムは強い、バルディッシュが強くなっても、接近戦ではやっぱり五分五分……いや、四分六分だ、でもそれくらいの差な

ら、私は手数で勝てる

「プラズマランサー、ファイア」

前とは違って、追尾型になったプラズマランサー

これならシグナムのよける方向を指定できる、もらった!!

「レヴァンティン、カートリッジロード」

ギヤイイイン

よけたところでの不意打ち、これでもしとめきれないんだ、やっぱり強いな

「バルディッシュにテストアロツサか……良いコンビだ」

「あなたと、レヴァンティンもです」

戦いの中で相手を褒めあつなんておかしなことかもしれないけど、私は自然にそれが出来た

「心が躍る戦いなのだがな……そうも言っていられん。受け止めてみる」

闘気が集まっていくのが分かる、シグナムの本気の一撃だ

もちろん怖い、できるなら逃げたい

でも、バルディッシュが信頼してくれているから、私は戦える

SIDEOUT

【ユーノ、そっちはどうだ？】

【こっちも全然】

はぁ、見つからないな

結構捜しているんだけどなぁ、クロノからも連絡がないし

なのは達は大丈夫だろうか、心配ではある

【見つけた!!】

クロノか、何処にいるんだ？

【剣介のいる場所から北に300M先だよ、中指の先に包帯を巻いている亜麻色の髪をした女性だ】

北に300か、少し遠いな

クロノの近くにあるサーチャーから、映像が送られてきた

【闇の書を使って、結界を壊そうとしているみたいだ、今から逮捕する】

【了解、気をつけるよ】

急いで向かいますか

画面では、クロノが後ろから、女性にデバイスをつきつけていた

「搜索指定ロストログニア所持の疑いで、あなたを逮捕します

抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある、武装の解除を」

よし、これで勝ちだろう

「グアアア!!」

クロノが吹き飛ばされた!?

くそっ、画面が乱れてよく分からない、もう少しで現場だからさっさと向かおう

現場につくと、ちょうどクロノが蹴られていた

「おっおっ」

かなりの勢いだったので抱き止めたが、お前軽いな、なのは……よりは重いけど、それでも女性の敵並みな軽さだぞ

「……ありがとう、剣介」

「で、あの趣味悪い仮面をつけた野郎は誰だ？」

「分からない、でも、強いことはたしグウ!!」

痛そうだな、バリアジャケットの上から蹴りでダメージを与えては

「その仲間も今は動くな!!」

直にこの判断が正しかったとわかる」

本当になんなんだ、あいつは

今の言葉から考えると、シグナムたちの仲間じゃない、だけど俺たちを攻撃してきている

「破壊の雷!!」

【やばい、アルフ、ユーノ、なのは達を頼む!!】

そして、闇の書の魔力が、結界を跡形もなくぶち壊した

## 第二十九話

前回のあらすじ：仮面の男が現れました

「そろそろ、闇の書とかシグナム達守護騎士について教えてくれよ」

あの戦いが終わってから、すぐにクロノに切り出した

これから先は、あいつらの事を知っていなければいけないと思っ  
た、なんとなくだが

「そうだね、そろそろ皆も知って良い頃だろう」

艦長、話しても大丈夫ですか？」

リンディさんに許可を取って、クロノが話し始めた

なんか、小難しい説明に入って理解しづらくなったので、掻い摘んで説明すると

要は危険物

まあ冗談はこれくらいにして

時空監理局でも、一級危険搜索物に指定されているロストログア

これまでに何度も完成されており、そのたびに大規模な破壊をしてきた

ジュエルシードがドラゴンボールなら、闇の書は聖杯みたいなものと考えればいい、結局大規模な破壊しかもたらさない

監理局が捕まえた事もあるらしいが、それでも暴走して、最後にはアルカンシエルと呼ばれる砲撃で粉碎したらしい

ならば、まだ形を保ってるのはおかしいじゃないかという疑問がでてくるだろう、それこそが闇の書の特徴の一つである『無限転生機能』

これは、どんなに破壊しても最終的には別の世界で転生するという能力、要するに不死身

ほかに、守護騎士ヴォルケンリッターも特徴として挙げられる

守護騎士は通常、闇の書の主の命令に従って666ページある闇の書の完成を目指すためだけに造られた擬似人格プログラム

そして、これが疑問点

なぜ、破壊しかもたらさないと分かっているのに、主のため、など

という名分のもとに行動しているのだろうか、ヴォルケンリッター達が最終的に破壊しかもたらさない事を知らないと考えれば辻褃が合うが、それはそれで、これまで何度も完成してきたのに知らないなんておかしいじゃないかという考えに至る

これに関しては、クロノ達監理局も分かっていないということだ

まあ、こんな感じかな

少しまとまったとはいえ、まだ色々と分からない事が多い

クロノによると、闇の書が解放されてしまえば封印は難しいので、そうなる前に主を捜しださないといけないらしい

ということなので、当面の目標は主捜しということになる

ちなみに、666ページのうめかたは、リンカーコアを持っているものからの蒐集ということになる

ただし、一度蒐集されたものからは一度と蒐集できない……まあ、なのはからは蒐集出来ないよということだ

「次だ、あの仮面の男は何者だ？」

クロノを吹き飛ばした体術からいっても、体捌きだけだったら俺よりも上だ」

御神流を習い始めてから一年半の俺に比べて、仮面の男は完成されている

ただ、正面から肉弾戦で戦って俺よりも強いと言われると微妙だ



あいつらが本気を出しているのか知らないけれど、あれが本気だとしたら、間違いなく俺が勝つ、理由はサーヴァント並みの身体能力だ俺の力は加減しているが、本気をだせばバリアジャケットの上から素手で殺すのも難しい事ではない

本気でクロノを蹴れば、その瞬間に内臓破裂を引き起こすことも可能……自分で言っていて恐くなってきたな

要するに、あの仮面は強いということだ

「あの男については、僕たちも分からないんだ  
守護騎士たちの仲間でもなさそうだし……  
執務官として様々な角度で調べてみるよ」

ってことは結果待ちか

「じゃあ、特にフェイトは気をつけるよ」

「え……何でかな？」

それくらい分かって欲しいものだけねどな

「フェイトは蒐集されていなくて、近接戦闘系だろ」

「あ、そっか」

「まあ、何かあっても俺が守るけどな」

「ケ……ケンスケ!？」

その……あり……がと」

うわああ、俺の馬鹿やろつがああ!!

無駄にフラグ建築してどうするんだって、どこの幻想殺しになるつもりはないのによお

「剣介さんって、女誑しって言われるでしょ」

言われてないからああ!!

「はい、じゃああの仮面に注意するってことで、オオオオ!!」

ぶっちゃけ逃げました

次の日の放課後

俺は今、図書館にいる

あれは今日の昼のことだった

「ねえねえ、けん君

今日は前に言った八神はやてちゃんと図書館で会うことになってるんだ、もしよかったら一緒に行かない？」

別に俺はいいけど、他の奴は？

「私はパス、今日は家庭教師が家に来るの」

「私もダメかな」

「ニヤハハ、ごめんね」

なのはとフェイトは、カートリッジシステムについてエイミィさんから説明を受けるんだっけか

皆、それぞれに予定があるんならしょうがない

「じゃあ二人で行くか

ただ、俺も用事があるから途中で時間で帰るぞ」

実はこの後、クロノやユーノと共に、人に会いに行くことになっている

クロノは、ユーノに何かやらせたいことがあるようだ、俺は興味本位だけどね

というわけで、今は図書館にいる

「あ、いたいた、あの子だよ」

車椅子に乗ってる幼女を発見した

優しそうな顔をしている

「はやてちゃん」

小走りで近づいていくと、幼女がこちらを向いて顔をほころばせた

「すずかちゃん!!」

ああ、関西弁なんだ、標準語と違って、『す』でなく『か』が強調されていたから分かった

「よお、八神はやて……だよな」

ふえっと声をあげてこっちを見た

少し疑問なんだが、どうして美少女の友達も全員美少女なんだろうな

「えっと、どなた様ですか？」

「あ、はやてちゃん

この人は私の友達で石神剣介君っていうの」

「八神はやていいいます、石神さん」剣介でいいよ「ほな、よろしゅうな、けん君」

なかなか礼儀正しいし、優しそうな幼女で好感が持てた

読んでいる小説を見ると、アーサー王伝説

アーサー王が好きなのだろうか

「かつこええよね、アーサー王みたいな人は憧れるわ」

もしかしたら、食いしん坊かもしれないと知ったらどうなるだろう

「で、なんや？ けん君はすずかちゃんの彼氏なんか？」

ほお、いきなりそうきたか、グイグイ来るな

「えええええ!! 違う、違うよはやてちゃん!!」

「会って5秒でこれか、関西人ってのはスゴいな」

「私は関西人やないんやけどな、それでも、面白そうな事があつたらグイグイいくで」

元気いいな、ハンデを感じさせない子だよ

その後は、好きな本とかについてしゃべっていたのだが、時間が来たので、先においとまさせてもらった

また会ってしゃべりたいと思わせる子だった

「で、クロノ、どこまでいくんだ？」

「本局までだよ、そこで待っていてくれるんだ」

本局か、遠いな

「別に、剣介はついてこなくてもよかつたんだよ

大事な用があるから会わせてくれっていったのは剣介だろ」

まあそうなんだけどね

「ねえ、クロノ、そのお師匠さんたちってどんな人なの？」

不安そうにユーノが聞く

俺、クロノ、それにユーノはクロノの師匠に会いにいっている、前会ったグレラムさんの使い魔らしいんだけど、性格は強烈だって話だ

クロノを教えたってことは、かなり指導力がある人なんだろう

端から見ても、クロノは才能があるわけではない、ただ、努力の天才だ

それゆえに、指導者の指導力によって、ダイヤになるか黒鉛になるか決まる

そしてクロノはダイヤ……とまではいなくても、それに近いものになっていると思う、だから、その人達はものすごい人なんだろうな

ある部屋の前でクロノが立ち止まって深呼吸した、ああ、この部屋で待ち合わせているのか

「リーゼ、クロ、わーお!!」「ってっわあ!!」

おお、クロノが押し倒されとる

とりあえず、18歳未満には禁止の映像が広がっているけど気にしないでおこうか

「あれ、あなたたちは？」

二人いた内で、クロノに飛びかかっていないほうの猫型使い魔が話しかけてきた

「こんにちは、クロノの協力者の石神剣介と」

「ユーノ・スクライアです」

「私はリーゼアリア、そこでクロノをいただきますしているのがリーゼロツテね」

双子の使い魔ってのもいるんだ

「あれ、アリアーこのちっさいこ誰? ……食べていい?」

よし、ユーノを盾にしよう

「なんで微妙に僕の横に回ってくるのさ!!」

なあ、なんでだろうっね

「闇の書ねえ」

「父様から話は聞いてるわ、出来る限り力になるけど、まだ新人をしごかなきゃならないのよ、それまでは無理ね」

提督の使い魔で、しかもクロノを育てたってことは、実績も豊富なんだろう

でも、確かユーノの頼みってこっちがメインになる頼みだったよな

「僕が無限書庫で闇の書の事について調べるのを、手伝ってはもらえませんか？」

無限書庫、世界の歴史が集まる場所、国会図書館の上位版と違ってくれて構わない

Fate/extraを知っている人ならば、ムーンセルのようなもので通じるだろうか

ただ、年代別とかの区分けがなくバラバラに入っているため、通常はチームを組んで年単位で操作をするのだとか

「そういうことなら、暇な時には手伝ってやれるよ」

「あ、ありがとうございます」

「で、次は剣介の用事なわけだが」

ぶつちやけ用事なんてない、クロノの師匠がどんな人なのかという興味だけ



「君が大事な用があるというから連れてきたんじゃないか!!」

失礼な、興味があるってのは立派な用だぞ

「はあく、剣介の言葉を鵜呑みにした僕がバカだった」

「なんだか面白い子だね」

「僕はちっとも面白くない!!」

俺はとっても面白いぞ

SIDEなのは

私は、新しくレイジングハートに導入されたカートリッジシステムについて、エイミーさんから説明を受けている

本当なら、けん君やすずかちゃんと一緒に遊びに行きたかったんだけどな

最近のけん君は、いろんな女の子と仲良くしていて、私には関係ないかもしれないけど面白い

けん君がフェイトちゃんとかと仲良くしていると、何でかわからな  
いけれど胸がチクチクする

「なのはちゃん、聞いてるかな？」

あ、いけない、すっかり聞かなきゃ

「じゃあ、もう一度説明するね」

カートリッジシステムっていうのは扱いが難しいの、普通はインテ  
リジェント・デバイスなんて繊細なものに組み込んだら危ないの  
でもこの子達がどうしてもって頼んだのよ、よっぽど悔しかったん  
だろうね」

そんなに私のことを思ってくれていたんだ、ありがとう、レイジン  
グハート

「バルディッシュ、ありがとう」

フェイトちゃんも同じ気持ちだね、デバイスとはいつてもレイジン  
グハートは私の大切な友達だから

「モードは両方ともっつ」

レイジングハートは、中距離攻撃のアクセルと、砲撃のバスター、フ  
ルドライブのエクセリオンモード

バルディッシュは範囲用のアサルト、鎌のハーケン、フルドライブ  
はザンバーフォーム

二人ともできるだけ使わないでね、特になのはちゃんのエクセリオ  
ン・モードは壊れる危険性があるから」

そっか、やっぱり危険なんだ

あんな思いはもう嫌だから、出来るだけ使わないようにしなくちゃ

## 第三十話

前回のあらすじ・闇の書は要するに危険物だったことがわかりました

### SIDEシグナム

最近、蒐集が忙しくて主と一緒にいられる事が少ない

昨日だって、テストロッサ達との想定外の戦いにより、結局、主はご友人のところでご飯を食べた

冷蔵庫を見ると、鍋物の用意が出来ている

皆で食べようと準備してくれていたのだろう、落胆する主の姿を思つと胸が張り裂けそうになる

「どうしたんだ、シグナム」

狼形態になったザフィーラが話しかけてきた

ザフィーラも本当によくやってくれている、本人は知らないがシヤマルとヴィータそして私の中で、彼は副官のようなものとして認識されている

いつでも冷静で思慮深い、ともすれば特攻しがちなヴィータと私、緊張しやすいシヤマルを抑えて、その場で最適なことを教えてくれる

「いや、なんでもない」

今日は曇っているな、あの日を思い出す

主と出会った日を

あれは半年ほど前の話だったか

いつものように闇の書が起動して、いつものように新しい主を見つけた

だが、それからは違っていったな

まさか気絶してしまうとは思わなかった、ただの気絶だからシヤマルの魔法でも治すことはできない

それに加えて、今回の主は足が動かないようで心配になり、テーブルの上にあった地図に従って、かかりつけと思われる医者の中へ向かったのだったな

そこで待つていたのは、奇異の視線だった

今考えると当たり前だ、私たちは全員、黒のタイツ姿であったし、ザフィーラに至っては犬耳を生やした姿だったからだ

担当医と思われる医者に主との関係性を尋ねられたが、主の願いをかなえるヴォルケンリッターとしか言えなかったな、そのせいで変な人たち（本当に変な人たちだったが）と勘違いされたりもした、主の機転で助かりはしたが

私達が一番驚いたのは、その後のことだった

魔法の事を話すと、これまでの主であれば、驚き、錯乱してしまう方もいた

しかし主は、随所で驚きはしながらも終始冷静に話を聞いて、すぐに納得したのだった、また、いきなりメジャーを取り出すと、私達の身体をはかり始めたのだ

これまでの主は私達を、自分の欲望を叶えるために存在するプログラムとして使う人がほとんどだった（中には慰み者として使う方もいたが）それだけに、なぜメジャーで身長や胸囲をはかるのかわからなかったが、全てが終わった後に服を買ってくると主は言った

複雑な気持ちだった、嬉しいのだが私達はあくまでプログラムにしかすぎない存在、そこに人としての扱いを求めてはいなかった、だから牢屋のような場所で暮らすのにも、恥辱の限りを尽くされた事にも何も感じなかった

だからこそ、私は本当の願いを聞き出さなければいけなかった

闇の書のページを完成させれば、主に大いなる力を与えられる、そうすれば足は治るだろうし、他にも世界を支配する事だって可能だ

そんな万能の力を秘めている闇の書に、願いをもっていない人間などいない

そう思って主に願いを聞いてみると、自分の幸福のために他人を不幸には出来ないという意外な答えが返ってきた

意外だけど納得した、実に主らしい言葉、これで私達を人間として扱うのにも得心がいく

そして私は騎士の誓いをした、必ずこの暮らしを守りきると、もう蒐集はしないと

しかし、そんな平穏な生活は唐突に終わりを告げた、主が倒れたのだった

すぐに病院に運んで検査してもらい事なきを得たが、そこで主の主治医から聞かされたのは主の病気についてだ

主の病気は原因不明の病で、麻痺が足から始まって徐々に上にあがっていく病だ

それは産まれてからの病気ではあるが、ここ数ヶ月で極度に進行が早まっているらしい

そして、このままのスピードで進行していくならば、遠くない未来のうちに麻痺は心臓に達して最悪の結末を迎える

私たちは悟った、この病気と私たちは無関係ではないことを

この病気は闇の書の病だ

闇の書は、主が産まれた時から共にある、そしてその呪いは長い時を経て主のリンカーコアと強く結びつき、ゆっくりとだが確実に身体を蝕んでいった、また、私たちを造りだした覚醒によって、その速度は一気にあがっていったのだ

それに、私たちは自分の魔力を使って戦闘を行うが、存在するためには少しか主の魔力を使ってしまう、無関係とは言えない

私たちは考えたな、主をどうやって救えばいいのか、どうすれば進みが止まるのか、考えて考えて考え抜いた、だが出てきた結論は一つだけだ、それは主に対する背信行為だ、騎士としての誇りに自ら泥をぬる行為だ

だが、主を救うにはこの方法しかなかった、少なくとも私たちが想像しうるなかで出てきた唯一の方法だった

それは、闇の書の蒐集

ページをすべて埋めれば主は莫大な力を得ることができ、そうすれば足の呪いなど簡単になくせるはずだ

ならば、この方法をとるしかないだろう

こうして、闇の書の蒐集は始まったのだ

温かい家庭をもう一度取り戻すために



SIDEOUT

「……どれがいいんだろう」

学校でカタログを見て唸っているフェイト、リンディさんが皆との連絡 and 通信用に携帯を買ってくれるらしい、それで何がいいのか迷っているというわけだ

「やっぱり外見が可愛いのがいいわよね」

「えー、操作性も大事だよー」

どんな機種がいいのか話してるけど、もはやフェイトを混乱に陥れているように見えるのは俺だけだろうか、特にすずか、肝心の携帯が決まってないのに外部メモリの話はしなくていいだろう

「あの…… 剣介はどれがいいと思うのかな」

俺自身はスマートフォンだけど、他の人に勧めるかと聞かれればNOだ、小学生が持つには早すぎる機能が盛り沢山だし扱いきれない、それに普通の比べて電池が消費されやすいのだ、小学生ならお

子様携帯で十分だと俺は思っている……けど納得しないだろうなあ

「うーん、フェイトが気に入ったやつにすればいいと思うぞ」

当たり障りのないコメントでお茶を濁したけど、本当にそうだと思う、自分の好きなやつを買えばいいんだ、それが一番愛着がわくし大切にする

そして結局、フェイトが選んだのは普通の大人用携帯、ただ使い勝手は良さそうだし重くもない、初めてでも使いやすい代物だろう

「どんな電話番号にしたの？」

「えっとね……」

「わあ、いい番号だね」

番号にいいも悪いもないとは思いつけど、喜んでるようだしそっとしておくか

その日の夕飯はリンディさんの家で「ちそうしてもらうことになった」とは言っても家主のリンディさんとクロノはアースラの試験航行とやらでないけれど

「今日は何を作るんですか？」

これまで何度かご馳走になっているのでエイミィさんが料理を出来ることは知っている、桃子さんに比べると劣るが、一般家庭レベル

なのは間違いない

「今日は野菜スープかな」

そういえば、リンディさんとクロノがいないので現在の現場指揮官はエイミィさんらしい、本人は基本的に介入なんてないんだから平気だよと言っていたが、こういうときに限って嫌なことがあるんだよな

《エマーゼンシー、エマーゼンシー》

はあ、やっぱりか、嫌な予感はあるっていうもんだな

状況としては、管理外世界の砂漠で交戦中のシグナムとザフィーラが発見された、個人で転移できる全世界をサーチ対象としていたのが功をそうしたな

戦っている敵はムカデの化け物、相手が強そうなので方針としては、消耗しているところを捕縛する、まあ当然の選択なんだが、フェイトが守るかっていうと微妙だな

【エイミィさん、フェイトが行った後に俺を転送してください】

フェイトにも聞こえないように念話で話す、敵を騙すにはまず味方からだ、たぶんただけど仮面の男は現れる、その時に俺は不意打ちができるように準備をしよう

「じゃあ、私は行ってくるね」

「気をつけてね、フェイトちゃん、アルフさん」

そう言ってフェイトとアルフは出撃していった、俺も準備しなく



俺は出撃した

SIDEなのは

けん君が読んだとおり、もう一つの管理外世界に今度はヴィータちゃんが現れた、今度は私が行く番だね

「えっと、リスさんにセラさんですよ、手伝ってもらえますか？」

時の庭園で一回会ったことあるけど、あの時はお話出来るような状況じゃなかったから、何も二人のことは知らないけど、けん君のお友達さんなら大丈夫、信頼できる

「わかった……なのは？」

「御主人様の御友人を呼び捨てにしない!!

なのは様、私たちは御主人様よりあなたを守れと命じられております、あなたを手伝うのは当たり前ですよ」

えっと、そうじゃなくて、命じるとかじゃなくて手伝ってほしいんだけど……

「……ええ、わかりました、ではあなたを私たちの意志でお助けします」

「……セラ、嬉しそう」

「黙りなさいリズ!!」

ちょっと笑っちゃった、そうだよな、しっかりと話せば分かってくれるんだ、だからヴィータちゃんともしっかりとお話ししよう

「エイミーさん、よろしくお願いします」

「気をつけてね」

「はい!!」

そうして、私も飛び出した

周りには森林が広がっている、エイミーさんにはヴィータちゃんの進路の少し先に転送してもらったから上空に上がって待っていていれればいい

「では、お気をつけて、何かあればすぐに私たちの下へいらしてください」

「はい」

二人の言葉を受けて飛び立つと前からは飛んでくるヴィータちゃん  
んがいた

「……またお前かよ、た……た……た……田中!!」

「田中じゃないよ!?!」

まだ覚えてくれてないの私の名前、もしかして覚えにくい名前なの  
では……ってそんなことしてる場合じゃなくて、お話を聞かせてもら  
わなくちゃ

「ヴィータちゃん、お話聞かせて。私は手伝えるなら手伝つよ」

少し、ヴィータちゃん表情が変わった

「管理局員の言葉なんか信用できねえよ」

私とけん君は、管理局の人間じゃないよ、民間協力者だから手伝え  
るかもしれないよ、そんな気持ちで両腕を広げるけど、ヴィータちゃ  
んの表情は険しいまま、やっぱりこれまでが悪すぎたのかな、うっつん、  
諦めちゃだめフェイトちゃんの時だって諦めなかったから友達にな  
れたんだもん

「ヴィータちゃん」

一歩前にでる、警戒を解いてくれることを信じて

「っは。てめえは今度相手してやるよ」

ヴィータちゃんが鉄球をだしたけど、いつものような誘導弾とはま  
た違う

それをヴィータちゃんがハンマーで叩いて……きゃあ!!

鉄球が炸裂して、辺りを閃光と轟音が支配した

思わず目をつぶって耳を塞ぐ、バリアジャケットの上からこんなにうるさいんだもん、セラさん達は大丈夫かな、それにヴィータちゃん……遠くにいつちゃった

「マスター、まだ大丈夫です」

レイジングハートの声に頷く、大丈夫、私とレイジングハートなら届く位置だ

私が自信の持てる事、それは長距離砲撃、これに関してはフェイトちゃんにもクロノ君にも負けない、けん君は……分からないかな

レイジングハートを砲撃モードにする、杖だった形状が先が二つにわかれた砲撃専用のモードになる

「久しぶりの長距離砲撃」

「カートリッジロード」

普通なら届かない距離でも、私とレイジングハートなら

「ディバイナー」

届く!!

「バーバスター!!」



物凄い音が響いた

〔直撃ですね〕

ちょっとやりすぎちゃったのかな

そうして煙りが晴れると、そこには仮面の男の人がいました

そんな、私のバスターが無傷で……しかもデバイスも持たずに防がれるなんて

とにかく、セラさんとリズさんのところに行かなくちゃ

降下しようとする、青色の輪が私を締め上げた

バインド!? あんな距離から!?

それを解くと同時に、ヴィータちゃんと仮面の男の人はいなくなっ  
てしまいました

SIDEOUT

現在、砂漠で交戦しているのはフェイトとシグナムにアルフとザフィーラ、俺は近くにあった岩陰で休んでいる

エイミーさんからは、なのはも出撃したっていう念話が来た

しかし、フェイトも強くなった、見ていると分かるのだが、シグナムについていけるようになっていて、武器が良くなったからもあるが、あの時と比べてあきらかに動きがよくなっている、技術やパワーはシグナムが上だが、フェイトはフェイトでスピードを生かしてヒット&アウェイの戦法だ、これならば相手よりスピードが速いほうが有利になる

シグナムもシグナムで、相手の有利な土俵で戦いながらも自分はどっしりと構えて互角の戦いをしている

どちらが先に仕掛けるのか分からないけど、一度主導権を握ったほうが勝ちそうだな

しかし、シグナムの動きは独創的というか……凄いな、剣と鞘の二刀流で戦っている、今もフェイトのフォトンランサーを打ち消した

アルフとザフィーラはというと、やっぱり肉弾戦か、二人ともパワーもスピードも互角だから勝負はつきづらいだろう、勝負がつくとしたら体力切れだけど、その前にフェイト達のほうが早く終わるだろうな

お、フェイトとシグナムが佳境に入ったな、二人とも血を流してにらみ合っている、この攻撃で何かしら結果がでるだろう

二人が動き出して決着が……つかなかった

フェイトの身体からは手が生えている、そこにいたのは仮面の男

まだ待て、あともう少し待て、飛び出したくなる衝動を何とか抑える

バビロンから弓と矢をだしてつがえる、相手との距離は3km、この程度なら蠅の目玉だって打ち抜ける

フェイトのリンカーコアが露出して、闇の書が蒐集を開始する……  
今だ!!

相手がフェイトと離れなければ回避不能な場所、すなわちフェイトの身体を貫いている腕を狙って放った、結果なんて見なくて十分、フェイトの蒐集を中断できたのならば、後は仮面を捕まえるだけ

「構造把握」

自分が出来る最速のスピードで自分の身体を把握する

「現世展開」

フェイトの目の前に薄っぺらい何かを創り出した

「位置変移」

意識が一瞬飛んで、目の前が白く光った後、見えたのは気を失って倒れかけているフェイトと矢を避けるために腕を抜いた直後の仮面の男だった

フェイトのリンカーコアはもう戻っている、作戦は成功だ、だが、重要な事が残っている、仮面を捕まえることだ

無茶な魔術の代償で身体の中はめっちゃくちゃだが、ここで治療なんか使えない、バビロンから使い慣れた二振りの剣を取り出して仮面を斬りつける

だが、無茶をしているので動きがいつもより若干遅い、仮面はいきなり現れた俺を相手に驚きもせずに対処してくる

干将・莫耶の攻撃を受け流して、腹を蹴られた

いつもなら何ともない蹴りでも、今の俺相手には十分すぎるほどの威力だ、のたうち回りはしないけれど、血を吐きながらうずくまるしかない

近づいてくる仮面、切り札を使うしかないのか

「少し、寝ている」

仮面が放った蹴りは、意外な人物に止められた

その人物は、桃色の髪をしており美しき甲冑を身にまとった騎士

「これ以上、騎士の誇りを傷つけることは許さん」

「シグ……ナム」

なぜシグナムが味方をしてくれるんだ、これだから騎士の考えていることは分からない、けど、ありがとう、助かった

「なぜ、お前が邪魔をする？」

「これ以上、騎士の誇りを傷つけるような暴挙は見逃しておけん、それにテストアロツサのリンカーコアからは蒐集できない」

そう、それこそが俺の狙い、一度蒐集した者からは二度と蒐集できないのならば、ほんの少しだけ蒐集させて、それを中断させればもう蒐集出来なくなるのではないかという考え、当たっていたみたいだな、これならフェイトが魔力を失うことはない

「石神、お前は休んでいろ、ここはヴォルケンリッター烈火の将シグナムが引き受けた」

ああ、そうさせてもらおうよシグナム

「そういつことならば、退散するとしよう」

そう言って、仮面は姿を消した

「大丈夫か、石神」

手を差しのべてくるシグナム、本当に高潔な人間だな

「ありがとうシグナム、一つでかい貸しが出来たな」

そう言つと、フツと微笑んだ

「これは、私が独断でやった事にすぎん

貸しなどは気にするな、次会ったときには容赦なく斬らせてもらつぞ」

「フェイト!!」

「シグナム、平気か」

両方とも迎えが来たようだな

「ではな石神、また会おう」

シグナムは去っていった

## 第三十一話

前回のあらすじ：シグナムに助けられました

俺は闇の書対策会議にでている、実際は闇の書というよりは仮面の男についてだが

「で、なのはちゃんのいた星から転移して、剣介君のいた星に現れたという事です

そのことを連絡しようとしたときには通信回線がダウンされちゃって……私の責任です」

あの仮面は管理局の通信システムを一時的にダウンさせたらしい、その影響でリンディさんやクロノに連絡が出来なかったとか

管理局の通信システムはサイバーテロの可能性を考慮して、最高峰のセキュリティーを持っているらしい

これも仮面の仕業だとすると、仮面は

達人並みの体術を使う

なのはのディバインバスターをデバイスなしで防ぎ、遠距離からバインドを決める

最高峰のセキュリティを誇る通信システムをダウンさせられる

これだけの力を持っていることになる、それになのはのいた星から転移するのに費やした時間も普通では考えられない速度だったらしい

「こう考えると仮面はチートといっても過言ではない

「あ、あの、少し思っただんですけど」

なのはか、どうしたんだろう

「もしかしたら、仮面の人って何人かいるんじゃないんでしょうか」

ほお、複数犯か、仮面なんていくらでも調達できるし、外見なんて変身魔法を使えば簡単に変えられる

「うーん、それは考えにくいんじゃないかな」

会議に参加してくれているリーゼアリアさんだ

「えっとね、まず、なのはちゃんクラスの砲撃をデバイスなしで受け止めることが出来る人なんて、同員でもほとんどいないのよ、それに加えて剣介君を体術で圧倒する仲間や、管理局のセキュリティを突破できるほどのハッカーがいる犯罪組織なんてあったら、もっと大規模な事件を起こすと思う」



「それもそうか、ただ、単独犯でないという視点は面白いと思う」

「なら、次は対策をどうするかだ、現状前線に出張る人で蒐集されていないのは俺とクロノにアルフとユーノだ、俺の場合はリンカーコアがあることすら気づかれていないようなので除外する」

「ここで考えるのは、もし俺が仮面ならどうするか、不意打ちだろう  
夜、夜道を一人で歩いているときなどに後ろから攻撃を加えるのが  
一番安全だし手軽だ」

「これの回避方法としては、四六時中誰かと一緒にいることだ、ユーノに関しては無限書庫でリーゼ姉妹のどちらかが常にいるし、アルフも基本的にフェイトと一緒にいるから大丈夫だろう、問題はクロノだ、単独で色々と捜査しているので一番危ないかもしれない、とはいっても俺たちが操作を手伝えるわけではないので、せいぜい注意してくれというしかないが」

「アースラも戻ったことだし、拠点はアースラに移しますね」

「まあ、それは当然なんだけどフェイトはどうなのだろう、ほとんど蒐集されていないとはいえ、リンカーコアがダメージを負ったことは確かだ、今も気を失っているし」

「フェイトさんなら大丈夫ですよ、私たちが責任を持って看病しますからね」

「それなら大丈夫だろう、なにせお義母さん予定の人だからな」

## SIDEクロノ

無限書庫に入ってから少し日数がたっている、ユーノは何か手がかりを見つけたようなので報告をしたいと言ってきた、やはりスクライアの一族はスゴい、年単位で搜索するところを数えるほどの日時でみつけてしまうんだから

「まず、闇の書っていうのは本来の名前じゃない、正式名称は夜天の魔導書」

まず、名前からして違ったのか

「本来の使用目的は、各地の魔法を蒐集するためのもの、力を持ったのは誰かがプログラムを改変したからだと思うそして、その改変のせいで機能が暴走しているんだ」

なら、転生と無限再生はそれが原因なんだろうか

「それは十分にありえるね

一番酷いのは、主への攻撃だ、一定時間蒐集がないと、主の身体を蝕み、集めたら速効で殺される」

ああそうだ、暴走して死んでいる

停止や封印方法についての資料はどうなっているのだろうか、それさえあれば対策が立てられる

「それは今調べているよ、でも、完成前の停止は難しいかな。

管理者権限という物があってね。書本体に認められなければそれが使えないんだ」

厄介だな、これが闇の書の永久封印が不可能と言われている要 因か

僕の父、クライド・ハラOWNは闇の書の事件で殉職した、因縁めいた事は感じるけど、だからどうだったことではない、僕は正義の味方を目指す者として、闇の……夜天の魔導書を含めて皆を助けたいだけだ、そのためなら何でもしよう

「なのは、ケンスケ!!」

「フェイトちゃん!!」

久しぶり……というほどでもないけど数日振りだ、これまでは療養も兼ねて本局の方にいたからな、俺らも会いに行きたかったけど、士郎さん相手に嘘を突き通せる自信がなかったからやめた

「あの……ケンスケが助けてくれたんだよね、ありがとう  
その、すごく嬉しい」

助けたといっても最初の部分だけだな、後は魔術のリバウンドでふらふらしてたから仮面の男にやられたが

あの戦いはシグナムにお礼を言うべきだよ

「フェイトちゃん、もう身体は平気なの？」

見た限りでは健康そうだが、髪の手やもいしスッキリとした顔をしている鼻は……濡れてないな犬じゃあるまいし

「うん、ケンスケのおかげで魔法も問題なく使えるよ」

そりゃよかった、それならば成功というわけだ、もう狙われることもないから安心して勝負に臨めるし、俺としても仮面に的を絞れる

そんな感じで学校に着くと、さすがが勢いよく俺たちのところにきた

「びっしたのよ、さすが」

「あのね、けん君が前にあって、話もした八神はやてちゃんが入院しちゃったらしいの」

はやてが入院か、病状が悪化でもしたのかな

「それでね、放課後にお見舞いに行かない？」

今日は、俺の修行もなのはの修行もないな

アリサも平気みたいだし、フェイトも行きたがっている、なら皆で行こう

真っ白な壁で囲まれた病院は気が滅入る、しかも小児科病棟だからうるさいことこの上ないしな

「えっと……あ、ここだよ」

病室についたようだ、確かに八神はやてと書いてある、小児科病棟で個室って凄いことなんじゃなかるうか

トントンとノックをすると、中からどろどろの音が聞こえてきたので皆で一斉に入った

知らなかったのかよっぽど嬉しかったのか、はやては満面の笑みだ、女の子はやっぱり笑顔が一番似合うよ

「すすずかちゃん、けん君、皆ホンマにありがとうな」

うん、俺の中で少し心配だったフェイトも問題なく話せている……  
これは……視線？

後ろの方向からきているということは家族の人が担当医の人だろうか、いや、これは受けたことがある視線だ、だれだっけな、確か最近にも受けた記憶があるんだが……思い出せねえなあ、まあ危害を加えるつもりがないのなら俺もどうでもいいけど

「ねえねえ、はやてちゃんって甘いお菓子好きかな」

「うん大好きや」

初対面にも関わらず盛り上がったってな、なのはがフレンドリーなのか二人ともフレンドリーなのか、後者だろうな

うん、やっぱり視線が気になるぞ、ちょっと調べてみるか

お手洗いといって病室を抜け出した、そうすると不自然なサンングラス姿で不自然に去っていくこうとする亜麻色の髪をした女の人、こいつだな

「ちょっと屋上まで来い」

後ろにピッタリと張り付いて小さな声で脅しをかけた、相手の女性は一瞬びくりと身体を震わせた後しっかりと屋上に行ってくれた

今日は風が強い、シーツが飛ばされなにか心配になるほどだよ

「で、私に何のようですか？」

いやいや、今更それかよ、さすがに俺も正体がわかっているんだが

「ふ〜、くんには……シャマルさん……で合っていましたっけ」

そういうと、観念したようにサングラスを取った、そこから現れたのは美人のお姉さん

「そうです、確か石神君ですよね」

ああ、あってるね、そんなことはどうでもいいんだけどな

「単刀直入に聞きます、あなたたちの主は八神はやてですね」

「……だったら、どつするんですか？」

「特には何も」

「え!? ああ、何もって……管理局とかにも」

まあ、そりゃ驚くか、俺としては管理局はもちろん、なのはにも言うつもりはサラサラない

「あ、大変嬉しいのですが……何ででしょうか？」

「簡単ですよ、シグナムに伝えておいてください」

俺は嘘もつくし約束も平気で破る、だけど、借りだけは絶対に忘れないってね

だから、ここで俺と会ったことは忘れてください、俺もあなたたちの主がはやてだってことは忘れて、今まで通り何も知らない敵になりますので」

シグナムは借りを返さなくていい、というか借りだと思わなくていいと言っていたが、俺はそんなことは無理だ、だから偶然見つけてし

まった今回だけど、このことは忘れるという事で貸し借り無しということにしたかったのだ

「えっと……あの、こんなこと聞くのは失礼なんでしょうけど、本当に大丈夫なんでしょうか……いえあの、信用してないという事では無いのですが……万一ということがありますので」

そりゃ心配だろうけど、強制するようなものが何も無い以上、信用してもらおうほかない

「……では、あなたを信用します、ありがとうございます石神君」

「俺たちには何もなかった、そういうことでよろしくお願いします」

それだけいって、強風が吹く屋上を後にした、さてさてなのは達になんて言い訳しようかな





というわけだ、クソ忙しい時にこれをやられちゃ対応出来ないので名札とかを作る係になっている、たぶん、なのはは運動の才能を全て魔法に持って行かれたのだろう

まあそういうわけで、イブや本番は楽しめるわけが無く、次の日はグロッキー状態なのでイブイブ、つまり今日がプチクリスマスなのだ、いつもは家族だけだけど、今年はせっかくだからフェイトも誘おうという話になったというわけ

そうしたら、やたら桃子さんが張り切ってしまって、今に至る

テーブルの下ではアルフが骨付き肉を食べている、わざわざ小犬モードにした意味がないと思うのだけれど、まあいい

ユーノはいつも通り美由希さんに捕まって色々食べさせて貰ってる、たまにこつちを見るけど無視だ無視

「そういえば、フェイトちゃんは今年のクリスマスイブはご家族と過ごすのかい？」

リンディさんの家に来てから初めてのクリスマスイブか、楽しいだろうな

「はー……」

嬉しそうな顔をしているね、最近はシグナム達もあまり姿を見せないから、リンディさんやクロノは警戒を強めている……とはいってもクリスマスイブくらい帰ってくるだろう

「どうしてで、恒例イベント『プレゼント発表会』!!」

どこの家でもするだろう、家族へのプレゼントを発表するというわけだ、クリスマスならではの行事で意外と皆気合いが入っている、なのはなんてかれこ2ヶ月前くらいから準備をしていた気がする、ちなみにルールとして、自分より年下にしかプレゼントしてはならないというがあるので、土郎さんは何も貰わずあげるだけということになる、まあどうせ、高町家+俺+フェイト 土郎さんで土郎さんへのプレゼントを用意しているので関係ないが

俺は服や図書カードをもらった、正直ね、最近服のレパトリーがなくなつて困つてたからありがたい、だつてバビロンに入っている服を見ると、趣味の悪いワカメが入つてそんな服やら、飾り気のまっつたくない服、あとはメイド服やら神父の服など、どうみてもコスプレにしか見えないものしか入っていないんだもん、どうにか子ギルが着ていた服は着れたけど

そして、重要な事、年下にしかあげてはいけないので、俺となのは、それにフェイトは渡す相手がないのだ、ならば何故なのはは2ヶ月も前から準備していたのか、このパーティーが終われば分かるけどね

「お父さん、これは皆からだよ」

「ふ〜、年下だからと言つてもダメなのだろう、ありがとう、大切に使用させてもらつよ」

そつだ、だつて俺たちの年齢を合計すれば軽く土郎さんの年齢を超える、発案者は桃子さんで、お金はなのはとフェイト以外の皆が出した、買ってきたのはフェイトで渡すのはなのというわけだ

「じゃ、最後にクラッカーを鳴らして終了としますか」

皆で持って、せーの

「メリークリスマス!!」

パーンとはじける音とともに色とりどりの吹雪が舞い、クリスマスパーティーは閉幕した

で、その後、なのはの部屋で俺たちだけのプレゼント交換会

「じゃあ……私からいくね、リンディ提督から教わって作ったんだ、はいなのはケンスケ」

フェイトがくれたのは手袋だった、柄も色もなのはと同じ、ペアルックかと思ったがフェイトも同じ物を持っているのでトリオルック? になった

「ありがとうフェイト、あったかいよ」

なのはも嬉しそうだ、アリサやずか以外からもらうのもあまりない経験だろうからな

次はなのはかな

「えっと、フェイトちゃんにはこれ、メリークリスマス」

フェイトにはマフラーのようだ、白のマフラーがフェイトの金髪を引き立てる、なるほど、センスがいいな

「えっと、その……ありがとう、凄く嬉しいよ」

「次はけん君、メリークリスマス」

俺には黒地に赤がかかったセーターだった、そっか、これを作るために2ヶ月も前から準備をしていたのか、ありがとうなのは

最後は俺か、心のこもったプレゼントが出来るほどの裁縫技術とかはないので職人に頼んだ、まあそれなりに金額はかかったけど、そこは黄金律Aの英雄王が貯えまくっていたので、ぶっちゃけ銀座と新宿と渋谷を丸々買っても余裕で余るほど……全世界の国家予算よりも多いんじゃないのだろうか

だから失敗は無いと思うけど……結構自分のプレゼントをあげるって緊張するな

「えっと、フェイトにはこれだな」

取り出したのネックレス、美しい黄金の輝きをもった宝石、喜びや社交性などの宝石言葉をもらった石、トパーズで造ったネックレス

ブルートパーズにしようか迷ったけど、やっぱりフェイトは黄色かなど、で、反応は

「……………」

あれ？ 無言だな気に入らなかったのか……そうでもないか、顔は真っ赤だし目は輝いている

「あ、あの、ケンスケ本当にこれ」

当然、プレゼントするために造ってもらったんだから

「じゃあ、つけてやるっか」

「ええ!? そんなわ」「いいから」……はい」

後ろから鎖を回す、髪が長いのでちょっとあげると、女の子特有の良い匂いがする、フェイトは肌が白いから真っ赤になると分かりやすい

「はい、出来た」

カチャツと手にとって宝石を見て微笑む、なんか絵になるな

「えっと、ありがとうケンスケ」

いえいえ、次はなのはか

「なのははこれな」

取り出したのは指輪、不思議な宝石で、太陽や蛍光灯のもとでは緑色に、白熱灯では赤く光る、高貴、情熱を意味する宝石、アレキサンドライトを使った指輪

「え……うわぁ!! こんなプレゼントをくれるの!?!」

まあ、確かに小三に贈るものではないかもしれないけどな、レイジングハートはネックレス型だからちよっどいいかなと、なのはにもはめてあげないとな

「なのは、手をだして」

差し出された左手を割れ物を扱うようにそっと取り、その細くて綺麗な小指にそっとはめた

小学生の小さい手には少し似合わないけど、可愛いからよしよしよ  
う

「あの、けん君ありがとう、すごい嬉しい」

顔を赤らめて俯くなのはの頭をそっと撫でた、ちよつとやりすぎた  
感はあるけど、まあいいだろう

バイブレーションが鳴って、メールが来た事を知らせてくれた、差  
出人はすずか、内容は明日の事についてで、はやてにサプライズパー  
ティーをしようというもの

まあシグナム達に会う危険が無いかと言えば、ガンガンにあると思  
うけど、俺ははやてが主であることなんざ知らないから関係ない

だからすずかには了解と伝えておいた、サプライズプレゼントか、  
どうせ手作りの何とかだろうから、手伝える事があれば手伝おう

やべえ眠い

昨日なのは値札作りを手伝っていたら、なのはが何時の間にか寝てしまって、俺が一人で作ることになったのだ、別にそれはまだいい、なおかつ俺に寄っかかる形で寝てしまったので右手が使えなかったから作業時間が当社比60%増しになったのだ、必死に左手だけで作り終えて、時間を見たら午前3時、そこからなのはをベッドに移して寝たけど、俺の体質のせいで2時間しか眠れなかった

「えっと、けん君大丈夫？」

「どうしたのよ、ものすごい眠そうだけど」

うーん、大丈夫じゃないかも、とりあえず授業は睡眠だな

バスに座りながらうつらうつらしていると、アリサがなのはの指輪とフェイトのネックレスに気がついた、どうしたのか聞いてなのはから話を聞いた後、わたしたちも欲しいと言われたので作ることにした、まあ俺は頼むだけけどね

「……………んすけ……………石神剣介」

何だよ、俺の睡眠を邪魔するやつは……………って先生か

「今は授業中だ、この問題を解いてみなさい」

国語か、なにになに？ この文章とその文章の違いを述べなさい……………  
か

「この文章は長くて、その文章は短いです」



「真面目にやらんか!!」

うわぁい、怒られちった

まあそのあとは真面目にやって睡眠したから何も言われなかったけど

お昼を食べながら今日の計画を練る、通り道にあるぬいぐるみ屋さんでぬいぐるみを買って、そのあと行くところになった

「どんなぬいぐるみさんが良いのかな? フェイトちゃんはどう思う?」

「私は……犬か狼がいいと思うな、ケンスケは?」

うーん、はやてか……とにかく可愛い系としか思いつかないな

「じゃあ、犬のぬいぐるみにしようよ」

すずかの一声で決まった

早速、放課後買いに行く、すずか達行きつけのお店みただけだ……場違いだな俺

生前でもここまでファンシーなお店に入った事はないので場違い感がすごい、たぶんアリサはワザとで他は天然だろう、しっかりぬいぐるみって色々種類があるな……ウーパールーパーのぬいぐるみを買う人はいるんだろうか

「元気だな」

ワーキヤー騒いでる皆を見てるだけでお兄さんは十分ですよ、フエイトもすっかり騒いでるし

ポフツと音がして隣りに誰かが座る気配

「じゃはは、ちょっと疲れちゃったかな」

なのはか、こいつも相当頑張ってるもんな、今もレイジングハートによる魔力限定は行っていて、その限定率は30%、疲れるにきまってる、だからこそ睡眠時間とかを増やさせているけど、それも限界があるし

ちなみに言うと、戦闘の時はリミッターを外しているのでやっぱりヴォルケンリッターは化け物だと思う

「時間まで寝てていいよ」

たぶん、どんなに寝ても寝たりないのだろう、だからといって訓練をサボったり、学校で寝たりはしないので疲れは溜まる一方、俺も気をつけてはいるが限界はある

「えっと、じゃあ、よろしくお願いします」

そう言って、膝に頭を乗せた……こんなちっこいのが命がけの戦闘をしているんだよな、今くらいはゆっくりとしてほしいものだ

「あれ、なのはは寝ちゃったんだ」

可愛い子犬のぬいぐるみを持ったアリサ達がやってきた……  
ちょっと待て、なんで全部で五個あるんだ？

「はあ、いいよ、置ってますげる」

わあ!! っと歓声をあげた、まあこの程度なら全然構わないしな

なのはをおぶって席を立つ、えっと何円だ? OK分かった、さらば諭吉!!

「ありがとうございました」

しかし、俺の格好がものすごい、なのはを片手でおぶって、もう一方の手で4人分のぬいぐるみを抱えている

「手伝うよ、ケンスケ」

「私も手伝おうか?」

優しいなあフェイトとすずかは、それに引きかえこのシンデレラは

「誰がシンデレラよ!!」

皆の視線がアリサに移る

「じゃあ、シンデレラって言うな」!!

弄りがいがあったて可愛いよ

「でも、本当に手伝おうか?」

大丈夫、この程度まったく問題ない

そろそろ病院のはずだから、なのはを起ここそうかなと思って横を見るとすぐなのはの顔があった、かなり焦ったぞ、まあ好都合ではあ

るな

「起きるなのは〜」

そつと声をかけると、大きな眼が開いてー

「ふえ…………おはよ〜けん君」

あれ、叫ぶの前提だったんだけどな、珍しいこともあるもんだ

そのまま降ろして歩こうとするけど…………ええい重いわ!!

なのはが寄りかかって歩きにくいと思ったらありやしない、しょうがないから起こそうと思ってほっぺたをグニグニしてみると

「じゅ〜…………じゅみゅ〜」

どこの猫ですかあなたは、面白いけどさ

「完全に寝ぼけているわね〜、ちょっと賢いなさい」

なのはに何か言っているな…………うお!! 真っ赤になったぞ

「なあアリサ、お前何言っただんだ?」

「ふぶん、ちょっとね〜」

本当に何を言っただらろう…………次回からの参考にしたいぞ

病院についた、やっぱり病院の白って少し気分が暗くなるよな

「えっと、たしかはやての病室って」

皆でエスカレーターに乗って病室の前まで行く、さすががドアを叩いて、部屋に入ると……やっぱりいたか

シグナムにヴィータ、シャマルもいる……ザフィーラはいないが

「ねえ、どうしようっけん君」

まあ……ここでモジモジしていても変な人だしな、俺ははやてに渡しますよ

「「メリークリスマス!!」」

なのはとフェイトはやっぱり言えなかったか、まあシグナム達の前ならどうしようもないか

「なのは、フェイト、どうしたの?」

不思議そうなアリサとすずか、それにはやて、ヴィータは無茶苦茶睨んでくるし、シグナムは何考えているのか分からない表情だ

「え、えっと、服を預かりますね」

シャマルさんが微妙な空気を脱しようとして声をかけてくれた、俺とフェイトは上着を預かってもらった

「……………通信妨害ですね」

そういえば念話を通じないね、誰かに念話をしようとか考えていなかったもんな

「あの、お見舞いをしてるかまわらないでしょうか」

「……かまわない」

やっぱりはやての事を一番に考えているんだな

「えっと、その、そんなに睨まないでほしいな」

「睨んでねーです」

今度はなのはかってヴィータの顔が恐いな

「石神、なぜ私たちに連絡をくれなかった」

俺は言ったはずなんだけどな、あなたたちと会った事は忘れるって、だから別にここに来たのもはやてが主だと知らない俺だ

「そういう意味だということとは分かっていたが……もう今となっては無意味な事か」

そおそお、これからが大事ってね

「こうなった以上、もう管理局に隠し通すことは出来ませんよ」

「分かっている、今はそれを考えているところだ」

もう俺にはどうすることも出来ないしな、高見の見物をさせてもらおう……ってことではやてと遊ぼうって

「久しぶりだな、元気だったか？」

「けん君も元気そうやなあ」

うーん、見た限り体調はやっぱり悪そうだが、闇の書が原因なのかな、前にクロノから聞いた夜天の魔導書の改変、だからヴォルケンリッターたちは分からないのだろう、だとすれば止めるしかない、もはや言葉でどうにかなんて領域は超えたから『お話』でな

「「さようなら」」

ということではやてと遊んでもう夜になったので帰る時間、翠屋は戦争状態だろうから早く帰ってあげたいけど、そういうわけにもいかない

途中でさすが達と別れて、もう一度病院に戻る、屋上に行くと、シグナムとシャマルがスタンバっていた

「完成までは間近……邪魔立てするならば主の友人でも……斬る！」

そりゃそうだよな、こいつらの悲願だもん

「ちょ、ちょっとまってくだ」静かにしろ、なのは「……けん君」

「シグナム、もはやこちらの話は嘘としかとらえられないでしょう、うりゃああああ!!」「ヴィータか」

なのはがシールドで防ぐが、レイジングハート経由でないシールド

だから防ぎきれぬわけもない

「きゃあああ!!」

「なのは!!」

っと、危ない危ない

飛ばされたなのはを抱き止めてた……ってヴィータお前、火はない  
だろう火は

いきなり爆発が起きて、なのはと共に火に飲まれる、さっさとバリ  
アジャケットを着ろって、俺が熱くてたまらねえよ

なのはが着たのを見て火から逃げ出した、なのはは炎の中から悠然  
と出てくる

「……悪魔め」

ヴィータにとっちやそう見えても仕方ないか、俺としてはいきなり  
火をだすお前も悪魔だけどな、俺は生身だぞ

「悪魔でいいよ……悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらっつから」

こうして、最終決戦が始まった



## 第三十三話

前回のあらすじ：最終決戦が始まります

上空では、桃色と赤の閃光が、地上では金と紅の閃光がそれぞれ舞っている、それはとても美しく、時々仮面の存在を忘れてしまっただが、たぶん仮面は現れるというか、もっこの場にいる気がする、完全に予感だけど、だからこそ見逃さないように集中しながら見ていないといけないな

フェイトとシグナムの戦いは、なんと言えばいいか……とにかく、構図としては守るシグナムと攻めるフェイトとなっている

これだけ言えば、さもフェイトが有利そうに見えるが実際は違う、フェイトが攻める理由、それは一発でも当たれば即敗北だからだ、今のフェイトはただでさえ薄い装甲を更に薄くして戦っている、理由は単純で、そちらのほうが素早く動けるからだ

だが、それがハイリスクだということは幼稚園児でもわかる、軽い

攻撃でも致命傷になりえるのだ、だからシグナムはカウンター狙いの戦法だ、フェイトとしては短期決戦を狙いたいだろう、そうしなければいずれは体力が尽きる

なのはとヴィータは単純明快だ、とにかくなのはのレンジにならないようにヴィータが攻め立てて、なのはが防ぎつつ距離をとろうとする

こちらは逆にヴィータが早く決めたいだろう、理由はフェイトと同じで、スタミナが切れたところでなのはの砲撃は必殺だろうからな

さて、俺は何をしているかというと、空中で二人を見守っているだけだ、この状況ではやることもないからな

フェイトが鎌を構え直す、シグナムはこれまでと何も変わらないカウターの構え、前回の戦いで鞘を使って戦える事も分かったから、フェイトとしてはやりづらだろう、いつシグナムが鞘を抜くか分からない以上、こちらにも神経を使わなければならない、そうすれば攻撃も鈍ってしまう

ザワッ

今、何か聞こえたな、気のせいかもしれないが、少しでも可能性があるなら潰さなければならぬ、バビロンを展開して意識を集中させる

どこだ……どこに隠れているーそこだ!!

展開させていた宝具をギルがやるように射出する、飛んでいく物はいずれも死の象徴ばかり、慈悲を感じさせない死の嵐が何も無い虚空に向かって飛んでいく……さて、防がなければ死ぬぞ

「仕方がない……か」

思った通り仮面の男が現れてプロテクションを張る、さすがはなのはの砲撃を軽く防いでみせた男だ、宝具の嵐を何もなかったかのように防いでいる

ならば、飛んでいる宝具を複製して量を増やす、そして、相手が処理している間に捕らえさせてもらおうぞ

「……な!？」

初めて聞いた狼狽の声、それはそうだろう、飛んでいる宝具を全て2倍にしたのだ、いきなり圧力が2倍になれば誰だってビビる、その隙を俺は逃さない…… 終わりだ

「……では終われないのでね」

嘘…… だろ

なのはの想像が当たったというのか、まさか…… 一人だと!？」

ドゴッ!!

何とかガードするも、体勢が不安定だったことと何も持っていないことが災いして思いっきり蹴られて吹き飛ばされる…… ウザりたい

バビロンから斧剣を取り出して複製し、あいつらにたたき落としてやる

「君は厄介だ、これ以上自由にはさせないよ」

腹にバインド？ 何の意味ガアアアアア!!

「特製のバインドでね、君たちの世界でいう象とやらも昏倒させられる電流を流すのさ……といっても、もう聞かえないと思うがね」

……き……こえてるぞ、きこえてる、だけど……通信が……使えない

「じゃ……こよは……フエ……イト……気をつ……けりよ」

呂律が上手く廻らない、思考がぼやける、囁くような声しかでないから誰も気づかない……どうすればいいんだ

「ふむ、まだしゃべる元気があるのかね？」

「ガアアアア!! ……ウグアアアア!!」

意思とは無関係に痙攣する身体

「やりすぎたか？ まあいい、もう少しの間動かずに待っている」

顔を持ち上げられて、そう吐き捨てられる、せめてもの抵抗だ……  
くらくえ

唾をはいた、痙攣しているから上手く飛ばないが、それでも仮面の顔にあたる

「これ以上抵抗してもロクな事にはならないぞ」

腹を蹴られる、六重のバインドをかけられて青いケージのようなものに閉じ込められた

「さて、そこで君の大切な者がどうなるか見ているがいい」

「うっ……うっ……」

もはやうなり声しかでない、それでも懸命に仮面を見つけることを求めた、今、出来る事を探せ、何かをしようとしている以上、治療をして10分も時間をとられたくはない、『アヴァロンすべて遠き理想郷』はこの身体じゃ出せない……自然回復を待つしかない……か

この状況に気づいている人は誰もいない、何とかして仮面がいることを知らせたいが、シャマルの通信妨害の影響で誰にも念話を通じない、そうこうしているうちに、なのはが捕らえられた

「……一人とも!!」

バカやろう、策もなしに飛びかかってくるやつがあるかよ、案の定、敵に捕まった

目を閉じて天を仰ぐ、このまま終わるのかよ

「ぐっ!?!」

「なあ!?!」

「きゃめ!?!」

叫び声にもう一度目を開けると、シグナム、ヴィータ、シャマルが捕まっていた

どっぴうことだ? しかもリンカーコアが露出してる……まさか

!?

「さて、最後の余興だ、君たちの魔力を戴くよ」

予想外だった、まさかヴォルケンリッターのリンカーコアを蒐集することで闇の書を完成させるとは、だが、それ以上に仮面達の目的が分からない、破壊をもたらしたいにしても、何故ここ海鳴で解放させる必要があるんだ、ここは俺にとって優しい街だ、こんな俺でも人として楽しく……優しく迎え入れてくれた街、この街を焦土とかす分けにはいかない

そうは思っている、身体は相変わらず動かないし、なのはやフェイトも俺と同じように捕らえられている

「グ、グウ……アアアアアア!!」

シグナムの蒐集が完了した、元から魔力で身体を維持していたので、その魔力がなくなれば現界できるわけがなく消滅した

「ク、アア……イヤアアアア!!」

シャマルも同じように消えていった、残されたのはまだ温もりを宿した服だけ

「なんで……なんで消えなきゃならないんだよ!!何なんだよおまえ等は!!」

「どりゃああああ!!」

ヴィータが蒐集される直前、ザフィーラが飛び込んできた

「……君か」

結局シールドで防がれて捕らえられるザフィーラ

「ガア……グウアアアア!!」

「ザフィーラ……ザフィーラ!!」

ヴィータの叫びも虚しく、ザフィーラは消え去った……見てることしか出来ない自分が不甲斐ない

「……なのはとフェイト、それに剣介は大丈夫なのか？」

「なのはとフェイトは四重、剣介は六重のバインド、それにクリスタルケージだ、抜け出すまでに数分はかかる」

「十分だ」

な!? 仮面達なのはとフェイトに姿を変えた!?

「闇の書の主の目覚めの時だ」

声まで完璧になのはだ、しかし、何の意味が

「因縁の……終焉の時だ」

バインドで十字架に張りつけられているようなヴィータの両隣に立っている仮面達、そこに魔法陣があらわれた……転移魔法だと?

「あ……なのはちゃん? フェイト……ちゃん?」

そういうことが、初めからそれが狙いだったのか、卑劣だな……むちやくちや卑劣だよ

「君は病気なんだよ、闇の書の呪いって病気」

「もうね、治らないんだ」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われることは、ないんだ」

それは、どれほどはやてにとつて痛い言葉なのだろう、親をなくし、病気になるって、それでも懸命に生きてきた、そしてやっと家族ができて、でも、それすらも奪われて

「そんななんどつでもええ、いいからヴィータを放してえな」

強い、とても強い子だ、だがそれに仮面達は追い討ちをかける

「この子ね、もう壊れちゃっているの」

「私たちがこつする前にとつくに壊されていた闇の書の機能を、まだ使えると思ひ込んで無駄な努力を続けてた」

「こいつらの努力は間違つた努力なのかもしれない、でも、お前らにそれを言う権利があるのかよ」

「無駄ってなんや!!皆は……うちの家族はどこにいるねん!?!」

顎で促されて見た物は、ただの布切れ、3つ転がっている布切れ、でも、ここまで長い時間を一緒に過ごしてきたはやては、それが誰のだからすぐにわかる、これでもかというほどに顔を歪ませた



「壊れた機械は役にたたないよね」

「だから、壊しちゃおう」

あと残っている人はヴィータだけ、その意味をすぐに理解する

「やめて……やめてや!!」

いつものカードをだす、仮面達、それがなのはとフェイトの姿だから違和感がある

「やめてほしければ」

「力づくで、どうぞ?」

「なんでや!?なのはちゃん!!フェイトちゃん!!なんでこないなこと  
「!!」

無駄だとわかっていても、聞くしかない言葉

「ねえ、はやてちゃん」

「運命って、残酷なんだよ」

「やめ……やめて……やめてええええ!!」

閃光がほとばしって、ヴィータの姿が……消えた

バキイイイイン!!

ケージを壊して宝具を飛ばす、二手に別れた仮面の、なのはのほうに追撃に向かう、手には短槍、不治の呪いのかかった禍々しき短槍

「いい加減に……死ねよお前ら」

身体に痺れはなく、しっかりと動く、これならば負ける要素がない

「なに、なのはの姿をしてるんだ？」

ぶっちゃけヴォルケンリッターがどうなるかと構わない、はやてだって可哀想とは思うけど、だからといって何かしてあげようとは思わない、こいつらを破壊する理由は一つ、俺の大事なものを愚弄したから

「てめえの薄汚ねえ身体で、俺の大切な一を馬鹿にするんじゃないやねえよ」

突く、突く、突く、突く、突く

全てギリギリのところでないなされるが構わない、反撃の隙を与えなければいいだけの話だ

「く……ぐう、ぬあ、くはあ……貴様、なぜそれほどまでにガアア!!」

なぎはらいが当たって仮面を吹き飛ばす、なのはの姿だからやりにくいと言えはやりにくいけど、あまり関係ない

しかし……確実に破壊するためには、こんなもんじゃ足りないな、あれをだそう

取り出したのは、Fate/Stay Nightにおいて一つしかない対城宝具、騎士王が使いし聖剣、豪華な装飾が施されているわけ

ではないが、見る物を圧倒させる

「待て、待て待て待て、やめる……やめてくれ」

『「エクス約束された」ー」

やめるわけないだろ？ 痛がる暇を与えないだけでも感謝しろ

「いやあああああ!!」

何だ？ はやての悲鳴？

「少し遅かったようだな、見る、あれが闇の書の主の姿だ」

あれが、はやてだと？ 髪は銀色で目は赤色、漆黒のスーツみたいなのを身にまとっている、変身魔法というわけではなさそうだし、はやての身体を乗っ取ったってところだろう

「いいのか？ なのは達が危険だぞ」

……ッチ、しょうがねえ、こいつを破壊するのはまた今度だな

「我は魔導書……力を……受けよ」

なんだありゃ？ 馬鹿でかい魔力球か、ってことは範囲攻撃系だな

「けん君」

「ケンスケ」

「フェイトはなのはの後ろに隠れる、なのはは俺の後ろでシールドを張って……『ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇』、『ロー・アイアス熾天覆

「う七つの円環」

取り出したのは絶対的な防御を持つ赤き盾と、『魔』を払う槍

「ディアボリッグ・エミッション」

禍々しき力の奔流が爆発した、槍で相手の魔力をかき消すが、それでも対処しきれない大規模な魔力を盾で防ぐ

「けん君……大丈夫？」

なんとかね、アイアスが2枚破壊されたけど防ぎきれる

「ケンスケ、離脱しよう」

フェイトがなのはを抱えて飛んでいく、俺もそれに倣ってビルの後ろに隠れた

「なのは!!」

「フェイト!!」

ユーノにアルフか、サポート役がいえくれるなら、かなり戦いやすくなる

よし、なら作戦会議だ、あいつを倒したらはやてにダメージはいくのだろうか

「消滅させさせなければ、どこまで追い込んででも大丈夫」

だったら、かなりの攻撃をしても大丈夫そうだな、俺とフェイトで近接戦闘をしかける、出来た隙をアルフとユーノがバインドで広げ

る、で、そこに砲撃をぶち込む、単純だけど決まれば一撃で落とせる  
くらいのダメージはあるはずだ

「了解」

黒い翼を生やしている闇の書と対峙する、横にはフェイト、二人で  
視線を合わせて一飛び出した

## SIDEクロノ

認めたくなかった、目の前のモニターに映っている人物を、でも認  
めなければならぬ、それが真実だから

不思議に思ったのは関係者として一応調べなくてはならないとき  
からだ、彼の交友関係からしてありえない友人、しかもその友人  
が死んでしまったから娘の援助をするなど考えられない

彼の目的は分かっているし、彼がしようとしていることは間違っ  
てはいないのかもしれない、でも、たった9歳の女の子を生け贄にする  
なんて、やってはいけないことだ、批判されてもいい、偽善だと言わ

れてもいい、それがクロノ・ハラオウンの正義なのだから

艦長にも話した、信じられない気持ちと、やっぱりか、といった気持ち混ぜられたら複雑な表情になっていたが、最終的な判断は捕縛だった

彼が黒幕だと仮定すると、たびたび出現した彼ら……いや、彼女達の目的にも、強さにも納得がいく、彼女達の強さは僕が一番よく知っているからだ

準備をする、全てを終わらせる……いや、僕のせいで続けることになっってしまうかもしれないな、でも、それならそれで構わない、いつか、誰もが幸福になれる方法を編み出してみせるから

「……クロノ君」

エイミー、彼女もびっくりしていたな、僕の気持ちを理解して、一緒に悲しんでくれる優しい人

「いつてくるよエイミー」

「うん」

短いやりとりで、出撃した

夜の街で、激しい戦闘がおこっている、周りを見ると、剣介がスターライトブレイカーを上回るような威力を秘めた剣を振りかぶった、彼は街なんてどうでもいいのかもしれないな

結局、剣介の宝具は発動することはなかった、はやてが闇の書の主として目覚めたからだ、なら、来たるべき時に備えて彼女達は転移するだろう

「なのは達は保ってくれるかな」

「保ってこれなければ困るんだがな」

計画がほぼ成功確實になったから彼女達は安心しているのだろうか、向こうに注目して後ろに気をくばっていない、だから、発動が遅いこの魔法も簡単に決まった

「な!？」

「ぐう!？」

「ストラクルバインド、使いづらい魔法だけどね、こんなときには重宝するよ……ほら、変身魔法も解除されるよ」

呻き声とともに変身魔法が解除されて現れた姿は予想通りだった

「クロノ……ちっくしよっ」

「どこで覚えたのかしらね……この魔法は」

「ほかならぬ君たちに言われたことだからね、一人でも精進しろって……ロツテ、アリア」

リーゼロツテ、リーゼアリア、ギル・グレアム提督の使い魔だ

「リーゼ達を使ったのはあなたですね……グレアム提督」

僕は、本局にあるグレアム提督の部屋にいる、外には武装局員が見張りをしている逃げ出すようなことはさせない

「ちがう!! 父様は関係ない、私たちが勝手にいいんだ、ロツテ……父様」

「クロノ、君は全容を掴んでいる、そうだろ」

11年前、闇の書の封印に失敗したグレアム提督は、独自に行方を探してきた、そこで見つけたのが、八神はやて、しかし、完成前の闇の書の主を抑えてもあまり意味がない、主を捕らえようと闇の書を破壊しようと、すぐに転生してしまうから

八神はやてが天涯孤独の身である事を知ったグレアム提督は、監視の意味も含めて生活の援助を申し出た

「両親に死なれ、身よりもないあの子だ、悲しむ者は少ない、ただ、眠りにつく前に……多少なりとも幸福にさせてあげたかった……偽善だな」

僕には、それを否定することは出来ない、いくら偽善でも、彼女を想う気持ちは本物だ

「封印の方法も分かっているのだから」

主ごと凍結させて、次元の狭間か氷結世界に閉じ込める、そうすれば転生機能は発動しない

「これまでだってアルカンシェルで消滅させてるんだ!!それと何が違



うって言うんだよ」

違うんだよロッテ、それは違う

凍結可能である覚醒前の数分間、その時では、闇の書は凍結される  
ような罪を犯していない

「そんな……そんなくならない法のせいだ!!」

「クロノ、法を守るのもいいけど、法に縛られてはいけないんだよ」

「これ以上話しても、どっにもならない

席を立って出口に向かう

「クロノ」

提督に呼び止められた

「アリア、デュランダルを」

「なぜ!?!」

「私たちにもうチャンスはないよ、持っていたって役にはたたん

クロノ、氷結の杖『デュランダル』、私の魔術の知識が混ぜ込まれた  
ものだが、君なら使いこなせるだろう」

これは、グレアム提督の思い、これまでの11年間の結晶、これに  
最良の形で応えなければならぬ

さあ現場に行こう、この悲しみの輪廻を止めるんだ

SIDEOUT

「はああ!!」

「せやあ!!」

俺とフェイトとでコンビネーション攻撃をしかけているが、なかなか隙をつくらないな

【フェイト、正面から斬り込んで鏢迫り合いに持ち込んでくれ、その時に隙をつくらせる】

【了解】

話したとおりにフェイトが鏢迫り合いに持ち込んだ、体格や力で負けるフェイトでは数秒も保たないけど、俺には十分、莫耶を敵の背後に投げて干将の力で引き寄せ、もちろん敵はその程度軽々と防ぐが、ここからが本番、正面から斬り込むと同時に敵の両横から複製した剣を射出する、だがこれすらも防がれたので、最後の仕掛け、上からの射出をする、ここまですればたまらず動きを止めるので、ここでアルフとユーノの出番だ

二人のバインドが四肢を封じる、しかし、敵の「砕け」の一言で砕け散る、まあそれも作戦通り、ここで時間をかせげば

「デイベイーンー」

「サンダーー」

『偽（カラド）』ー」

高火力の攻撃が放てる

「バスター!!」

「スマッシュャー!!」

『螺旋剣（ボルグ）』!!」

「盾」

「これも簡単に防いじゃうのか……かなりの高威力宝具なんだがな

「刃を放て、血に染めよ」

敵の回りに朱い、槍の穂先のようなものが大量に出現する……まずい、複製!!

「穿て、ブラッディードガー」

ドゴオオオン!!

とつさに複製した斧剣で四方を囲んだが……なんちゅう散弾銃だよ、魔導師ならバリアジャケットがあるけど、俺が当たったら死ぬぞ

「咎人達に滅びの光を」

かざした手の前に魔法陣ができて、魔力が集まり始めた

「おいおい……スターライト・ブレイカーかよ」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

あれは、本気でまずいな……守りきる自信がないぞ、まあいい、ならば打ち勝てばいい

【全員、聞こえるか？ 今すぐ全力でこの場を離れる】

【あんたはどつするのさ？】

【俺は……スターライトブレイカーを打ち消す】

【そんな！ 無茶だケンスケ!! 絶対に出来ないよ】

【あう、そこまで言わなくなたって】

【冗談なんて言っていないんだよなのは、防御したってその上から蹂躪される!!】

【まあ、そういうなって、フェイト、俺を信じろ】

【信じろって言っても【フェイト】……ユーノ？】

【ケン、出来るんだね】

【……ああ、出来る】

【わかった、頑張って……皆、逃げるよ!!】

ありがとな、ユーノ、お前のおかげで助かった

「さあ、闇の書、どちらの火力が上か、勝負といこうや  
起きろ『乖離剣（エア）』」

『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』から取り出すのは、そこに納められていなければならない宝具、英雄王のアベレージ・ワンにして、最古の剣

それは、剣と呼ぶには不釣り合いな丸い金色の刀身で、この世が出来る前の地獄を表した赤が這っている、先にはドリルがついていて、魔力を巻き込むのだ

「貫け、閃光」

肥大化した魔力の塊が、今か今かと号令を待っている

「すごいな、素晴らしい魔力だよ、でもな、お前が使うのは星の魔力だろう、俺は、その星を二つに割った剣を使う、これに勝てはしないぞ俺を倒したければ……その三倍は持って来い!!」

『天地乖離す（エヌマ）』「ー」

地獄の象徴のような先端のドリルが唸りをあげる、それとともに魔力が辺りを抉る

「スターライト、ブレイカー」  
『開闢の星（エリシユ）』!!

莫大な力の奔流のぶつかり合いが結界を揺るがす、大地が、空が泣いているかのようだ

対決は、始めこそ拮抗していたが、すぐに『天地乖離す開闢の星』エヌマエリシユ』が上回った、だが、それは上回っただけの話でかなりの魔力が相殺されたので、闇の書にはほとんど攻撃が通っていない、まあ消滅されるよりは全然いい

【ン……ケン、大丈夫？】

【ん、ああユーノか、大丈夫、俺の勝ちだ、まあ攻撃自体はほぼ通っていないけどな】

【良かった……良かったよケンスケ】

まだ何も終わってないからな、気を引き締めないと

【……けん君、アリサちゃんとすずかちゃんに見つかっちゃった】

はぁ？ 何で？

【結界内に人がいて……それが二人だったの】

じゃあ、アリサ達は大丈夫だったのか？

【うん、それは平気、エイミィさんに頼んで転移してもらったから、でも……バレちゃった】

それはしょうがない、いつかはバレるものだ、それが早まったただけの話、だから今はーあいつを止めるぞ

【そのことなんだけども、エイミィによると、闇の書の主はやてだったか？ あの子に停止を呼びかけるってぞ】

それを聞いてすぐに、なのはが呼びかける

「闇の書さん、はやてちゃん!!聞いてください!!守護騎士を倒したの……私たちじゃないです!!」

「私は主の願いを叶えるだけ」

主には安らかなを、守護騎士を仇なしたものは……死を」

「闇の書さん!!」

「やはりその名で私を呼ぶのだな」

聞く耳をもたねえな、しかし、その名で呼ぶ? なら、夜天の魔導書か?

ドゴオオオン!!

うわっ、地面が割れて何だこれ? 虫?

変な虫みたいのが出てきて、なのはとフェイトが捕らえられた

「だがそれはどうでもいい、主の願いを叶えるだけだ」

縛られたなのはが、苦しげにそれでもしっかりと声をあげる

「願いを叶える? そんな願いははやてちゃんが願っているわけじゃない!!あなたは道具じゃないんだよ、はやてちゃんの言葉をしっかりと聞いてあげて!!」

「我は魔導書、ただの道具だ」

泣いている？ 心が通じるのか？

「でも泣いてるでしょ、言葉が使えるでしょ!! そんなのは道具じゃない、あなたは道具なんかじゃない!!」

「この涙は主の涙、私の物ではない」

二人を縛っている触手みたいなものを斬って、二人を小脇に抱える

「そんな顔で言ったって、誰が信じるものか!!」

フェイトの叫び

「あなたのだって心があるんだよ、叫んでいいんだよ、泣いていいんだよ!! はやてちゃんはそのにんえてくれる優しい子だよ!!」

なのはの叫び

「お前に言っておく、悲しいことを夢だと想うのは楽だ、とても楽だ、でもな、それに飲まれると現実でも飲まれてしまう、それはとても辛いことだぞ、分かっているても、もう引き返せないやつだっているんだ、でもな、はやてはまだ引き返せる、今ここに戻せるんだ!!」

俺の叫び

ゴトゴトゴト

地面から火柱が立ち上る

「早いな、もう崩壊が始まったか、私もじき意識をなくす、そうならば



すぐに暴走が始まる、そうなる前に主の願いを叶えたい」

闇の書が光って、俺達の回りに朱い槍が出現する

「闇に……沈め」

「ケンスケ!？」

「けん君!？」

痛いけど大丈夫だよ、お前らを上に放り投げた後、服を複製して回りに配置しまくったんだ、さすがに全部は防ぎきれなかったけどな

俺とフェイトが構える

「この……言っことをきけえ!!」

むちゃくちゃだけど、今は賛成だよ

バビロンからガウエイン卿が使ったと言われる剣を取り出す

『転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）!!』

突っ込んで、一撃決めてやる

「お前達も、我が内で眠るといい」

「おおおおお!!」

「はああああ!!」

俺たちの剣は魔法陣に止められて……な!? 身体が消える!?

「え……うそ」  
「な、んだと」

「フェイトちゃん!! けん君!!」

俺たちの身体が……消えた

## 第三十四話

前回のあらすじ：闇の書に取り込まれました

「……………きて」

声が聞こえる

とても懐かしい声

「起きて、お兄ちゃん」

目を開けると、そこは、俺の部屋だった

何から何まで完璧に、生前の俺の部屋だった

信じられない気持ちで後ろを見ると、彼女がいた

「あ……………やっと起きた、おはよ」「華音!!」「ふえええ!? ど、ど、どしたの

お兄ちゃん!? 何で、抱きついて……」

「華音……華音……華音……華音」

思わず抱きしめて、何度も何度も名前を呼んでしまっ、つやつやした黒い髪から、その細い身体から華音の匂いがする、もっと包まれたくて、更に強く抱きしめてしまっ、そんな俺を華音は優しく抱きしめてくれた

「どっしたの、お兄ちゃん? ……あの、怖い夢でも……見た?」

見てないよ、そんなものは見ていない、お前にまた会えたのが、嬉しいんだ

「お母さんが待っているよ……だから、その……下に行く」

……ちよつと待て、母さんが待っている? 俺と華音を?

「どっしたの、お兄ちゃん? 早く行く」

「あ、ああ」

階下に降りると、そこには俺の知らない、でも夢見た景色があった

俺と華音、それに父さんと母さんのご飯が並んでいる、しっかりとあるべき場所にあるべき物があるテーブル

「おはよう、剣介、冷めちゃうわよ、早く食べなさい」

ちよつとまで、今更ながら考えると不自然な事が多すぎる、一度洗面所にいって顔を洗おう

「……プハア」

冷たい刺激で完全に目が覚めた、だから色々な確認をする

俺の名前は？ 石神剣介だ

俺はどこにいた？ リリカルなのはの世界に転生している

どうしてここにいる？ 確か……闇の書に攻撃をしたら魔法陣に防がれて、そのまま連れてこられたんだ

じゃあここは？ ありえない光景がいくつも広がっているからな、たぶん闇の書が見せている夢のようなものだろう

よし、状況把握は完了した、フェイトも一緒に取り込まれたから、なのはが一人で闇の書と戦っているのか、大変だな、一応、皆にも聞いてみるか

席にもどると、皆は待っていてくれた

「あら、やっと戻ってきたのね、では、いただきます」

「「「いただきます」」」

「ご飯に納豆、お味噌汁に漬け物、完全に日本の朝食だな……聞かなきや

「ご飯中にうどん、皆に聞きたいことがあるんだ」

「……なあに？」

「じじは、この世界は現実じゃないよね、闇の書が見せている夢……違  
じじ」

空気が変わった、目を伏せる皆、聞かないほうがよかったのだろう  
か

「ねえ…… 剣介、確かにこれは夢よ、でも、ここで生きていくことは出  
来るのよ、家族皆で、とても楽しく」

そうだね、そして、それは逃げている事だね、だから俺は

「じじ、じじと一緒にずっと暮らそう」

この世界を受け入れた

SIDEなのは

「エイミーさん!!」

目の前の光景が信じられなかった、フェイトちゃんが、けん君が目

の前からいなくなってしまうた、二人は無事なのかな

【状況確認、フェイトちゃんと剣介君のバトルまだ健在!!

闇の書の内部空間に閉じこめられただけ、助ける方法現在検討中】

よかった、本当によかった、もし、もしもいなくなっちゃったりしたらなんて考えるのも嫌だもん

「主もあの子供達も覚めぬ夢に溺れる、それは永遠の快樂、永遠の誘い」

違う、そんなのではない、永遠なんて存在しないんだ、皆変わっていきんだ、それが良い方向でも悪い方向でも変わっていかなきゃ……ダメなんだから

「レイジングハート」

「カートリッジロード、アクセルシューター」

これ以上街を壊すわけにはいかないから、まずは闇の書さんを海上に連れ出そう、アクセルでダメージが通らなくても、誘導する事は出来る

魔力弾が闇の書さんの行く手を限定させる、たくさん弾をコントロールしなければいけないから疲れてしまう、それを分かっているから闇の書さんも弾を潰したりせずに誘導されているのだろう

「穿て、ブラッディーターガー」

あの放射状の攻撃だ、私のバリアジャケットはほかに比べて堅いらしいんだけど、それでも喰らってしまうと結構痛い、操作している弾で何発か消してみるけど、間に合わないからアクセルを放棄して

シールドを張った

しっかりとシールドを張ればあまり恐くない、わたしは距離をとって砲撃を構える、それを見た闇の書さんがすごいスピードでつっこんできた

何とかシールドを張ったけれど、構成が甘かったからなのか一撃で破れてしまった……もう一撃!?

「きゃああああ!!」

いつのまにか海上までできていたので地面に当たる心配はなくなっただけど、それでも痛い、でも、ここで弱気を見せちゃだめ、やばくなくても虚勢をはねって、前にけん君が言っていた

【リンディさん、エイミィさん、町をお願いします】

【大丈夫、局員が向かっているわ】

【それから、闇の書さんは会話が出来そうです、このままやらせてもらいます】

「いくよ、レイジングハート!!」

〔Yes my master〕

マガジンを装填する、残りは3本、18発、スターライトブレイカーを撃つチャンスくるかな

〔手段はあります〕

レイジングハート?



「エクセリオンモードです」

何言ってるの!? あれはフレーム強化したあとじゃないと使っちゃダメだっていわれてるんだよ、もし、私がコントロールに失敗したら……レイジングハートは壊れちゃうんだ

[call me……call me my master]

……わかった、わかったよレイジングハート

「お前も眠れ、この世は辛いだろう」

「辛いことはたくさんあるよ、でも挫ければいいわけじゃない  
私は皆を助ける、もちろんあなたも、それまでは眠れない、眠っちゃいけないんだ!!」

私……頑張るよ、レイジングハート

絶対に助けるという強い気持ちをもって、この言葉を口にする

「レイジングハート、エクセリオンモード、ドライブ!!」  
「イグニッション」

レイジングハートの先端が伸びて、槍みたいになった、力が溢れるのが分かる

「いくよレイジングハート!!」

そして、私と闇の書さんがぶつかった

SIDEOUT

SIDEフェイト

「ん……ふう……」  
「んは？」

目を開けると私は部屋にいた、辺りを見てみると、私には大きすぎるベッドで寝ている、横にいるのは誰だろうと思って見てみると、アルフト、私と同じ髪質、髪の色をした女の子が寝ていた

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよ」

信じられない声と単語が聞こえた、まだ小さかった頃によく聴いた声と、私にとっては忘れることの出来ない人の声

「ん……おはよおフェイト」

ガチャリとドアが開いて声の主が入ってくる、やっぱり……彼女は

「アリシアとアルフはまたお寝坊さんですか、フェイトを見習いなさい」

「……………むっ〜」

まるで、ずっと昔からこの光景が続いていたようなやりとりだ

「……………リニス？」

「何ですか？ フェイト」

やっぱり、この人はリニスなんだ

「アリ……………シア」

「ん？」

ああ、本当に信じられない、これは……………夢なのかな

「はあ、今日はフェイトもお寝坊さんのようですね」

「……………あはは」

人差し指を立てて言うリニスの言い方が懐かしくて、面白くてつい笑ってしまった

「朝ご飯ですよ、プレシアはもう待っています」

母……………さん？ まさか、母さんがいるの？ そんな、私は目の前で死ぬのを見たじゃないか、お墓も建てたじゃないか、そんな事が……………あるわけない

食堂に行くよ、本当に母さんがいた

「おはよ〜」

「おはよ〜プレシア〜」

「アリシア、アルフ、おはよう」

アリシアとアルフが駆けていく、私は姿を見ても信じられなくて、それ以上に厳しい言葉を言われるのが嫌で柱の後ろに隠れた

「ほら、フヘイト」

リニスに呼ばれたので出て行かざるをえなくなった、母さんを見ると、いつも眉間にあった皺はなくなっていて、優しい顔をしていた、まるでアリシアの記憶にある母さんみたい

「フヘイト、どうしたの？」

「どうも今日のフヘイトは怖い夢を見てしまったようです」

「……フヘイト、くらっじゃい」

まだ怖いけど……母さんに呼ばれたからいかなくちゃ、でも、こんなに優しい声で呼ばれた事なんてなかったけど

「フヘイト」

母さんに頬を触られて一気に血の気が引いた、でも、そうして見た目の前の母さんは……とても優しくかった

「怖い夢を見たのね、でももう大丈夫、母さんもリニスもアリシアも、それにアルフも、皆あなたのそばにいるわ」

「あ……ふ、うえ、うわああん!!」

その言葉が嬉しくて、そんな言葉をずっとかけてもらいたかったから、私は母さんに抱きついた、これまでの悲しみを全部吐き出すかのように、泣きじゃくって、抱きついた

それでも母さんは、私を優しく受け止めてくれた

アリシアと一緒に外にいたら、雨が降ってきた

「あー雨が降って来ちゃった……帰ろうフェイト……フェイト？」

「ごめん、もう少し考え事をしたいんだ、この世界がどういう世界なのか、もう気がついてしまったから」

「じゃあ、私も残ろうかな」

フェイトと一緒に、あ、ま、や、ど、り」

私の隣にアリシアが座った、だからだろうか、この疑問を聞かなくてはいけないと思った

「ねえ、アリシア、「これは夢……なんだよね」

何も反応を返さないから肯定だとわかる

「あなたが生きているのなら私は産まれてこないから」

ちよつとの沈黙の後、アリシアが口を開く

「そつ……だね」

短いセリフだけど、悲しそつだった

「母さんも、私には、あんなに優しくは……」

「優しい人なんだよ、優しすぎたから……壊れちゃったんだ」

そつだよね、やっぱり母さんは優しい人だったんだ、ケンスケから聞くのとはまた違う、当事者からの言葉だから、更に胸をつかれる

「ねえ、フェイト、夢でもいいじゃない、ここにいよ、ずっと一緒にわたし、ここでなら生きていられる、フェイトのお姉さんでいられる」

母さんと、リニスと、アルフト、皆と一緒にいられるんだよ  
フェイトが欲しかった幸せ、皆あげるよ」

すごく楽しい言葉、ここで領けば楽しい未来が待っているんだろ  
う、遊園地にいたり、お花畑にいたり、そんな普通の生活ができるんだろつ……これは？

ふと下を見るとネックレスがあった、ケンスケが、私のたぶん……  
うつん、好きな人がくれたネックレス、そつだ、私が帰る場所はここ  
じゃないんだ、なのはがいて、クロノがいて、リンディさんがいて、エ  
イミイさんがいて……ケンスケがいる、そんな世界が私の帰る世界な  
んだ

「しゅめん、アリシア、だけど私は行かなくちゃ」

「……ネッ」

短い言葉とともにアリシアが差し出したのは、バルディッシュだった

それは、この世界との別れの印を意味するアイテム、分かってしまったから涙がこぼれ落ちる、無言で受け取って、アリシアを抱きしめた

「ありがとう、ごめんね、アリシア」

「いいよ、私はフェイトのお姉さんだもん、いってらっしゃいフェイト」

「いって……きます」

「現実でも、こんな風にフェイトのお姉さんをして、一緒に遊んで、一緒にご飯食べて……生きたかったな」

そう言って、アリシアは消えていった、行かなきゃ……皆のところ

「バルディッシュ、」からであるよ、ザンバーフォーム」

[ get set ]

いつもの戦闘服に着替える、私の手には身の丈よりも長い大剣

「疾風・迅雷!!」

ありがとう、アリシア……私、がんばるからね

「スプライトザンバー!!」

空間を切り裂いた

SIDE OUT

SIDE はやて

眠い……眠りたい……何も考えたくない

それでも前に人がいる気配がして目を開けてみると、銀髪の美人さんがいた

「そのまま休んでください、あなたの望みは私が全て叶えます」

その言葉が気持ちよくて目を閉じようとした、でも、何か違う

私が欲しかった望みって……何なんやろう

「あなたが歩ける世界、あなたの好きな人が全員存在し、幸せに生きる



世界

「そんな世界が待っていますよ」

「そうやな、ずっと……ずーっと欲しかったものや、どんなに求めても得ることが出来ひんかったやつや、それが得られるってのは幸せなんやろつ……でも、それは夢や現実やない」

意識が覚醒した、それと同時に自分が置かれている状況に気づかされた、たくさんの人に迷惑かけてる

「私はこんな望んでへん、あなたもそうや」

「そうじゃなかったら、こんなに苦しそうな顔はせえへんもん、ポーカークフェイスを貰おうとしてるけど、私には分かる」

「私の心は、騎士たちの感情と深くリンクしています、だから騎士たちと同じようにあなたを愛おしく思います、だからこそ、あなたを殺してしまつ自分自身が許せない」

「ああ、やっぱりこの子は優しい子なんだ、皆と同じように私のことを思ってくれとる優しい子なんだ」

「覚醒の時にな、ちょっと分かったんよ、今までのこと」

「ずっと、何でだろうと思つとつた、何で私だけ足が思うように動かないのか、両親がいないのか……悩んだ事もある」

「忘れたらあかんよ」

目の前の優しい女性に手を伸ばす、悔恨に満ちた頬を挟む

「あなたのマスターは私や、マスターの言うことはちゃんと聞くんや」

マスターとして、一番最初にやることや

「名前をあげる、闇の書とか、呪いの魔導書なんて言わせへん、私が呼ばせへん、私は管理者や、私にはそれが出来る

夜天の主の名の下に、汝に新たな名を送る、強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のメール……リインフォース」

「無理です、自動防御プログラムが止まりません、私を止めようと頑張っている者がいますが……それももう」

大丈夫、マスターを信じて、絶対に止められるから、私が止める

SIDEOUT

SIDEなのは

「そんな砲撃、通るとでも？」

やっぱり厳しい、前にけん君にも言われたけど私みたいなタイプは  
一対一に向いていない、砲撃を撃とうとしても止められるし、そもそ  
も撃って効くかどうかすら分からない、でも

「通す、レイジングが力をくれてる、命と心をかけて応えてくれる!!  
泣いてる子を……救ってあげてっ!!」

「A・C・S stand by」

私の切り札、突撃からの零距离砲撃、これを通す!!

「アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム」

たぶん、けん君がいたら馬鹿やるっつて怒るんだろうな、だけど、今  
の私にはこれ以上の攻撃が思いつかないよ、だから、全力全開でやっ  
てみるね

「エクセリオンバスターA・C・Sー」

翼を広げた槍って言えばいいのだろうか、形容できないけど、行っ  
てくるね

「ーードライブ!!」

ド「オオオオ!!」

あとちょっと、あとちょっとで先端が通る……そうすれば

「届けっ!!」

祈りが通じたのか、先端部分がしっかりと収まった、あとは、私の  
得意技だ!!

「ブレイク……シュート!!」

ドゴオオオオン!!

轟音が響いて爆発がおこる……どうだろう、零距离から砲撃だから、ちよっとは傷ついていてほしいな

「Master」

レイジングハートに言われて上を見ると、無傷の闇の書さんがいた、もう少し、がんばらなきゃだね

でも、どうしよう、A・C・Sは初見だからこそ効く魔法、一度見られたら次は避けられてしまう、それにあれ以上の砲撃となると……ってあれ、動きが止まった？

闇の書さんが仰け反っていく

【その方、聞こえますか、私はこの子の主、八神はやてです】

「はやてちゃん!!」

意識が戻ってる、はやてちゃんの意味になってる

【え……なのはちゃんか？】

「そつだよ、いまは色々あってこの子と戦ってるの」

一度動きが止まった闇の書さんだけど、また動いっしょしている

【じめん、なのはちゃん、どうにかして止めてえな、このプログラムさえ止まれば後は管理者権限でどうにかなるんや】

えっと、それってどうすればいいの？

【なのは、聞こえる、なのは？】

【ユーノ君？】

【分かりやすく伝えるよ、今から言う事が出来れば、はやてちゃんとフェイト、ケンが外にでられる

どんな方法でもいい、目の前の子を魔力ダメージでぶっ放して、全力全開手加減なしで!!】

そっか、そういうことなんだ、相変わらずユーノ君は分かりやすいな、その力に私もけん君も助けられてきたんだよ

「エクセリオンバスター、バレル展開、中距離砲撃モード」  
「Allright」

魔力が溜まっていく、まだ待って、もう少し……完了!!

「バレルショット!!」

不可視のバインド魔法で闇の書さんの身体を縛る、回りにいる虫みたいな魔獣はユーノ君とアルフさんにまかせた

「エクセリオンバスター!!」

はやてちゃん、フェイトちゃん、けん君、今、助けるからね

「ブレイク……シュート!!」

バインドで縛られて動けない闇の書さんを私の砲撃が撃ち抜いた

大量の魔力で辺りが見えなくなる、そしてそれが晴れた時、フェイトちゃんはいたけど、けん君がいなかった

SIDE OUT

## 第三十五話

前回のあらすじ…幸せな夢を受け入れました

「お兄ちゃん……その、お買い物いかない？」

珍しいな、華音が何かをしたいって言うのはあまりきいたことがない、よし、いっちょ行きますか

スクランブル交差点があったり忠犬がいたりする街にやってきた、何かすごい久しぶりだ、リリなのの世界にももちろん存在しているけど、遠いせいもあって行ったことはない、やっぱり人が多いし街全体として活気がある

「人が多いからはぐれないように……ほら」

左手をだすと恥ずかしそうに右手で握りかえしてきた、体格が前に戻っているせいか小さく感じる、今日は暑いから……2時間くらいかな

華音は身体がそれほど強くない、暑いのも寒いのも苦手なので、気持ち悪くなったりする前に喫茶店とかに入らないとな

「で、どこに行きたい？」

「えっと……あそこのお店から行きたいな」

渋谷は若者の街だ、中高生から大学生向けのお店がいっぱいあるし品揃えも豊富、だけど、だからといって小学生くらいの子が着る服が無いわけではない、というか、その年頃の子供を取り込もうと思っっている店が多いので、流行のファッションの小学生版みたいのが色々なところで売っている

色々な服を持って行って一人着せ替えショーをやっている華音、元の素材がいいので何を着ても似合う

「えっと……これなんてどう？」

試着室から出てきた華音がきていたのはピンク地に柄が書いてある夏向けの服、でも何かイメージと違うんだよね

「そうかな……これは？」

お……似合う、黒髪の女性にバッチリの白シャツ、ちょっと柄もついている

「うん、それ可愛いよ」

そう言って微笑むと、嬉しそうにうなずいてそれを買った、お金は出すといったのだが頑として聞き入れなかったのかもしれない

その後も色々なお店に入ったり出たりを繰り返していたら、あつと言う間に2時間たったので今はTSU AYAの一階にあるスタバ……スターダストドラゴンノバスターじゃないぞ、攻撃力3000なんてないからな、に入ってお茶をしている、俺は普通のコーヒで



華音はキャラメルマキアート、やっぱり苦いコーヒーは飲めないそう  
だ

「その……今日はわがまま聞いてくれてありがとう、お兄ちゃん」

わがままなもんか、これからいくらだって時間はある、こんな時間  
を作っつていこう

「うん……そうだ……ね」

なんか歯切れが悪いな、どうしたんだろう

「なんでもないよ……行こうお兄ちゃん」

「はいはい、何処までもついていきますよお嬢様」

その手をとって歩き出した、俺の居場所は……「ここにある

SIDEなのは

「なんで？　なんでけん君がいないの？　ユーノ君、帰ってくるって  
いってたよね!？」

ああ、私は馬鹿だ、けん君がいないのがユーノ君のせいじゃないっ  
て分かってるのに責めちゃってる、どっしりよっ止まらないよ、止めら  
れないよ

「ごめん……僕にもなんでだか、本当にごめん」

頭をさげるユーノ君、私こそごめんなさいなのに……口だけが違う  
生き物になっちゃったみたいだ

「なのは、それくらいにしてあげよう、ユーノも困ってる」

フェイトちゃんが止めてくれたおかげで収まった、ユーノ君に謝る  
とすごい申しわけなさそうな顔をされた

【皆、聞こえる？　剣介くんのバイタルだけど、未だ健在

反応が闇の書の闇の塊からでているんだけど、クロノ君が到着する  
まで近寄っちゃダメだよ】

よかった……生きている事がわかったただけでも嬉しい

「なのは……あまり言いたくないことだけど、もしかしたら帰ってこ  
ないかもしれない」

沈痛な面もちのフェイトちゃん、でもなんで？

「私はあの世界で、母さんとアリシアと一緒に過ごす夢をみたんだ

もしかしたらケンスケも幸せな夢を見て……囚われちゃったのか  
もしれない」

「っっ!! そんなこと……あ」

そんなことないと言いかけて思い出した、そういえば私はけん君の過去を少ししかもしらない、お父さんやお母さんも話したくなかった時に聞こえて言っていたから私もそうしようと思っていた

私……けん君の事、何にも知らない、だからつなぎ止めることが出来なかったのかな、そんなの……そんなのって嫌だよ、お願い……お願いだから帰ってきてよお

小指にはめた指輪に温もりが残っていないかと抱きしめる、でも、冷たい感触しかなかった

「そういえば、はやては……これは!!」

フェイトちゃんのを言葉を待っていたかのように、赤、白、緑、紫の魔法陣が現れた、そこから出てきたのは主を守る守護騎士達、そして、四方に配置された守護騎士達の真ん中に白く光る玉があった

「……きれー」

誰が発したのだろうか、フェイトちゃんかアルフさんかユーノ君か、それとも私かもしれない、そんなことがどうでもよくなるくらい美しい玉だった

そして、それがはじけて中から現れたのは――

「夜天の光よ我が手に集え、祝福の風リインフィース……セーリットアップ!!」

ーはやてちゃんだった

SIDEOUT

SIDEクロノ

「やっぱり……それしか方法がないですよね」

艦長と通信しながら現場に向かう、闇の書が覚醒したときの対応策の話をしているのだが、防衛プログラムが管理システムから切り離された以上、もう転生機能は使われないので破壊することができる、しかし、その破壊もしくは封印方法が問題なのだ、それに今、剣介が帰ってきていないという報告も受けている、管理プログラムを制御できるように帰っても帰ってきていないことを考えると、防衛プログラムの内部にいて考えて間違いはないだろう

【そうですね、クロノ執務官、よろしくお願いします】

「でも、そうすると剣介が……」

破壊する手段と封印する手段は二つあるが、どちらにしても剣介は死んでしまうだろう

【ええ、ですが、最悪の場合はやるしかありません、剣介さん一人と惑星一つは比べられないので】

「……わかりました」

わかってはいた、このままならば剣介は救えない、犠牲になるしかない、でも、やっぱり納得できない、やっぱり正義を貫くことはできないのだろうか、そんなことを考えている内に現場についた

海上に黒い魔力の塊みたいなものがある、あれが防衛プログラムなのだろう、そしてその近くでは赤い服の守護騎士ヴィータが夜天の書の主、八神はやてに抱きついている

ちよつと心苦しいが……時間もあまりないから仕方ないだろう

「时空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ、再開に水を差してしまうのだが、闇の書の防衛プログラムがもうすぐ暴走してしまう、封印なり破壊なりしてしまわなければならない

そして、その前に石神剣介を助けなければならない」

封印するにせよ破壊するにせよ剣介は死んでしまうので、今助けるしかない、だが、こちらとしても助ける方法が分からないので、そこは今考えるしかないのだ

「クロノさん……やったよね、けん君なんやけど、うちのリインフィースが言うには、助けるには自分から出るしかないそうや」

自分から出る……それができる人間ならばとっくに出ているだろう、出てくる望みは限りなく薄い

「あまり言いたくはないが、このままだと氷結の杖デュランダールで凍結するか、アルカンシエルで破壊することになってしまっ、そうすれば剣介は……生き残れない」

「そんな!？」

「それしか方法はないの!？」

なのはとフェイトが同時に叫ぶなかで、シャマルが手をあげた

「凍結は難しいですね、凍結自体はすぐに解除できますので」

「アルカンシエルもだな、こんな街中でぶっ放したら街がなくなっちゃう」

確かに、アルカンシエルは着弾から百数十キロ地点の空間を歪曲して消滅させる砲撃、「ここら辺一帯……」この世界の地形がかわるだろう、それによってどの程度環境が破壊されるかもわからない

「それはダメだね」

「それよりも、けん君を助ける方法を考えないと」

わかってるよ、でも、時間がない、あと10分しかないなかで二つを両立させるのは……難しすぎる

【えっと、皆ごめんね緊急事態だよ

剣介君の心音、急激に低下、危険域に突入目前、助ける方法があるのなら早くしないと危ないよ!!】

これもそろそろ覚醒を始める合図なのだろうか……

「るな……」

「ユーノ？」

小さな声だった

「ふぞ……けるな」

怒りを押し殺した声

「ケンを……ケンを返せええっっっ!!」

そう言って淀みに向かって飛んでいく、彼は何をやっているんだ!?

「僕たちをいつも守ってくれた男を返せよおおっ!!」

「ユーノ!!」

何とかユーノに追いついて後ろから羽交い締めにする

「離してよクロノ!!」

「君は馬鹿か!! あれに近づくのは危険だと言っているだろうっ!!」

「ねえケン、聞こえてるんだろ、帰ってきてよ!!」

なのはが、フェイトが、皆が待っているよ、聞こえてるんでしょ、返事くらいして……よお」

そう言って頭を垂れた、混乱が収まったみたいなのでアルフに引き受けてもらった、なのはが泣いている、フェイトが俯いている

「こんな僕が望む世界じゃない、こんな世界じゃ駄目なんだ

覚悟たる決意を持って僕は通信回線を開いた

「艦長、いえ、母さん、僕は、クロノ・ハラオウンは命令違反をします、最後の最後まで剣介を助ける方法を考えます」待ちなさいクロノ執務官!!」だって僕の夢は……正義の味方だから、誰にも不幸になつてほしくないから

処罰は後で受けます、では」

それだけ言いきって回線を切った、母さんからの通信をシャットダウンする

「やあ、皆、剣介を助けるためにはどうしたらいいかな?」

前には泣くのをやめたのはがいる、前を向いたフェイトがいる、顔を上げたユノがいる、それにシグナムやヴィータ、ザフィーラにシヤマル、はやてがいる、このメンバーなら、何か思い浮かぶはずだ「えっと、リインフィースからの話なんやけど、自分の力で戻ってくるしかないから、その力を出してあげて考えるべきやって」

自分の力で戻る、そんな難しいことでもすれば力になれるだろうか

「あの……応援とかってどうかな」

フェイトか、しかし応援とは言っても、それが届くのかどうか分からないし、非効率的だな

「でもさ、そのリインなんとかってやつという言葉を聞く限り、そのくらいしか方法がないように思えるんだけど」



まあ……確かにそうだ、外部からが無理なら内部から力を沸かさせなければいけない、それが出来るのは、応援しかないのかもしれない  
「なら、皆で応援しようよ」

「でも、どんな形で応援すればいいんだよ？」

「難しい」とはしなくていいんだよ、ただ名前を呼んで頑張れって言う、それだけでいいの、いくよ、せーのー」

「「「剣介、頑張れ!!」」」

なのはの一言で、剣介に対しての応援が始まった、そんな中、僕はシグナムとザフィーラと話していた

「石神が帰ってきた後の話だが……実際どうするつもりなのだ？」

それが一番頭を悩ませている、凍結が無理ならばアルカンシエルを撃ち込みたいが、こんなところでアルカンシエルを撃てば、この島国が二つに分かれてしまう、この国が騒いでいる原発なんてちっぽけな話になってしまうだろう

「確か……」

ザフィーラが口を開いた

「確かアルカンシエルは宇宙空間でも撃てるものだったな」

そうだ、あれは深海だろうが宇宙だろうがお構いなしに撃てる

「ならば……あれのリンカーコアを宇宙空間に運び、それをアルカンシェルで撃てばよいのではないか？ 幸い仲間にリンカーコアを摘出できるやつがいるのでな」

かなり、かなり個人のスペックだよりになってしまつ、覚醒が始まる数分間の間に現れるであろう防衛プログラムを破壊し、なおかつリンカーコアが露出する、つまり一度プログラムの表面部分を消滅させなければいけないということだ

「防衛プログラムは四層のバリアに守られている、魔力防御と物理防御の二層サンドイッチ構造だ、いくら高町やテスタロッサ、それに我々がいても消滅までさせられるかと聞かれれば確信はない、だからこの場の指揮官であり、執務官でもあるハラオウンに任せよう」

もちろん、最終的な判断は僕に任せられることになるのは当然だ

普通、暗殺のプロは成功率が90%以上なければ実行に移さないといい、この賭けは良くて六分四分といったところだろう、実際は五分五分かもしれない、普通なら決して実行してはならない数値、でも……成功すれば最善、ほかの結果ならば確実に誰か死ぬと分かっている今、この賭けはやる価値がある、成功させなければ、否、成功させる!!

「剣介が助かったらこの計画を実行に移す、皆に説明しよう」

皆のところに向けて飛び立った

SIDEOUT

「……………を返……………お」

雑音がする、なんか返せって言っている、何だろう、よく分からない、俺の眠りを邪魔するなよな

「く……………ああ」

隣を見ると、スヤスヤと眠っている華音がいる、昨日は嬉しすぎて、俺から一緒に寝ようと誘ったのだ

中学までの同級生であれば、俺の第一印象を聞くとシスコンという答えが返ってくるだろう、それが悪いと思ったことはなかったし、今でもそう思っている

手入れの行き届いた長い髪を撫でていると、くすぐったそうに身体をよじらせた、その拍子にずれてしまった布団をかけ直して外にでようとする、何か引っかけた、華音の指だ、俺のパジャマを掴んでいる、その指をそつとはずして、今度こそ外にでた

「あら、おはよう剣介」

ドアを開けて廊下にでると母さんに会った、やっぱりなれない感

覚、だからちよつと挨拶が詰まってしまつ

「……まあいいわ、あと、朝食出来てるわよ、食べちゃいなさい」

母さんが去っていくのを見送った後溜め息を一つつく、この夢では優しい母さんだって分かっているはずなのに、どうしても魂が拒絶してしまつ

まあ、まだ二日目だ、一週間もすれば普通に話せるよつになるだろう

リビングでぼーっとテレビを見る、街角 報室ではいつも通りどや顔をしているみたいだ、何もない暇な生活、これが幸せってやつなのだろう

「ああ、おはよう剣介」

親父も起きてきた、前々から不思議なのだが、親父は身長が195cmもあるのに俺はなんで170ちょいしかないのだろう、母親の劣性遺伝か？

そんなことを考えながらインスタントコーヒーを作つてあげる、ブルック派の親父も朝はカフェオレ派だ、ちなみに俺は紅茶派な、コーヒーは紅茶に比べると苦手

「ありがとう……お、アントラーズが勝つたじゃないか」

新聞を広げながらコーヒーを飲んでいる、よく見た光景だ

現在時刻7時5分前、ということとは華音が起きてくる時間だ、朝があまり強くない華音のために特別なジュースを用意しておこう

「お……はよ、お兄……ちゃん、お父……しゃん」

ポテポテと階段を下りてきた華音、まだ目がしっかりと開いていない、席に着いた華音にジュースを渡すと、なんの躊躇いもなく飲んだ

「……!? す、酸っぱあああいい!!」

グレープフルーツとレモンを絞ってクエン酸をいれたジュースだ、ぶっちゃけあまり美味しくない、そんなものを飲まされた華音はもちろん抗議してくる、それをあしらうのも昔よくやった光景だ

そんなこんなで、お昼になった

俺は華音に呼ばれて華音の部屋にいる、何かとても重要な話をするらしい

「どうしたんだ華音？」

目の前にいる華音は泣きそうな、だけど決意を決めた表情でこっちを見ている

「変にもなるよ、だって、お兄ちゃんはこれから夢から醒めるんだもん」

華音の言葉が引き金となって、俺の後ろに歪みが出来た、それは大きくて、俺なんか簡単に飲み込めそうなほどだ

「ぶっっっ……っっだ」

理解が出来ていないわけじゃないけど、もう一回聞く

「さっき言ったとおりだよ……お兄ちゃんは帰らなきゃいけないだ」

何で今更そんなことを言う、俺はこの世界で生きていくと決めただ、その言葉を撤回するつもりもない

「こんな幻想しかない夢の中で立ち止まっちゃいけないの」

幻想だってことも分かっている、夢だってことも知っている、全て分かった上で俺はこの世界を選んだんだ

「とにかく、俺はこの世界からは出てい」たあ!!」「うわっ!？」

いくら高三の身体でも、いきなり本気で押されたら後ろによろけてしまう、そして後ろには……歪みがあった

身体ごとが入るのは持ちこたえたが、足が少し入ってしまった

「何するんだよ華音」

そう言って前に歩こうとすると、歪みに入っていないほうの足は前に進むが、入ってしまったほうの足がぴくりとも動かない

「なんだよ、どういっことだよこれは!!」

「……」「めんなさいお兄ちゃん、これはね……一度入ったら進むしかなくて戻ることとは出来ないの」

試しに入っている足を後ろにずらしたら問題無く動いた、そのぶんだけ更に身体は後ろにいったが

「……なあ華音、なんでこんなことをするんだ?」

「だって、だってお兄ちゃんは生きてるでしょ、待ってくれる人がいるんでしょ?」

それは確かにそうだ、なのはやフェイトは俺の帰りを信じて待っていることだろう、でもそれは俺が気をやむ問題じゃない

「俺は……俺はお前がいればそれでいい!! なのはなんか、フェイトやユーノ、アルフにクロノなんかどうでもいい!! お前と一緒に家で暮らして、飯食って、学校行ったりして……そんな生活がいいんだよ!!」

俺が守りたい人のなかで一番は華音だ、それが一度も揺らいだ事はない、なのはやフェイトだって守りたい一だ、でも、あいつらだって華音には適わない

「ダメだよ……これは夢なんだ、夢はいつか醒めないといけないんだよ」

そんなこと分かってる、いつかは現実にも戻らなくちゃいけない、でも、それは今でなくてもいいはずだ

「分かっていると思っけど、私はもう生きていないんだよ、この世にはいないんだ、そんな妹に引つ張られちゃダメだよお兄ちゃん」

そんなの……無理だ、お前を忘れられるわけなんてない、お前のことを引きずらずに生きていける未来なんて想像もつかない

「もう……お兄ちゃんも甘えん坊さんだね、私と同じだ」

そつだよ、俺は甘えん坊だ、お前がいなきゃ何にも出来ないガキなんだ、だから助けてくれよ華音

「そんなことないよ、私がいなくてもお兄ちゃんはお兄ちゃんだった、私は短い時間だったけど久しぶりにすごく楽しい時間をもらったよ、だから、今度は今生きている子達を守ってあげて」

そつ言っただけ抱きついてきた、胸には確かな重量感、華音が言った言葉も突き刺さった気がする、でも、俺には後悔がある、もっと楽しいことをさせてあげられたし、もっと可愛いものを買ってあげられた、もっと、もっと、もっと、もっと、これから作る予定がたくさんあったのに

「お兄ちゃん……ありがとうお」

ああ、何だろう、すごく安心した、嬉しかった、華音にそつ言っただけ言われることが一番嬉しかったんだ

「だから、よろしくね」

その華音がこつやって頼んでる、なら俺は、それに答えてあげるのが一番なのかもしれない

「わかった、わかったよ華音、俺は戻る、お前がいなかつたらない世界かもしれないけど、お前の願いくらいは、絶対に守るから」

「私に縛られて欲しくないけど……そつだね、頑張ってお兄ちゃん、いつでも、いつまでも応援してるから」

最後にもう一度抱きしめた、髪に鼻をつずめる、身体を撫でる、こ



の温もりを忘れないように、いつでも思い出せるように、華音をつなぎ止められるように

長い抱擁のあと、髪を撫でて後ろを向いた、これ以上華音を見続け  
たら決心が鈍る

「いってきます、華音」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん」

俺は闇の中に身を投じた、あいつらを助けるために、華音の願いを  
叶えるために

「あじうう」

泣いているのは一人の少女

泣いてはいけないと分かっている、でも、こぼれでてしまうから止  
めようがない

「……く、ダメだよ、これは言っちゃだめだよ」

それを言葉に出したら決意が全て無駄になりそうだから言わな  
かった

涙を拭いて前を見た、その顔はグシャグシャだったけど、もう泣い  
ていなかった

「また今度、会おうね、お兄ちゃん」

少女は兄の姿を確かに見ながら消えていった

前に進んでいくと何か嫌な予感がした、おなじ黒い空間なのだが空間じたいの粘度が違うような、そんな気がする

今の俺はガブリエルにもらった能力が使えない、あの夢の中にいたときは気にならなかったけど必要性がでてきた

「どうしたもんかね」

思わずつぶやいてしまう、この空間で能力を取り戻すために出来ることは何だろう、まず、夢に囚われてから能力を使えなくなった、ということとは、闇から抜け出すことが出来れば能力が使えるようになるのではないか？

「……………れ」

そこまで考えたところで声が聞こえた

「……………すがん……………れ」

この声は前の闇から聞こえてくる、もしかしたらこの先は現実と繋がっているのか？ でも、そうならどうやってこの先に行こう、俺の前に広がる闇の空間はどうみても異質、五感どころか身体全体が警告を発している

想像だけど、聖杯の泥のようなものなのかもしれない、夢から醒め



を守ってあげてってな、だから泥なんかには負けるわけには……行かないんだよ」

それは聖なる鞘

それは王を守り続けた鞘

それは神が造りし鞘

その名は――

「――『全て遠き理想郷（アヴァロン）』!!」

鞘から発せられる光が泥を消滅させていく、それは完全なる拒絶の光、担い手以外がこの空間にいることを拒絶するのだ

そして、周りの景色も変わった、暗闇に変わりはないけれど、中は明らかに何かの体内、それでも泥はしっかりとあるのでやはり自分では打開できない、だから呼びかけた

「俺は生きている、誰か、この生物を消滅してくれ、俺はここにいたい!!」

誰かを指定しているわけではない、ただ繋がることを願って呼びかけた

SIDEなのは

声が聞こえた

クロノ君からけん君が助かった後の話を聞いた、私やヴィータちゃん  
んで防衛プログラムさんを破壊すればいいみたい

その計画を実行するための必要十分条件としてけん君が生きて  
帰ってくる必要がある、だから皆で応援していたんだけど……さっき  
のは気のせいかな

「俺は……」

やっぱり気のせいじゃない、けん君の声だ、やっと、やっと帰って  
きてくれた

他の人は聞こえていないみたいだから、私が皆に言うしかない、だ  
けど信じてくれるかな……ううん、皆信じてくれる、だから言おう

「皆、聞いてくれる？ 今ね、けん君から念話が入ったの「本当か!？」  
うん、本当だよ、その中でこの生物を消滅させてくれて言ってた、だ  
からさっきクロノ君が提案してくれた作戦を実行しよう」

皆の反応はあまり良くなかった、それは当たり前だと思う、私一人  
しか聞いてないから幻聴かもしれないもん、でも、ユーノ君だけは反  
応が違った

「皆、攻撃しよう」

なのはは僕たちよりもケンと一緒にいる時間が長い、だから僕たちが分からないようなことを感じ取ったのかも、それに僕は聞こえていたというのを信じるよ」

その言葉で皆がまとまった、ありがとうユーノ君

「じゃあ、これからロストログニア闇の書の防衛プログラムを破壊する、個人頼みになっちゃうけど、よろしく頼むよ」

「！！！！はい（おう）！！！！！！」

闇の書の闇が覚醒した、それは……説明ができないかな、銀色のジンオウガに紫色の女の人が頭にくっついてる感じ？

「サポート班、行動開始する！！」

「チエーンバインド！！」

「ストラクルバインド！！」

「鋼の軛、エエイヤアア！！」

ユーノ君とアルフさんが触手の動きを止めてザフィーラさんが触手を斬る

「合わせなかったらぶつとばすからな、高町……高町なのは」

名前覚えてくれたんだ、嬉しいな

「ヴィータちゃんもね！！」

それに答えしないでデバイスを構える

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーファイゼン!!

轟天爆砕、ギガントシュトラーク!!」

数十倍にまで肥大化したデバイスによる叩き潰し、単純だけど、バリアを破壊するには最高の一撃、狙い通り物理障壁の第一バリアが破壊された

「高町なのはと不屈の心レイジングハート・エクセリオン、行きます  
エクセリオンバスター!!」

伸びてきた触手をバレルショットで封じて、ブレイクシュートで魔法障壁の第二バリアを破壊した、あとはよろしくね、フェイトちゃん

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン

我が秘剣の最後の姿

駆ける隼、シュトルムファルケン!!」

弓の姿から放たれた一撃は第三バリアを悠々と破った

「フェイト・テスタロッサ、雷光バルディッシュ・ザンバーいきます!!  
撃ち抜け雷神!!」

フェイトちゃんの一撃はヴィータちゃんみたいに大きくなった刃で第四バリアを叩き斬った

バリアは全部壊れたけど、まだ本体は無傷、すぐに触手を復活させて砲撃を撃とうとしてきた

「盾の守護獣ザフィーラ

砲撃なんぞ撃たせるかああああつ!!」

ザフィーラさんの一撃で触手が貫かれていく

「彼方より来たれ宿り木の枝、銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍ニ  
ストルフィン!!」

はやてちゃんの攻撃で闇の書の闇が石化して崩れ落ちた、でも、す  
ぐに復活してしまう

「でも、効いている事は確かだよ、いくぞデュランダル  
永久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ、エター  
ナルコフィン!!」

クロノ君の攻撃で更に変な形になる、さあ最後にしよう

「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん!!」

この攻撃で終わらず、そしてけん君にお帰りなさいって言うんだ

小指を抱きしめた後レイジングハートを構える

フェイトちゃんとはやてちゃんも同じようにデバイスを構えた

「全力全開、スターライトー」

「雷光一闪、プラズマサンバー」

「響け終焉の笛、ラグナロク」

「ココブレイカー!!」



三つの莫大な魔力が貫いた、普通の人なら生きていないだろう、でも、けん君なら

「おいおい、無茶苦茶するな」

ほら、やっぱり帰ってきてくれた

「本体コア露出、捕まえ……た!!」

「長距離転送」

「目標軌道上」

「『転送!!』」

あとは映像だけでしか分からないけど、アースラからの大規模な砲撃で闇の書の闇、防衛プログラムが破壊された

SIDEOUT

## 第三十六話

前回のあらすじ…華首に背中をおされました

「けんくん」

「ケンスケ」

青く澄んだ空、淀みを吹き散らす清き風、そんな現実の素晴らしさの中に駆けてくる白と黒の少女、それに少しばかり遅れてユーノもやってくる

「……ちょっと待て勢いが強くないか？ このままじゃぶつか  
るー」

「お帰りなさい!!」「じぶっ!」「……けん君？」

「ああ、大丈夫、心配すんな  
ただいま、なのは、フエイト」

なのはの頭突きが鳩尾に入った、俺だから平気だったけど普通の人なら意識を持っていかれてたぞ

そのまま抱きついて心配そうに見てくるなのはと左腕を無言で抱きしめているフェイト、俺の自由が右腕しかないんだが……まあいいか

「お帰り、ケン」

「ああ……ユーノただいま」

自由に動かせる右手で握手をする、想像だけど、ユーノはずっと俺が生きて帰ってくることを信じていてくれた気がする

「まったく……君は本当に心配をかけてくれるよ

報告だ、闇の書の闇、切り離された防衛プログラムはアルカンシエルによって完全消滅が確認された、このまま後片付けをするから君たちも手伝ってくれ

あと……お帰り剣介」

クロノが俺の帰りを待っていてくれたことにちょっと驚いた、しかし素直じゃないね、わざわざ照れくさそうに言うこと無いのに

「了解

ありがとう、ただいまクロノ」

「べ、別に君の帰りを待っていたわけじゃないぞ」

男のシンデレレ気持ち悪いです

水面に浮かび上がりきらないほどの残骸、街は街で火柱が立った跡

や地割れなど、ちょっとどころでなくマズい、この惨状を片付けるのは骨が折れるぞ

「お帰りのな、けん君、家の子が迷惑かけたみたいで、ほんまにすまんかった」

はやてか、もう動けるようになったな

「ただいま、あと、リインフィースだっけ？ あんなに素晴らしい夢を見させてくれてありがとう」

これは本心だ、夢でもなんでも華音にもう一度会えたというのは最高に嬉しい、その機会を与えてくれたリインフィースには感謝してもしたりないくらいだよ

そういえば、シャルルさんは大丈夫なのだろうか、確か『ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇』の傷があるはずなんだけど

「ああ、あの治らない傷ですよ、大丈夫ですよ、一度消滅してはやくちゃんに修復してもらったとき直してもらったので」

そう言って指を見せてくるシャルルさん、確かに傷跡がない、いくら不治の呪いでも、プログラムの直すことが出来るということなのだろう

「そうなんや、それは……よかつ……た」

「「「「はやて（ちゃん）!?!?!」」」」

いきなり倒れたはやてをシグナムが抱き止める

「艦長、重要参考人が倒れたので艦の医療設備を使わせていただきます」

【わかりました

エイミー、よろしく頼むわね】

【はいはい、わかりました】

こうして、片付けは他の局員（+リズとセラ）に任せて、俺たちはアースラに帰った

「じゃあ、その取り込まれた先では理想の夢を見たわけですね」

「そうです」

はやてを医務室に運んだ後、俺とフェイトは報告、クロノはお説教をされている、なんでも、俺を殺さないように一肌脱いでくれたのだとか、あとでお礼を言っておこう

「本当にあなたがたは……どこまで大人を心配させればいいのです

か、特に剣介さん、あなたは一時いつ死んでもおかしくない状況になったのですからね」

俺は心臓が止まりそうになっていたみたいだ、本当にあとちょっとだったんだな

「はあ、まあいいわ、よく帰ってきてくれました、疲れたでしょう、これでも飲んで落ち着くといいわ」

運ばれてきたのは緑色の悪魔だった、それはリンディ茶と呼ばれる管理局至上最悪の兵器だ、それを最初に見て思うことは色がおかしくないかということ、そして次に臭い（匂いじゃないぞ）をかいで後悔をする、最後に口に含むと、例外なく（生きていられることを）神様に感謝するそうだ

【ぐ、ぐうしようケンスケ】

フェイトから焦りの念話がある、俺もどうすればいいのか考えている最中だ、リンディさんが好意を受け取らないわけにもいかないから、なおさらだ

【……………フェイト、飲む振りはできるか？】

【う、うん、出来るけど……………】

フェイトを守らなければいけないからな

俺はストローをだして、『インビジブル・エア風王結界』をかける、これでストローは見えなくなった、それをくわえて……………自分の分とフェイトのぶんを飲んだ

「ケンスケ、本当に、本当にありがとう!!」

なんとか部屋をでてすぐにフェイトがお礼を言ってきた

「ああ、だい……じょ……だ

あの河を渡ってしまっても構わんのだろう?」

「だめだよ!? それは渡ってはいけない河だよ、ケンスケ……ケンスケ……ケンスケ……!!」

七回口をすすいでも気持ち悪さが拭えないのならば、七の七乗倍すすぎなさい

ってのを教訓として覚えました

SIDEラインフィース

「はやて、大丈夫かな」

私に名前をくれた主が目の前で寝ている、私の責任だ

「ああ、主のリンカーコアは正常に機能している、遠からず足も動くようになるはずだ」

闇の書の闇が消えたことで主を蝕む悪しき魔力は消えた、リハビリなどは厳しいと思うが、私がいなくても頑張ってもらいたい

「おまえ一人だけ消える……本気か？」

「本気だ、これが最良の策になる」

闇の書は、もう致命的な部分まで破損が進んでしまっている、他の騎士たちとはともかく、管理プログラムである私は相当のようで、このままでは防衛プログラムを勝手に再構築してしまう、そうなればあの戦いが繰り返されることになる、加えて今度も主が闇に打ち勝てる可能性は限りなく低い、そもそも一度でも打ち勝てたこと自体が奇跡に等しいのだ、次は確実に取り込まれてしまうだろう

解決策は二つあった、一つは主に押さえてもらう方法だが、これは先ほと言ったように無理だ

二つ目は壊れたプログラムを一度完全に初期化し、新たに正常な闇の書本来の機能をインストールする、これは一からプログラムを作るので時間がかかりすぎる、その間に防衛プログラムが再構築されるのは明白だ

本来ならば私が消滅するとともに他の騎士も消えるだろう、だが今の私は管理者権限を使うことが出来る、その権限でヴォルケンリッターを私から切り離せば、私一人が消えるだけですむ



私としては少し寂しいが、主が死んでしまうことに比べれば蚊に刺されたようなものだ

「主が知れば、止めるだろうな」

分かっている、だからこそ私は主に知らせず逝くつもりだ

さて、そのためには彼女たちの助けが必要になる、頼みにいこう

#### SIDEOUT

「闇の書の完全封印だと？」

リインフォースに頼まれて食堂に集まったら驚くべき事を聞かされた、予想できないことではなかったが完全に失念していた、いくら防衛プログラムを切り離れたとはいっても再構築されたら同じだ

「その儀式のために彼女たちの力を貸してほしい」

なんでも、儀式を確実に終わらせるためには魔導師が3人以上必要

らしい、ヴォルケンリッターたちは残るので4人いるから条件は満たしているのだが、どうしてもなのはとフェイトに見送ってもらいたい  
そうだ

「できればお前にも頼みたかったのだがな、魔法が使えないのならば  
仕方がない、だから見ていてくれないか、私が逝く様を」

その程度ならいくらでも引き受ける

「……時間があればよかったんだけどね、そうすればプログラムを  
から作るのは時間がかかるけど難しいことじゃないのに」

苦虫を噛み潰したような顔のエイミィさん、助けたかったんだろ  
うな

「あかん!!」

ドアが開いたかと思っただけはやてが飛び込んできた

「……ごめん、だけど、最期くらい話したほうがいいと思って」

ヴィータか、間違った判断じゃないよ、リインフォースも感謝して  
くれる、自分が知らない間にいなくなっていたっていうのが一番辛  
いもんだからな

「一人で消えるなんて許さへん、リインが辛いなら私が抑える、リ  
インが苦しいなら私も耐える、一人で消えるなんて絶対にあかん」

フツと微笑んで、はやての車椅子の前で膝立ちになった

「……のですよ、主はやて」

「いいことない、リインが消えるなんていいことなんて何でもあらへん」

「汚泥のような闇の中で長く生きました、しかし最後に美しく、気高く、誇らしい名前をいただいた、私はそれがあれば十分なのです」

ずっと嫌だった蒐集行為、何のためなのか、何を招くのか分かってしまっても伝えるすべがなく、最終的には望まない破壊をもたらしてしまう、それはどれほどの苦痛だっただろうか

「私は名前だけですまそうなんか……リインと一緒に」ですから「リイン……」

「ですから、私は笑って逝きたいのです」

はやての気持ち痛いほどによく分かる、あの時の俺と同じだ、華音に背中を押してもらうまではこれまで不幸だったのだから、これからは幸せな時を『一緒』に過ごしていこうと思っていた

「ダメや、絶対ダメや、暴走なんかさせへんって誓ったやないか!! ずっと一緒にいるって誓ったやないか!!」

「その約束はもう立派に守っていただきました」

ちょっと待て、リインフォースが消滅する理由はこのままだと防衛プログラムが再構築されるから、時間さえかければエイミィさんはリインフォースをまっさらな状態に戻すことが出来る……ならば

俺は外にでて久々に天使を呼び出した

【な〜んで〜すか〜】

「単刀直入に聞く、宝具の譲渡は出来るのか？」

【そうですね〜、簡易パスを繋げればできますよ〜】

そうか、ならばたぶんこの計画は成功する、俺は簡易パスの繋げ方を聞いて部屋にもどった

部屋に戻るとはやてがリインフォースを抱きしめて泣いていた

「わかったよリイン」ああ、ちょっと待て」「けん君？」

「エイミーさん、時間があればリインフォースを、闇の書を元の夜天の魔導書にできるんですよね」

「ええ、出来るけど……」

よし、ならいける

俺の計画は完全に思いつきだけど、たぶん大丈夫だ

「お前は何をするつもりなんだ？」

「喜べはやて、リインフォースが消滅せずにすむぞ」

半信半疑の表情だが、話を続ける

「要は、新たなプログラムが作られるまで暴走しなければいいんだろ  
なら、俺に作戦がある」

その作戦とは至って簡単、俺とリインフォースで簡易のパスをつないだ後に『アヴァロン全て遠き理想郷』を譲渡する、そうすれば体細胞分裂を防ぐことすら出来る宝具だ、防衛プログラムが再構築されないようにするのも簡単なはず

「……そんなことが本当に出来るのか？」

出来る出来ないっていつのは本質と違う、やるかやらないかなんだ、はやては乗ってくれるだろうか

「ありがとうけん君、私、それに賭けてみる」

よし、なら早速開始するぞ

俺は口を斬って血をあふれさせる、リインフォースにも、自分の腕に傷をつけてもらった

「じゃあ、今から簡易のパスを繋げる

注意点としては、このパスは本当に簡易だから譲渡くらいしかできない、そして、やはり簡易だからマスターである俺のほうから魔力が移動することはないってのを理解してほしい」

「ああ、わかった」

その言葉を始まりとして、そのままリインフォースの傷口にキスをして、自分の血と混ざり合わせる

変な感じた、これまで何も感じなかったリインフォースが急に繋がっているように思える

「じゃあ、次に宝具を譲渡するな」

『アヴァロン全て遠き理想郷』を取り出してリインフォースに渡す、欲しいのは細胞の働きを止める効果だから、剣は渡さない

「ああ、しっかりと受け取ったぞ……これでいいのか？」

やってみれば簡単なもんだ、ただ単に宝具を渡すだけだからな、俺としては絶対防御宝具がなくなってむちゃくちゃ痛いけどな

「なんかあつけねえな、本当に大丈夫なのか？」

見た目に変化はない、だけど、これで再構築が起こらなくなるはずなのだが、どうだろうか

「……確かに、少しずつ起こっていた再構築の感覚がなくなった、すごいなこれは」

あくまで冷静だから喜びが伝わってこない……まあそのぶんはやがて喜んでくれるからいいけど

「えっと、ちょっといい？ にわかには信じられないんだけど……リインフォースのこれからについて説明するね

これから本局に渡って休眠に入ってもらいます、それが五年か十年か二十年かわからないけど、絶対にプログラムを作り上げてみせるから、次に目覚めた時には完全復帰というわけだね」

どっちにしてもリインフォースとはやては離れ離れになることは確定していたのか、まあそれでも消滅しちゃうよりは全然ましだな

「けん君、ほんまにありがとうな」

「感謝する……剣介」

お、名前で呼んでくれたか、俺としては大したことはやっていない、結局離れ離れになるしな

「ええの、リインフォースが助かるってわかっただけでええんや」

涙を流しながらありがとを繰り返すはやてに居心地が悪くなつて外にでた、ここまで感謝されるのは柄じゃないからな

「紅茶をだそう、少し待っていてくれたまえ」

猫二匹に睨まれつつも、俺は優雅な一時を過ごしていた

「へえ、地球の紅茶なんですね」

世界三代銘茶の一つでもあるダーズリンティー、俺の大好きな紅茶だ

「私も故郷の星の味が恋しくてね、ついつい買ってしまうんだよ」

地球でいう日本とアメリカの食生活の違いみたいに星ごとの好みなんてものもあるんだろうか

「で……なんであなたがここにいるの？」

そう、ここは本来俺は入れない場所、闇の書事件に関わった犯罪者の部屋にいる

犯罪者の名前はギル・グレアム、俺は管理局員でないからまず部屋に入れる理由がないが、グレアム提督の罪が軽いこと、事件の功労者であること、クロノ執務官の口利き、これらの条件が合わさったので入室許可がもらえた

「まあそういうなって

しかし、なんかスッキリしましたね」

前に来たときも整理整頓されていてスッキリとしていたが、今回は明らかに物がない、あるのは備え付けのソファやテーブルだけだ

「ふむ、実は管理局を辞めるつもりでね、あれだけの事件をおこしたんだ、君たちにも迷惑をかけたな、本当にすまなかった」

深々と頭を下げるグレアムさん、リーゼ姉妹も同じように頭をさげ

た  
「私たちもお父様の使い魔だしね、それに剣介君にはかなりの迷惑をかけたから」

さて、俺が来た理由、それは俺やなのは、フェイトに対する償いをしてもらうため、まあ、なのはとフェイトはそんなもの無条件で許すだろうから俺一人で来たわけだが



「……そんなおっさん一人と猫二人が頭下げたくらいで俺が許すと思  
いますか？」

考えてもみる、何度も何度も捜査妨害されて、あげくのはてには身  
体に電流を流された、そこまでされたのに、いくら提督とはいえ頭下  
げられたくらいで許せるわけがない

「あんたねえ」「いいんだよロツテ」「……父様」

「君の言うことももつともだ、それで、何を私たちに要求するのかね？  
私たちが出来ることならば何でもしよう」

さすがに物分かりがいいな、ここで反発でもされようもんならどう  
しようかと思っただよ

「では要求します、俺の要求は

あなたがた三人が管理局に残ってもらうことです」

「えっ？」

「……どうして？」

驚くロツテとあくまで冷静なアリア、グラムさんは黙って俺の真  
意をつかがっている

「これでは言葉が足りなかったですね

管理局に残って新部隊を立ち上げてほしいのです」

これからののはとフェイトは管理局に正式に入局するだろう、そう  
なると最初の方は一緒にいれるかもしれないが、あの二人の力だ、  
さっさと昇進して俺から離れるだろう、それなら俺が最初の方だけ一

緒にいてもあまり意味がない、だからちよつと酷かもしれないが一気に独り立ちさせてしまつのもありだと思つ

そのために必要になってくるのが、リンディさんよりも上の階級の人の言葉だ、リンディさんはなんだかんだいつて優しいから俺となのは、フェイトと一緒に部隊になれるようにつけあつてくれるはずだ、でもそれでは独り立ちさせることが出来ない、だからリンディさんより上の立場の人間が必要なのだ

いくらリンディさんでも、上司に「こいつは俺の部隊にいれる」「つて言われたら逆らえるとは思えない、俺が知っているリンディさんより階級が上の人はグラムさんしか知らないしな

あとは俺が知り合いが部隊長のほうがやりやすいっていうこと、学校やらなんやらで融通がききやすい

「……何でもやるとは言つたが、それは管理局を辞めた範囲内のことだ、新部隊を立ち上げる気はないよ、そもそも今更私のような人間に手を貸す物好きはいない」

そうだろうか、グラムさんの事をよく知っているわけではないがこの人は管理局の重要人物だ、それなりの功績をあげてきたのだろう、その人が、たかが捜査妨害と傷害罪程度で信頼を失うとは思われない、現にリンディさんやクロノなんかは尊敬してるって言っていた

「俺はなにもでかい部隊を造つてくれなんて言っていないませんよ、最初は俺含めて5・6人程度の部隊でいいんですよ」

というか、大きな部隊は逆に困る

「そうか、君は育成部隊を造れと言っているんだね」

そう、俺はそれを造りたいと思った、アリアとロツテは現役で人に教えたりしているし、グレアムさんもクロノを教えたりしている、この三人に少人数で鍛えてもらえばかなりの効果が期待できる、それから卒業生の中から一人でも部隊に残れば、更に次回の新人が増えていく、捕らぬ狸の皮算用ではあるが試してみる価値はあるんじゃないかなど

「発想は面白い、でも、さっきも言ったとおり私は管理局に残る気はない、この案は別の知り合いにかけあってみようか？」

最悪それでもいいが、俺はグレアムさんの部隊に入ってみたい、せっかくグレアムさんは厳重注意+二年間の執行猶予でおさまったんだ、わざわざやめることはないし、このことからいっても管理局のグレアムさんに対しての期待度は高い

「では、はやてはいいんですか？」

「ここからは情に訴えてみる、この人はそちら方面が弱点だろう」

「はやて君はヴォルケンリッターや君たちがいる、彼女は大丈夫だ」

はやては今回の事件の被害者であり加害者だ、それによって保護観察が決定してる、それを知られるだけでもこれから同じ部隊員になるであろう人たちの受けはよくない、そうなったときやはり幹部層に知り合いがいるのは大きいだろう

「そうかもしれないが……私はこれでも不当な報酬や俗に言う賄賂などはしたことがない、今回私が今の地位のまま管理局に残ることになれば確実にそれらの行為を強要されるだろう」

まあ、グレアムさんはやっていないだろうとは前から思っていた、この人はそういう人間ではないということとは容易に想像できる、俺だってできればやってほしくないがしょうがないだろう

「そういうことだから、私の方からつながりのある幹部に話してみよ  
「待ってください!!」……なにかね？」

もう反射的だった、ここで俺が引いてしまえばすぐにもグレアムさんは管理局を辞めるだろう、これほどの人が俺の近くにいるのに手放すなんてもつたいない……いや、何も考えずにただこの人の造る部隊に入ってみたかっただけかもしれないな

「お願いします、俺のために部隊を造ってください!!」

なのはのためだ、はやてのためだとグダグダ言ってきたが、結局はすべて俺のためだ、俺がグレアムさんに師事したいがためにグレアムさんに頼んだんだ

「……父様、造ってあげようよ」

ロツテ、俺の味方をしてくれるというのか？

「いやさ、迷惑をかけちゃったのは事実だし、このちびっ子に頭を下げられちゃつとね……」

「ロツテ、しかしだ」私も同じ意見ですよ父様「アリアまでもか」

「彼は私たちに名譽挽回のチャンスを与えているのですよ、引くことを知らない『不屈の指揮官』と呼ばれた父様がここで引いてどうするのですか」

アリアも俺の味方をしてきている、なんで助けてくれるのか分からないけど、それに甘えよう

「ギル・グレラム提督、お願いいたします!!」

俺は地べたに膝と頭をつけて俺に出来る最良のお願いをした

グレラムさんは目を閉じ、眉間を人差し指と親指で挟んでいくばかり考えた、そして、顔をあげて

「わかった、君のお願いをきこっ」

こうして俺はグレラムさんの管理局慰留に成功した

あれから数日がたった、グレラムさんからは新部隊をミッド地上部隊で造ることになったという連絡が来た、部隊名は『管理局地上部隊小規模新人育成課』というなんと微妙な名前だ、けっきょく闇の書事件自体は管理局によってもみ消されたが、それに関わった犯罪者身分の人が新部隊を造るとなると反発が大きい、それを少しでも減らすために本局とは離れた地上に小規模な部隊を造ることになったのだ

とらひ

「けん君、考え事？」

「いや、なんでもないよ」

おっと、上の空だったな、なのはの話をまったく聞いていなかったよ

俺はいま、お正月の準備をするためになのはと買い出しに行っている、士郎さんと桃子さんは新年が近いからお正月ケーキを作るのに奮闘中、美由紀さんはそれを食べすぎたので裏山を走ってくると言い残してでていった、そのあとは俺と恭也さんの醜い押しつけあいのおえ、なのはの買い物につきあうという言い訳で恭也さんに押し勝ち逃げてきた、だって考えてみるよ、桃子さんの作るケーキは確かに比類無き絶品だ、それでも、次から次へと繰り出されるケーキを食べ続けて感想を言っていくのだ……ある意味拷問だよ

「けん君聞いてる？」

また聞き逃しちまった、しっかり聞こう

「すまんすまん、で、なに？」

「私のね、これから行きたい道の話なんだ」

そりゃあ、歩きながら話すことではないな、その公園のベンチにでも座りながら話そう

「それで、なのははどうするつもりなんだ？」

真冬の公園のベンチは鬼のように冷たいので、バビロンから毛布を  
だして二人でなるべく近寄って暖をとる

「あのね、私は管理局に入ろうと思うんだ

私はこれまで何もなかった、でも、魔法に出会ってたくさん事が  
変わったんだ、だから私は色々ものをくれた魔法に恩返しをしたいん  
だ」

ちなみにいうと、なのはが魔法使いだったのは高町家にもアリサや  
すずかにもバラした、そのとき驚いて意味が分からないという反応を  
したのがアリサだけだったのですごい、恭也さんや士郎さんはもちろん  
のこと、すずかでさえ、そういうこともあるだろうってすぐに納得し  
ていたからな

「なあ、なのは、俺はお前が行きたい道をいけばいいと思う、決めるの  
はお前だしな、だから頑張れ」

ありきたりの応援しかできない自分に腹が立つ、俺は来年の春から  
地上部隊所属になる、なのはは訓練校で少し学んだ後本局所属となる  
ので、家では一緒に過ごせるが、一緒に戦うことなんて無いだろう

「けん君はどうするつもりなのかな、私はけん君と一緒にの部隊に入れ  
たら嬉しいな」

ちょっと……いや、かなり心が痛む、なのはは俺なんかを信頼して  
くれる人だ、そんなのはあまり裏切りたくないけど、今グレアム  
さんの事をなのはに話すわけにはいかなから曖昧に頷くしかない

「この微妙な空気を変えようと、違う話題を振ってきた

「そついえば、この公園って私たちが初めてあった場所だね」

そういえばそうだな、あの時はビックリした、助けたと思ったら泣き始めて、しかも泣き疲れて寝たからな

あれから一年半か早いもんだな

「私もけん君に出会ってからの一年半はとっても楽しかった、あつという間にすぎていった、だからね、私けん君の事を何も知らないんだ」

まあ……話したことないからな、俺は転生者だつてのを話すことに抵抗はない、俺にとつてどうでもいいことだからだ、でも、そうなる過去の話をしなくてはならないだろう、俺は自分の過去を誰かに語る気はさらさらない

「けん君が闇の書さんに取り込まれて死んじゃいそうになったとき、なんで助けられないんだろうつて悔しかった、いつもそばにいてくれた人がいなくなるつて考えたら震えるほどに怖かった」

俯いて手を握りしめるのはは本当に悔しそうだった、それもつかの間、顔をあげたなのはの眼はまっすぐ前を向いて俺をいぬく

「それでね、気づいたんだ、私はけん君の事を知りたいんだつて私の……好きな人だから」

言葉がでない、顔を真っ赤にしながらもしつかりとこちらを見据えるのはの強さに気圧される、なんて真っ直ぐな言葉なんだろう、だから俺はしつかりと返さなくてはならない、いつもみたいに曖昧にはぐらかしてはだめだ

「気持ち嬉しいよ、なのは、俺もなのはの事は大好きだ……でも、俺にとつての好きと、なのはにとつての好きは違う、だから、付き合っ



たりすることは出来ない」

一瞬輝いた顔が暗くなっていく、申し訳なさでいっぱいになるけど、「ここでごめんなどと言えば更に傷つけることになるから何も言えない

「そ……っか、そう……だよ、ごめんねけん君迷惑かけて」

その言葉になんて返せばいいのだろうか、俺は知らない

俺がロリコンじゃないから断ったわけじゃない、なのは事は好きだ、でも、それは家族や友人としての好きであって恋人のそれではない、それに俺なんかとしても幸せになれやしないだろう、俺がこの世界で頑張っけていけているのは華音との約束のためだけだから

「あのさ、虫のいい話かもしれないけど、これから今まで通り友達として接してほしい……いいかな」

正直、このまま縁が切れてしまっても仕方ないと思う、でも、問わずにはいられなかった

「……うん!!」これからも、うんうん、けん君はずっと家族だよ!!」

無理に元気良く、無理に笑っているのは明らかだ、辛いはずのなのはが笑っているんなら俺も笑おう……元気よく、これからも未来をめさせるように

「じゃあ、帰ろっか、なのは」

「お買い物まだ終わってないよ」

「おっと、忘れてたよ、「ごめんごめん」

「いっつ、けん君」

みんなで

桜が舞う季節、俺はミッドにいた

「これより、配属式を始める!!

アルベルト・クラフェルト 二等空士

石神剣介 二等陸士

キュルカス・クローバー 二等空士

サラミス・イーリアス 二等陸士

ティータ・ランスター 一等空士

ルーオカ・キザンカ 二等空士

以上六名はこれより新人育成課に配属となる、訓練は厳しいと思うが君たちは才能のある者ばかりだ、ここで我々についてくれば技術のうえでは同年代のなかでも特に上のクラスになるだろう、しっかりと頑張っしてほしい」

新しいリリカルでマジカルな時が始まる